

国道353号道路改築(改良)工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書 第2集

白井北中道II遺跡
吹屋犬子塚遺跡
吹屋中原遺跡
第2冊(旧石器・縄文時代篇)

1 9 9 8

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

国道353号道路改築(改良)工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書 第2集

白井北中道II遺跡
吹屋犬子塚遺跡
吹屋中原遺跡
第2冊(旧石器・縄文時代篇)

1 9 9 8

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



吹屋犬子塚遺跡Ⅲ区出土の旧石器（第1文化層）



吹屋犬子塚遺跡Ⅳ区出土の旧石器（第2文化層）



吹屋中原遺跡出土の旧石器（1）



吹屋中原遺跡出土の旧石器（2）



吹屋中原遺跡出土の旧石器（3）



吹屋中原遺跡出土の縄文土器

序

一般国道353号線の改良工事は、北群馬郡子持村の一般国道17号線鯉沢交差点の交通渋滞を解消すべく、鯉沢バイパスの建設工事と並行して行われました。両線とも、既に平成8年10月に開通し供用されています。

ご承知のように、工事が行われた子持村は西暦6世紀前半に大爆発した榛名山二ツ岳の軽石により埋没した遺跡が村内各地に所在する村として全国的に有名であります。本改良工事によっても軽石下、軽石上の貴重な遺跡が調査されました。

本改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、群馬県土木部の委託を受けて、当事業団が平成3年度より行い、引き続き調査報告書刊行のための整理作業を行ってきました。既に、平成6年度に古代・中近世の調査成果について『白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡 第1集』の調査報告書を刊行しました。今回、調査した遺跡の古代以前の整理作業が終了し、調査成果がまとまりましたので、ここに上記遺跡の調査報告書第2集を上梓したく存じます。

第2集の調査報告書には、北毛地域において調査例の少ない旧石器時代の資料が報告されており、本地域の旧石器時代の歴史を解明する上で、極めて貴重な資料を提供する物と存じます。

上記3遺跡の事業は、本報告書の刊行をもって全て終了しました。発掘調査から終了に至るまで群馬県土木部道路建設課、渋川土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、子持村教育委員会、地元関係者等には、種々ご協力、ご指導を賜りました。これら関係者の皆様に心より感謝の意を表し、併せて本報告書が我が国並びに群馬県の歴史を解明する上で、大いに活用されることを願い、序とします。

平成10年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

1. 本書は、国道353号線道路改築(改良)工事に伴い調査した白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡の埋蔵文化財の発掘調査報告書である。本書には旧石器時代・縄文時代の遺構・遺物に関する調査結果を掲載した。調査に至る経緯・経過、及び、弥生時代以降の遺構・遺物に関する報告は、既に刊行を終えている第一冊(古代・中近世編、群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第207集 1997)を参照されたい。
2. 遺跡の名称は大字名と小字名を併記する方法を採用している。複数の小字名からなる場合にはより広い字名を遺跡名称に採用した。
3. 各遺跡の所在地は下記の通りである。

白井北中道II遺跡	北群馬郡子持村大字白井字北中道2368ほか
吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡	北群馬郡子持村大字吹屋657-8・515ほか
4. 事業主体 群馬県土木部
5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 平成3年7月～平成6年3月
7. 調査組織 事務担当 邊見長雄・中村英一・松本浩一・近藤 功・佐藤 勉・神保侑史・巾 隆之・能登 健・岩丸大作・斎藤俊一・国定 均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・船津 茂・高橋定義
調査担当 石坂 茂・高井佳弘・石塚久則・菊池 実・杉山秀宏・根岸 仁・遠藤俊爾・岩崎泰一
8. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
9. 整理期間 平成7年4月～平成10年3月
10. 整理組織 事務担当 菅野 清・中村英一・原田恒弘・赤山容造・神保侑史・佐藤明人・右島和夫・中束耕志・小淵 淳・笠原秀樹・須田朋子・井上 剛・吉田有光・柳岡良宏・岡嶋伸昌・高橋定義・宮崎忠司・大沢友治
整理担当 石坂 茂・岩崎泰一
浅井良子・霜田恵子・神谷みや子・宮沢房子・小林恵美子・鈴木春美・永井亜美子・高梨房江・新平美津子・角田孝子・小菅優子・田中暁美・内山由紀子・荒木亜矢子・船津共子
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一・小材浩一・土橋まり子
11. 本書の編集執筆は、II-1を岩崎が、II-2を石坂が担当している。
12. 報告書の作成に際して、以下の方々に分析を依頼した。

石器の石材同定……………飯島静男氏	黒曜石の産地鑑定……………鈴木正男氏(立教大学)
土器の胎土分析……………第四紀研究所	テフラ・植物珪酸体分析……………古環境研究所
13. 本書の作成に際し、関係各方面の協力を得た。発掘調査の際には、群馬県土木部渋川工事事務所・工事関係者・子持村教育委員会・地権者・地元関係者には多大なる御支援を戴いた。また、調査に従事して戴いた発掘補助員には酷暑・酷暑の中たいへん御苦労いただいた。記して感謝もうしあげたい。

14. 調査資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、総て国家座標の北を使用している。

2. 遺構実測図は以下の縮尺で掲載した。

旧石器時代・全体図…… 1/100、1/200 縄文時代・全体図…………… 1/600

旧石器時代・石器分布… 1/60、1/80 縄文時代の住居・土坑…………… 1/50

3. 遺物実測図は以下の縮尺を基本に掲載した。なお、小形石器（石鏃など）は縮尺を変えて掲載しており、それぞれ図中のスケールを参照されたい。

旧石器時代・単独資料… 4/5

縄文時代の土器・石器…………… 1/1～1/5

旧石器時代・接合資料… 1/2

4. 旧石器時代の遺物分布図に使用したマークは、以下の器種を示している。

▲ 槍先形尖頭器	■ 削器	◆ 加工痕ある剥片	◇ 使用痕ある剥片	△ 石刃
● 剥片	・ 碎片	* 石核 a	* 石核	☆ 敲石
◇ 磨石	◇ 台石	* 石製品		

5. 報告した遺構遺物に使用したトーンは、各々の図版の中で凡例を示した。

6. 縄文時代の土器の断面に記した・印は土器の胎土に繊維を含むことを示している。

7. 縄文時代の土器・石器の記載は、II-2章末（351頁）に示した分類基準に拠る。

8. 遺物写真図版は基本的に実測図の順に掲載し、また、実測図と対照できるように挿図番号を図版の右下に付した。

目 次

序
例 言
凡 例
抄 録

I 遺跡と調査の概要

- 1. 遺跡の立地 1
- 2. 調査の方法 3
- 3. 基本土層 8
- 4. 周辺の遺跡 10

II 調査の成果

- 1. 旧石器時代 15
 - 1-1. 吹屋犬子塚遺跡 15
 - a. 第1文化層 15
 - (1) 概 要 15
 - (2) 出土石器 18
 - (3) 石器の分布 19
 - b. 第2文化層 21
 - (1) 概 要 21
 - (2) 出土石器 22
 - (3) 石器の分布 35
 - (4) 接合資料の分布 36
 - (5) 同一母岩の分布 37
 - 1-2. 吹屋中原遺跡 39
 - (1) 概 要 39
 - (2) 出土石器 43
 - (3) 石器の分布 90
 - (4) 接合資料の分布 96
 - (5) 石材分布 105
 - 計測値一覧表 108
- 2. 縄文時代 113
 - 2-1. 白井北中道II遺跡 113
 - (1) 検出された遺構と遺物の概要 113

- (2) 土 坑 113
- (3) 集 石 115
- (4) 倒 木 痕 116
- (5) 包含層の出土遺物 119
- 2-2. 吹屋犬子塚遺跡 159
 - (1) 検出された遺構と遺物の概要 159
 - (2) 竪穴住居 162
 - (3) 土 坑 163
 - (4) 陥 穴 171
 - (5) 焼 土 痕 173
 - (6) 倒 木 痕 174
 - (7) 包含層の出土遺物 180
- 2-3. 吹屋中原遺跡 246
 - (1) 検出された遺構と遺物の概要 246
 - (2) 竪穴住居 247
 - (3) 土 坑 261
 - (4) 陥 穴 270
 - (5) 焼 土 痕 271
 - (6) 倒 木 痕 271
 - (7) 包含層の出土遺物 275
 - 出土遺物の分類の凡例 351
 - 出土遺物の観察一覧 359

III 自然科学分析

- 1. 黒曜石の原産地分析 389
- 2. 土器の胎土分析 395

IV 成果と今後の課題

- 1. 旧石器時代の遺構と遺物について 410
- 2. 縄文時代の遺構と遺物について 415

報告書抄録

ふりがな	しろいきたなかみちIIいせき・ふきやいぬこづかいせき・ふきやなかほらいせき
書名	白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡
副書名	国道353号線道路改築（改良）工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第2冊
シリーズ名	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第241集
編著者名	石坂 茂・岩崎泰一
編集機関	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-0061 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
しろいきたなかみちII 白井北中道II	きたぐんまぐんこもちむら 北群馬郡子持村 おおあぎしろいふきや 大字白井・吹屋	10341		36°30'55"	139°1'15"	19910701 19920325	5,600	道路建設
ふきやいぬこづか 吹屋犬子塚	きたぐんまぐんこもちむら 北群馬郡子持村 おおあぎふきや 大字吹屋	10341		36°31'00"	139°1'00"	19920401 19930325	10,200	道路建設
ふきやなかほら 吹屋中原	きたぐんまぐんこもちむら 北群馬郡子持村 おおあぎふきや 大字吹屋	10341 10341		36°31'00"	139°0'50"	19930401 19940325	8,136	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白井北中道II	包蔵地	縄文時代前期	土坑 集石	縄文時代前期の土器・ 石器	
吹屋犬子塚	包蔵地	後期旧石器時代 後期旧石器時代 縄文時代前期	ブロック1 ブロック1 住居・土坑	石刃・敲石 尖頭器・削器・石刃 縄文時代前期の土器	As-SP下の石器群 As-BP下の石器群 隆線文・爪形文土器
吹屋中原	包蔵地	後期旧石器時代 縄文時代前期	ブロック3 住居・土坑	削器・大形剥片 縄文時代前期～後期 の土器・石器	As-YP下の石器群 黒浜式期住居1 諸磯式期住居1 加曾利E式期住居1

I 遺跡と調査の概要

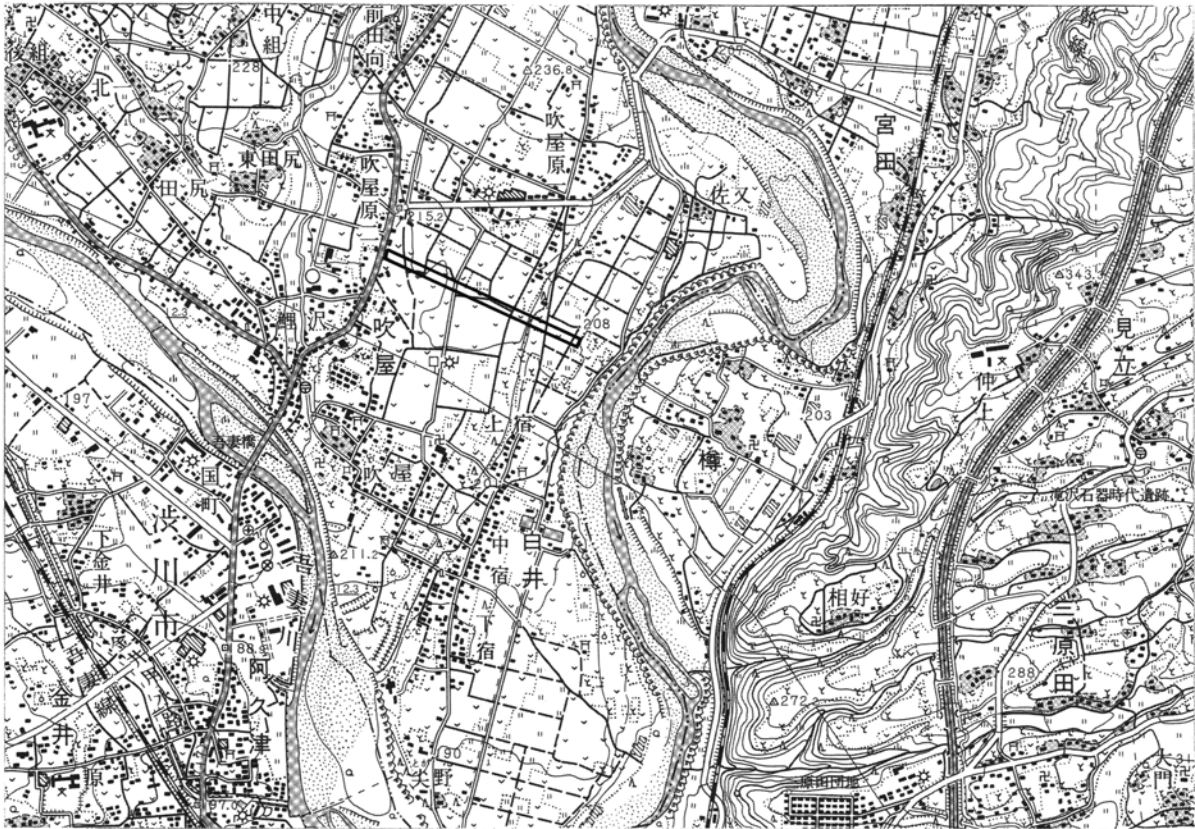
1. 遺跡の立地

遺跡の所在する子持村は、前橋市の市街地から15kmほど北に位置する。村の南側は吾妻川を挟み渋川市と、東側は利根川を挟み赤城村と接し、両河川が行政区の境を成している。

村の地形は、標高500mより高い地域に広がる火山山麓、及び、山麓末端に広がる火山麓扇状地、さらには吾妻川流域や利根川流域に展開する段丘地形に大きく区分されよう。標高1296mを測る子持山は複式の成層火山で、活動の起源は50万年前とも60万年前とも言われ、山麓は浸食が著しい。火山山麓の端部に広がる火山麓扇状地はカルデラの形成に伴い生じた泥流に起源し、裾野の長い典型的な成層火山の特徴を示している。この火山麓扇状地は、子持山の南側や西側に広く展開する反面、河川浸食が激しい

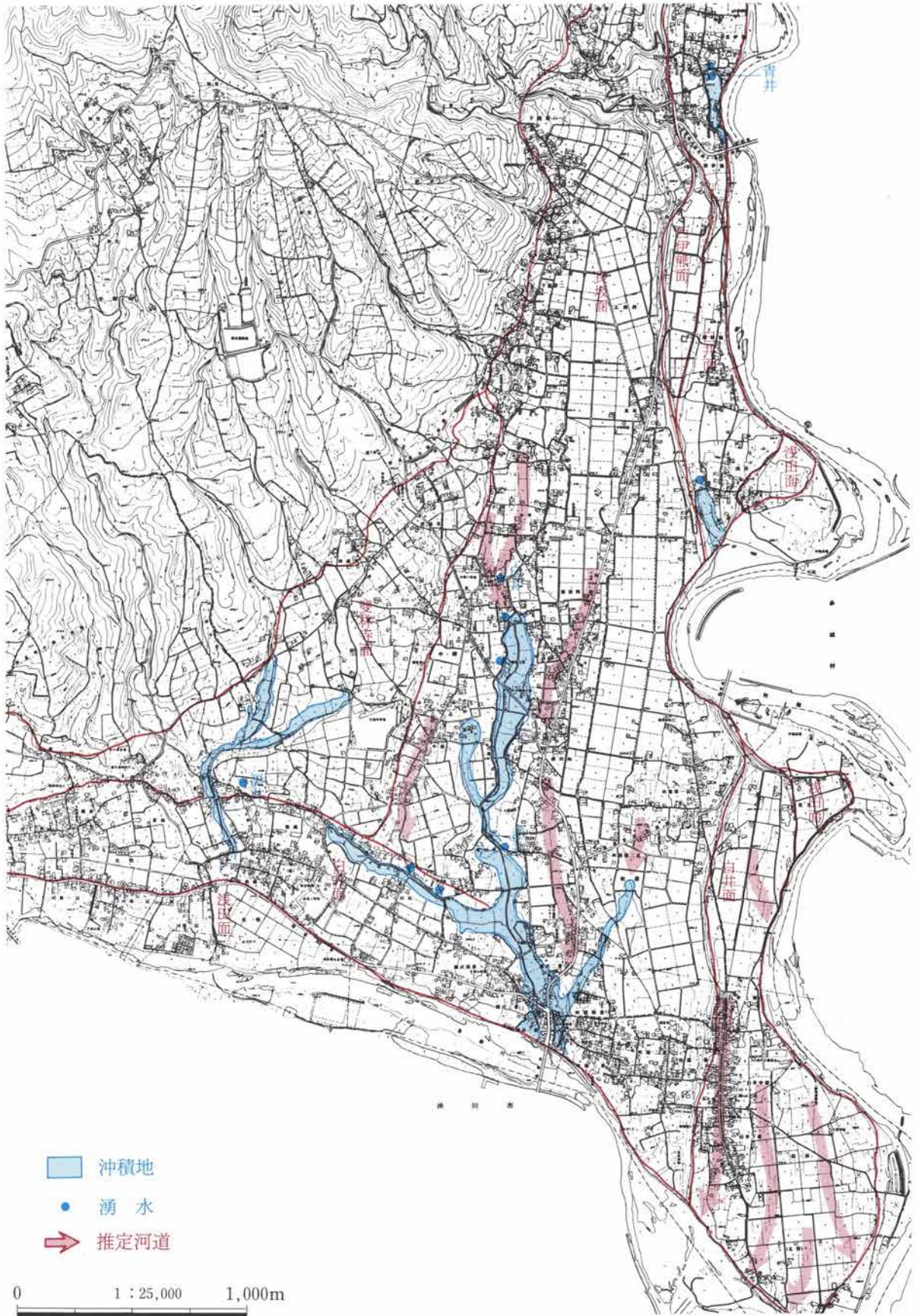
山麓の東側は直接段丘地形に移行している。扇状地の形成は古く（子持火山起源の火砕流堆積物の上位で大町A軽石、約30万年前を確認している）浸食も進み、比高差の大きい尾根状の丘陵が展開している。

一方、吾妻川流域や利根川流域に広がる段丘地形は上位より双林寺面・長坂面・立和田面・西伊熊面・白井面・浅田面に区分（子持村誌を参照）され、比較的平坦な典型的な段丘地形が展開している。各々の段丘は概して地形の変化に乏しく比較的平坦だが、離水する前の原形面を反映した凹凸（離水前の旧河道を示している可能性が強い）が生じており、特に、白井面で著しい。反面、これより上位の段丘ではこの種の地形発達は弱い。また、最上位段丘面（双林寺面）にはより上位の山麓末端（火山麓扇状地）から広がる扇状地が部分的に見られ、浅い凹地も他の段丘の凹地とは異なり山麓を刻む河川に一致して



第1図 遺跡位置図 国土地理院 25000分の1 (鯉沢)

I 遺跡と調査の概要



第2図 周辺地形図

2. 調査の方法

おり、地形発達複雑な過程を示している。以上に述べた凹地は浅く、基本的に沖積地を形成するものではない。が、各々の段丘、及び、崖線には湧き水や大小の河川浸食に伴い水田耕作に適当な谷が形成され、山田川や鯉沢川の流域では古墳時代に遡る水田（黒井峰・相ノ田・吹屋瓜田遺跡など）の発見が続いている。群馬用水掘削以前の村内には子持五井（黒井、赤井、白井、青井、黄井）その他の豊富な湧き水が存在していた。地元の聞き取り調査でも複数の湧水の存在を伝えているほか、関連地名（井の付く地名以外では清水下など）を残している。

遺跡の立地する白井・吹屋地区には、約10mを測る大規模な段丘崖が続いている。吹屋犬子塚・吹屋中原遺跡は上位の段丘（長坂面）に、白井北中道II遺跡は下位段丘（白井面）に立地する。現状では、遺跡の立地する周辺地形は概ね平坦だが、離水以後の土層堆積環境に起因する地形の凹凸を古墳時代に降下した軽石（Hr-FP）が厚く覆い微地形の復元を難しくしている、と指摘できよう。以下、調査所見からみた微地形の変化に関して若干を指摘していきたい。

下位段丘に立地する白井北中道II遺跡では、国道17号バイパス（通称、鯉沢バイパス）に接する遺跡の東端（I区）に1mの比高差を測る崖線が、さらには調査区（I区からIII区）を便宜的に分けた農道付近・II区の東側と西側に浅い凹地が存在する。III区は約10mを測る段丘崖に接し、徐々に崖線に移行・高度を増していく。この地点は他の地点と異なり、ロームに礫を多く含み、崖線から崩落・再堆積した可能性が強い。一方、上位段丘ではHr-FA（二ツ岳火山灰）下に水田を確認した谷地を挟み若干地形が異なり、谷を隔てた東側（吹屋犬子塚・V区）では比高差の乏しい地形感を呈し、これとは逆に西側の台地は比高差の著しい地形感を呈している。また、この谷には台地縁辺にロームの堆積を確認した程度で、谷の中央付近ではロームが流出しており、約30cmで基盤層（前橋泥流層）に達している。

なお、今回確認した水田は上から水を掛け流す水

田で、遺跡の北・約100mの地点に湧き水を利用した可能性が極めて強い。Hr-FPの降下以後、水田の耕作を放棄したとはいえ、今回の発掘調査ではFPを掘り抜く溝（地下レーダ探査では約100m下流まで確認）を確認しており、下流域の低地部に通水している。この溝は出土遺物（須恵器・長頸瓶の小破片が1点のみ出土、近世遺物は見られない）から古代まで遡る可能性（第1分冊を参照されたい）も指摘されよう。下流域の位置する「吹屋瓜田遺跡」の調査では、FP降下以後の水田復旧時期の解明を期待した。が、確証をえるまでにはいたらず、今後課題を残した。

下位・上位の段丘とも、旧石器の分布域に関しては、台地の高い地点に立地・分布する傾向が指摘されよう。

2. 調査の方法

平成3年6月から同6年3月にかけて、白井北中道II遺跡、吹屋犬子塚遺跡、吹屋中原遺跡の発掘調査を順次実施し、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中・近世などの遺構・遺物を検出した。中・近世代の調査はFr-FP（III層）の上面で、また弥生～古墳時代の調査はFr-FP層下面およびFr-FA（V層）下面でそれぞれ行い、それらの調査内容については既に「第1冊（古代・中近世篇）」として報告したとおりである。ここでは、縄文時代と旧石器時代の調査方法について、その概略を述べておきたい。

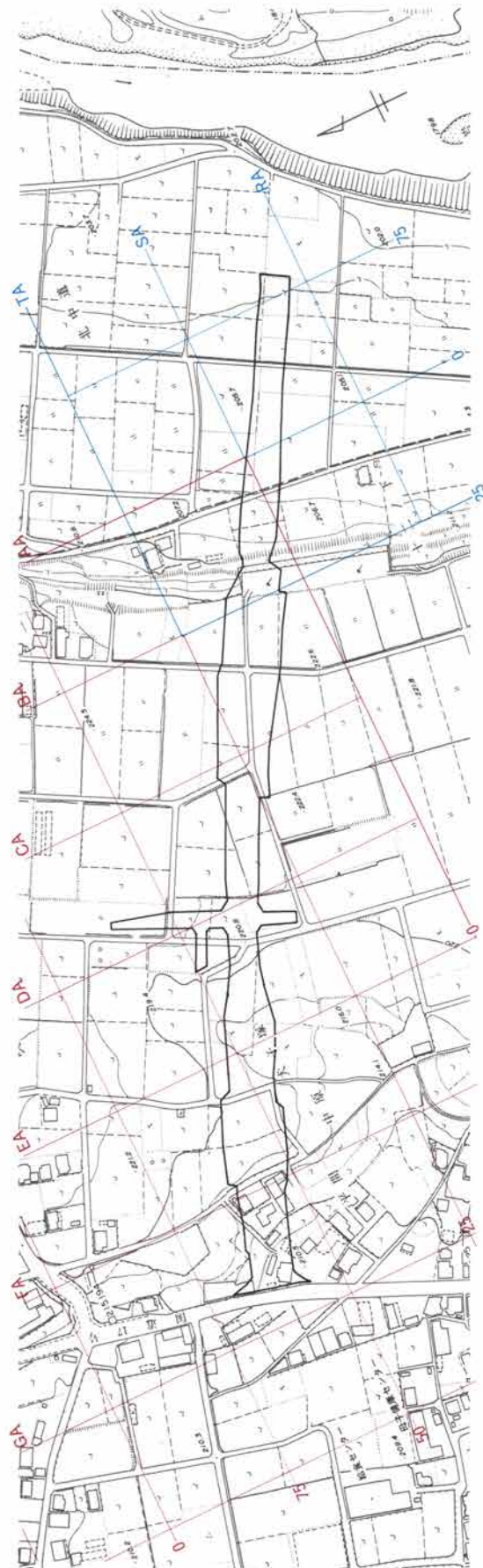
縄文時代 平成3年度に白井北中道II遺跡より開始された発掘調査は、古墳時代の放牧地および農耕地関連の調査がHr-FA層下のVI層上面にて終了し、併せて同時代の住居・土坑等の遺構も存在しないことが確認された。しかし、周辺遺跡の調査事例を参照したところ、通常その下位にはローム層までの間に黒色および淡色の黒ボク土が堆積し、しかもこれらの土層中には縄文時代を主体とする遺物が包含される傾向も認められた。こうしたことから、同遺跡の4m×4mグリッドを基準として試掘箇所を

I 遺跡と調査の概要

適宜設定し、鋤鎌を用いてその存在の有無を確認することにした。2区を中心に数カ所のグリッドを調査してゆく時点で、縄文時代前期の諸磯式土器や同時期と思われる石器が、ローム層直上までのVI～VIII層にかけて多数包含されることが判明したため、試掘調査を中断し、本調査を行うための計画策定に入った。遺物包含層は約50～80cmの層厚を有し、しかもその範囲が5,600㎡にも及ぶことから、人力での調査には困難が予想されたが、黒ボク土の堆積がプライマリーな状態に近く、出土遺物の層位的区分が可能な点を考慮して、掘削重機を使用しないで手掘りによる調査を選択した。また、学術的に価値の高い情報が得られる可能性があることや、発掘調査と整理・報告段階の遺物情報処理に一貫性をもたせるために、個々の遺物の出土状態をコンピュータを利用したトータルステーションシステムにより記録することにした。

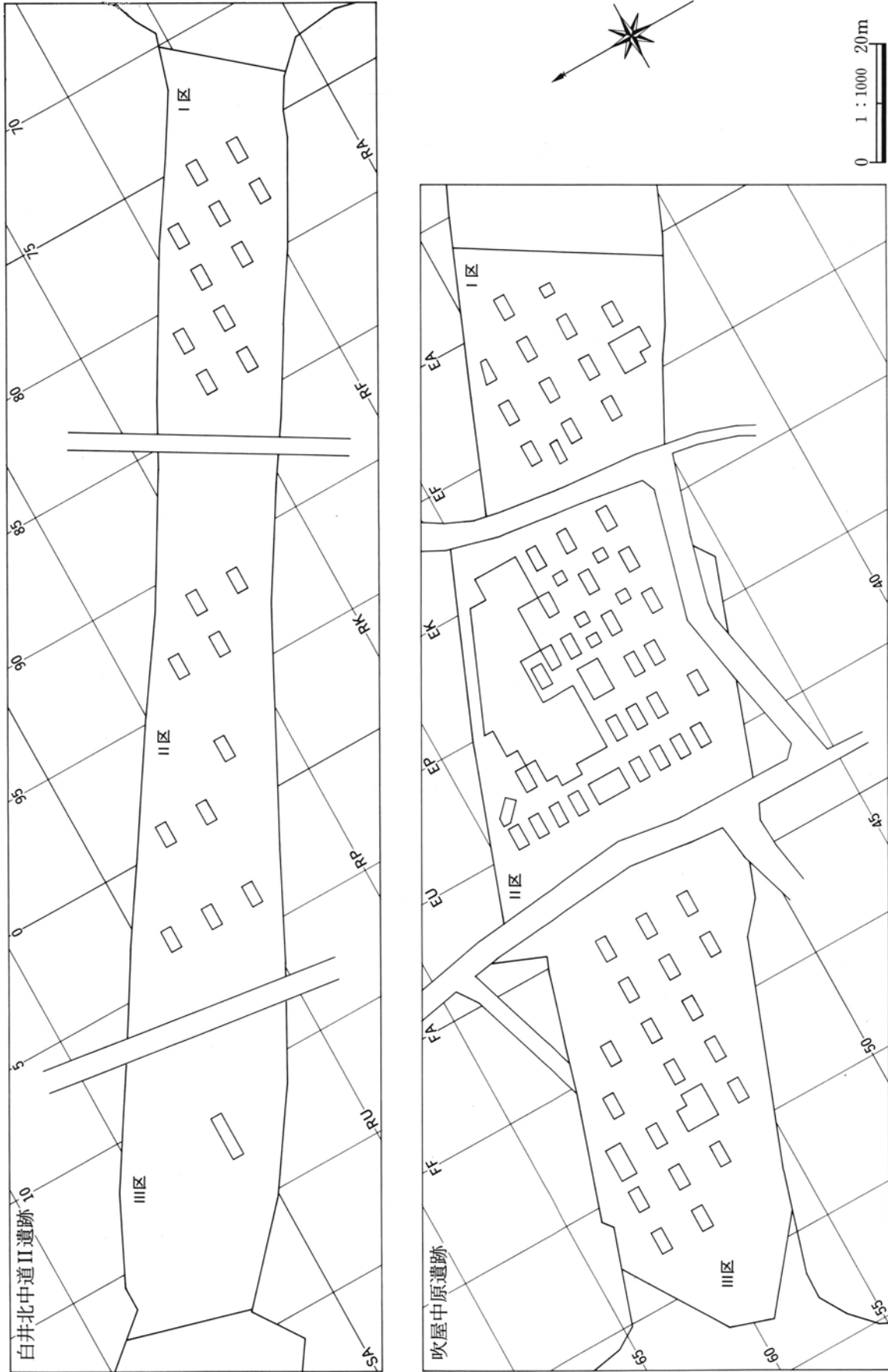
遺物包含層の調査中に、VII層上面にて1基の集石土坑を確認したが、他の遺構については全く検出できず、包含層の調査終了後にローム（IX層）上面において再度遺構の検出作業を行った。結果として、2基の土坑と25基の倒木痕の検出をみた。

吹屋犬子塚遺跡および中原遺跡についても、白井北中道II遺跡と同様の試掘調査を行い、吹屋犬子塚遺跡II・VI区を除いて、遺物包含層の存在を確認した。白井北中道II遺跡との整合性から、人力による層位的調査とトータルステーションシステムによる記録を考慮したが、調査面積が10,200㎡と広大なことや調査期間との兼ね合いから、吹屋犬子塚遺跡I区を除き、人力による調査とともに掘削重機に電動ふるい機を組み合わせ、包含層内の遺物を層位的に調査する方法を試みることにした(写真参照)。この方法は、1グリッドを四分割して2m×2mメッシュを位置的な単位とし、その中を重機により約5cm厚で層位的に掘削するとともに、その土を5mmメッシュのふるい機にかけて遺物を採取するもので、ドット取り上げに比べて位置情報が粗くなるのは避けられず、いわば次善にして苦肉の策というべ



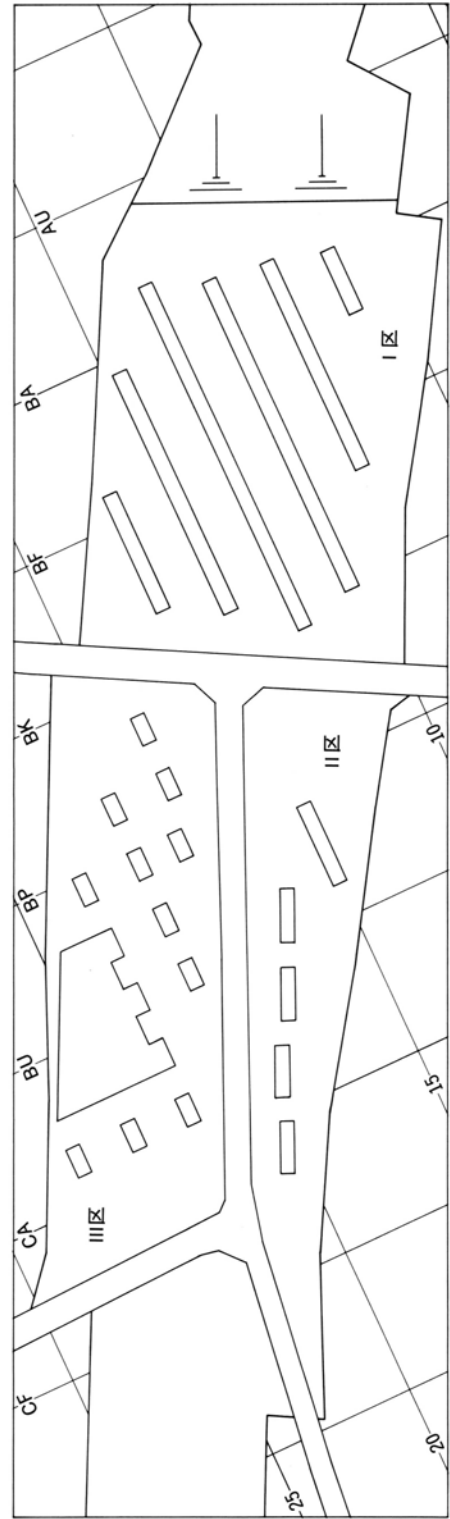
第3図 調査区とグリッド設定図

2. 調査の方法



第4図 旧石器試掘図(1)

I 遺跡と調査の概要



吹屋犬子塚遺跡



第5図 旧石器試掘図(2)

きものであった。吹屋犬子塚遺跡 I 区については、下位段丘に位置する白井北中道 II 遺跡のデータと照合・検討することも必要と考え、人力による層位的調査とトータルステーションシステムによる遺物の記録採取を行った。

なお、吹屋犬子塚・中原の両遺跡ともに、包含層中途の VII 層上面にて、数カ所の焼土痕や中・後期の埋設土器を検出したが、住居・土坑等の掘り込みを検出することはできず、これらの遺構は包含層の調査終了後にローム (IX 層) 上面にて確認した。吹屋犬子塚遺跡では、竪穴住居 1 棟、土坑 67 基、陥し穴 4 基、焼土遺構 6 基、倒木痕 66 基を、また吹屋中原遺跡では竪穴住居 3 棟、土坑 44 基、陥し穴 1 基、焼土遺構 2 基、倒木痕 21 基をそれぞれ検出した。

旧石器時代 IX 層上面での縄文時代の遺構調査が終了した後に、当該期石器群の有無を確認するため、各遺跡の各地点に対して 2 m × 4 m のトレンチを全面積の約 12% を目途に設定することを原則とし、試掘調査を実施した。

白井北中道 II 遺跡の試掘は、ロームが比較的良好に堆積していた I 区・II 区を中心に試掘を進めた。当該地点では、結果的に石器群の検出を見なかったが、隣接する白井北中道遺跡の翌年の調査では、今回試掘した地点と同じ段丘から流れ込んだ状態で、草創期の隆起線紋土器や石斧、石槍、石鏃が出土しており、崖線に近い地点の試掘が不十分であった可能性もある。

なお、西側の段丘崖から多量の礫の崩落供給を受けて、ローム層中や縄文時代の遺物包含層中にも多量の礫を含む III 区では、1 ケ所で堆積土層を記録して調査を終えた。

吹屋犬子塚遺跡では、I 区・II 区については調査の遅延と地形変化に乏しく湧水起源の谷から離れていることなどから、試掘調査に重機を用いた。両区ともに幅約 2 m、長さ 40 m のトレンチを東西方向に設定し、5 cm ~ 10 cm を単位に掘り下げながら、その度に石器群の有無を確認する方法を採用したが、いずれの地点からも検出することはできなかった。III



掘削重機と電動ふるい機を使用した遺物包含層の調査状況

区～V 区の試掘では、湧水起源の谷に近い地点がその対象にもなることから、人力により 2 m × 4 m の試掘トレンチを徐々に掘り下げて石器群の有無を確認する従来の調査方法を採用した。III・IV 区では各 1 箇所において石器群の検出を見たため、それらの石器群の周囲を拡張して本調査を行った。

結果的に、谷から大きく台地の中に入り込んだ III・IV 区の地点でも石器群を確認し、石器分布の多様なあり方と出土層位 (地形・植生とも大きく影響を受けたであろう、5 m 厚にも達する泥流堆積層に近接して出土) に対して、予断的調査の危うさを反省することとなった。

吹屋中原遺跡では、I～III 区ともに As-YP の降下前後期の石器群を検出したが、I・III 区は数点のみであり、II 区では 2 箇所を確認した。各区とも人力により 2 m × 4 m の試掘トレンチを掘り下げ、石器群の存在とその散布範囲を確認した後に、それらの石器群の周囲を拡張して本調査を行った。

本調査を進める過程で、堆積土層中に泥流起源の礫が大きく巻き上がる状態や、堅い As-YP アッシュの部分的な残存状況が観察され、植物根あるいはインポリューション等により土壌攪乱が生じるような環境変化の存在も認められた。

3. 基本土層

離水以後堆積したIX層より上位の土層の堆積は、上位段丘・下位段丘とも大きく変わることなく堆積していた。ここでは、段丘を単位に土層の堆積状況の概要を記す。なお、III層(Hr-FP)・V層(Hr-FA)は細分が可能だが、詳細は第1分冊(第2章、第3節テフラ層)を参照されたい。

下位段丘にはIX層の中程にAs-YP(厚さ4cm)を含む以外テフラは堆積せず、これより下層には砂層が互層堆積するなど河川起源の堆積状態を示し礫層に移行していた。IX層より下の堆積状況は場所場所で大きく異なり、As-SPの降下以後の離水を示している。IX層より上位の土層の堆積状況は上位段丘の土層と概ね同様な状態で堆積している。が、敢えて言えば、上位段丘に比べ、VII層(淡色黒ボク土)が安定した状態で堆積すること、崖線に近い地点では崖線から崩落した礫を多く含む、など若干相違する点も指摘されよう。

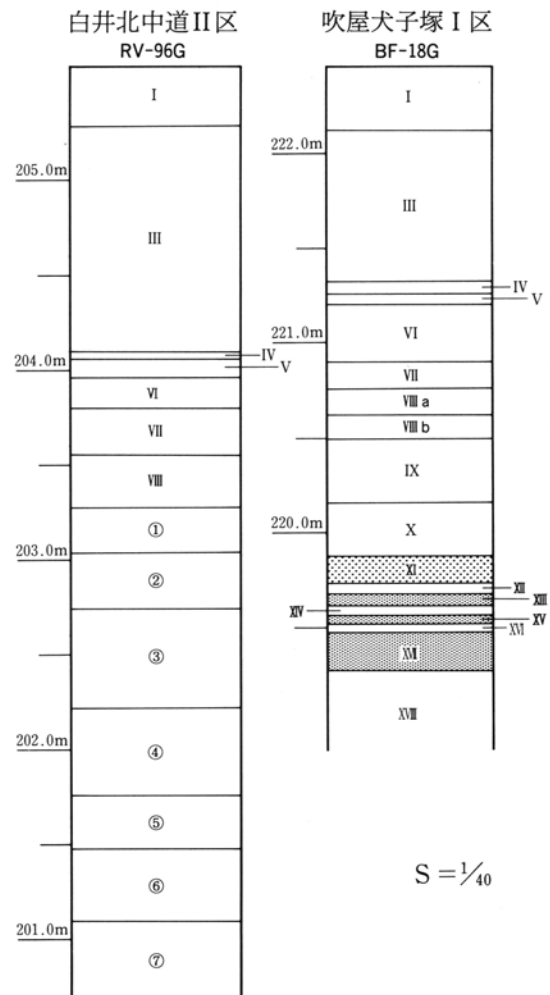
上位段丘には、As-BPより上位の土層が堆積している。堆積状態は比較的良好だが、As-YPは部分的に堆積する程度で、確認できない地点が多く、土壤攪乱に起因して若干土層の乱れる地点(第85図を参照)や、ロームが流出している地点(吹屋犬子塚・V区、Hr-FA下の水田を確認した谷)など、若干の相違が指摘されよう。また、VII層の堆積も下位段丘ほど安定せず、不明な地点も多い。

ここでは、以下上位段丘に立地する吹屋犬子塚・ローム層の堆積状況(白井北中道II遺跡 RW-3 G)



I区の基本土層を示し、その概要を記す。

- I層 現耕作土 Hr-FP を多く含む。
- II層 旧耕作土 Hr-FP を多く含む。
- III層 Hr-FP
- IV層 黒色土
- V層 Hr-FA
- VI層 黒色土

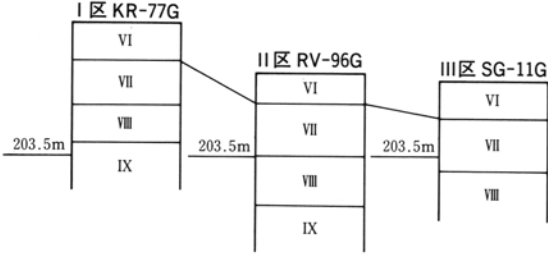


第6図 基本土層図

- ①明黄褐色ローム土 黄色パミス(As-YP)を斑状に含む。上位段丘に堆積するIX層に相当。
- ②明黄褐色ローム土 ①層よりやや明るい。①②の堆積は部分的で、分層できない地点が多い。
- ③黄褐色シルト質土 シルトと砂の互層堆積。
- ④黄褐色土 やや暗く粘性を帯びる。
- ⑤黄褐色土 砂質土を部分的に含む。
- ⑥黄褐色シルト質土 シルトと砂の互層堆積。③に類似。
- ⑦砂礫層(段丘礫層)

3. 基本土層

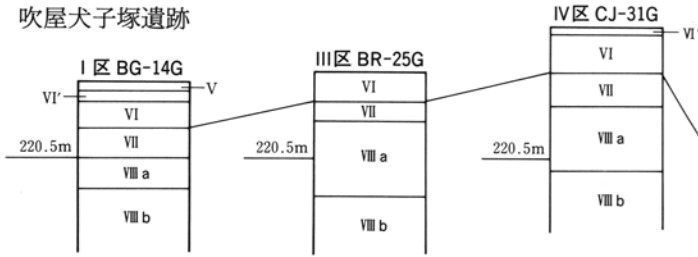
白井北中道II遺跡



VI'層 細粒の白色パミスを含む。パミスの粒径はAs-Cのパミスと異なりやや細かく、Hr-AA (有馬火山灰) に伴うパミスである可能性が強い。

※VII~VIII a層と記載した地点では「淡色黒ボク土」の堆積が発達せず、明確には分層できない。「淡色黒ボク土」の堆積は一律ではなく、地形と相関する関係にはない。

吹屋犬子塚遺跡



吹屋中原遺跡



土層の堆積状況 (犬子塚II区、BP-17G)



$S = \frac{1}{40}$

第7図 黒ボク土の形成と堆積状態

I 遺跡と調査の概要

As-Cを多く含む。VI層の上に榛名起源の火山灰(Hr-AA)を含む黒色土が堆積する地点が部分的に存在。

VII層 淡色黒ボク土

黒ボク土の生成が概して乏しい赤城南麓の標高100m付近では不明瞭だが、標高300m付近には明瞭に堆積しており、県内全域に堆積する可能性が高い。生成要因は不明。

VIII層 黒褐色土

より土壌の均質な上層(VIII a)と、As-YPを若干混入するやや明るい下層(VIII b)に細分。この付近ではロームのソフト化が弱い。

IX層 明黄褐色硬質ローム

白色・黄色パミスを混入。中位にAs-YPが部分的に存在。As-YPは上位にアッシュが、下位にパミスが堆積。アッシュは上位より黄褐色アッシュ4mm、灰白色アッシュ7mm、黄褐色アッシュ5mm、小豆色アッシュ5mm、小豆色アッシュ(やや砂質)22mm、砂質のアッシュ10mm、黄褐色アッシュ5mmに細分。

X層 黄褐色軟質ローム

パミスの混入は見られない。

XI層 As-SP

下位部分は風化しており、幅1cmが白色・粘土化している。

XII層 黄褐色軟質ローム

パミスを多く含む。パミスは風化が著しい。

XIII層 As-BP

XIV層 黄褐色ローム

XV層 As-BP

風化が激しく、粘土化が著しい。

XVI層 黄褐色ローム

XVII層 As-BP

火山砂を多く含む。

XVIII層 前橋泥流層

礫(角礫状で、風化した脆い礫)を多量に

含む。上層は土壌化が著しい。

4. 周辺の遺跡

当遺跡の所在する子持村をはじめ、小野上村、赤城村などの地域では、表土下約50cmに6世紀第2四半期に降下したHr-FP軽石が、1~2m厚の堆積層を形成している。このため、6世紀以前の遺跡はこれらのテフラ層下に完全に埋没し、地表面にてその存在を確認することが困難となっている。また、当地域の多くが現在でも山林であり、現在確認されている遺跡のほとんどは、宅地・耕地化の進んでいる山麓末端部や段丘上に集中している。このような自然的制約により、各時代の遺跡分布の実体については不明な点が多いのであるが、最近では関越自動車道建設工事や国道17号(鯉沢バイパス)改良工事などに伴って発掘調査が行われるとともに、市町村の行政単位での調査も増加してきており、おぼろげながらその地域の様相が窺い知れるようになってきた。以下、発掘調査された遺跡を中心に、旧石器時代および縄文時代における歴史的環境の概略を記していきたい。

旧石器時代 関越関連の調査やバイパス関連の調査で当該期石器群の調査は多い。市町村レベルでも、事情が許せば当該期石器群を対象に意識的・精力的な調査が行われ、確実に成果を挙げている。以下に、地域別・地形別に見た石器群の様相を記す。

利根川の左岸では、赤城西麓の山麓端部に遺跡が密集分布している。関越関連の調査では、AT下の「暗色帯」より石器群が出土する例が多い。主な遺跡には北橘村の分郷八崎遺跡(23)、房谷戸遺跡(22)、赤城村の中畦遺跡(20)、諏訪西遺跡(19)、見立溜井遺跡(18)、勝保沢中ノ山遺跡(16)が知られ、見立溜井ではAs-YP下・As-SP下・As-BP下・AT下で、房谷戸ではAs-YP上(縄文・草創期の尖頭器)・AT下・Hr-HP下(片岩製石器)で重層的に石器群が出土した。残る他の遺跡の石器群はAT下の出土で、当時、関越関連の調査では「掘れば、必ず旧石器が出る」状況を呈していた。市町村レベ

4. 周辺の遺跡

ルの調査では、北橋村の北町遺跡(26)で As—BP の間層と AT 下の、上原遺跡(41)で As—SP 上の石器が出土している。利根川左岸の赤城山西麓では山麓端部の様相は比較的明確だが、利根川に流れ込む小河川に臨む山麓内部の遺跡の有無・様相の把握が今後の課題ともいえよう。

利根川の右岸では調査例は少なく様相は不明だが、徐々に調査例が増し、ある程度の推定が可能な状況が生まれつつある。下位段丘(白井面)では、国道17号バイパス関連の調査で白井北中道遺跡(10)から草創期・神子柴系石器群が隆線文土器群に伴い出土している。出土資料は遺跡の西側に広がる台地縁辺から低地に流れ込んだ状態で出土しており、本来的には台地の上の平坦部分に遺跡は展開した、と推定されよう。上位段丘(長坂面)では、国道353号バイパス関連の調査で吹屋犬子塚遺跡(2)より As—SP 下・As—BP 下の、吹屋中原遺跡(3)より As—YP 下の石器群を確認している。このほか、最上位段丘面に立地する押出遺跡で北方系削片系・細石刃核を、火山麓扇状地に立地する加生西遺跡(4)で YoP.2(横川第二軽石)より1mほど上で前期旧石器を確認している。

縄文時代 当遺跡周辺域での遺跡立地動向として特徴的なことは、数量的に前期遺跡の存在が際だって多く、次いで中期、草創・早期、後・晩期の順で推移していることである。前期の場合、赤城山西南麓では三原田城(21)、中畦(20)、諏訪西(19)、見立溜井(18)、見立大久保(17)、勝保沢中ノ山(16)、西ノ平(25)、西坂脇(33)、森山(36)、真壁城山(50)、下箱田向山(51)などの集落遺跡が存在し、いずれも瘦せ尾根状の丘陵地形上に立地する点で共通している。これらの集落は、一時期2棟前後の小規模かつ継続時期の短い集落であり、時期的には関山II式期、有尾式後半期、黒浜式後半期、諸磯b式期の集落が多く、諸磯c式期や十三菩提式期は極めて希薄である。同様の集落は、利根川左岸段丘上では吹屋犬子塚(2)、吹屋中原(3)、黒井峯(7)、押手(6)などがあり、榛名山東麓でも神宮寺西(66)、後田(67)、

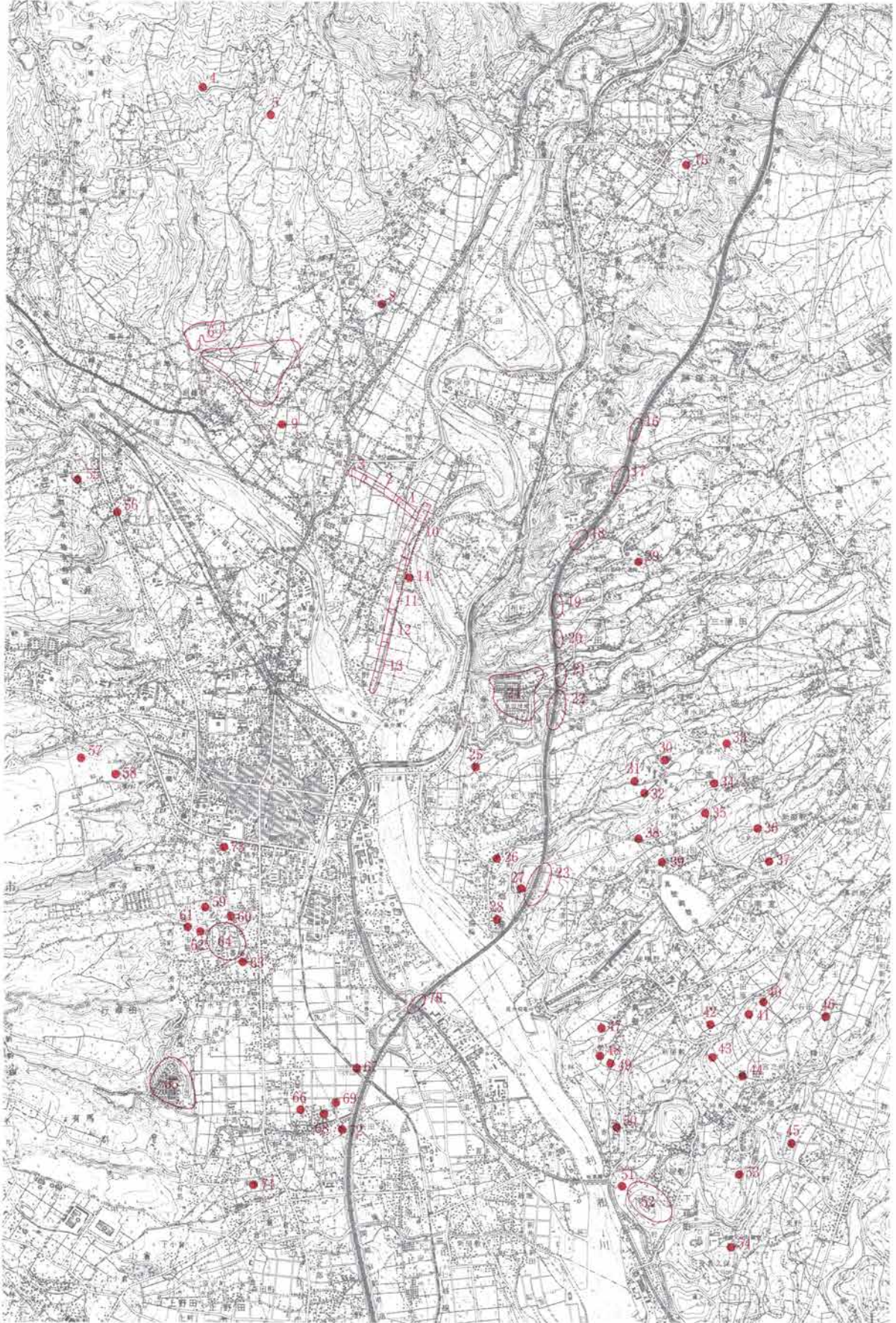
後田東(68)などが存在している。

中期では、三原田(44)に代表される加曾利E式期を中心とした規模の大きい集落が、赤城山麓末端の台地部に立地するようになる。三原田では333棟の竪穴住居と、約2000基の土坑が検出され、これらが環状の形態に配列されている。集落規模は小さいが、行幸田山(65)も環状の集落形態を持つ点で共通している。これらの環状集落は長期継続的な居住の結果であり、一時期の集落規模にすれば10棟前後に過ぎないが、それでも前期に比べれば遙かに大規模で、定定的かつ集住的な様相を有し、その立地も広い平坦面をもつ台地部に移行している。しかし、こうした大規模集落の一方で、諏訪西、見立溜井、見立大久保、田尻(9)、小室(34)、箱田遺跡群上原、空沢(64)などの1～2棟で構成される小規模集落もあり、数的にはこれらが主体を占めている。

草創期や早期段階の様相は、遺跡数が僅少なために不明瞭であるが、相対的には稲荷台式期の遺跡が主体をしめる。赤城山麓末端の丘陵部に立地する城山(52)では、稲荷台式期の竪穴住居が検出されており、当該期での明確な集落形成と文化的高揚が存在したことを窺わせる。集落は一時期1～2棟で構成され、小規模かつ丘陵部立地という点で前期に類似した様相を有する。こうした集落は、稲荷台式期以降では前期に至るまで確認できず、その後に居住形態の変化あるいは文化的衰退が生じた可能性がある。

後・晩期の集落は、後期前半の称名寺～堀之内式期の短期で終焉する三原田のようなパターンと、配石墓群を有して後期後半の加曾利B式期から晩期前半の安行3C式期までの長期にわたる押手のようなパターンが見られる。後者の場合、長期継続的かつ明瞭な墓域を形成している点が特徴でもあるが、集落規模としては中期後半の三原田のような大規模なものにはならない。散布地は、勝保沢中ノ山や白井北中道・丸岩・南中道、西坂脇、小室、八崎六反田(30)、諏訪ノ木(60)、などが存在するが、その主体は堀之内式期であり、後期後半から晩期の遺跡数は前期や中期に比べて極めて希薄な状態である。

I 遺跡と調査の概要



第8図 周辺遺跡(旧石器・縄文)

第1表周辺遺跡一覧(1)

番号	遺跡名	市町村名	概	要	文献
1	白井北中道II	子持村	縄文時代前期の土坑。草創期～後期の包含層。		1
2	吹屋犬子塚	子持村	縄文時代前期の集落。草創期～後期の包含層。		1
3	吹屋中原	子持村	縄文時代前期・中期の集落。草創期～後期の包含層。		1
4	加生西	子持村	前期旧石器時代(斜軸尖頭器・削器など)		16
5	加生	子持村	縄文時代の包蔵地。		17
6	押出	子持村	縄文時代前期の集落と後・晩期の配石を伴う集落。		14
7	黒井峯	子持村	縄文時代前期の集落。		15
8	中井	子持村	縄文時代中期の包蔵地。		17
9	田尻	子持村	縄文時代中期の集落。		17
10	白井北中道	子持村	縄文時代草創期～後期の包含層。		10
11	白井丸岩	子持村	縄文時代前期の土坑。中・後期の包含層。		11
12	白井南中道	子持村	縄文時代前期の土坑。中・後期の包含層。		10・11
13	白井二位屋	子持村	縄文時代前期の包含層。		10
14	白井大宮	子持村	縄文時代前・中期の包含層。		8
15	六万	赤城村	縄文時代前～後期の包蔵地。		21
16	勝保沢中ノ山	赤城村	旧石器時代AT下の石器群。縄文時代前期の集落。草創期～後期の包含層。		4
17	見立大久保	赤城村	縄文時代前・中期の集落。草創期・早期の包含層。		19
18	見立溜井	赤城村	旧石器時代AT下・As-BP下・As-SP下・As-YP下の石器群。縄文時代前・中期の集落。草創期・早期の包含層。		19
19	諏訪西	赤城村	旧石器時代AT下の石器群。縄文時代前・中期の集落。草創期・早期の包含層		2
20	中畦	赤城村	旧石器時代AT下の石器群。縄文時代前期の集落。		2
21	三原田城	赤城村	縄文時代前期の集落。中期の包含層。		7
22	房谷戸	北橘村	旧石器時代AT下・As-YP上の石器群。縄文時代中期の集落。		6
23	分郷八崎	北橘村	旧石器時代AT下の石器群。縄文時代前期の集落。		22
24	三原田	北橘村	縄文時代前期～後期の集落。		20
25	西ノ平	北橘村	縄文時代前期の集落。		33
26	北町	北橘村	旧石器時代AT下・As-BP下の石器群。縄文時代前期～後期の集落		34
27	田ノ保	北橘村	縄文時代中期の包含層。		31
28	八崎城	北橘村	縄文時代・時期不明の遺物。		7
29	滝沢石器時代遺跡	北橘村	縄文時代早期～晩期の集落。		18
30	八崎六反田	北橘村	縄文時代中期の集落。中期・後期の包含層。		31
31	前中後II	北橘村	縄文時代後期の集落。		24
32	前中後III	北橘村	縄文時代後期の集落。		31
33	西坂脇	北橘村	縄文時代前期の集落。前期～後期の包含層。		23
34	小室	北橘村	縄文時代後期の集落。前期～後期の包含層。		25
35	棗久保	北橘村	縄文時代前期の包含層。		24
36	森山	北橘村	縄文時代前期の集落。		26
37	下南室中高根	北橘村	縄文時代前期の包含層。		27
38	上浅ヶ原	北橘村	縄文時代中期の包含層。		24
39	東丸山	北橘村	縄文時代前期の包含層。		24
40	開発	北橘村	縄文時代前期・中期の包含層。		31
41	上原	北橘村	縄文時代の包含層。		24
42	東諏訪	北橘村	縄文時代・時期不明の遺物。		31
43	箱田遺跡群上原	北橘村	旧石器時代As-YP下の石器群。縄文時代前期・中期の集落。草創期・早期の包含層。		35
44	西浦	北橘村	縄文時代・時期不明の土坑。		24
45	東篠	北橘村	縄文時代・時期不明の遺構。		28
46	八幡山	北橘村	縄文時代前期の包含層。		24
47	真壁向山I	北橘村	縄文時代前期の包含層。		31
48	真壁向山II	北橘村	縄文時代前期の包含層。		31
49	真壁向山III	北橘村	縄文時代前・中期の包含層。		31
50	真壁城山	北橘村	縄文時代前期の集落。		24
51	下箱田向山	北橘村	縄文時代前期の集落。前・中期の包含層。		9
52	城山	北橘村	縄文時代草創期の集落。草創期～前期の包含層。		30
53	芝山	北橘村	縄文時代草創期(爪形文)・前期～後期の包含層。		29
54	瓜山	北橘村	縄文時代草創期～中期の包含層。		28
55	金島中学校内	渋川市	縄文時代の包蔵地。		36
56	吾妻山	渋川市	縄文時代の包蔵地。		36
57	渋川古城	渋川市	縄文時代の包蔵地。		37

I 遺跡と調査の概要

周辺遺跡一覧(2)

番号	遺跡名	市町村名	概	要	文献
58	上の原	渋川市	縄文時代の包蔵地。		37
59	石原手川	渋川市	縄文時代前期の包含層。		38
60	諏訪ノ木	渋川市	縄文時代時期不明の土坑。前期～後期の包含層。		43
61	伊勢森南	渋川市	縄文時代早期・中期の包含層。		39
62	糺屋	渋川市	縄文時代早期～後期の包含層。		38
63	行幸田寺後	渋川市	縄文時代中期の集落。		42
64	空沢	渋川市	縄文時代中期の集落、弧状列石。早期～晩期の包含層。		44
65	行幸田山	渋川市	旧石器時代As-BP下の石器群。縄文時代中期の集落。		45
66	神宮寺西	渋川市	縄文時代前期の集落。		46
67	後田	渋川市	縄文時代前期の集落。早期～中期の包含層。		38
68	後田東	渋川市	縄文時代前期の集落。		38
69	有馬後田東II	渋川市	縄文時代・時期不明の土坑。		42
70	中村	渋川市	縄文時代中期の包含層。		36
71	有馬神戸	渋川市	縄文時代の包含層。		36
72	愛宕塚	渋川市	縄文時代		36
73	石原清水田	渋川市	縄文時代早期～前期の包含層。		36

〈文献〉

- 「白井北中道II遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
- 「中畦遺跡・諏訪西遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 「勝保沢中ノ山遺跡I」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 「勝保沢中ノ山遺跡II」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 「房谷戸遺跡I」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 「房谷戸遺跡II」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 「三原田城遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- 「白井大宮遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 「下箱田向山遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 「年報10」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 「年報11」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 「年報12」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 「年報13」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 「押出遺跡」[群馬県史 資料編1 原始古代1]群馬県史編纂委員会 1988
- 「黒井峯遺跡」子持村教育委員会 1985
- 「群馬県北群馬郡子持村加生西遺跡-10万年前の中期旧石器時代の遺跡」日本考古学協会第63回総会研究発表要旨 1997
- 「群馬県遺跡台帳I 東毛編」群馬県教育委員会 1971
- 「勢多郡史」勢多郡史編纂委員会 1958
- 「見立溜井遺跡」赤城村教育委員会 1985
- 「三原田遺跡」群馬県企業局 1980
- 「六万遺跡発掘調査報告書」赤城村教育委員会 1993
- 「分郷八崎遺跡」北橋村教育委員会 1986
- 「西坂脇遺跡」北橋村教育委員会 1992
- 「村内遺跡I」北橋村教育委員会 1993
- 「小室遺跡」北橋村教育委員会 1968
- 「森山遺跡」北橋村教育委員会 1986
- 「下南室中高根遺跡」北橋村教育委員会 1990
- 「東篠遺跡・瓜山遺跡」北橋村教育委員会 1990
- 「芝山遺跡」北橋村教育委員会 1993
- 「城山遺跡」北橋村教育委員会 1989
- 「村内遺跡IV」北橋村教育委員会 1996
- 「開発遺跡」北橋村教育委員会 1995
- 「西ノ平遺跡」北橋村教育委員会 1996
- 「北町遺跡」第2回石器文化研究交流会発表要旨 1995
- 「下箱田遺跡群上原遺跡」第4回石器文化研究交流会 1997
- 「中村遺跡」渋川市教育委員会 1986
- 「群馬県遺跡台帳II 西毛編」群馬県教育委員会 1972
- 「市内遺跡I」渋川市教育委員会 1988
- 「市内遺跡II」渋川市教育委員会 1989
- 「市内遺跡III」渋川市教育委員会 1990
- 「市内遺跡V」渋川市教育委員会 1992
- 「市内遺跡VI」渋川市教育委員会 1993
- 「諏訪の木遺跡」渋川市教育委員会 1981
- 「空沢遺跡」渋川市教育委員会 1978ほか
- 「行幸田山遺跡」渋川市教育委員会 1987
- 「神宮寺西遺跡」渋川市教育委員会 1988

II 調査の成果

1. 旧石器時代

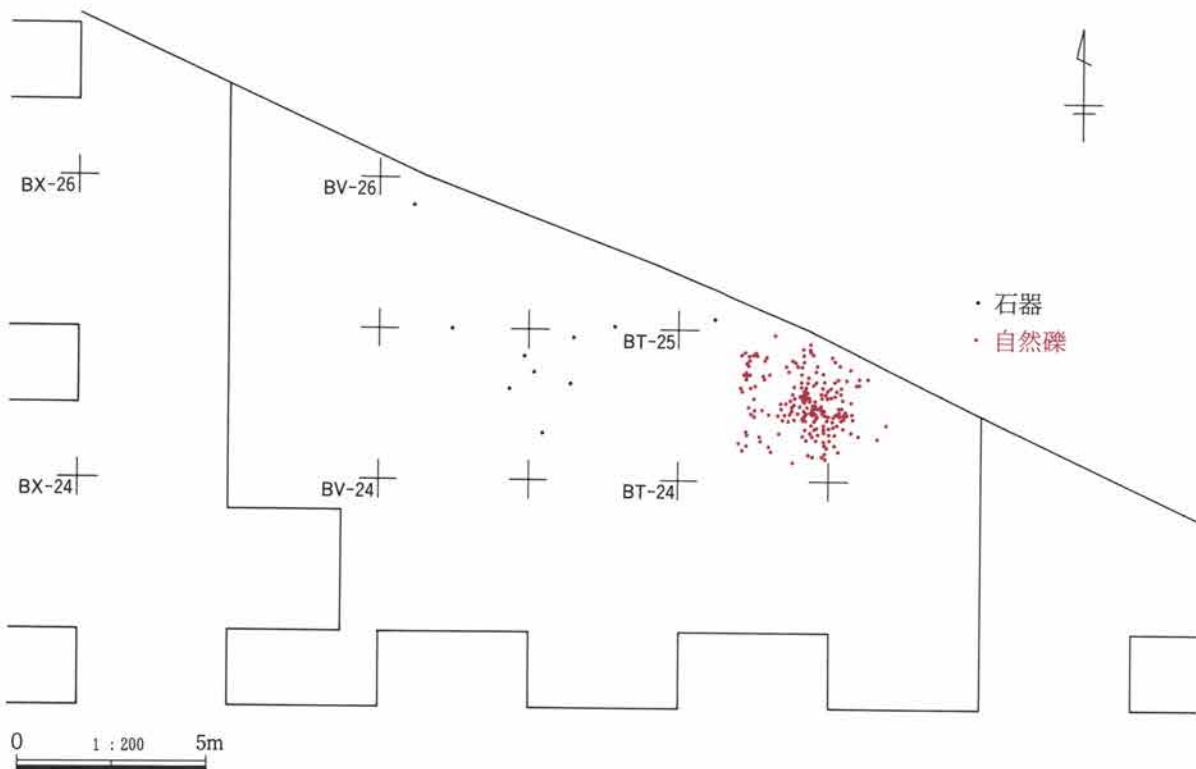
1-1 吹屋犬子塚遺跡

a. 第1文化層

(1) 概要

第1文化層を構成する石器群は、総計10点がIII区中央よりやや西側の、路線の北側に近い地点に出土した。出土地点は、東側の段丘崖線より100mほど、西側の谷地より200mほど離れており、本来なら余り分布の期待できない地点と思えた。縄文の遺構確認段階では東に緩く傾斜するようにも見えた出土地点の地形は、As-SPの直下では概ね平坦な地形感を呈していた。石器群の分布域は、概ね、4.4m×2.4mの範囲に散漫な状態で分布しており、この地点以

外石器分布は見られない。他の地点の試掘調査は前橋泥流層（XVIII層）の上面まで掘り終えた時点で試掘調査を終了している。出土資料は比較的形状の整う剥片が多く、ある意味では完結するようにも見える石器群だが、路線北側にも分布が広がる可能性を残しており断定できない。なお、分布域の東へ、約4mほど離れた地点には白色の斑晶を多く含む灰色に風化した特徴的な安山岩(第15図を参照されたい)が集中分布していた。ローム中に出土する自然礫と著しく異なること、部分的に意図的・人為的な剥離の痕跡が存在するようにも見えたことから出土位置・層位を記録した。検討の結果、旧石器と認定する積極的な理由に乏しく、ここでは紹介のみしておきたい。



第9図 石器と礫の分布（第1文化層）

II 調査の成果

出土石器には石刃(典型的な稜付の石刃ではなく、打面転移を行う中で結果的に生じた石刃を含む)や、幅広の剥片、敲石、台石が出土している。石器製作

に伴う碎片の類は極めて少なく、石器の「使用空間」的な色彩を強く示している。現状では出土資料の中には接合資料・同一母岩は確認できない。

器種構成 (10点)

①	剥片 4点 (40%)	②	敲石 3点 (30%)	③
---	-------------	---	-------------	---

①石刃 ②碎片 ③台石 各1点 (30%)

石材構成 (10点)

粗粒輝石安山岩 4点 (40%)	黒色頁岩 3点 (30%)	黒色安山岩 2点 (20%)	①
---------------------	------------------	-------------------	---

①ひん岩 1点 (10%)

石刃 (1点)

黒色頁岩 1点 (100%)

敲石 (3点)

粗粒輝石安山岩 2点 (67%)	ひん岩 1点 (33%)
------------------	--------------

剥片 (4点)

黒色頁岩 2点 (50%)	黒色安山岩 2点 (50%)
---------------	----------------

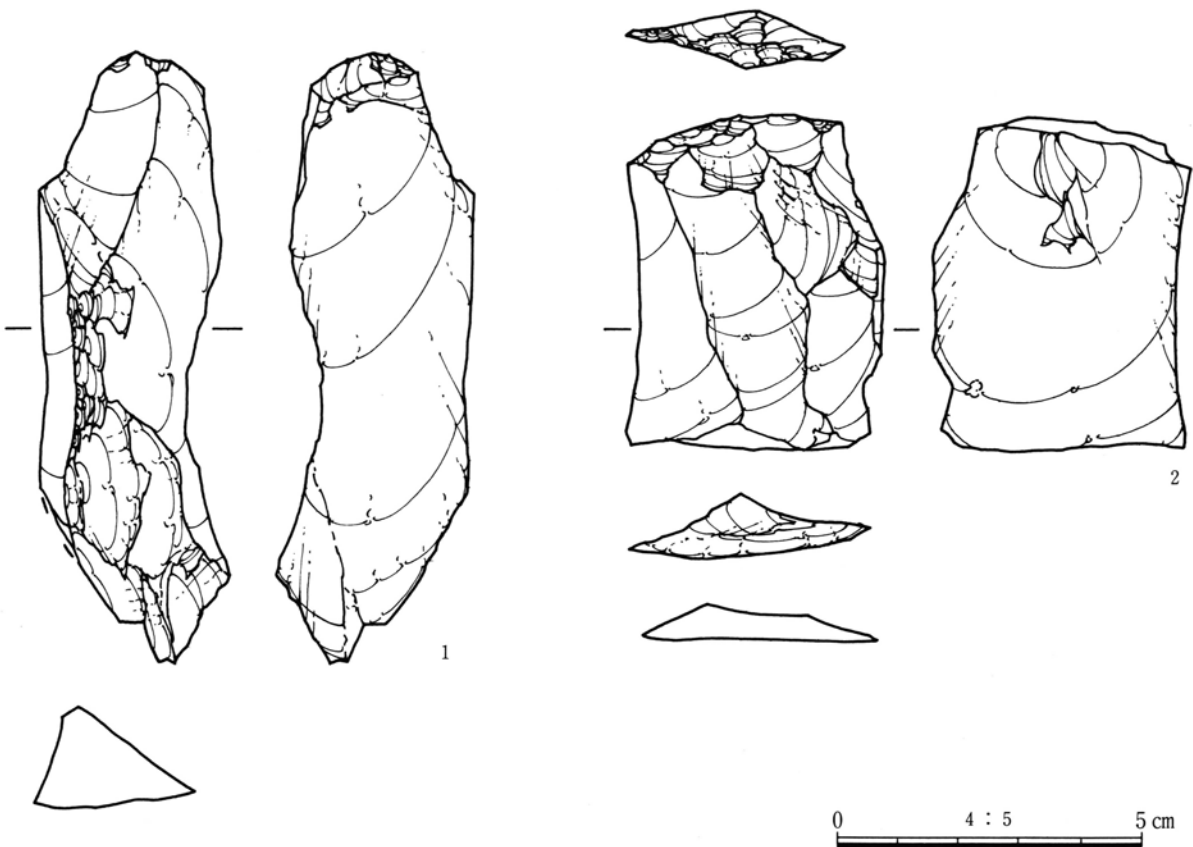
台石 (1点)

粗粒輝石安山岩 1点 (100%)

碎片 (1点)

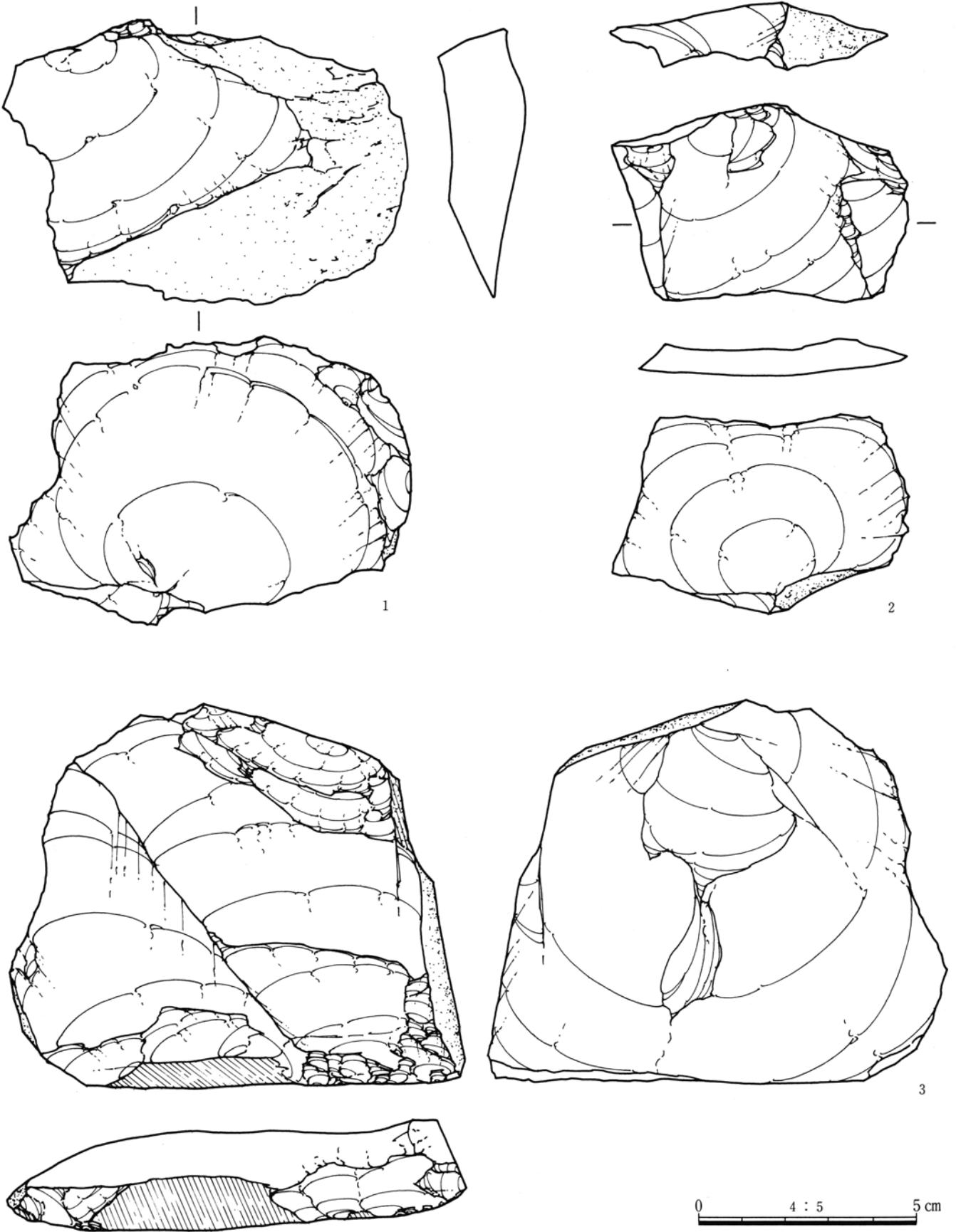
粗粒輝石安山岩 1点 (100%)

第10図 器種構成と石器石材



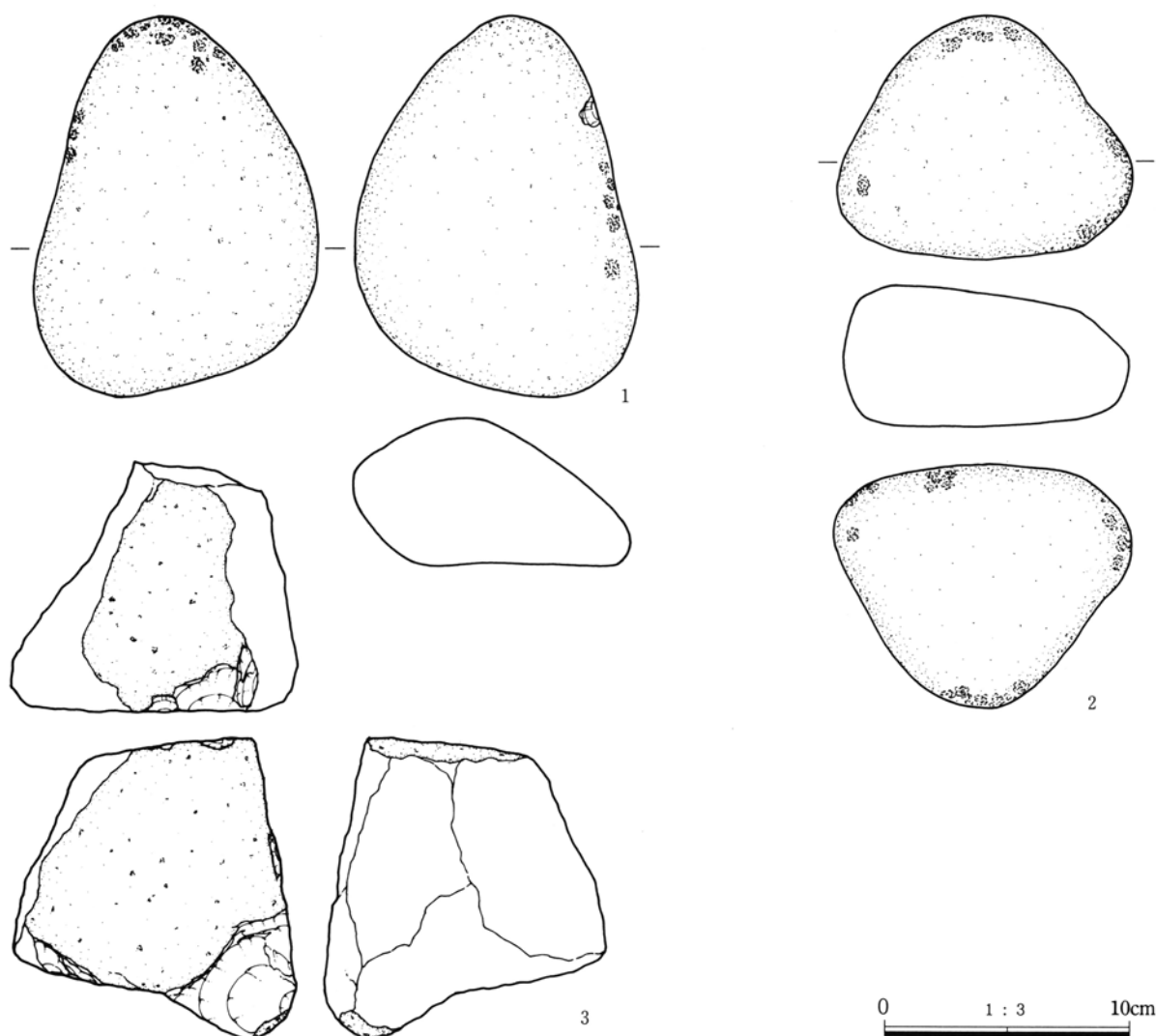
第11図 出土石器(1)

1. 旧石器時代



第12図 出土石器(2)

II 調査の成果



第13図 出土石器(3)

(2) 出土石器

10点が出土している。比較的形状の整う剥片が多く、外部より搬入した可能性が高い。出土石器には石刃1・縦長剥片1・幅広の横長剥片3・碎片1・敲石3・台石1が組成する。碎片は粗粒輝石安山岩だが斑晶の少ない比較的緻密な石材感を呈しており、打製石斧にも使用可能な石材と判断している。

第11図1は、90°の打面転移を伴い剥離した石刃で、左側縁・下端部分、及び、右側縁・上端部分を欠損する。表面・稜上には打面転移する前の作業面調整痕を残している。黒色頁岩。2は、やや幅広の縦長剥片で、中央より下の部分を大きく欠損する。剥離に際し、丁寧な打面調整を施す。黒色安山岩。

第12図1は表面に礫面を大きく残す幅広の横長剥片で、平坦打面より剥片を剥離している。黒色安山岩。2は幅広の横長剥片で、礫面を大きく残す打面より剥片を剥離している。形状の比較的良好な短縁を刃部に用いた可能性が高い。黒色頁岩。3は、台形に近い大形剥片で、剥片端部を欠損する。背面に残る剥離から上下両端に打面を持ち剥片を剥離している。黒色頁岩。第13図1・2は、礫の小口・側縁部分に打痕が集中する敲石。粗粒輝石安山岩。3は大形の角礫を用いた台石。表面や上面には小さな剥離が生じている。正面・上下両面以外は破損しており、ここでは本来の大きさ・形状から台石と判断した。粗粒輝石安山岩。

(3) 石器の分布

III区・中央よりやや西側の路線の北側に近い地点
に出土した。出土資料は10点で、石器群の分布域は
長径4.4m・短径2.4mの範囲(BT-25G、BU-25G)
に散漫に分布していたほか、Bs-26Gに碎片1、Bu
-26Gに縦長剥片1(第11図2)が単独で出土して
いる。石器はAs-SP直下のⅫ層下位に多く出土し
ており、上位部分と下位部分とは約40cmの高低差を
持つ。

1号ブロック(第14図)

BT-25G・BU-25Gに散漫に分布していた。概
ね、As-SPの直下(Ⅻ層の下部からⅫの上部に多く
出土)に出土している。

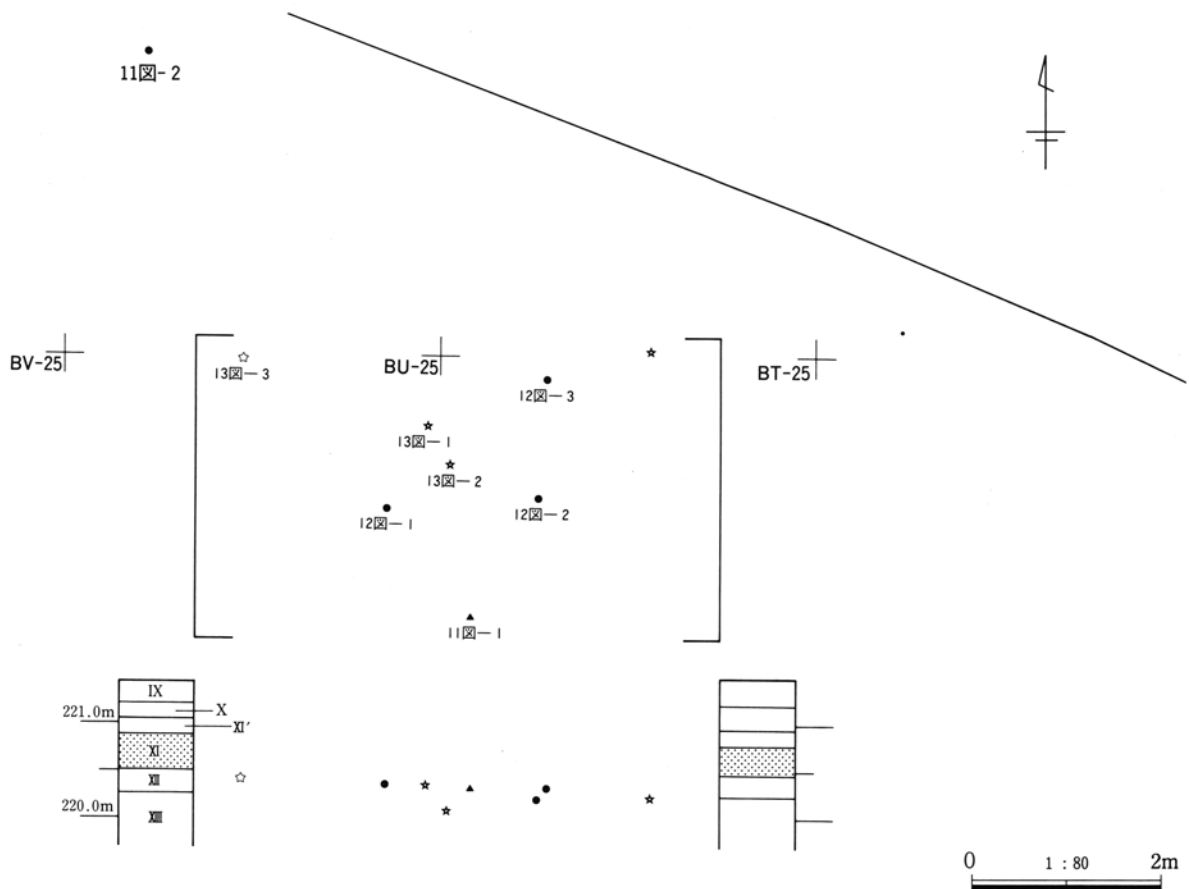
8点の石器には、石刃1・幅広の横長剥片3・敲
き石3・台石1が組成している。剥片系石器が4点
(黒色頁岩3点・黒色安山岩1点)、敲石その他の礫
石器が4点と礫石器の占める率が高い。接合資料・
同一母岩とも見られない。

礫の分布(第15図)

石器群の分布域から少し離れて礫の分布(BS-24
G・25G)を確認した。出土層位はAs-SP直下か
ら前橋泥流の上位で、60cmの高低差を以て出土した。

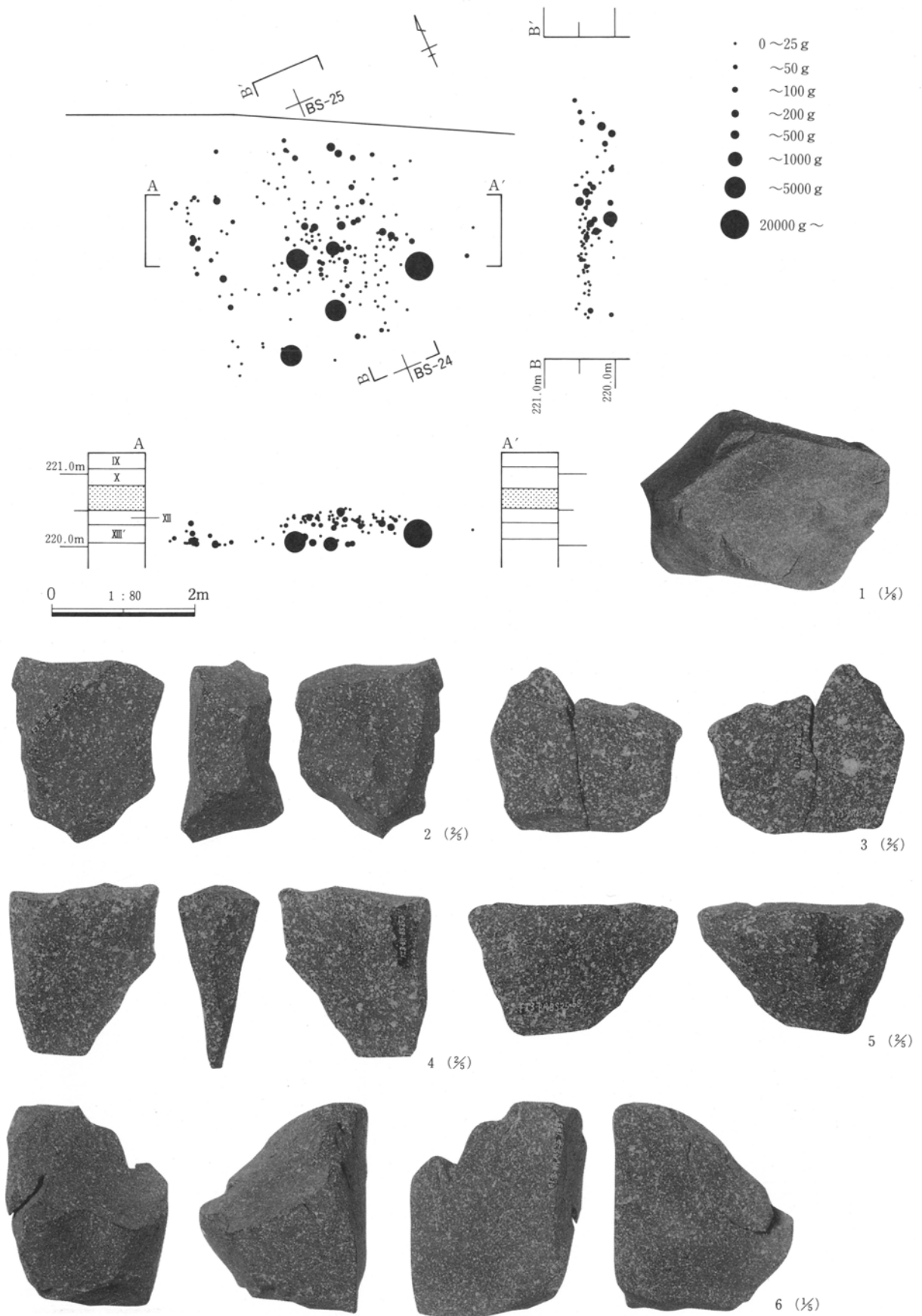
出土資料は198点が出土している。概して、小形・
角柱状を呈する例が多く、このほかには剥片状を呈
する例や、石核状を呈する例が存在している。20g
以下の礫が143点(72%)と圧倒的に多く、100gを
越える礫(14点)は10%にもならない。割れ口の鋭
い例も多い反面で、若干例(第15図、下段の写真資
料)を除いて人為的剥離を示す資料は少ない。

礫表皮はパン状にひび割れ、肉眼で見る限り浅間
起源の礫に由来する可能性が強く、また、この地点
には本来なら純層で堆積するAs-BPが著しく乱
れていること、さらにはガラス質に富み鋭く割れる
とはいえ、強度が劣り石器の石材には適当ではない
ことなどから、前橋泥流に包含した礫が上層に混入
した可能性が想定されよう。



第14図 石器の分布(1号ブロック)

II 調査の成果



第15図 礫の分布

1. 旧石器時代

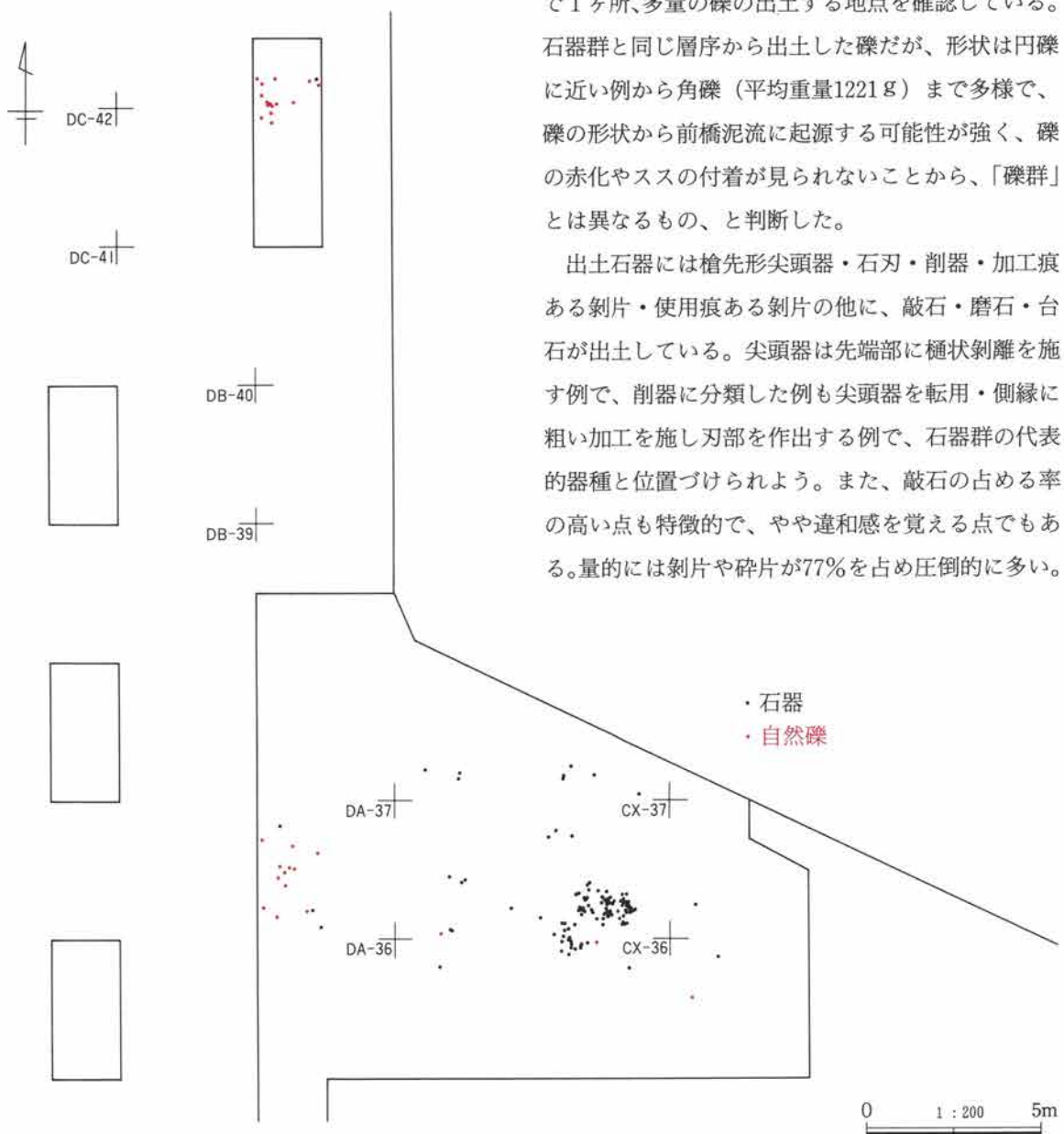
b. 第2文化層

(1) 概要

第2文化層を構成する石器群は、総計121点がIV区西端に出土したほか、北側に20mほど離れた地点に敲石（第21図8）が単独出土している。出土地点は約100mほど台地の中に入り込んだ地点で、上層の文化層と同様に、本来なら余り分布の期待できない地点に出土したようにも思えた。出土地点の地形は南西に緩く傾斜している。

先にも述べた通り、石器群は町道に近いIV区の西端に出土した。石器群の分布域は、長径2.8m・短径1.8mの範囲に密集・分布している。比較的規模の小さな分布だがさらなる細分が可能にも見える。このほか、周辺域には削器や石刃、敲石・台石が散漫な状態で分布していた。石器群の分布域は概ね判明したとも思える反面、北側20mの地点に単独で出土した敲石の存在が示す通り、周辺域にはまだこの他にも別の石器群が存在する可能性を残している。なお、試掘調査ではDA-37Gで1ヶ所、DA-42G・43Gで1ヶ所、多量の礫の出土する地点を確認している。石器群と同じ層序から出土した礫だが、形状は円礫に近い例から角礫（平均重量1221g）まで多様で、礫の形状から前橋泥流に起源する可能性が強く、礫の赤化やススの付着が見られないことから、「礫群」とは異なるもの、と判断した。

出土石器には槍先形尖頭器・石刃・削器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片の他に、敲石・磨石・台石が出土している。尖頭器は先端部に槌状剥離を施す例で、削器に分類した例も尖頭器を転用・側縁に粗い加工を施し刃部を作出する例で、石器群の代表的器種と位置づけられよう。また、敲石の占める率の高い点も特徴的で、やや違和感を覚える点でもある。量的には剥片や碎片が77%を占め圧倒的に多い。



第16図 石器と礫の分布（第2文化層）

II 調査の成果

器種構成 (121点)

①	剥片55点 (45%)	碎片39点 (32%)	②
---	-------------	-------------	---

①尖頭器・石刃・削器・加工痕ある剥片	各1点 (3.2%)
使用痕ある剥片	2点 (1.8%)
②敲石	13点 (11.2%)
台石・礫片	各3点 (5.0%)
磨石	2点 (1.8%)

尖頭器 (1点)

黒色安山岩 1点 (100%)

石刃 (1点)

黒色頁岩 1点 (100%)

削器 (1点)

黒曜石 1点 (100%)

加工痕ある剥片 (1点)

黒色安山岩 1点 (100%)

使用痕ある剥片 (2点)

黒色安山岩 2点 (100%)

剥片 (55点)

黒色安山岩50点 (91%)	①
----------------	---

①黒色頁岩 5点 (9.0%)

石材構成 (121点)

黒色安山岩93点 (76.5%)	①	②
------------------	---	---

①黒色頁岩	6点 (5.0%)
②粗粒輝石安山岩	15点 (12.5%)
溶結凝灰岩・ひん岩	各2点 (3.6%)
黒曜石・変質安山岩・石英閃緑岩	各1点 (2.4%)

碎片 (39点)

黒色安山岩38点 (97.5%)	①
------------------	---

①粗粒輝石安山岩 1点 (2.5%)

敲石 (13点)

粗粒輝石安山岩 8点 (62.5%)	①
--------------------	---

①溶結凝灰岩 2点 (15.0%)
変質安山岩・石英閃緑岩・ひん岩 各1点 (22.5%)

磨石 (2点)

粗粒輝石安山岩 1点 (50%)	ひん岩 1点 (50%)
------------------	--------------

台石 (3点)

粗粒輝石安山岩 3点 (100%)

礫片 (3点)

粗粒輝石安山岩 2点 (67%)	黒色安山岩 1点 (33%)
------------------	----------------

第17図 器種構成と石器石材

剥片系石器では黒色安山岩が93点(77%)と圧倒的に多く黒色頁岩(6点・5%)、黒曜石(1点・2.4%)と続き、礫石器では粗粒輝石安山岩(15点・12.5%)が多く、石器石材の在り方は概して赤城山麓の遺跡と同様な傾向を示している。

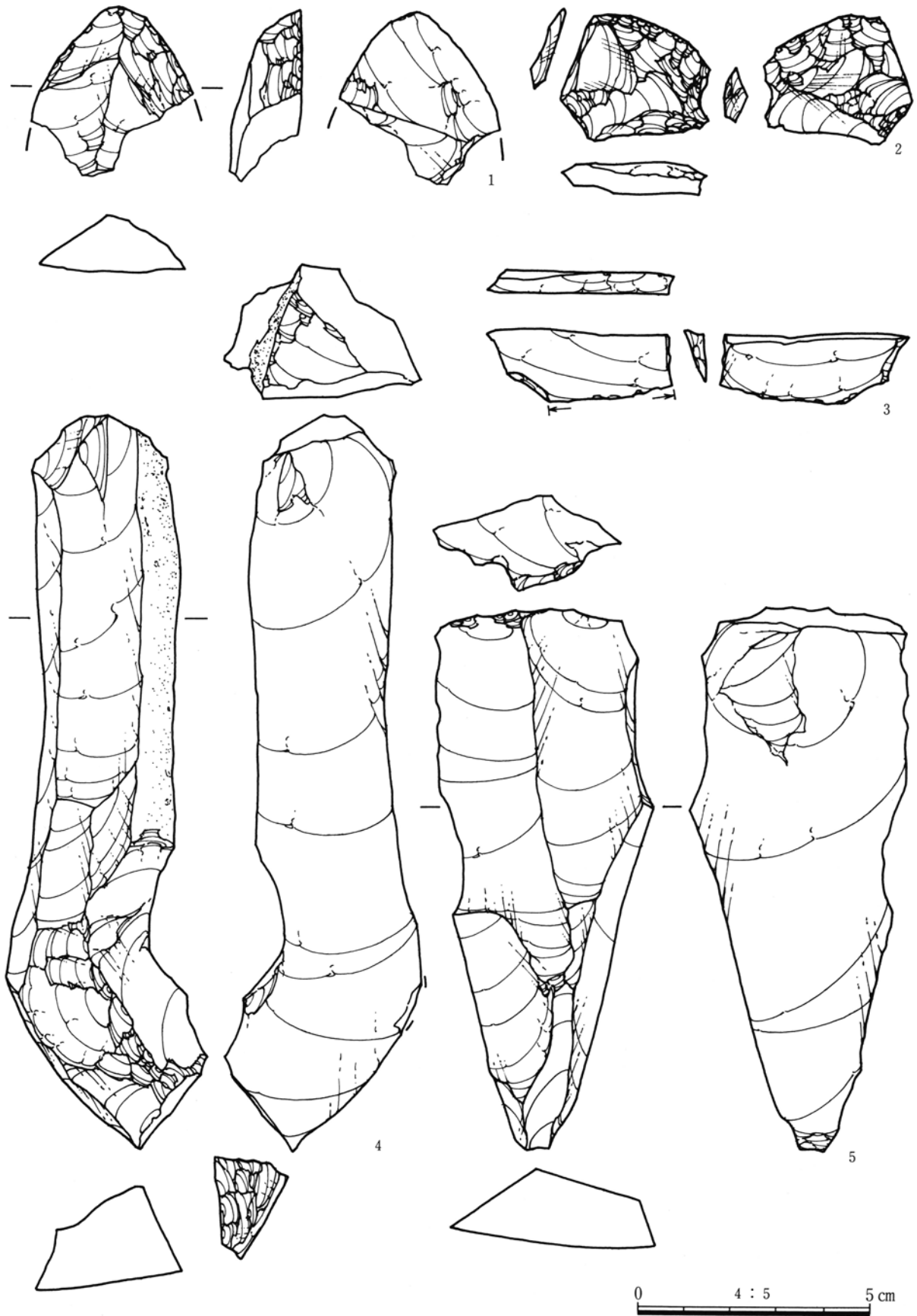
接合資料は、6例(敲石の1例を含む)を確認している。39点の剥片が接合した例(第24図)が示す通り、接合資料-1は頻繁な打面転移を繰り返し剥離を行う例だが、このほかには体系的剥離を示す接合資料は存在せず明確ではない。

同一母岩は黒色安山岩に3種類を確認したほか、黒色頁岩に1種類を確認している。

(2) 出土石器

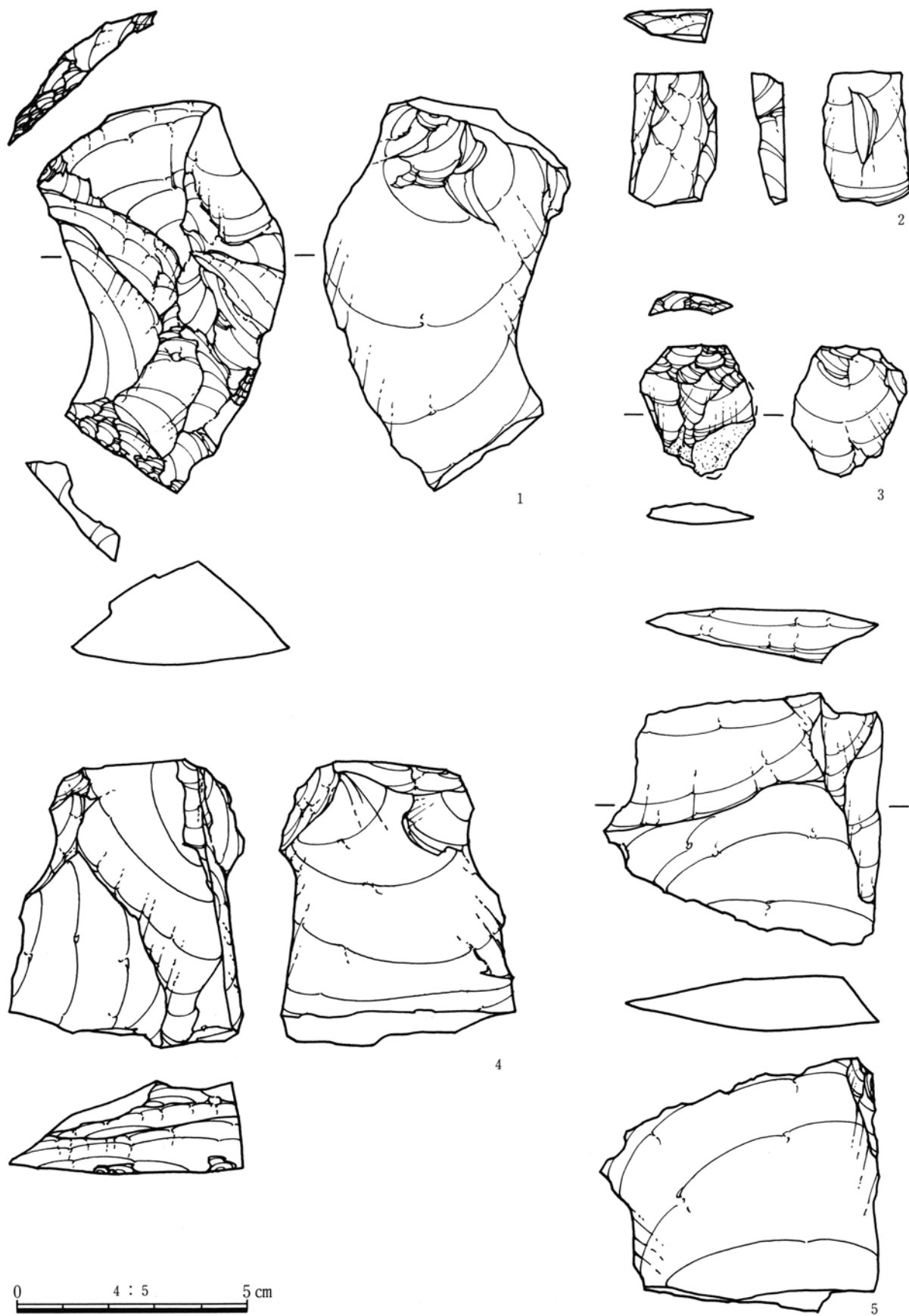
計121点が出土している。量的には剥片や碎片が約77%と圧倒的に多い。また、敲石が10%を越える率で組成する点も特徴的である。出土石器には先端部分に「槌状剥離」を施す男女倉型尖頭器1、削器1、石刃1、加工痕ある剥片1、使用痕ある剥片2の他、敲石・磨石・台石が組成している。概ね、単位的石器群を確認したようにも見える反面、集中地点の石材の構成が黒色安山岩のみ偏在すること、黒色頁岩は単独で出土することなど石材構成の観点から、石器分布は調査区の周辺域にも広がる可能性が否定できないことから、単純には単位的石器群、或は、「搬

1. 旧石器時代

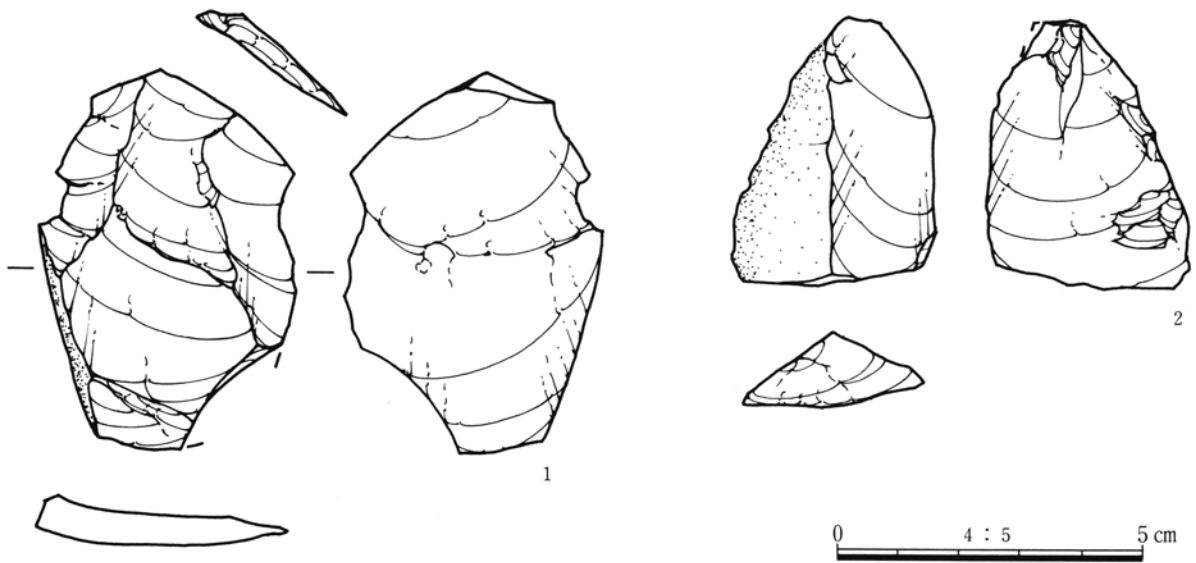


第18図 出土石器(1)

II 調査の成果



第19図 出土石器(2)



第20図 出土石器(3)

入石器」と評価できないかもしれない。

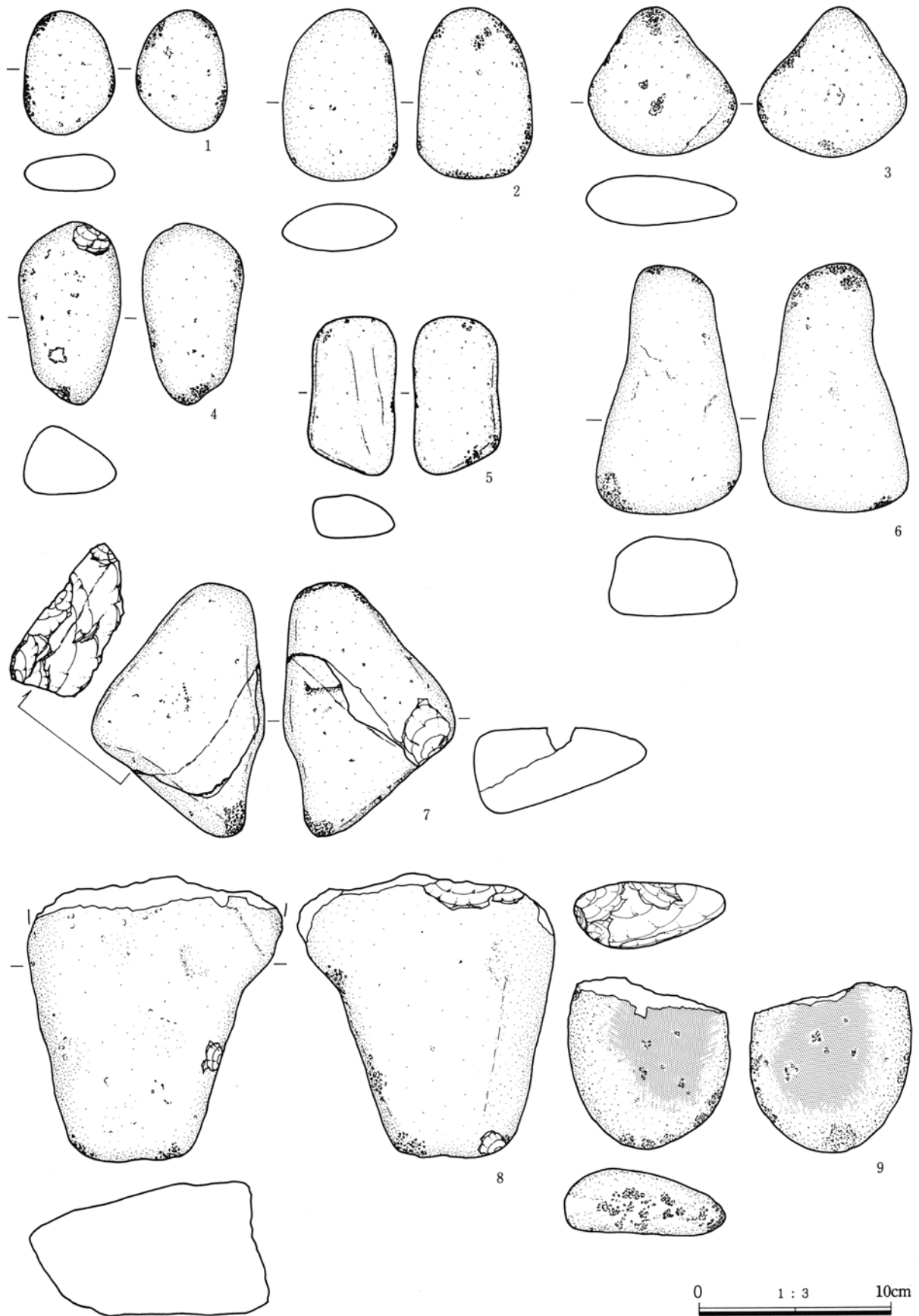
出土石器

第18図1は、「槌状剥離」を有する男女倉型尖頭器で、先端部を除き大きく欠損する。形状は不明だが、残存部分から判断する限り、10cm近い大形・幅広を呈する形状が想定され、機能部の再生を繰り返したのではなく、製作途上、或は、完成直後の欠損と考えておきたい。刃部角度は先端部で厚く、基部に近い所は薄く、先端から1cmの所で45°を、同3cmの所で39°を測る。黒色安山岩。2は、幅広の槍先形尖頭器を再生、側縁部分に加工を加え刃部を作り出した削器。表裏両面とも、図の上端部分に尖頭器・作出段階の剥離を残している。裏面・右下の剥離は上端部分の剥離に似る。が、尖頭器の側縁と考えるには左右対象とはいえないため、ここでは下端の剥離を尖頭器製作時の剥離ではなく、再生以後の剥離と見た。黒曜石。3は、剥片端部に「刃こぼれ」の連続する使用痕ある剥片で、幅広の剥片を用いる。上半部・右側縁を大きく欠損するため、形状は明確ではない。黒色安山岩。4は、上下両端に打面を持つ大形の石核から剥離した石刃。上下両端の打面は並行するものではなく、打面の形状も下端の打面は調整打面、上端の打面は剥離してえた平坦打面と著しく異なる。また、稜上には調整剥離も見られ、側縁に

も大きく礫面を残していることから、剥片剥離初期の石核調整剥片とも見られよう。黒色頁岩。5は、平坦打面より剥離したやや厚い縦長剥片。背面の剥離方向より両設の打面を持つ石核から剥離した可能性が強い。黒色頁岩。第19図1は、上下両端に打面を持つ石核より剥離したやや幅広の縦長剥片。上端の打面には微細な打面調整を施す。黒色頁岩。2は、左右の側縁が並行する石刃で、上半部分を大きく欠損する。剥片端部はヒンジ状に剥離している。黒色頁岩。3は、剥片端部に礫面を残す幅広の小形剥片。打面には著しい打面調整を施す。黒色頁岩。4は、幅広の大形剥片。剥離段階に打点部分から大きく縦に破損したうえ、打面も弾け飛んでいる。剥片の中央付近で横位に破損している。黒色安山岩。5は、やや幅広で大形の剥片。剥片の中央付近より上半部分を大きく欠損する。黒色安山岩。第20図1は、やや幅広の縦長剥片。バルブは殆ど発達せず、薄い剥片の剥離に成功している。側縁に礫面を残す。打面は剥離段階で弾け飛んでいる可能性も否定できない。黒色安山岩。2は、礫面を大きく残す縦長の剥片。平坦打面より剥離した、剥離の初期段階に剥離している可能性が強い。中央付近より下半を欠損する。黒色頁岩。

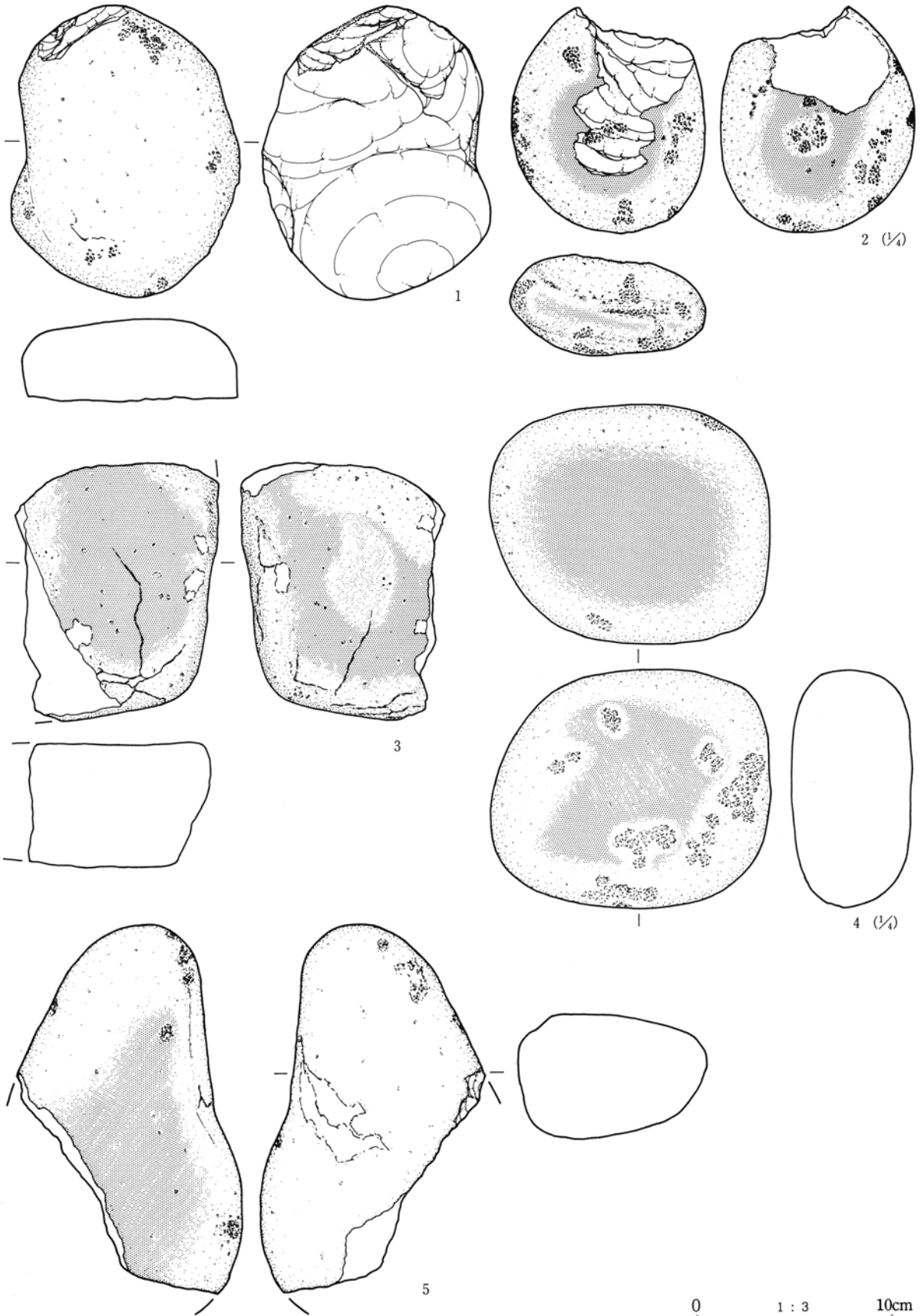
第21図1～9、第22図1・2は、敲石を一括して

II 調査の成果



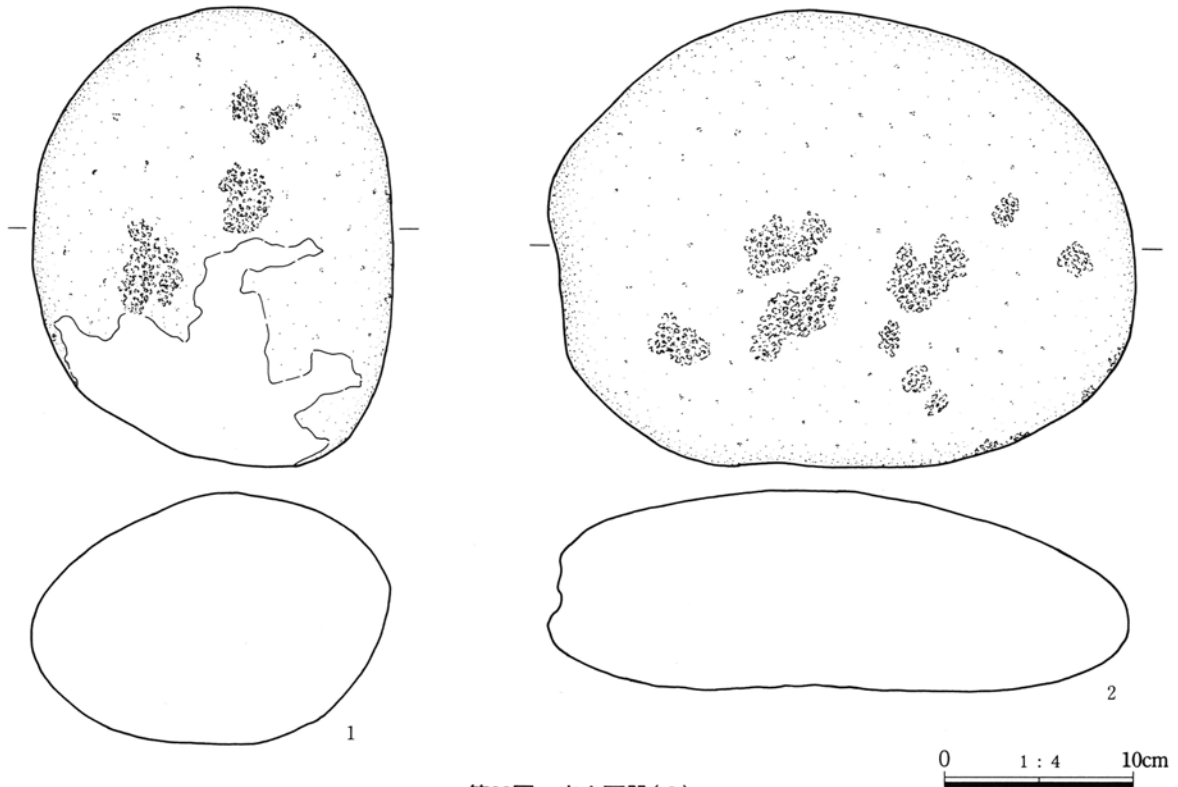
第21図 出土石器(4)

1. 旧石器時代



第22図 出土石器(5)

II 調査の成果



第23図 出土石器(6)

図示した。敲石には小形の例(第21図1~5)から大形の例(第21図8・第22図1・2)まで多様な形状が見られ、石器製作の各々の段階に対応する敲石が出土している。小形の敲石は200gを少し越える程度の礫を用いる例が多い。中形の敲石(第21図6・7)は掌に入る程度の礫を用いており、500g~700gを測る。大形の敲石は片手で持ち作業するには限界とも思える重量の礫を用いている。打痕は礫の側縁や小口部分に集中する例が多い。が、なかには礫面の摩耗する例(第21図9)や摩耗の他にも礫の中央付近に打痕を有す例(第22図2)も見られ、機能・用途の複合する状況も想定されよう。第22図3・4は、磨石を一括して図示した。3は、熱を受け、ヒビ割れ破損しており、残存形状からやや縦に長い礫形状が想定されよう。表面側に摩耗面を有する。4は、4kgを越える大形の磨石。摩耗痕は裏面側に著しいほか、表面側には打痕が集中する。第22図5と第23図1・2には、台石を図示した。礫面には打痕が著しく、礫重量は10kgを越える例も存在する。

接合資料

接合作業の結果、6例51点の接合資料(敲石の接合資料1を含む)を確認、接合率は42%に達した。接合資料1は多数の剥片からなる接合資料で、剥離の進捗状況を知る上で良好な接合資料だが、残る接合資料2~6は剥離段階で破損した資料で、剥離の実態は明確ではない。

接合資料1(第24~28図)

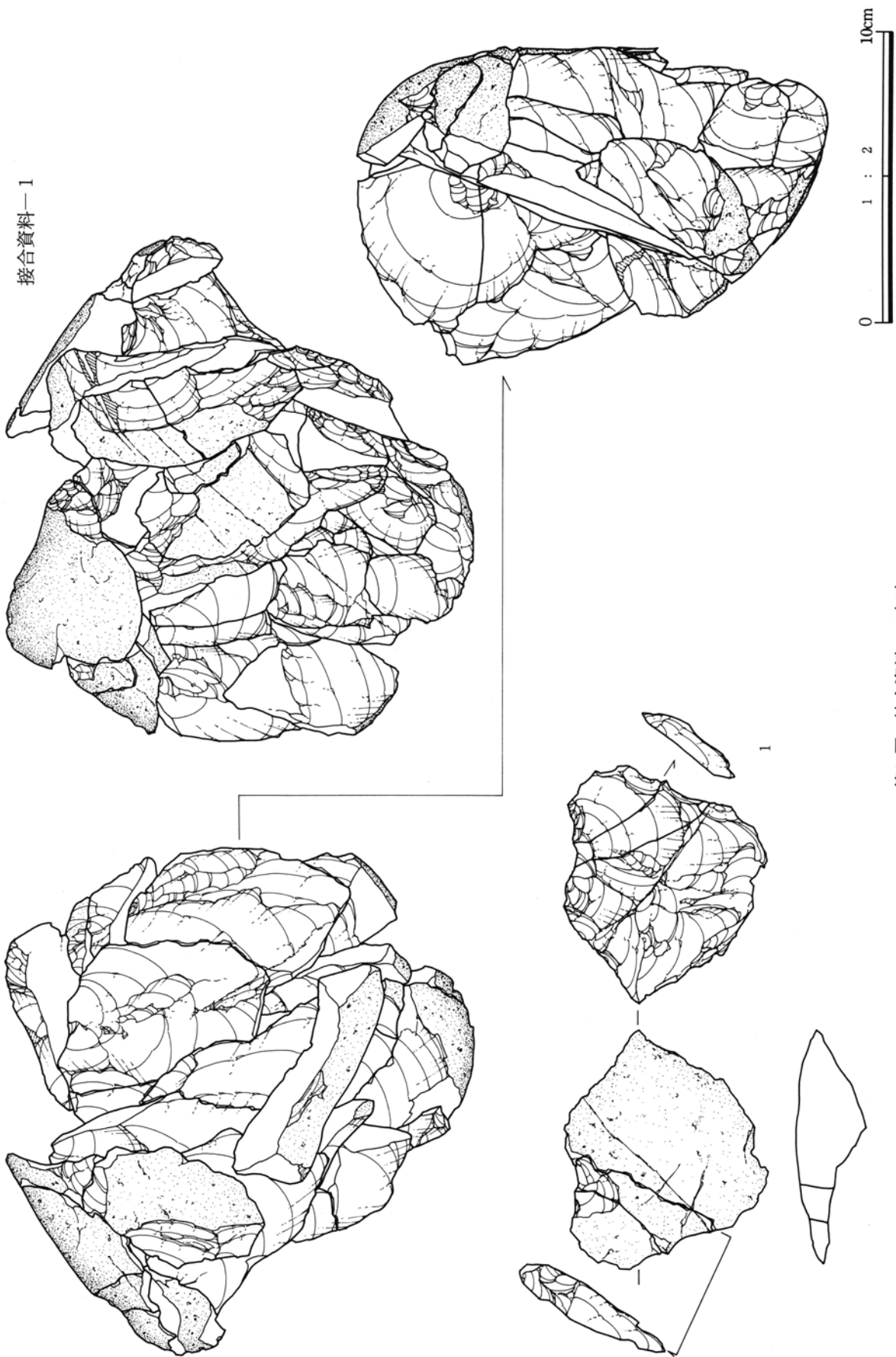
比較的大型の原石を用い、剥片剥離を行う。原石は長径18cm・短径17cm・厚12cmを測り、残存礫面・接合状況から河床で採取した円礫を遺跡に持ち込み剥片生産した可能性が強い。

原石の分割

① 1 → 2 ⇒ ○ → ○ → 3 ⇒ 4 → ○ → ○ → 5 → 6 →
○ . . . ⇒ 7

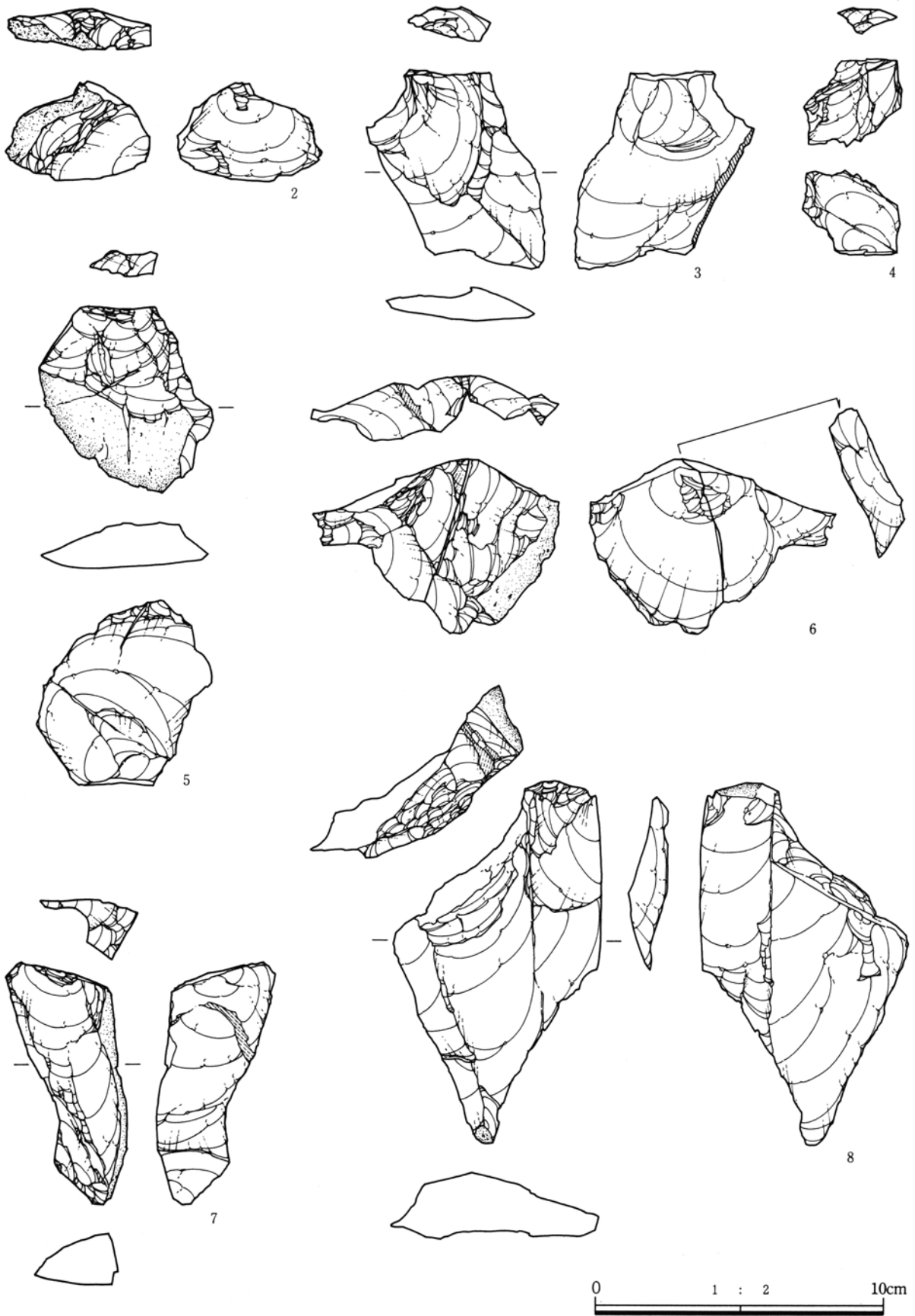
② 8 ⇒ ○ → ○ → 9 → ○ → 10 → 11 ⇒ ○ → ○ ⇒ 12 → 13
→ 14 a ・ 14 b → 15 → 16 → 17 → 18 ⇒ (19 → 20)
(○ → 21 ⇒ 22 ⇒ 23 → ○ ⇒ 28 ・ 24 → 25 → 26 → 27)

剥片剥離は原石を大きく二分・分割して石核素材を得た後、各々の石核で剥片剥離(①・②)が進む。



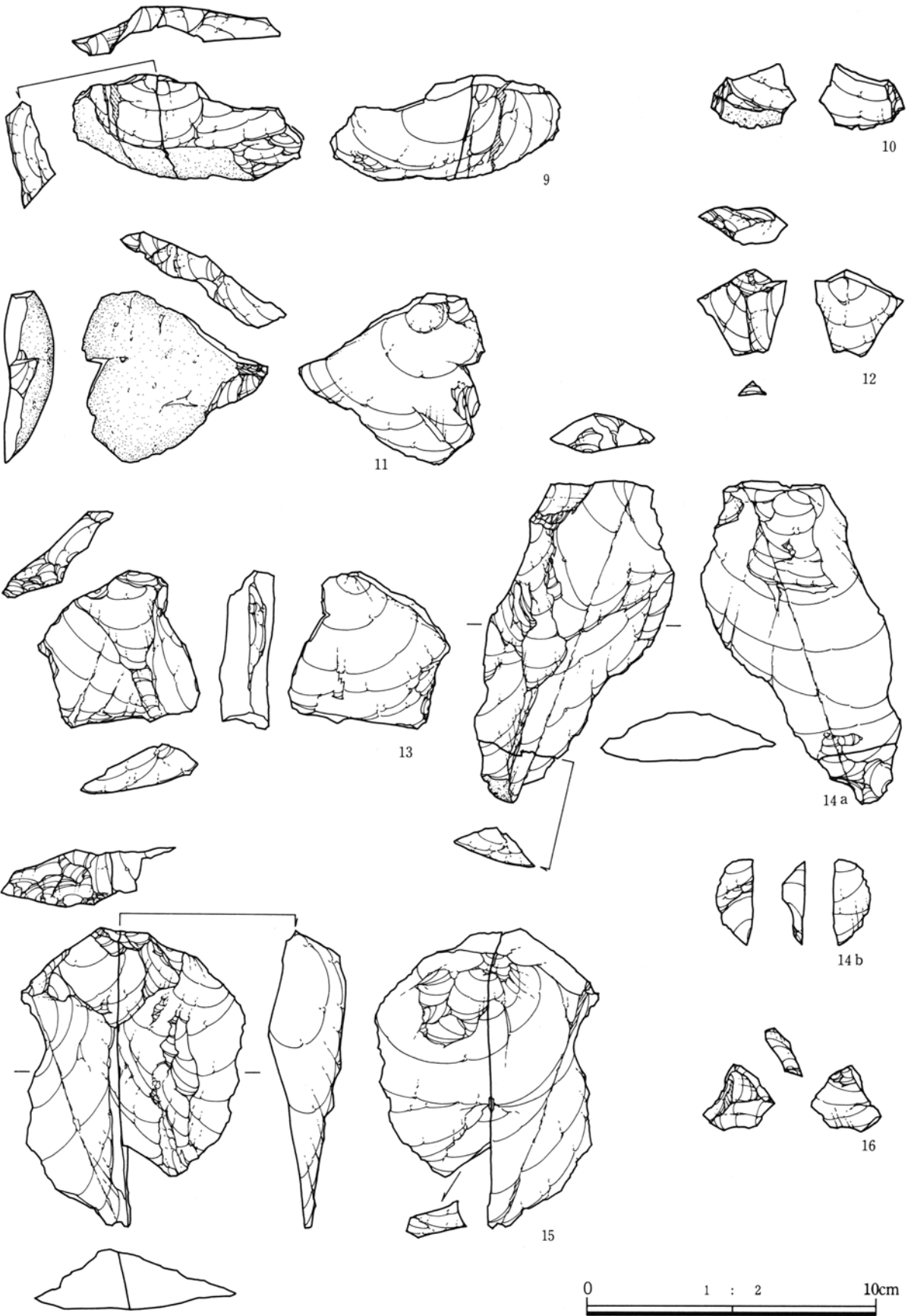
第24図 接合資料-1(1)

II 調査の成果



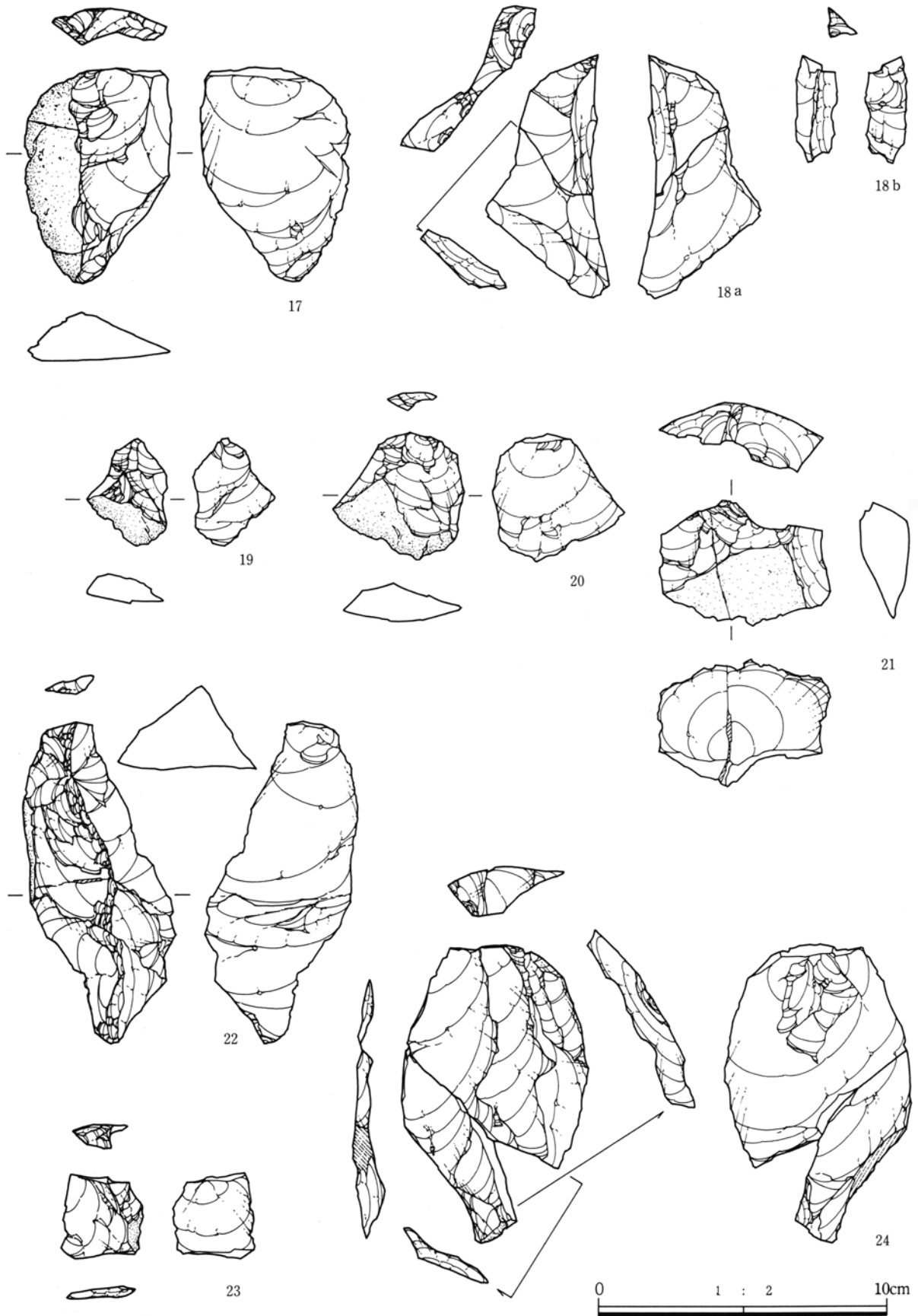
第25図 接合資料一(2)

1. 旧石器時代



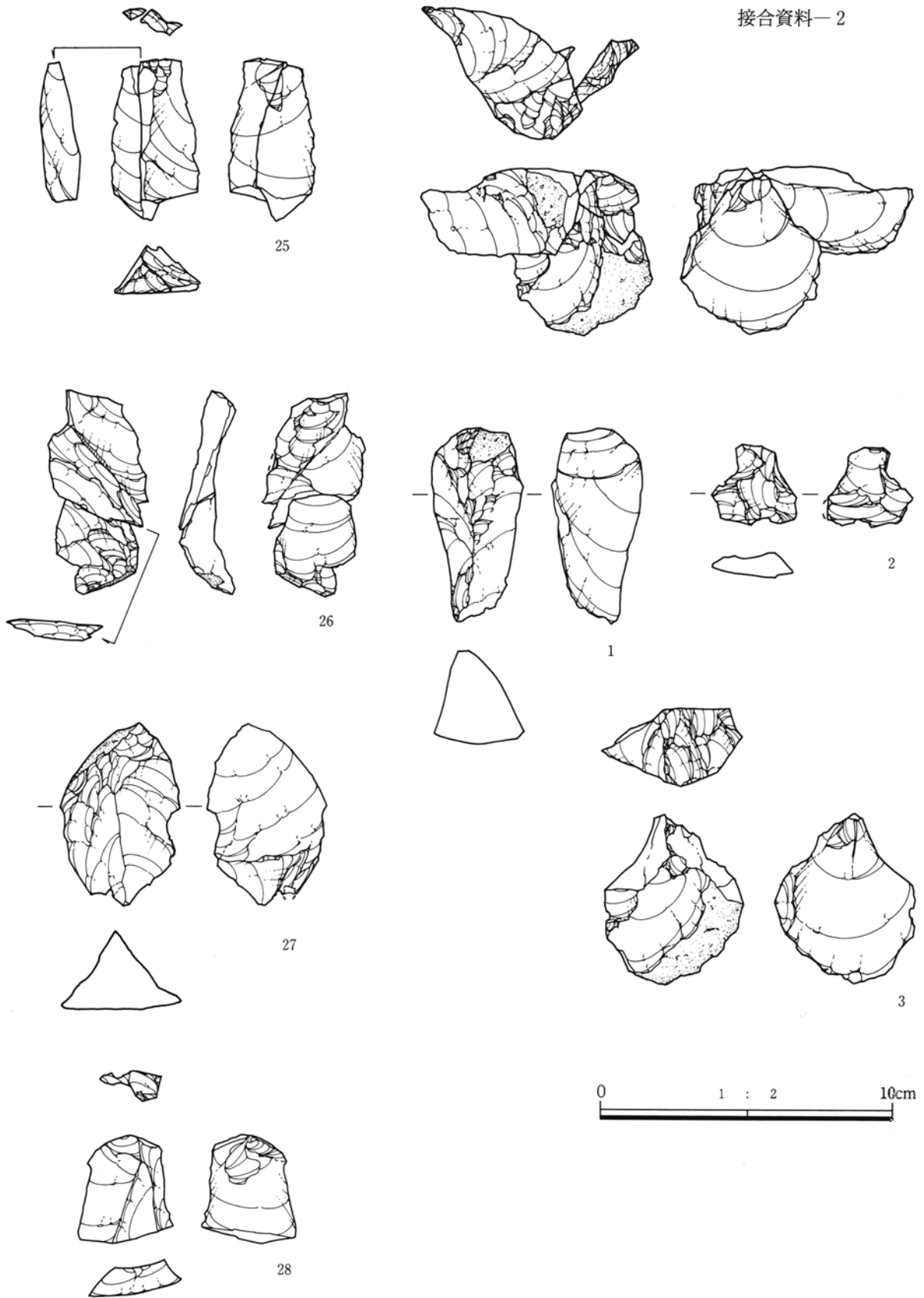
第26図 接合資料一(3)

II 調査の成果



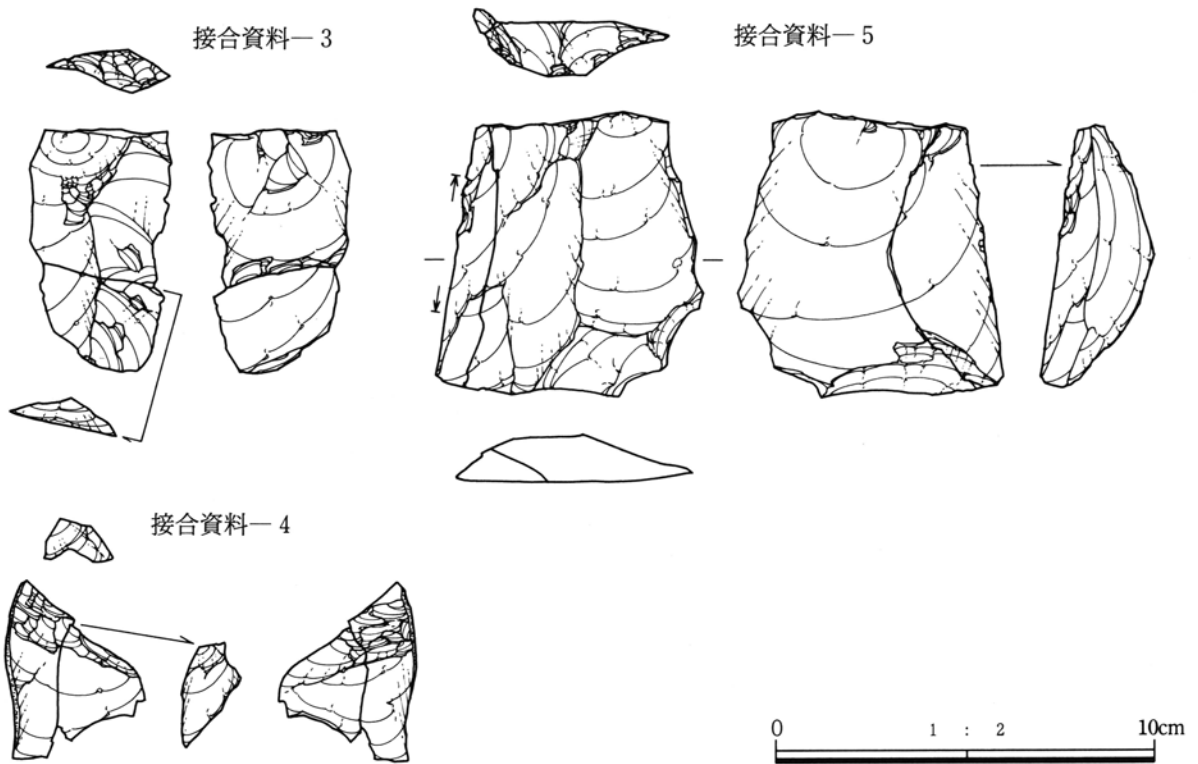
第27図 接合資料一(4)

接合資料-2



第28図 接合資料-1(5)・2

II 調査の成果



第29図 接合資料-3～5

①では、分割面を打面に1・2を連続剥離したのち、作業面を打面に入れ換え3を剥離する。3の剥片を剥離した後、作業面を打面に入れ換え6枚以上の剥片4～6を剥離、再び作業面と打面を入れ換え7を剥離する。②では、礫面を打面に8を剥離した後、作業面を打面に入れ換え2枚の剥片を剥離、9を剥離する。9の剥離以後は打点を大きく振り10・11と剥片を剥離している。以後、作業面と打面を入れ換える剥離が繰り返され、12以下の剥片剥離が進む。剥片剥離は縦長剥片を指向する一特に22の剥片剥離以後に著しいものだが、良好な剥片の剥離には成功したとはいえない状況を示している。28の剥片を剥離して剥離を終え、残核を遺跡の外へ持ち出している。

接合資料-2 (第29図)

3点からなる接合資料で、加工痕ある剥片1と剥片2が接合している。厚い大形剥片を石核に用い、剥片剥離を行う。剥片の形状は概して厚く、1の剥片は「切り合い」関係が微妙だが、剥離の後に稜上

に粗い剥離を加えている可能性が強い。

礫面を打面に1の剥片を剥離した後、1の剥離面(作業面)を打面に2を剥離する。この後、更に1枚の剥片を剥離・90°の打面転移を行い、やや厚い剥片・3を剥離する。

接合資料-3～5 (第29図)

3例とも剥離段階で剥片の打点付近や中央付近で破損した資料の接合資料。礫面を大きく残す例は少なく、ある程度剥離が進んだ段階の剥片と判断されよう。

接合資料-3は、折断剥片の接合例。裏面側の折れ面には折断した際に生じる「剥がれ」が存在している。

接合資料-4は幅広の剥片を剥離した際に、打点部分から破損した資料の接合資料。破損した一方の剥片には側縁に「刃こぼれ」が見られ、直線的側縁を刃部に巧く用いている。

接合資料-5は、剥離の段階で打点部分から破損した接合資料。

(3) 石器の分布 (第30図)

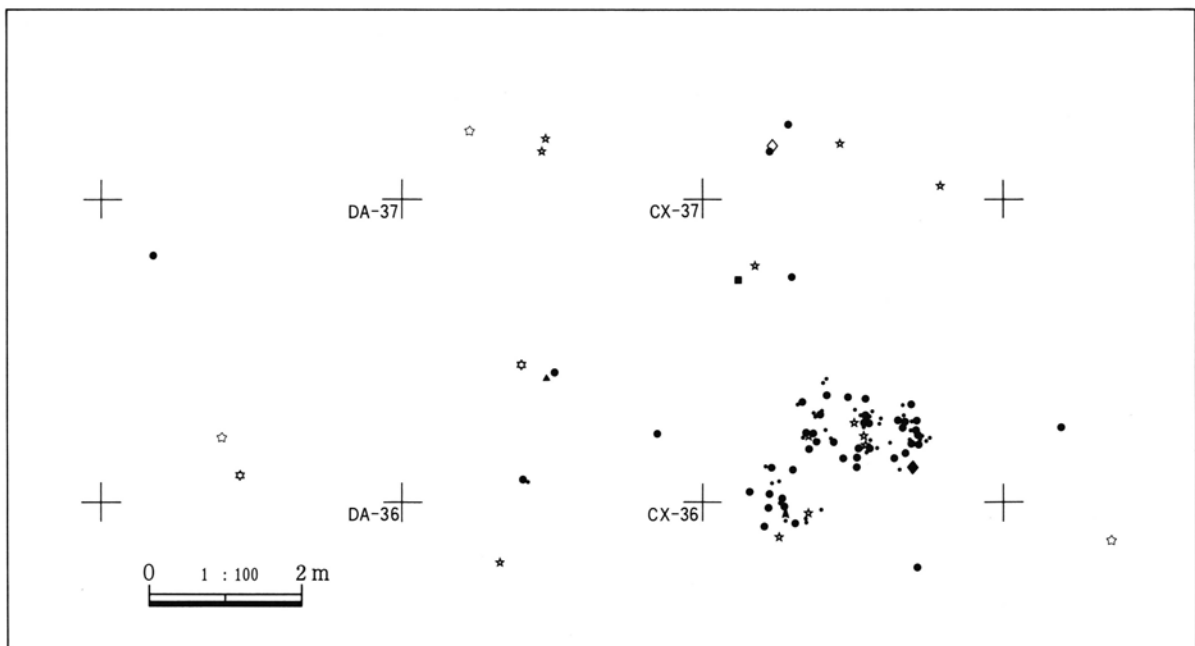
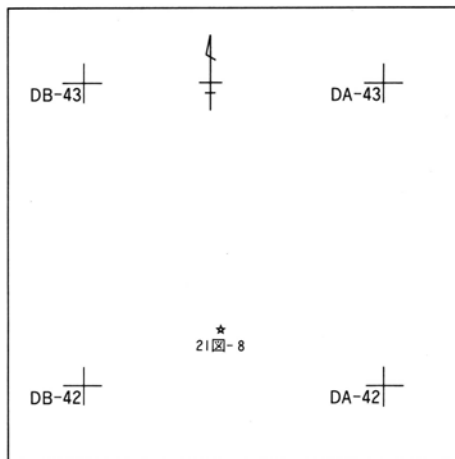
石器群は、台地が南西に緩く傾斜するIV区・西端に分布していた。出土資料は121点を数え、石器群は長径2.8m・短径1.4mの範囲 (CX-36G・37G) に集中分布したほか、周辺域 (CX-38G・CY-36G～38G・DA-37G) にも散漫に分布していた。石器の集中分布する範囲は狭く、集中地点は1ヶ所とも見える反面、細かく見れば、微妙だが石器分布が途切れるようにもみえ、CY-36に近い分布域の南西部と北東側 (CX-37G) で分布が切れ、さらにはこの

CX-37Gの集中部の中にも若干分布の途切れる所が見られ、細分が可能ともいえよう。後述するよう剥片剥離の順と分布にはある種の関係も想定され、分布の細分が可能かもしれない。

石器の分布地点はAs-BP (ⅩⅢ層) が純層では堆積せず攪拌して堆積しており、出土層位の確定は正確にはできない。石器群はⅩⅢ層より下位のAs-BPを多量に含む黄褐色ロームから前橋泥流層 (ⅩⅧ層) の上位に出土している。IV区の石器群はⅢ区の石器群 (第1文化層、As-SPの直下のⅩⅢ層に出土した) とは確実に出土層位が相違するのであり、Ⅲ区から出土した石器群とは分けて扱っておきたい。

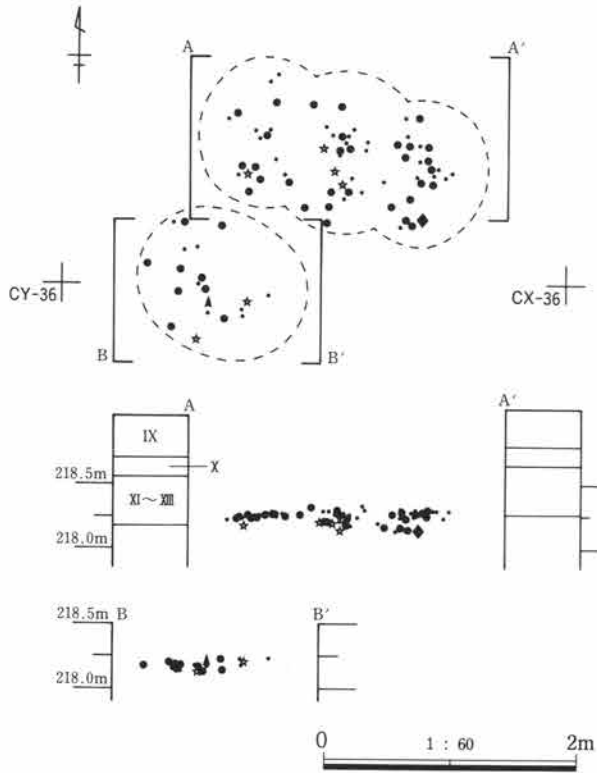
1号ブロック (第31図)

CX-36G・37Gに分布していた。石器の出土地点はAs-BPの堆積が良好ではなく、また、As-SPの堆積も部分的に乱れており、出土層位を確定するには条件が悪い。しかし、既に述べた通り、石器群はAs-BPを多量に含む黄褐色ローム (ⅩⅢ層に相当する) から前橋泥流層の上位 (概ね、25cmの高低差を以て出土) に出土したのであり、第1文化層より下位の石器群と考えて良い。



第30図 石器の分布 (第2文化層)

II 調査の成果

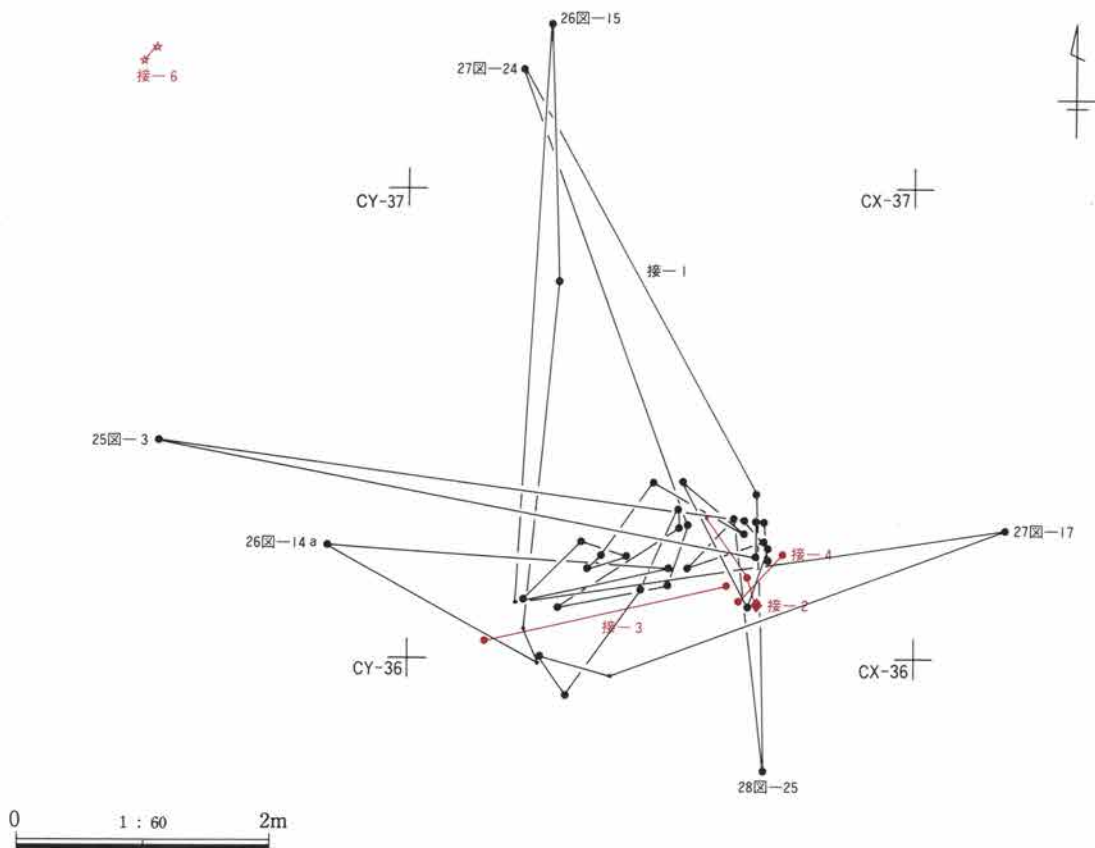


第31図 石器の分布（1号ブロック）

出土した87点の石器には槍先形尖頭器1・使用痕ある剥片1・剥片40・碎片39・敲石6が組成している。石器石材は黒色安山岩が77点と圧倒的に多く、88%を占める。このほかには、黒色頁岩3（第19図2・3、第20図2）、粗粒輝石安山岩3、ひん岩1、変質安山岩1、石英閃緑岩1が出土している。接合資料は5例（接合資料-5は出土位置不明、実測図のみ掲載）を確認しており、接合資料は集中部周辺域にも分布している。接合資料-2~4は、40点の剥片・碎片が接合した接合資料-1と同一母岩と見られ、「石器製作跡」的な色彩が濃い。

(4) 接合資料の分布（第32図）

接合資料は6例を確認している。このうち、1例（接合資料-6）は集中部からやや離れたCY-38Gに、残る5例の接合資料は集中部に分布する。先にも述べた通り、集中部は分布域も狭く、大きく見れ



第32図 接合資料の分布

ば、集中部1と把えて支障ない分布状況を呈している。が、以下に示す通り剥片剥離と分布にはある程度関係も指摘され、以下に検討していきたい。

まず剥離と分布の関係だが、ここでは接合資料-1を例に、剥片剥離と出土位置の関係を考えていきたい。

- ① 1(1 d)→2(1 d)⇒○→○→3(外)⇒4(1 d)→○→○→5(1 d)→6(1 c)→○・・・
⇒7(1 d)
- ② 8(1 c)⇒○→○→9(1 b)→10(1 b)→11(1 b)⇒○→○⇒12(1 a)→13(1 c)→14 a(外)・14 b(1 a)→15(外)→16(1 a)→17(外)→18(1 a)⇒19(1 c)→20(1 a)
○→21(1 c)⇒22(1 c)⇒23(1 c)→○⇒28(1 d)・24(1 c)→25(1 a・1 d)→26(1 c)→27(外)

既に述べた通り、この資料の剥離は原石を二分してえた石核を単位に剥離が進む。3回の打面転移を確認した①に関連する剥片は、概ね1 dブロックに分布していた。ブロック外には、やや幅広の大形剥片(第25図3)が分布した。一方、7回の打面転移を確認した②に関連する剥片は、搬出資料を除けば、概ね、1 bブロック→1 aブロック→1 cブロック→1 dブロックと剥離場所を変えているようでもあり、注意されよう。②の場合も①と同様に大形の剥片がブロック外に分布する傾向を示していた。

このほか、剥片剥離に関連する資料に敲石が出土している。敲石は1 dブロックを除く1 aから1 cブロックに1点～3点が組成している。敲石は概して小形の部類に属す例が多い。細分した各々の集中地点には大・中・小の敲石が組成するとは限らず、また、大形の敲石(第22図2)には礫面の著しい摩耗痕や打撃痕が存在していた。

剥片剥離と分布には地点を変え剥離(石核消費の推移を想定しておきたい、単純な破棄の場ともいいきれない)するようにも見えたわけだが、多目的・多用途に用いる敲石の存在も判明したのであり、単純に「石器製作跡」と断定できない。

(5) 同一母岩の分布

接合資料を踏まえ母岩単位に分類した結果、出土資料には7種の同一母岩を確認した。接合資料が示す通り、出土資料は複数の母岩を剥離消費した状態ではなく、消費母岩は概ね1個体、と判断している。

母岩別資料・黒色安山岩-1(第33図)

白色の斑晶を多く含む母岩(接合資料-1)で、大きな節理を有する。接合資料-2～4も同様な特徴を示し同一母岩と判断した。単独出土した槍先形尖頭器も同様だが、やや風化が激しい。白色の斑晶の入り方は極めて類似しており、ここでは同一母岩と判断した。分布域は、CX-36G・37Gに集中するほか、周辺域にも若干分布している。

母岩別資料・黒色安山岩-2(第33図)

白色の斑晶(径1mm前後)を含む他、灰色の斑晶を特徴的に含む。接合資料-5の他、単独出土の剥片(第19図4・5、第20図1)からなる。接合資料-5を除き分布の散漫な集中部の周辺域に出土した。剥片は比較的形状が整い、遺跡外部から搬入。

母岩別資料・黒色安山岩-3(第33図)

風化が弱く新鮮で、白色の斑晶や灰色の斑晶を含む在り方は黒色安山岩-2に近い。遺跡の外で剥離し、遺跡に持ち込んだ可能性が強い。CX-38G出土。

母岩別資料・黒色頁岩-1(第34図)

構成粒径が均質で、珪化は弱い。3点とも1ヶ所に分布していた。1点(第19図3)は調整剥片に近く、付近の石器製作を暗示するかもしれない。残る2点(第19図2、第20図2)は比較的形状が整う剥片で、搬入資料と考えている。

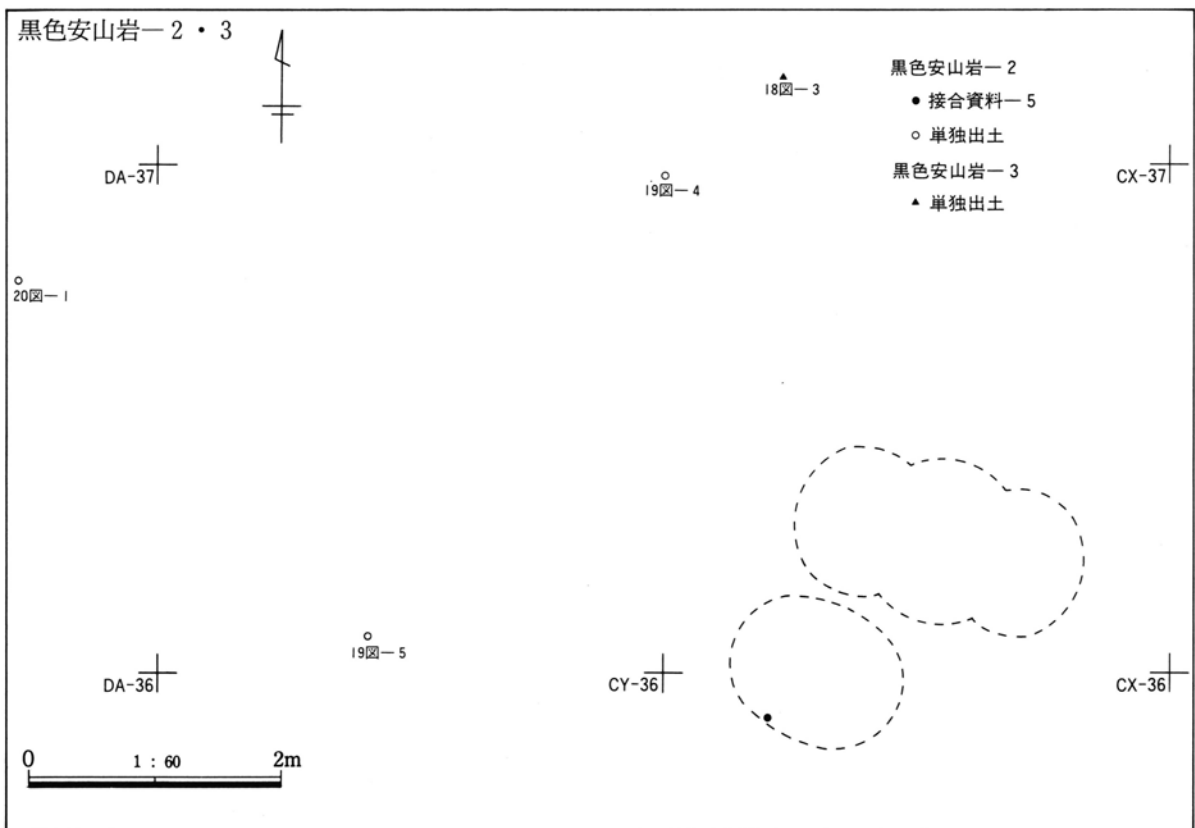
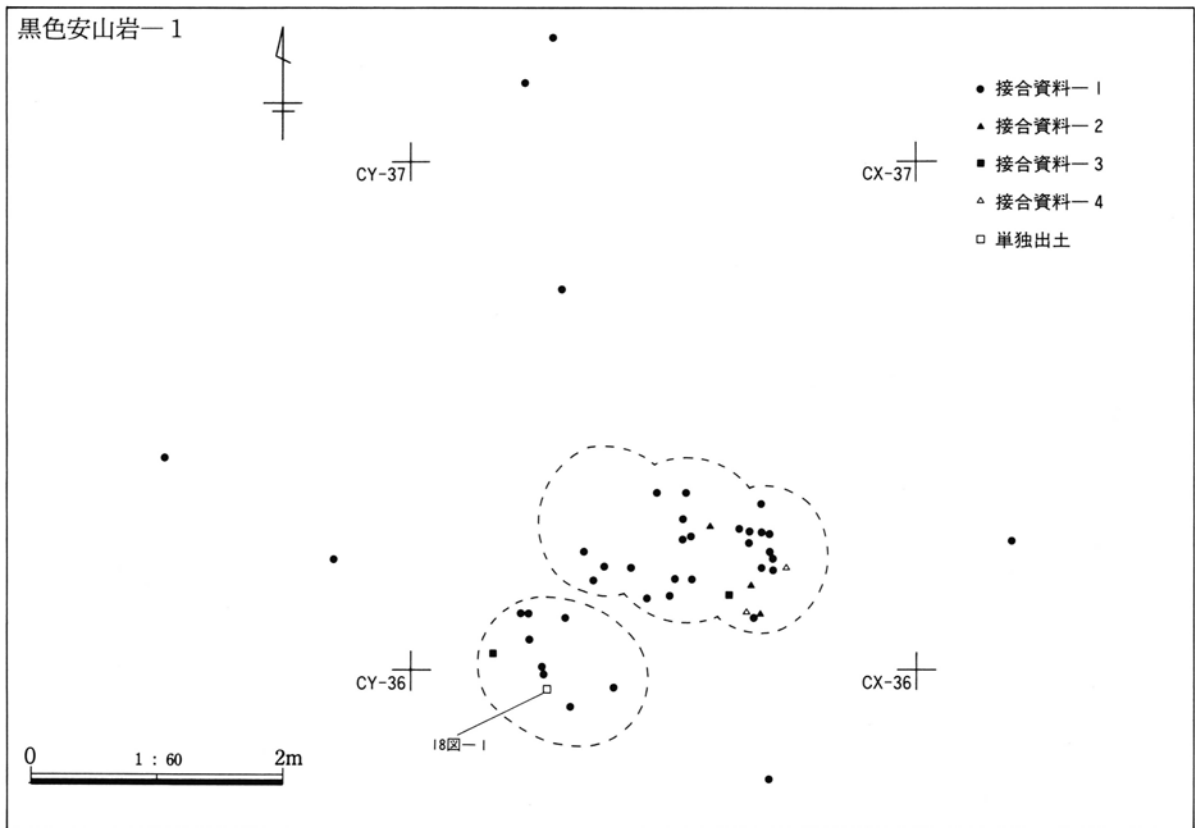
母岩別資料・黒色頁岩-2(第34図)

石材感は黒色頁岩-1に近い。表面に鉄分が付着しており、観察を妨げている。ここでは、剥片剥離を示す資料が見られないことから、黒色頁岩-1とは分けて把えた。CY-37Gに出土。

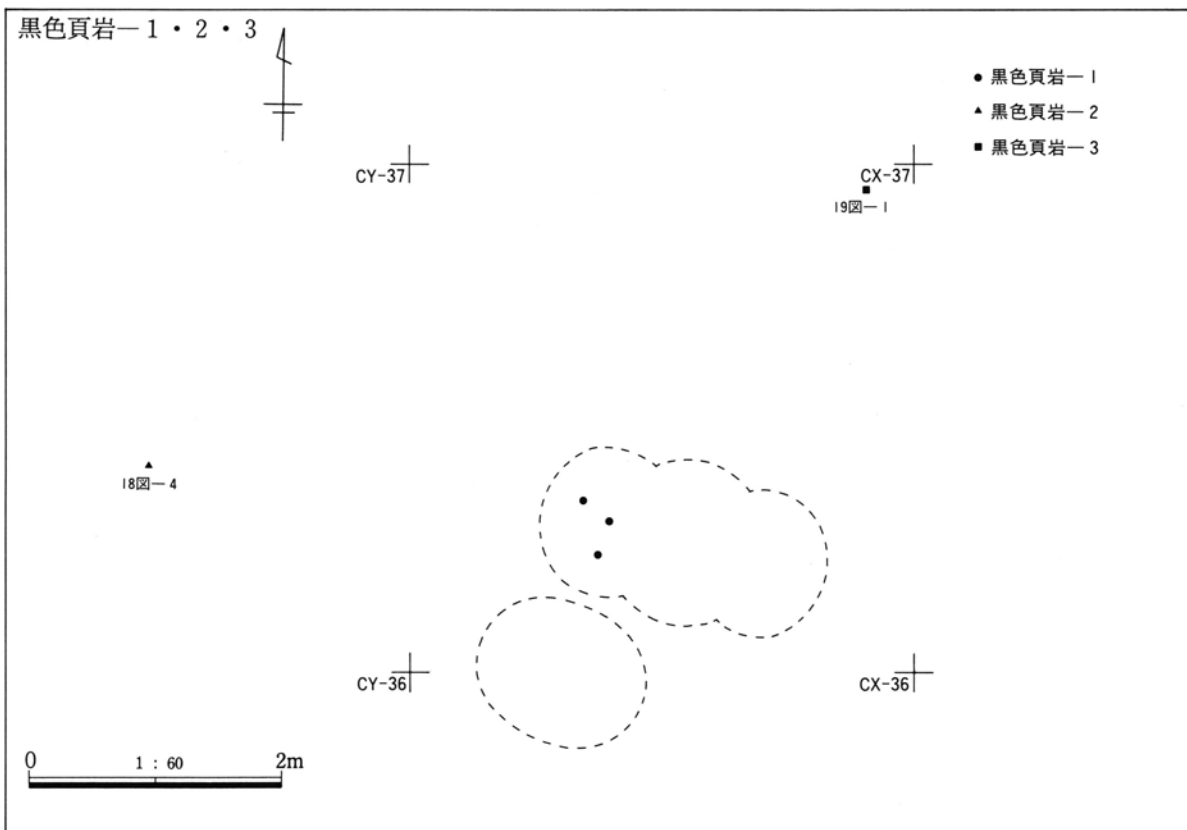
母岩別資料・黒色頁岩-3(第34図)

石材構成粒径が均質ではなく、1・2よりやや珪化する。形状の良好な剥片で、搬入資料と判断した。

II 調査の成果



第33図 母岩別資料の分布(1)



第34図 母岩別資料の分布(2)

1-2 吹屋中原遺跡 YPR~SP上

(1) 概要

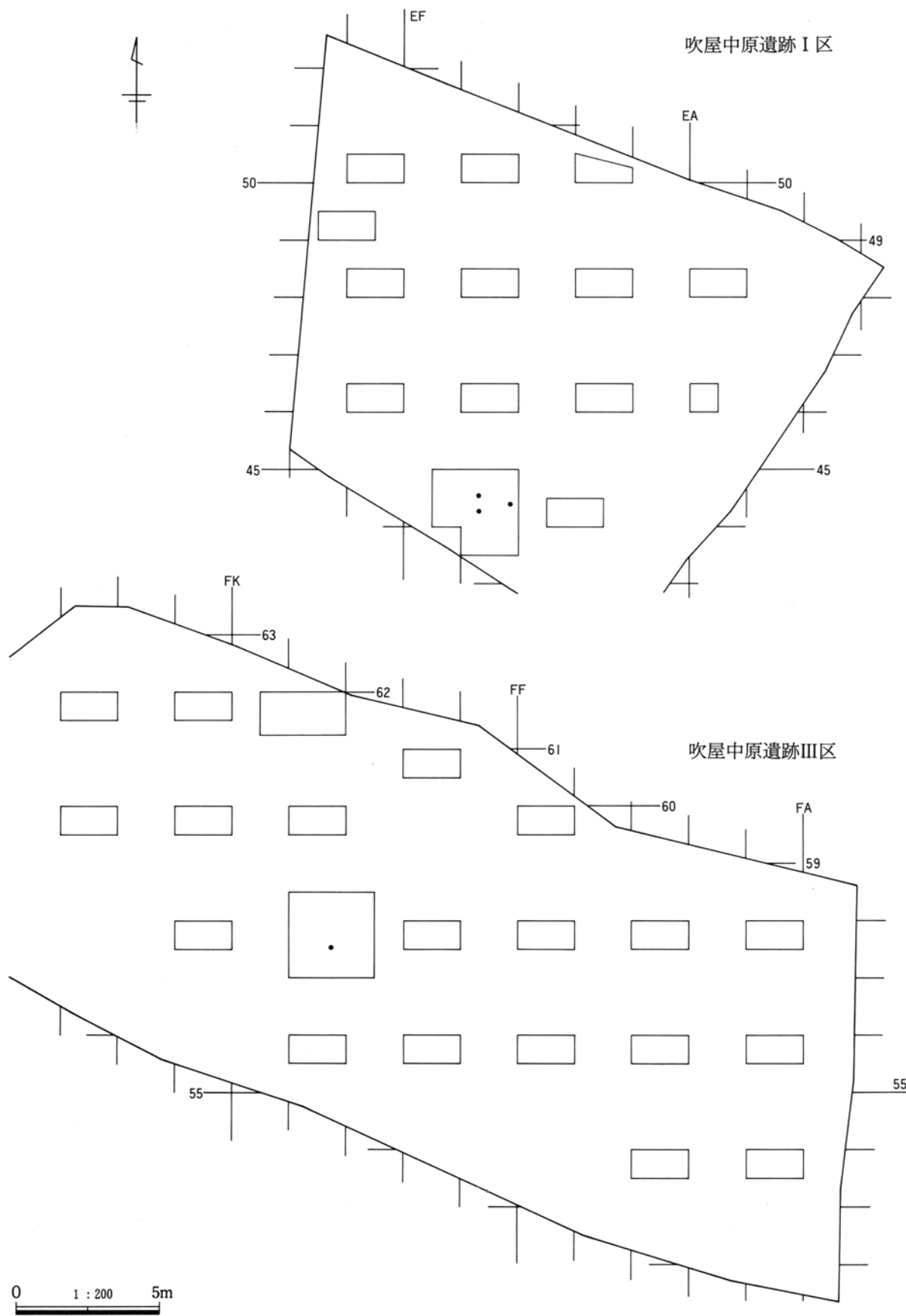
主たる石器群の分布域は、丘陵性台地の頂部（II区）の最も標高の高い地点で確認され、1225点（礫を含む）を確認している。このほかI区・III区では、単独出土に近い状態で数点の石器の出土を確認している。

遺跡の立地する丘陵性台地は、大きく見れば東西に谷（沖積地）を控えた、500mにも及ぶ広い台地と把握できる。最も標高の高い地点（標高217.9m）と低い地点では10mの高低差を有しているばかりでなく、台地内部には浅い凹地を挟み尾根が展開する複雑な地形観（付図を参照されたい）を呈していた。遺跡の立地と地形の関係は単純ではなく、先験的に谷に近い台地の縁辺に遺跡は多く立地するとは断定できないのであり、遺跡の選地に至る様々な要因・経緯を示唆するもの、と理解されよう。

I区・III区の石器分布は薄い。試掘密度が低く、このため、試掘を実施した地点の他にも石器が分布する可能性を残している。現状ではI区の石器分布は犬子塚V区の谷に臨む尾根の先端部分に、III区の石器分布は南北に浅い凹地が入る西側に延びる狭い尾根に分布した、と把握できる。出土資料からみる限り、各々の地点で剥片剥離した状況にはなく、この地点以外で剥離、搬入した可能性が強い。出土層位は概ねIX層と判断され、出土層位からみる限り、明確な差は指摘できない。

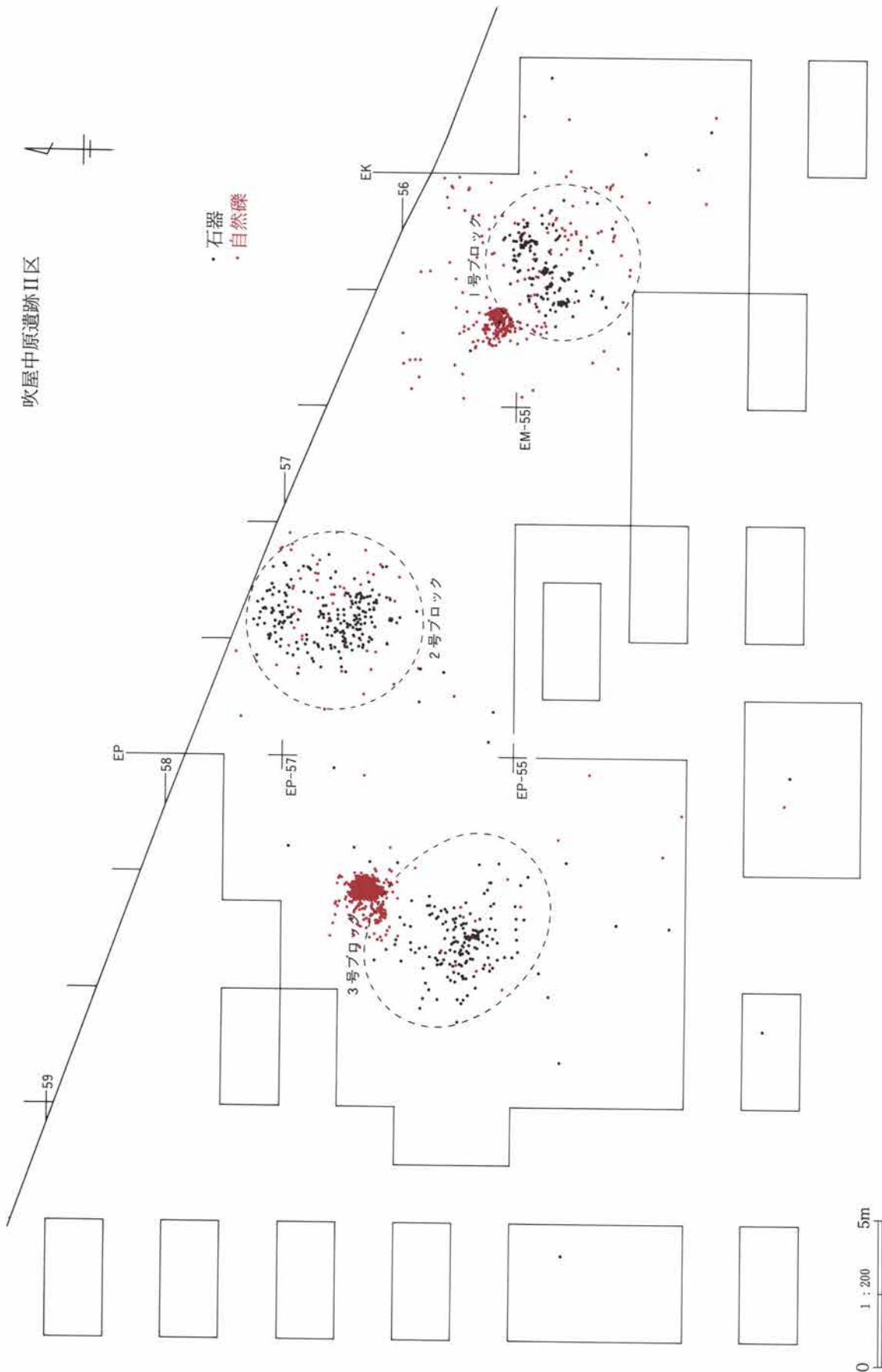
II区の石器分布は濃く、出土した石器群の大部分を占める。石器群は路線の北側に近い、尾根の最も高い地点からやや傾斜の強い尾根の西側斜面に分布していた。石器群は3ヶ所の集中部からなる。試掘状況からみて、石器群は路線の北側に広がる可能性は否定できない。が、接合資料や母岩の在り方は、

II 調査の成果



第35図 石器の分布(1)

1. 旧石器時代



第36図 石器の分布(2)

II 調査の成果

I区・器種構成 (3点)

剥片 2点 (67%)	石核 1点 (33%)
-------------	-------------

I区・石材構成 (3点)

黒色頁岩 3点 (100%)

石核 1点

黒色頁岩 1点 (100%)

剥片 2点

黒色頁岩 2点 (100%)

III区・器種構成 (2点)

加工痕ある剥片 1点 (50%)	剥片 1点 (50%)
------------------	-------------

III区・石材構成 (2点)

黒色頁岩 1点 (50%)	砂岩 1点 (50%)
---------------	-------------

加工痕ある剥片 1点

砂岩 1点 (100%)

剥片 1点

黒色頁岩 1点 (100%)

II区・器種構成 (489点)

②	剥片 228点 (47%)	碎片 206点 (42%)	③
---	---------------	---------------	---

- ① ① 削器 3点 (0.6%)
 使用痕ある剥片 6点 (1.2%)
 加工痕ある剥片 7点 (1.4%)
 不明石製品 1点 (0.2%)
- ② ② 石核 23点 (4.6%)
 ③ ③ 敲石 12点 (2.4%)
 台石 3点 (0.6%)

削器 (3点)

黒色頁岩 3点 (100%)

石核 (23点)

黒色頁岩 13点 (57%)	黒色安山岩 7点 (30%)	①
----------------	----------------	---

- ① 変質安山岩 3点 (13%)

加工痕ある剥片 (7点)

黒色頁岩 2点 (29%)	黒色安山岩 4点 (57%)	①
---------------	----------------	---

- ① 珪質頁岩 1点 (14%)

使用痕のある剥片 (6点)

黒色頁岩 3点 (50%)	①	②	③
---------------	---	---	---

- ① 黒色安山岩 1点 (16.6%) ② 細粒安山岩 1点 (16.6%)
 ③ 珪質頁岩 1点 (16.6%)

不明石製品 (1点)

軽石 1点 (100%)

II区・石材構成 (489点)

黒色頁岩 381点 (78%)	①	③
-----------------	---	---

- ① ① 黒色安山岩 78点 (16.0%)
 ② ② 頁岩・細粒安山岩・軽石 各 1点 (0.6%)
 珪質頁岩 2点 (0.6%)
 ③ ③ 粗粒輝石安山岩 13点 (2.6%)
 変質安山岩 6点 (1.2%)
 石英閃緑岩 4点 (0.8%)
 溶結凝灰岩・雲母石英片岩 各 1点 (0.4%)

剥片 (228点)

黒色頁岩 187点 (82%)	①
-----------------	---

- ① ① 黒色安山岩 40点 (17.5%)
 ② ② 細粒安山岩 1点 (0.5%)

碎片 (206点)

黒色頁岩 172点 (84%)	①
-----------------	---

- ① ① 黒色安山岩 26点 (12.0%)
 ② ② 粗粒輝石安山岩 6点 (3.0%)
 ③ ③ 頁岩・雲母石英片岩 各 1点 (1.0%)

敲石 (12点)

①	粗粒輝石安山岩 4点 (34%)	変質安山岩 3点 (25%)	石英閃緑岩 3点 (35%)	②
---	------------------	----------------	----------------	---

- ① ① 黒色頁岩 1点 (8%) ② ② 溶結凝灰岩 1点 (8%)

台石 (3点)

粗粒輝石安山岩 2点 (67%)	石英閃緑岩 1点 (33%)
------------------	----------------

第37図 器種構成と石器石材

3ヶ所の集中部で各々が補完関係を示していることから概ね単位的石器群は把握し得た、と考えている。出土層位はIX層からX層の上位部分で、IX層の下部で遺物出土のピークに達する。3ヶ所の集中部は上面の遺構と重複することなく良好な状態で検出され、石器群の本来的・基本的な組成を示す、と判断している。

出土した石器には削器など若干の加工具と石刃が組成するほか、やや幅広で大形の縦長剥片（比較的形狀も整い石刃剥離を意図しているようでもあり、なかには石刃と区別できない例も存在する）も多く組成している。層位的には槍先形尖頭器や細石刃の出土が想定可能だが、出土資料には狩猟具の類は見られないのであり、ある意味では石器群の特徴でもある。

石器石材は黒色頁岩が圧倒的に多く392点（80%）を数える。黒色安山岩は78点（16%）と予想外に少なく、黒色頁岩5に対して黒色安山岩1の割合を示していた。剥片系石器に限れば、珪質頁岩や頁岩、細粒安山岩が数点出土した程度で、石器の製作に供した石材の種類は以外に少ない状況が判明した。敲石などには、粗粒輝石安山岩や変質安山岩、石英閃緑岩、溶結凝灰岩を用いており、周辺域で比較的容易に採集可能な石材を用いており、県内遺跡と同様な石材選択傾向を示している。

接合資料は、42例182点を確認した。接合率は37%に達している。接合資料は原石、或は、原石を分割した後の剥片剥離の初期状態や、ある程度剥離が進んだ状態を示す例など多様だが、前者の剥離の初期状態を示す例が相対的には多い。

同一母岩の分類は母岩に特徴が乏しく、ここでは敢えて分類を避け、石材別に分布図を示した。出土資料には搬入資料と見て良い資料も若干だけ見られ、石器群の大部分を占める剥片の生産と、少量の搬入資料からなる構造は他の遺跡構造と何ら変わるものではなく、接合資料の分布・碎片の分布と併せ図を理解していただこう。

(2) 出土石器

路線の北側に近い標高の最も高い尾根の頂部から西側斜面（II区）に489点（第36図、このほかにも位置の不明な27点が出土している）が出土したほか、I区で3点、III区で1点が単独に近い状態（第35図）で出土している。

出土石器

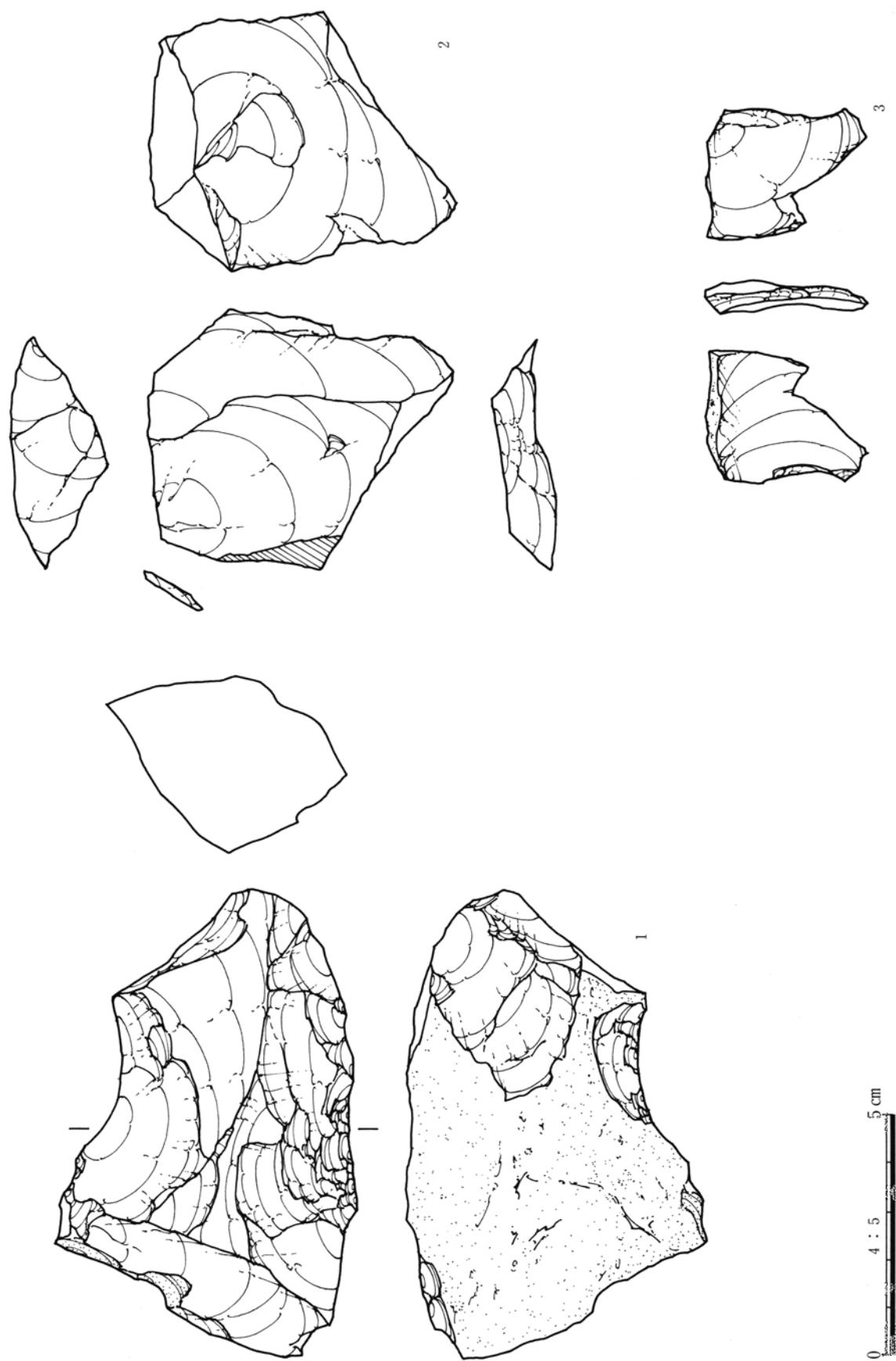
I区 3点（第38図）が出土している。1は、裏面に大きく礫面を残す石核で、厚い大形剥片を用いる。剥片剥離は主に石核の上下両端で行われ、小形で幅広の剥片を剥離している。石核裏面の剥離は剥離に伴う打面作出を意図する剥離と判断している。なお、石核左側の「折れ」は剥離に先行する可能性、或は、剥離の途中で不意に生じた可能性が強く、意図した剥離とは思われない。黒色頁岩。2は、大形の縦長剥片で、下端部分を大きく欠損している。打面は大きく、剥離面の成す稜上を敲き剥片を剥離している。黒色頁岩。3は、礫面を打面に剥離した小形の剥片。形状は良好とは言えず、「管理的石器」とは評価できないため、周辺に別の石器分布が存在する可能性も想定されよう。やや珪化の進んだ黒色頁岩。

III区 1点（第39図2）が出土しているほか、出土位置の不明な石器1（第39図1）を確認している。

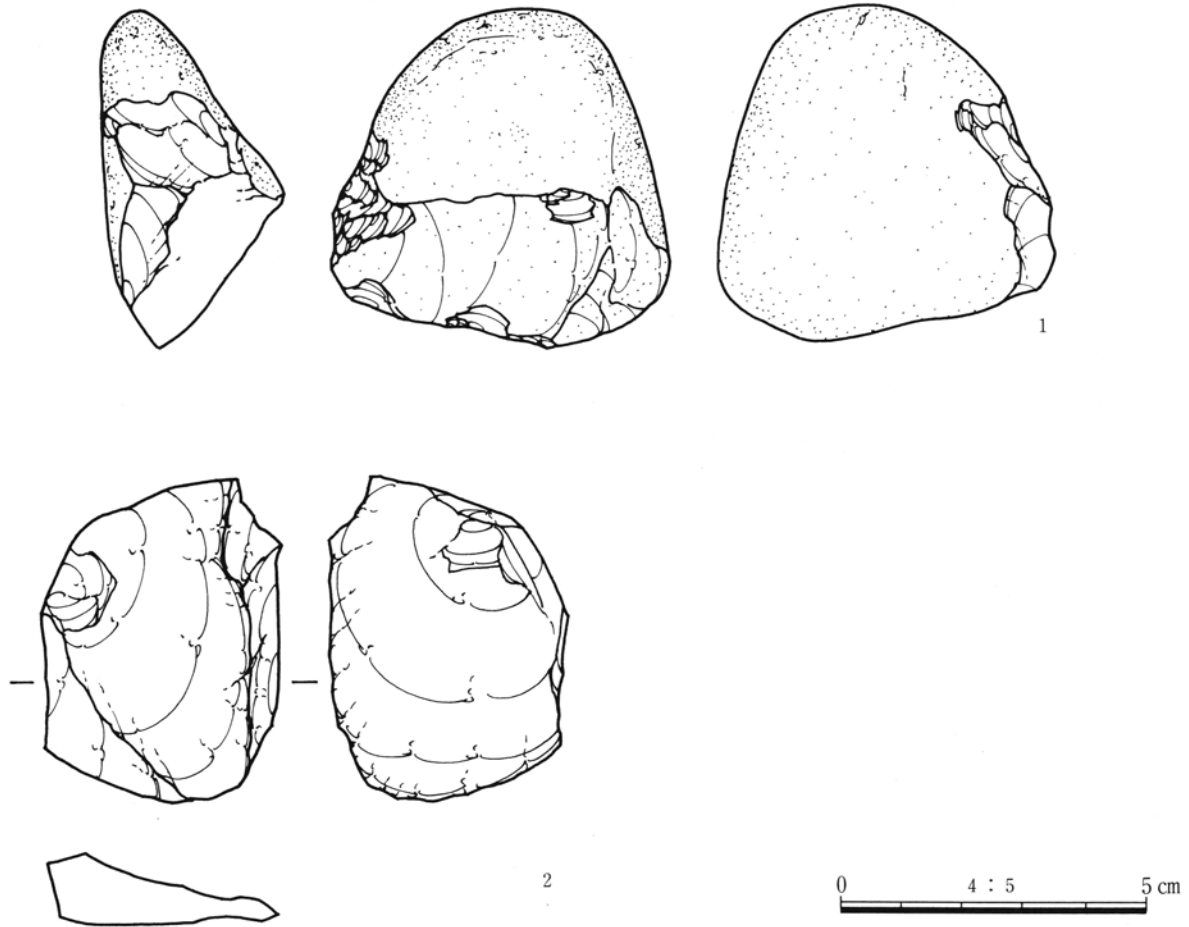
1は、比較的小形の扁平礫を大きく割り、機能部を作出している。刃部角度は75°を測る。機能部の小さな剥離痕には剥離面を覆う摩耗が存在するほか、正面・左端を除く分割面の全域が摩耗しているようにも見える。全域が摩耗するスタンプ的な使用は、刃部角度からみて想定できないため、単純には摩耗を使用痕とは断定できない。摩耗を切る正面・左端の剥離も位置的に刃部の再生とはいえないのであり、剥離を施す適当な理由が明確ではない。このため、ここでは加工痕ある石器と便宜的に把えておく。頁岩。2は、やや幅広の剥片で、平坦な打面より剥離する。背面を構成する剥離の在り方からみて、剥片剥離は打点を大きく振り展開したものと推定できよう。剥離角は120°を測る。

II区 489点が出土している。出土資料は剥片や碎片

II 調査の成果



第38図 出土石器(1)



第39図 出土石器(2)

が90%近い比率で組成している。出土資料には削器や加工痕ある剥片、使用痕ある剥片など加工工具の類が若干組成する程度で、槍先形尖頭器や細石刃など、この段階の主たる狩猟具は見られない。既に述べた通り、石器群は石刃や縦長剥片、或は、石刃剥離を指向する剥離の在り方に特徴づけられよう。

削器 (第40図1・3、第62図7)

3点が出土している。幅広の台形状剥片を用い、剥片端部に刃部を作出する例2点・縦長剥片を用い側縁部分に刃部を作出する例1点が出土している。比較的良好な剥片の選択と、剥片形状に即した刃部位置の選択が看取されよう。

第40図1は、やや幅広の台形状を呈する剥片を用い、直線部分を長く持つ剥片端部に刃部を作出している。刃部中央にはやや浅い剥離を、左端にはやや

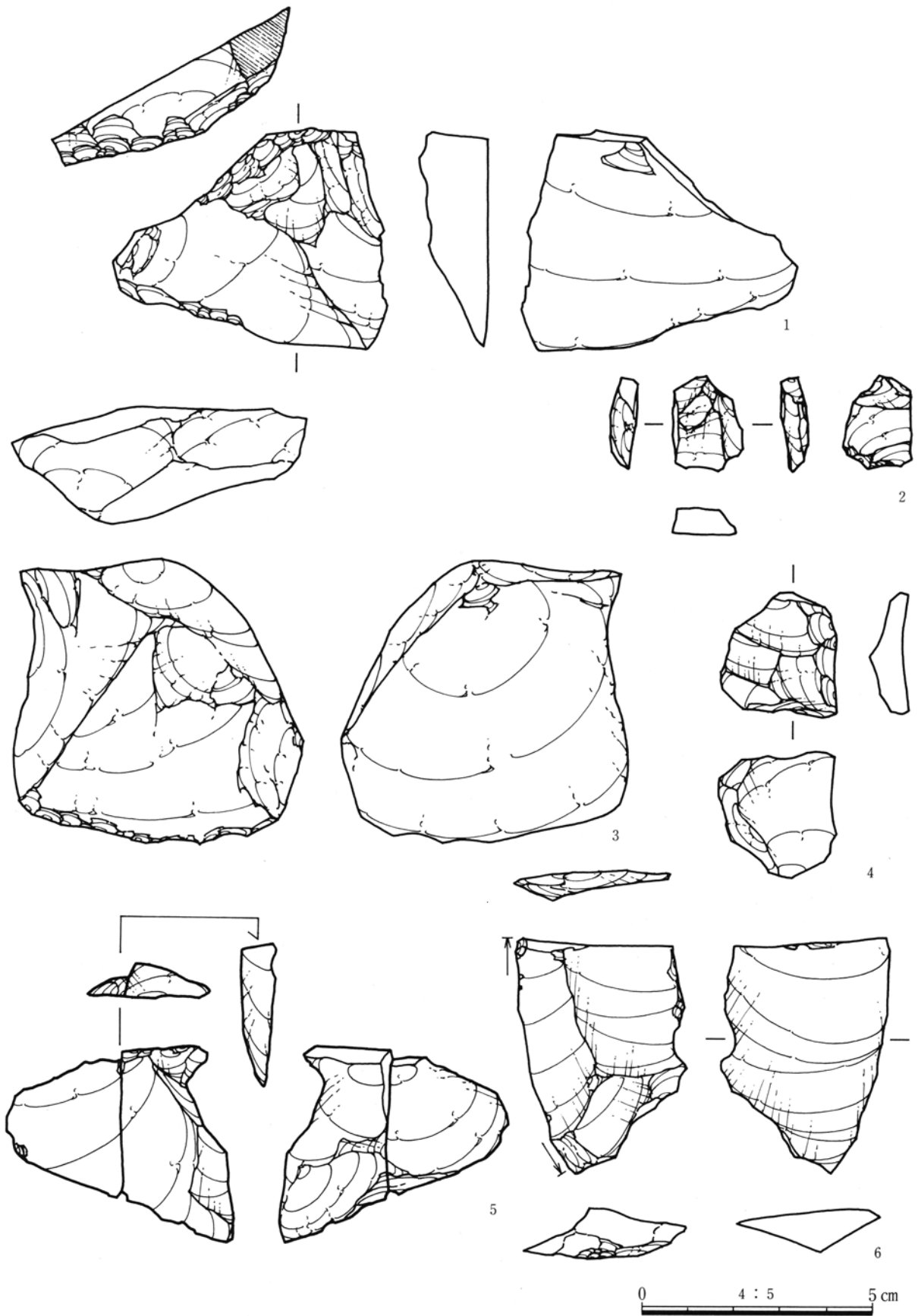
角度の厚い剥離を施し、中央より右は加工することなく刃部に用いている。接合資料-15。黒色頁岩。3は、やや幅広の台形状を呈する剥片を用い、剥片端部に刃部を作出している。刃部の加工は、やや粗く右端は鋸歯状を呈する。背面を構成する剥離方向は多様で、打面転移を頻繁に行い剥片を剥離した、と想定できよう。黒色頁岩。第62図7は、縦長剥片を折り、側縁に加工を施している。折れ面には比較的丁寧な剥離を施し、形状を整えている。接合資料-8。黒色頁岩。

加工痕ある剥片 (第40図2・4~6)

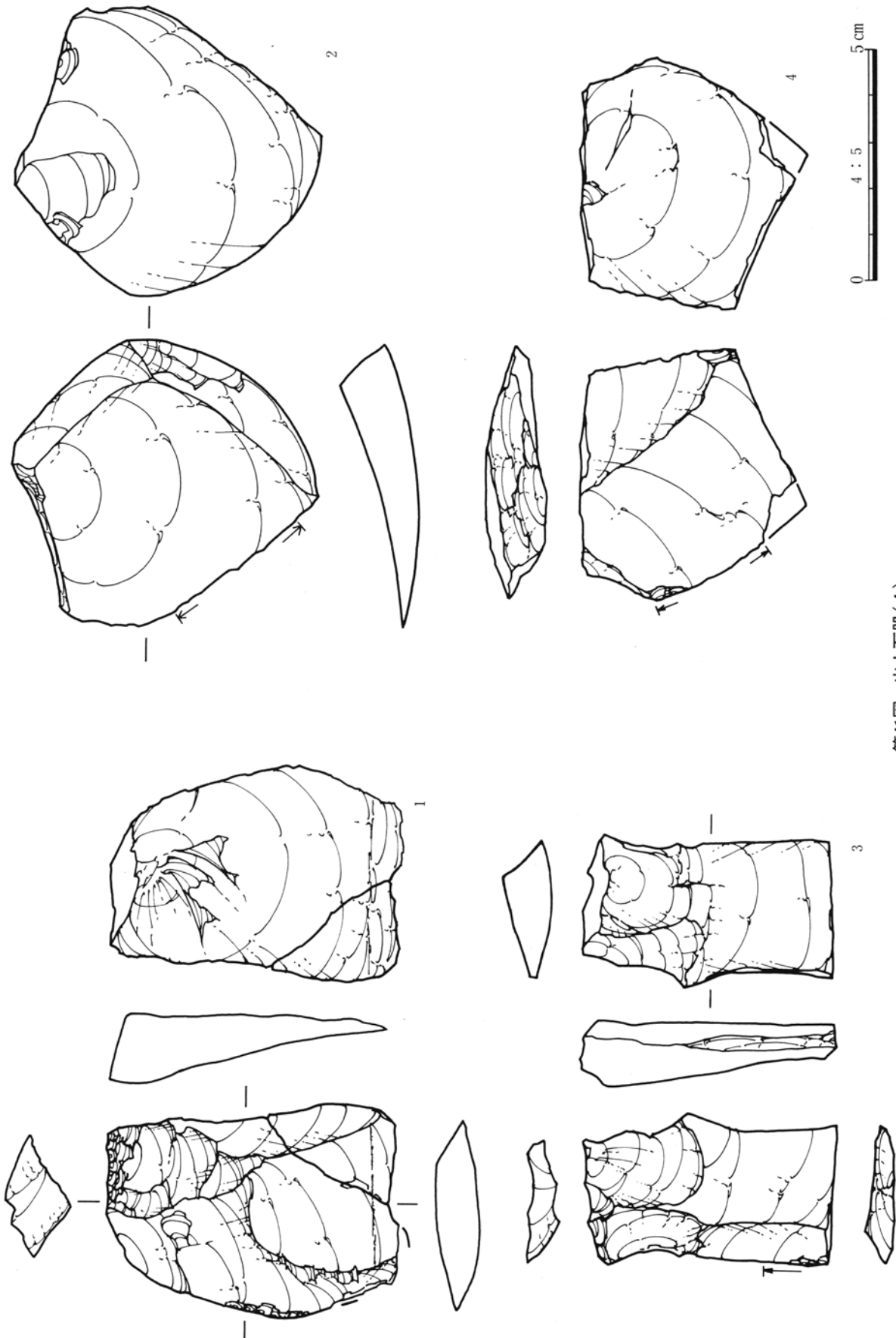
7点が出土している。幅広の剥片を用い、粗い加工を加える例が多く、加工意図は明確ではない。

第40図2は、幅広剥片の両端を折り取り、裏面・下端部分に粗い加工を施す。右端の折れ面は形状が

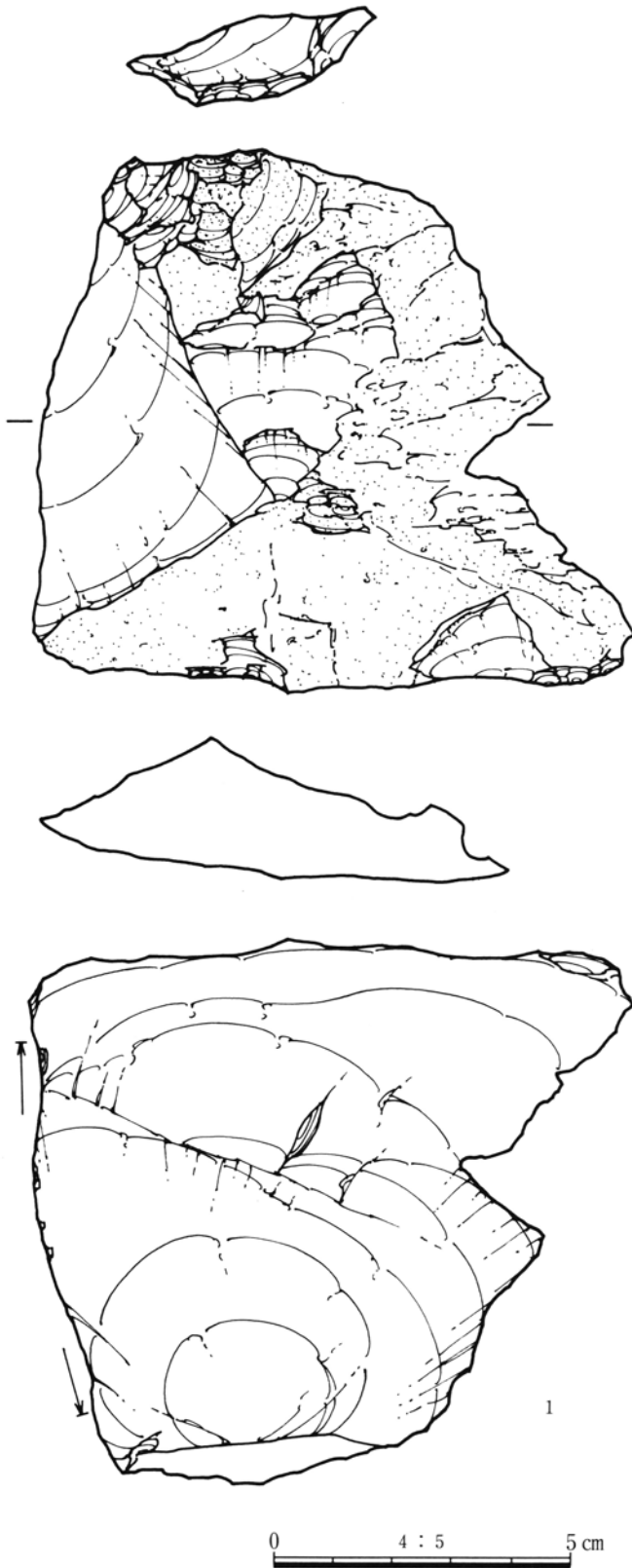
II 調査の成果



第40図 出土石器(3)



第41図 出土石器(4)



第42図 出土石器(5)

整わず、加工途中で石器の製作を断念した可能性が強い。黒色安山岩—5。4は、やや幅広の剥片を用い、右側縁に粗い加工を施す。接合資料—14。黒色頁岩。5は、幅広の横長剥片を用いる。剥片は剥離段階で打点から破損しており、破損した一方の剥片端部・打面部分に剥離を施している。接合資料—1。黒色安山岩。6は、上半部分を大きく欠いた縦長の剥片を用いている。加工は剥片端部に若干が施され、剥片の形状を修正する程度で、形状を大きく変えるものではない。左側縁には微細な「刃こぼれ」が連続する。石材は茶褐色を呈する珪質頁岩で、光沢が強い。出土資料には同一母岩は確認できない。

使用痕ある剥片 (第41・42図)

6点が出土している。縦長剥片や幅広の剥片を用いる例が多く、横長剥片を用いる例は概して少ない。

第41図1は、やや幅広の縦長剥片を用いる。剥片形状は良好で、右側縁は直線的、左側縁は若干だが湾曲する剥片形状を呈している。使用痕は左側縁に著しい。剥片は広く平坦な打面から剥離している。背面の示す剥離方向は概ね一致しており、打点を左右に振り後退・剥離を進めている。良質な黒色頁岩を用いており、出土資料には同一母岩は見られない。搬入資料か。2は、幅広の剥片を用いる。剥片端部はヒンジ状に捲れ、厚い。使用痕は左側縁に生じており、剥片の直線部分を刃部に使用している。接合資料—14。黒色頁岩。3は、比較的形状の整った縦長剥片を用いる。剥片は広く平坦な打面より剥離され、中央より下半を大きく欠損する。使用痕は左側縁に著しく、側縁の直線部分を刃部に持っている。黒色安山岩。4は、やや幅広の剥片を用いる。打面部分を折り用いる。が、裏面中央の特徴からみて、打点からそれほど離れているとは思われない。使用痕は左側縁に見られ、若干湾曲する部分を刃部に用いる。黒色安山岩—3。第41図1は、幅広の大形剥片を用いる。使用痕は左側縁に見られ、やや湾曲する側縁を刃部に用いる。珪質頁岩。

石核 (第43～46図・第47図1)

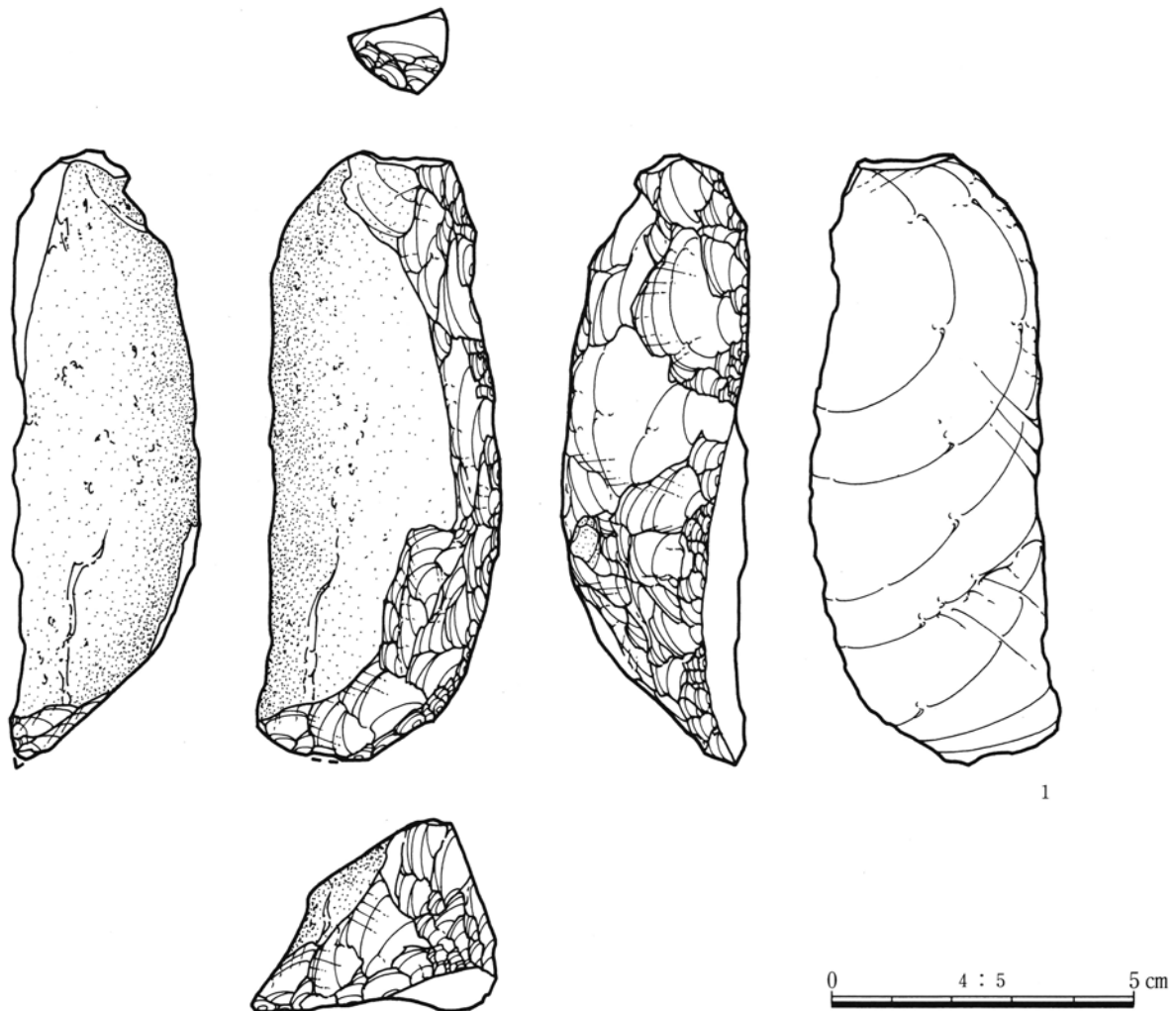
23点が出土している。出土資料が示す剥片剥離は多様で、原石から直接剥離を行う例(接合資料-8)、原石を分割・打面を固定して剥離を進める例(接合資料-1・2)、原石を分割・打面転移を繰り返す例(接合資料-14・31)、大形剥片を石核素材に用いる例(接合資料-18・25)を確認している。石核形状も様々だが、ここでは石核分類が可能か、ある意味では分類に躊躇を感じる、特殊な例と接合関係の確認できない単独出土の石核に限り取り上げ、図示した。

石核には黒色頁岩が13点と最も多く、黒色安山岩が7点、変質安山岩が3点と続く。

以下には、石核を便宜的にa類～c類に分け概要を記していきたい。

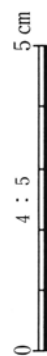
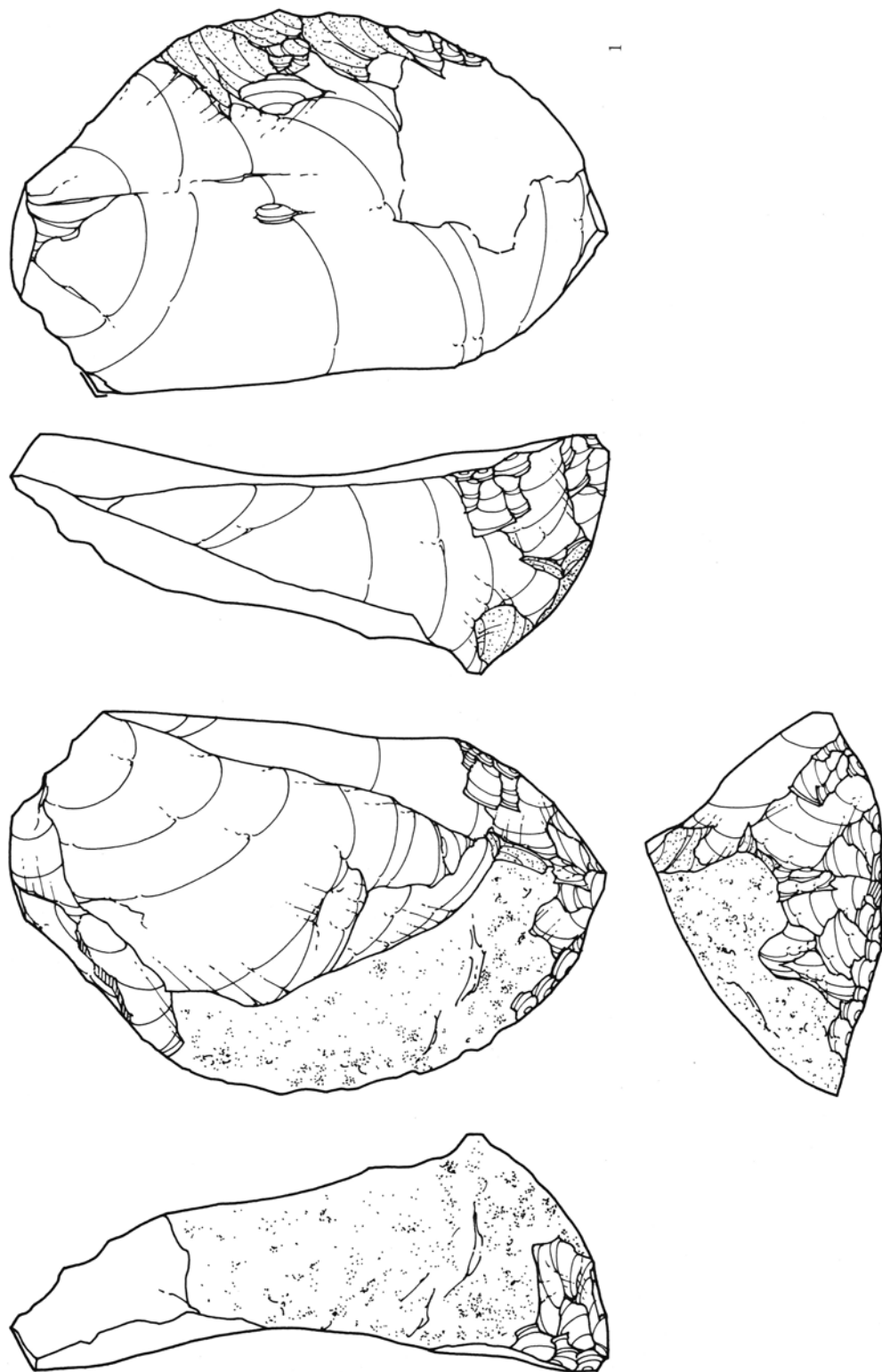
石核a類 厚い大形剥片を用い、側縁や剥片端部に剥離を施す石核。出土資料は1例(第45図)を除き、石核調整・石核原形の段階に位置づく可能性が強く、目的剥片の剥離を開始しているわけではないため、この資料だけでは器種分類に疑問を感じるかもしれない。第43・44図・45図2。

石核b類 大形の扁平礫を用い小口部分で剥離を行う例。剥離は粗く、打点を大きく左右に振り2度の剥離で剥離を終える例が多い。石材は他の石核とは異なり、この種の石核のみ変質安山岩を用いている。同種剥片が出土資料にはないこと、礫重量は約1kgで3例とも近接していること、石材的にはやや粗い石材で剥片石器の素材には適当ではないこと、などから「礫器」と分類が可能かもしれない。出土資料に用いた石材は粒度が粗く使用痕が明瞭ではなく、



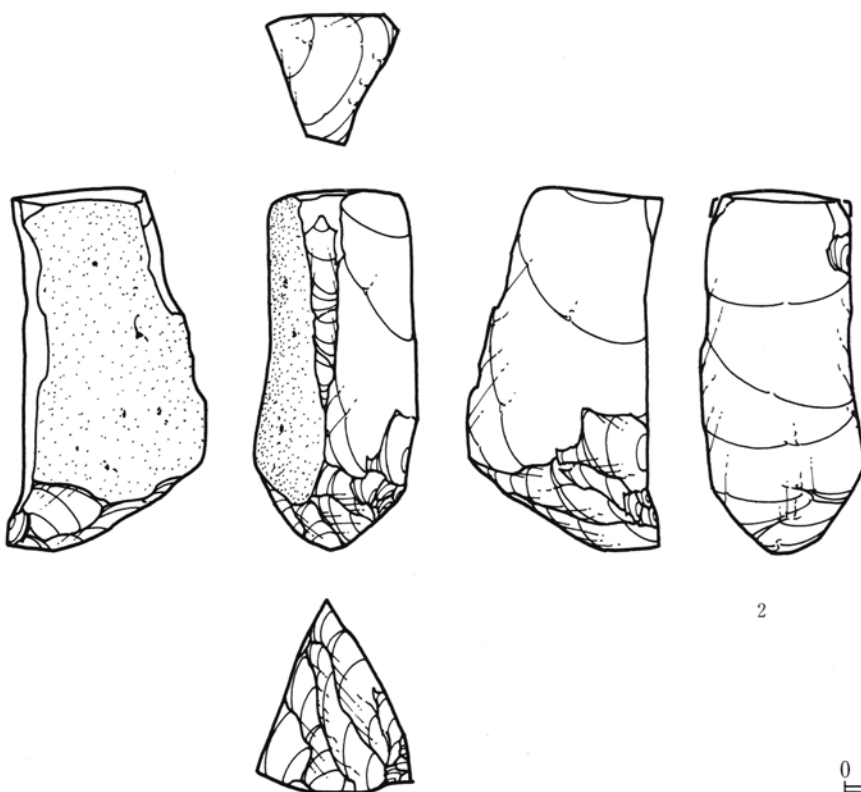
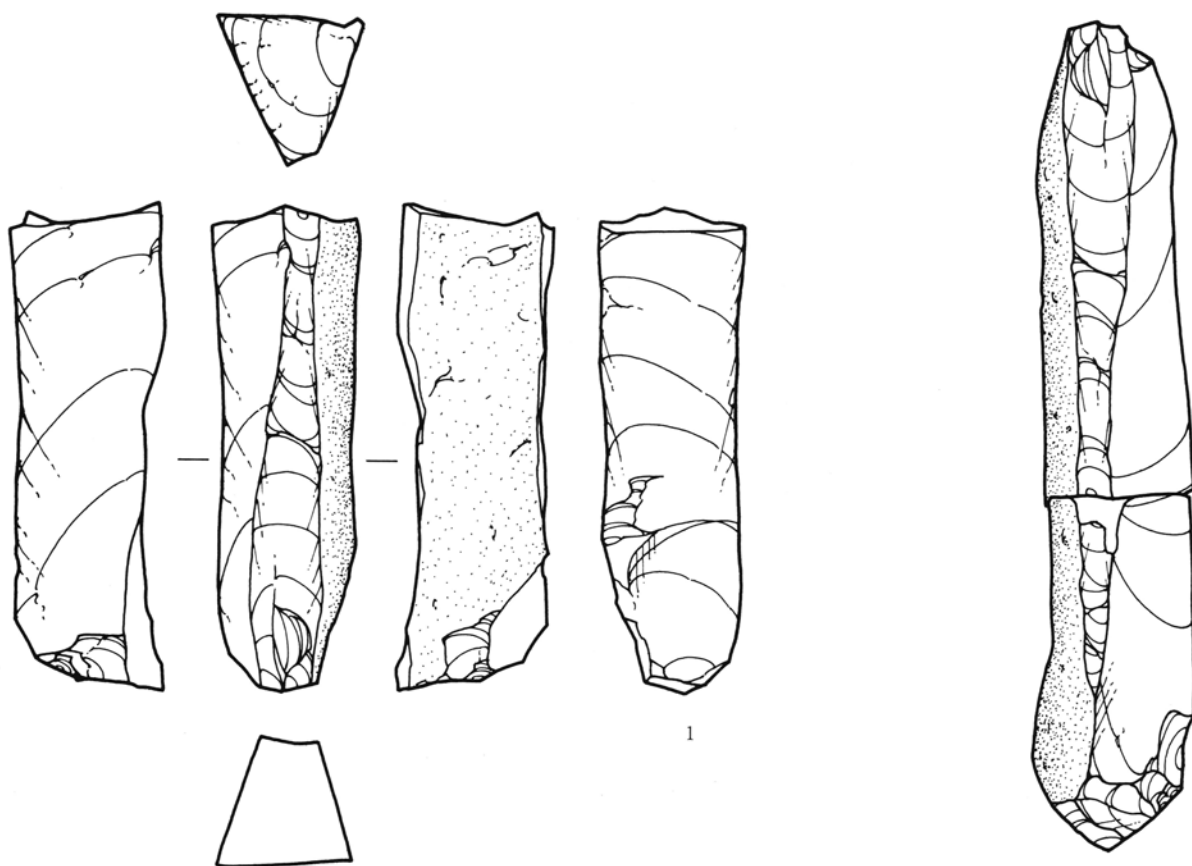
第43図 出土石器(6)

II 調査の成果



第44図 出土石器(7)

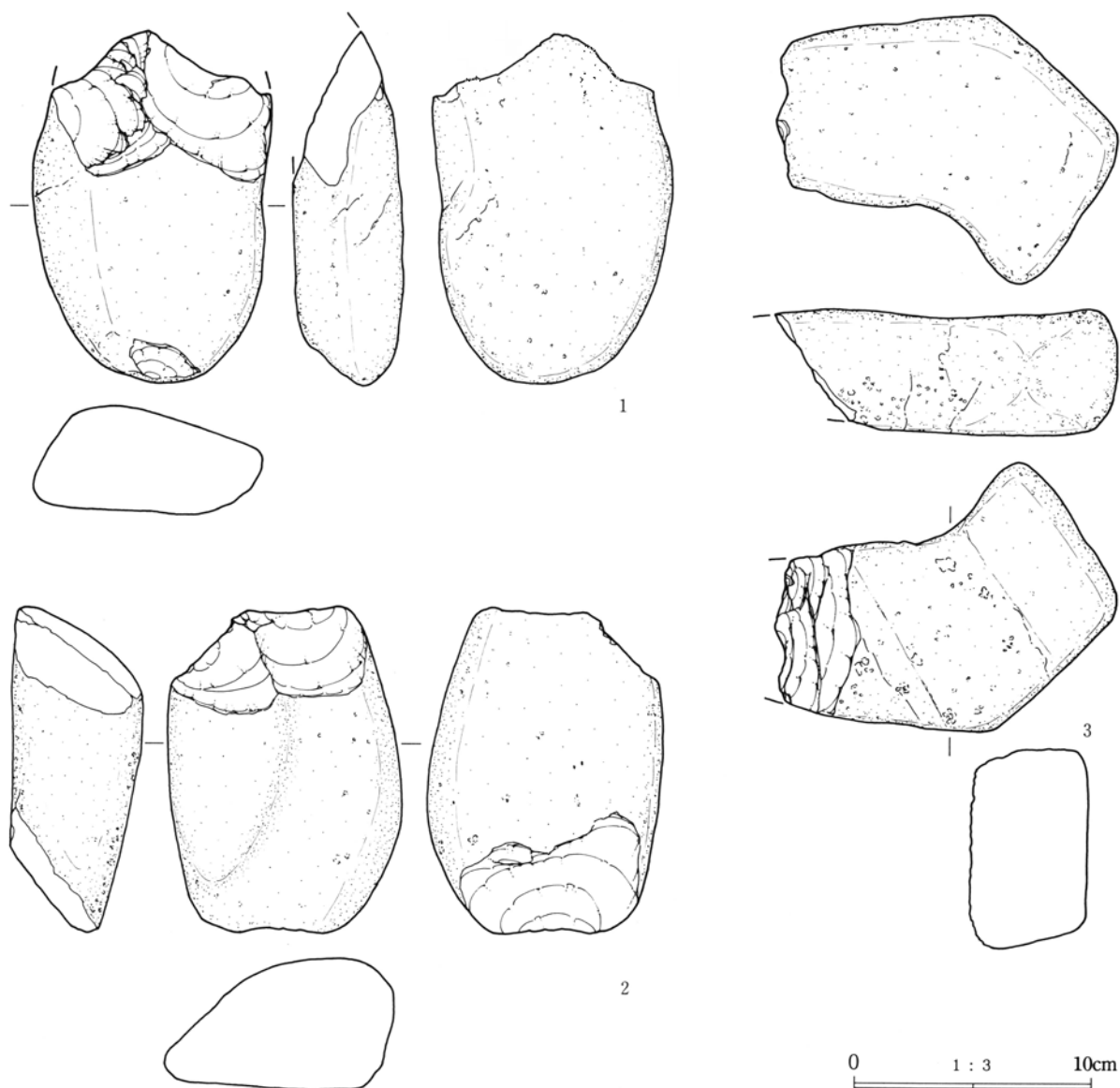
1. 旧石器時代



0 4 : 5 5 cm

第45図 出土石器(8)

II 調査の成果



第46図 出土石器(9)

ここでは便宜的に石核b類と扱えた。が、段階的には礫器も組成に加わる段階の石器群でもあり、検討を要す。第46図。

石核c類 ここでは特徴的な形態の石核を意識して掲載したため、その他の石核を一括している。本類に該当する石核は1例(第47図1)のみ図示した。が、このほかにも接合資料の中には石核を多数確認しており、既に述べた通り、石核素材や打面転移の有無などからさらなる細分が可能でもある。

第43図1は、厚い大形剥片を用いる。背面には礫面を大きく残している。1の側縁には4点の小形・幅広の剥片が接合しており、最も外側に付く剥片の

背面には礫面が見られ、小形剥片を剥離する以前の素材段階の石核形状(長さ11cm・幅6cm・高さ3cmを測る)が復元されよう。この資料は29点からなる接合資料(一8)を構成する1点で、概ね、剥離は縦長剥片の剥離を意識している。が、この資料に限れば、縦長剥片を意識した剥片の剥離には失敗しており、大きく高いバルブを持つ大形剥片を石核素材に用いた、と判断されよう。接合する4枚の剥片は幅5mmから10mmの打面を有する剥片が半数を占め、点状の打面を有す典型的なポイント・フレイクは1例(残る1例はポイント・フレイク的だが、点状打面とはいきれない)と少ない。側縁を剥離する以

前の形状は「舟底形」に近く、右側縁の剥離を進め過ぎた感が強く、石核を放棄している。石核を放棄した背景には、バルブが高く大きく除去するため剥離を進め過ぎ、左側縁を剥離するにはサイズの小さくなりすぎ、結果的に剥離を放棄したもの、と思える。黒色頁岩。第44図1は、大形の縦長剥片を用いる。この資料は4点からなる接合資料（第74図を参照されたい）で、剥離の初期段階に属す剥片と判断されよう。風化が激しく剥片端部の剥離の観察は容易ではない。が、剥片端部に近い側縁に剥離を施している。加工部位から見れば搔器的だが、搔器の典型的な縞状の剥離とは大きく異なること、エッジは尖り、機能部は厚く著しくバランスを欠いていることなど搔器の範疇で把えるのは難しい。側縁調整も貧弱で断言は困難だが、上述した消極的理由からここでは石核原形と把えた。黒色頁岩。第45図1は、断面三角形形状を呈する厚く大きい縦長剥片を用いる。剥片剥離は上端の「折れ面」及び、下端の平坦打面を選び稜部を狙い行われ、幅の狭い（5mm～10mm）小形剥片を剥離している。この資料は14点からなる接合資料—17の1点で、側縁に礫面を大きく残している。黒色頁岩。第45図2は、断面・三角形形状を呈す厚く大きい縦長剥片を用いる。風化が激しく剥離の状態観察は極めて難しい。が、上端の平坦な「折れ面」から幅の狭い（3mm～6mm）小形剥片を剥離するほか、剥片端部に剥離を加えている。剥離は位置的には搔器的だが、エッジは鋭く搔器の範疇で把えるのは難しい。側縁に礫面を大きく残す。第45図1と接合する。黒色頁岩。

第46図1～3は、扁平な円礫を用い礫の小口部分を加撃する。既に述べた通り、消極的理由からだが礫器に分類可能かもしれない。1は、礫の小口部分に粗く打撃を加える。やや突出した形状を呈する。重さ929gを測る。変質安山岩。2は、礫の小口部分の両端に粗い剥離を加える。やや突出した先端部分は、1と同じ在り方を呈する。重さ1026gを測る。変質安山岩。3は、礫の小口部分を大割したあと、2度の打撃を加えて、やや突出した先端部分を作成

している。重さ1163gを測る。変質安山岩。

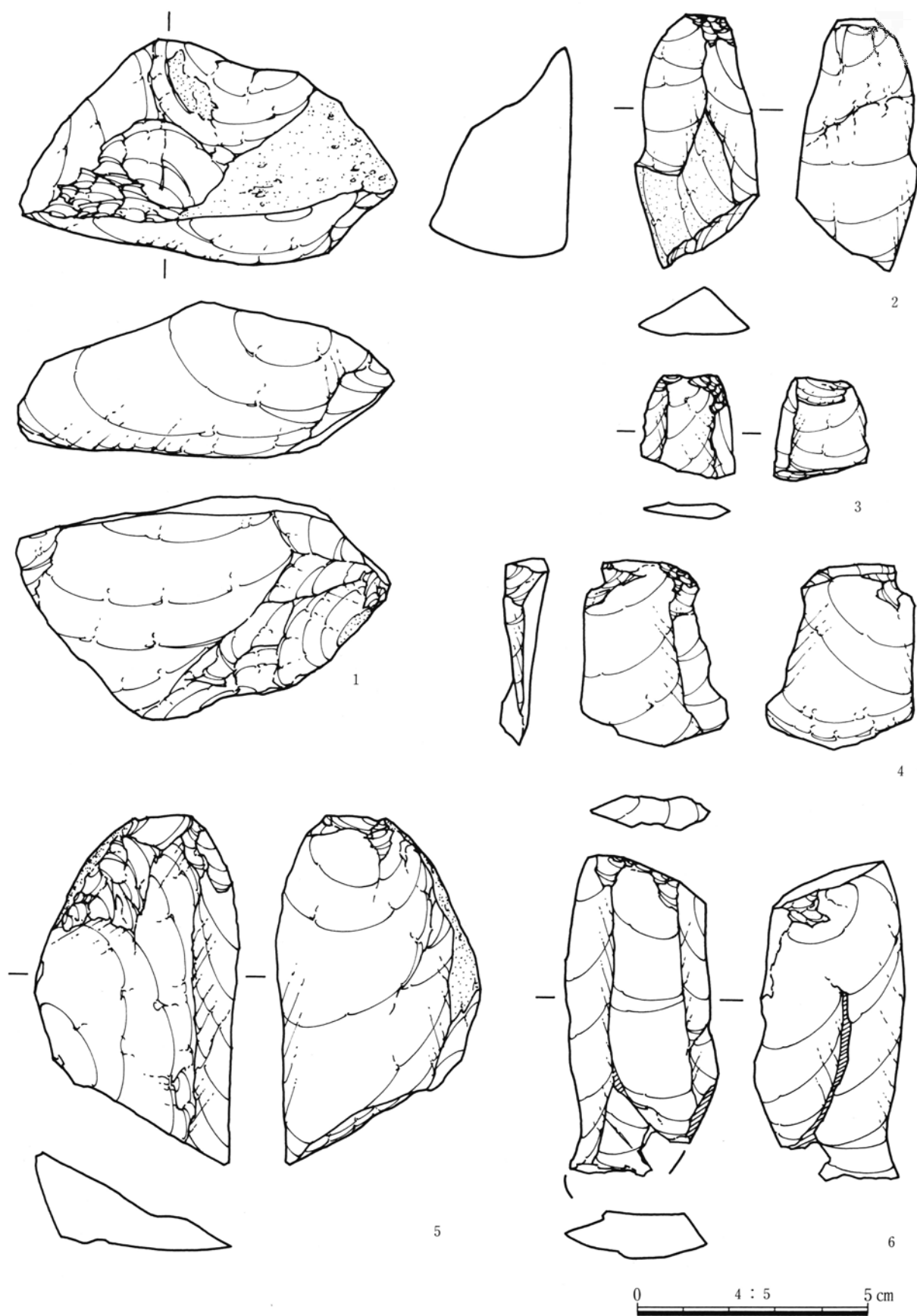
第47図1は、礫面を大きく残す大形剥片を用いる石核。剥片剥離は表裏両面で展開する。このほか、表面側には分割面から側縁調整にも似た剥離が存在している。この微細な剥離は石核a類にも通じる剥離で、評価は分かれよう。黒色頁岩。

剥片（第47図2～6、第48～50図）

228点が出土している。80%以上を黒色頁岩が占め、残る20%弱は黒色安山岩が占める。剥片形状は様々だが、ここでは比較的剥片形状の整う剥片を主に図示した。第47図2～6、第48図1・3・4は「石刃」に、第49・50図は幅広の大形剥片に分類されよう。

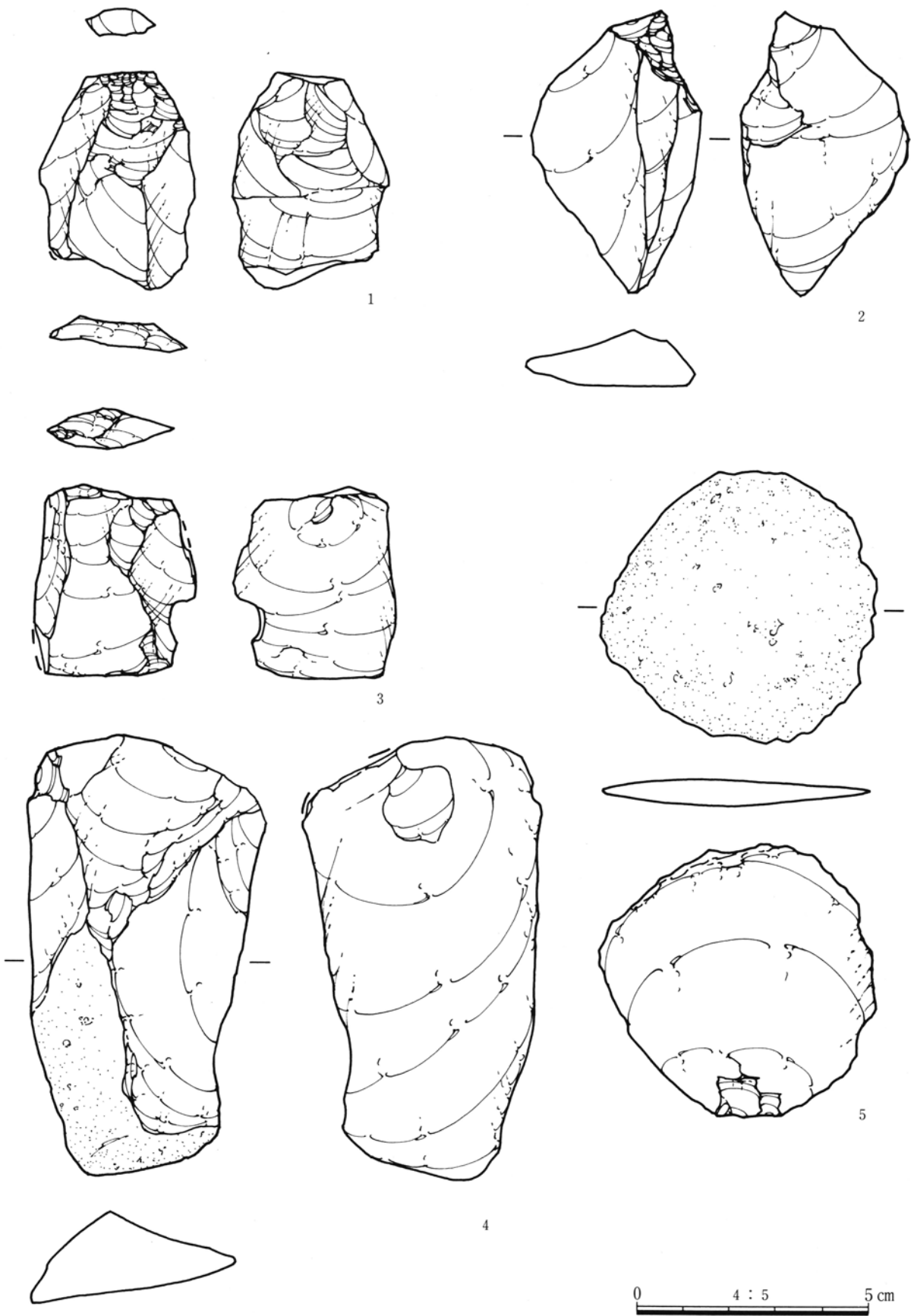
第47図2は、礫面を表面に大きく残す縦長の剥片。背面に残る剥離は、剥片端部の剥離を除いて剥片の剥離方向に一致する。黒色頁岩。3は、剥片の下半を欠損する縦長剥片。打面は剥離段階に弾け飛び、不明。背面に残る剥離は剥片の剥離方向に一致する。黒色安山岩。4は、平坦打面から剥離した縦長剥片。比較的形状の整う剥片だが、剥片端部はヒンジ状を呈し、捲れる。黒色頁岩。5は、側縁に礫面を残す縦長剥片。剥片の下端部分を欠損する。剥片の表面に残る剥離は90°の打面転移を示す。6は、平坦な打面より剥離した縦長剥片。背面に残る剥離は剥片の剥離方向に一致する。節理が入り込み、この部分で剥離面は影響を受けている。剥片端部は調査段階で破損。黒色頁岩。第48図1は、平坦打面より剥離した縦長剥片。剥片は剥離の段階で打点の直下からヒンジ状に剥離しており、目的剥片の剥離には失敗している。黒色頁岩。2は、先端の尖る縦長の剥片。打面部分は剥離段階で弾け飛んでいる。背面に残る剥離は剥片の剥離方向に一致する。黒色頁岩。3は、平坦打面より剥離した縦長剥片。背面に残る剥離は剥片の剥離方向に一致する。剥片端部はヒンジ状に捲れる。黒色頁岩。4は、礫面を大きく残す縦長の大形剥片。背面に残る剥離は剥片の剥離方向に概ね一致する。打面部分は調査段階で破損しており断言は困難だが、点状の打面形状を呈する可能性が強い。

II 調査の成果



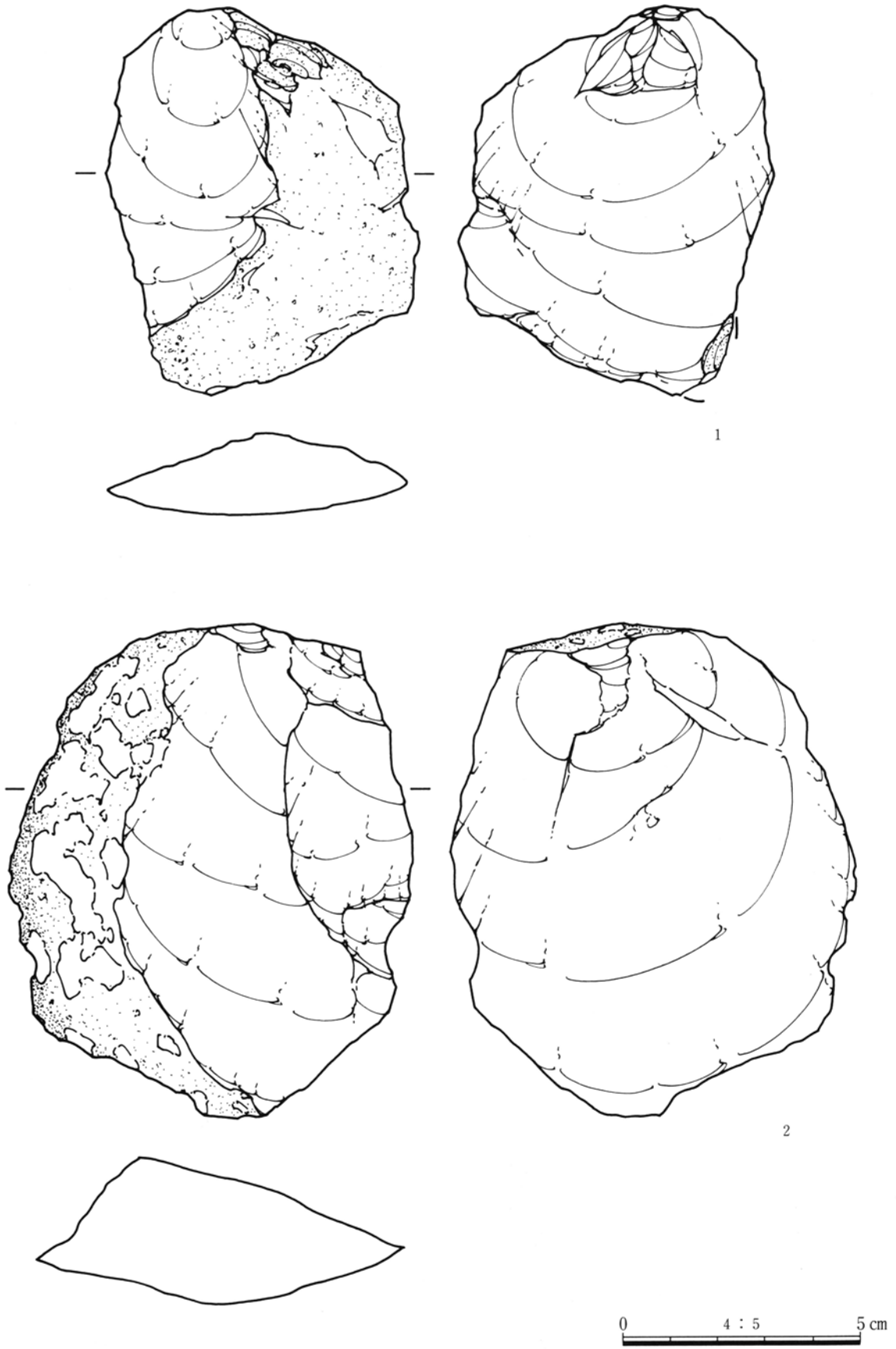
第47図 出土石器(10)

1. 旧石器時代

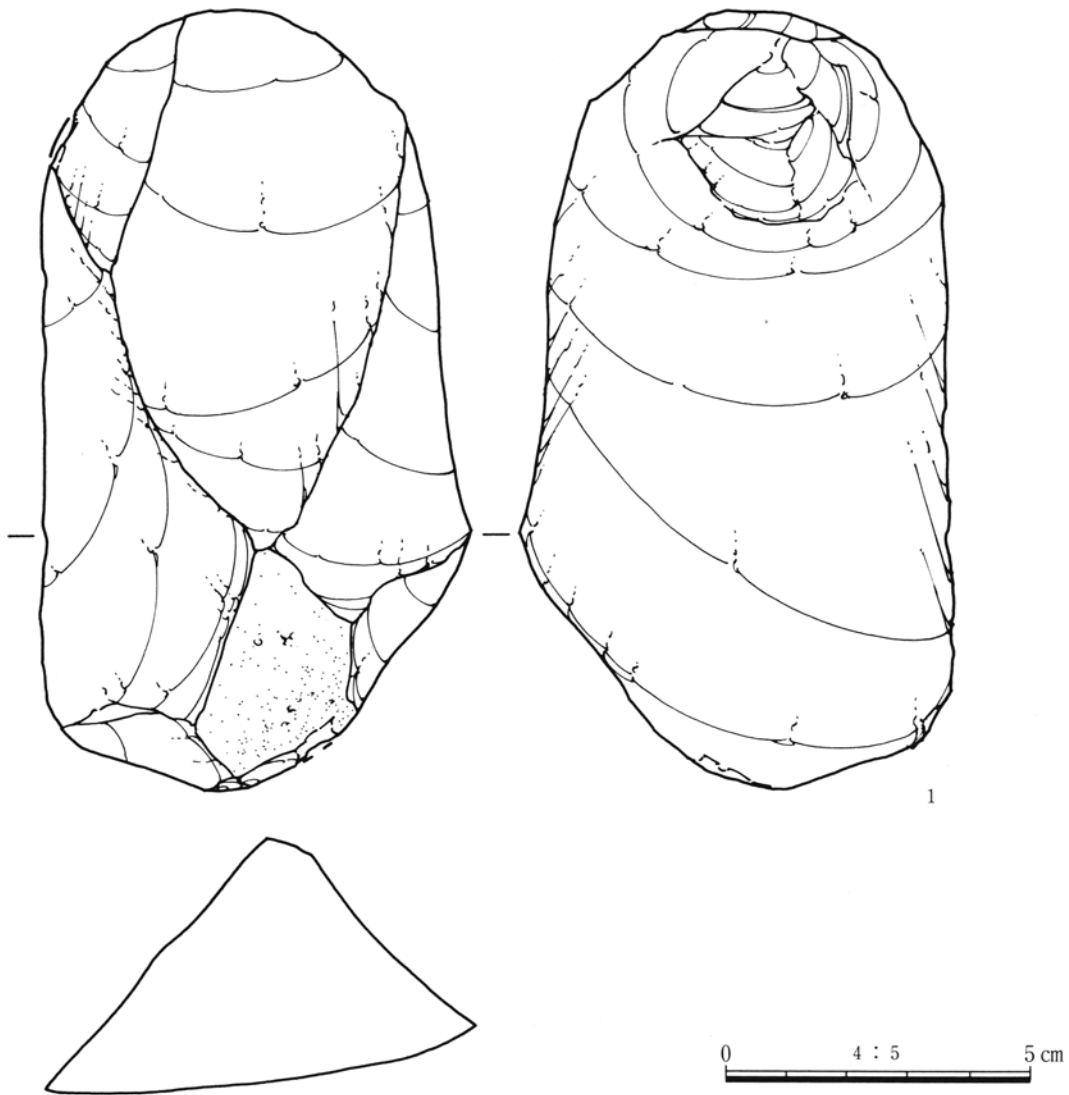


第48図 出土石器(11)

II 調査の成果



第49図 出土石器(12)



第50図 出土石器(13)

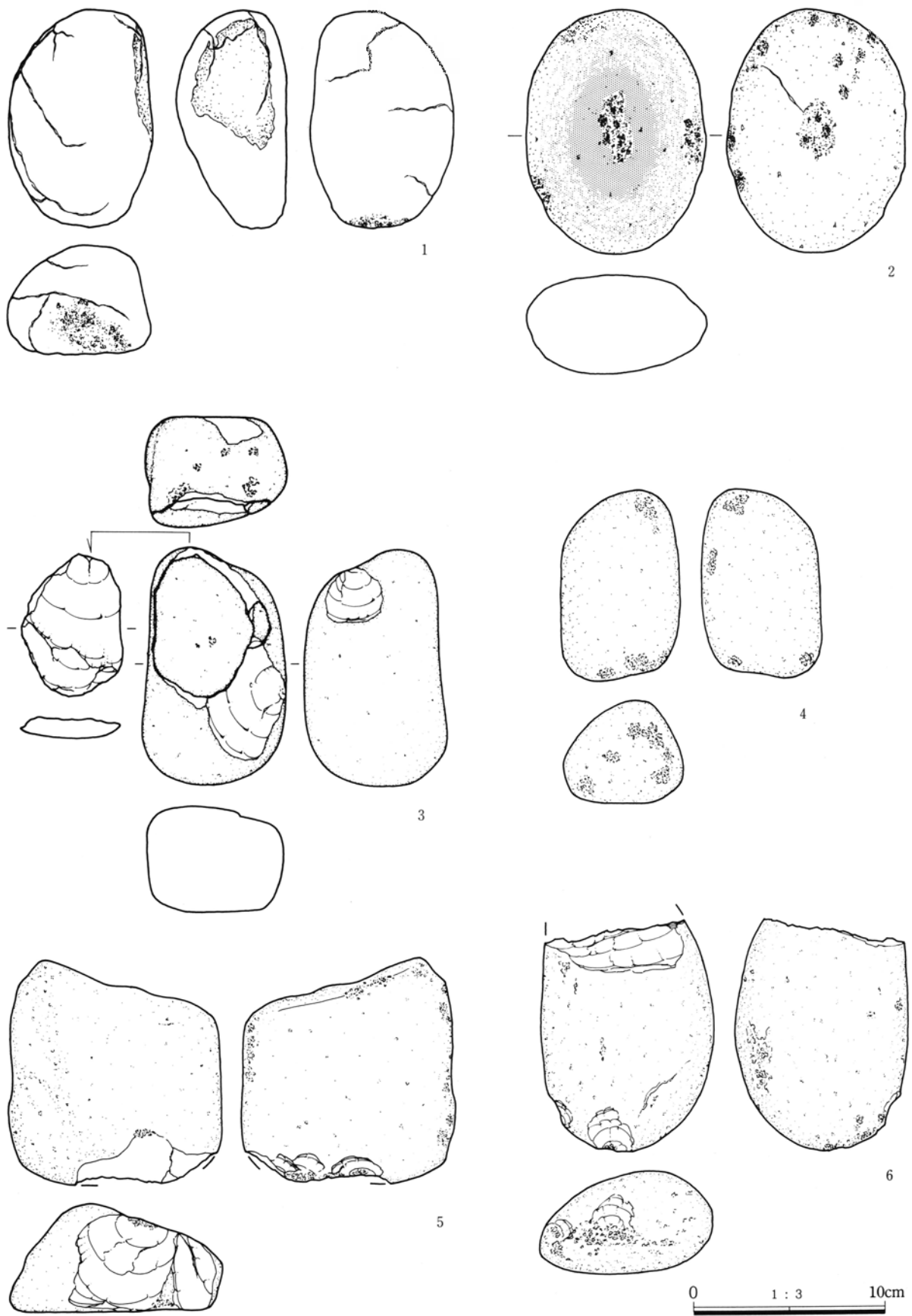
風化が激しい。黒色頁岩。5は、礫面を大きく残す剥片。打面は弾け飛んでおり、不明。石材からみて敲石の破片と判断されよう。石英閃緑岩。第49図1は、礫面を大きく残す幅広の大形剥片。剥離の初期に剥離しており、打面は平坦で狭い。黒色頁岩。2は、礫面を大きく残す幅広の大形剥片。剥離の初期に剥離しており、礫面から剥片を剥離している。粗粒輝石安山岩。第50図1は、礫面を部分的に残す大形の縦長剥片。平坦打面から剥離され、左右の側縁が並行する形状の整う剥片の剥離に成功している。背面に残る剥離の方向は剥片の剥離方向に一致する。黒色頁岩。

敲石 (第51・52図2)

12点が出土している。吹屋犬子塚・第2文化層に組成した敲石とは異なり、200g前後を測る小形の敲石の出土は見られない。出土した敲石には重さ500g弱を測る敲石(第51図4)、700g～900gを測る敲石4(第51図1～3・6)、1000gを越える大形の敲石(第51図5)が出土しており、中・大形の出土例が多い。

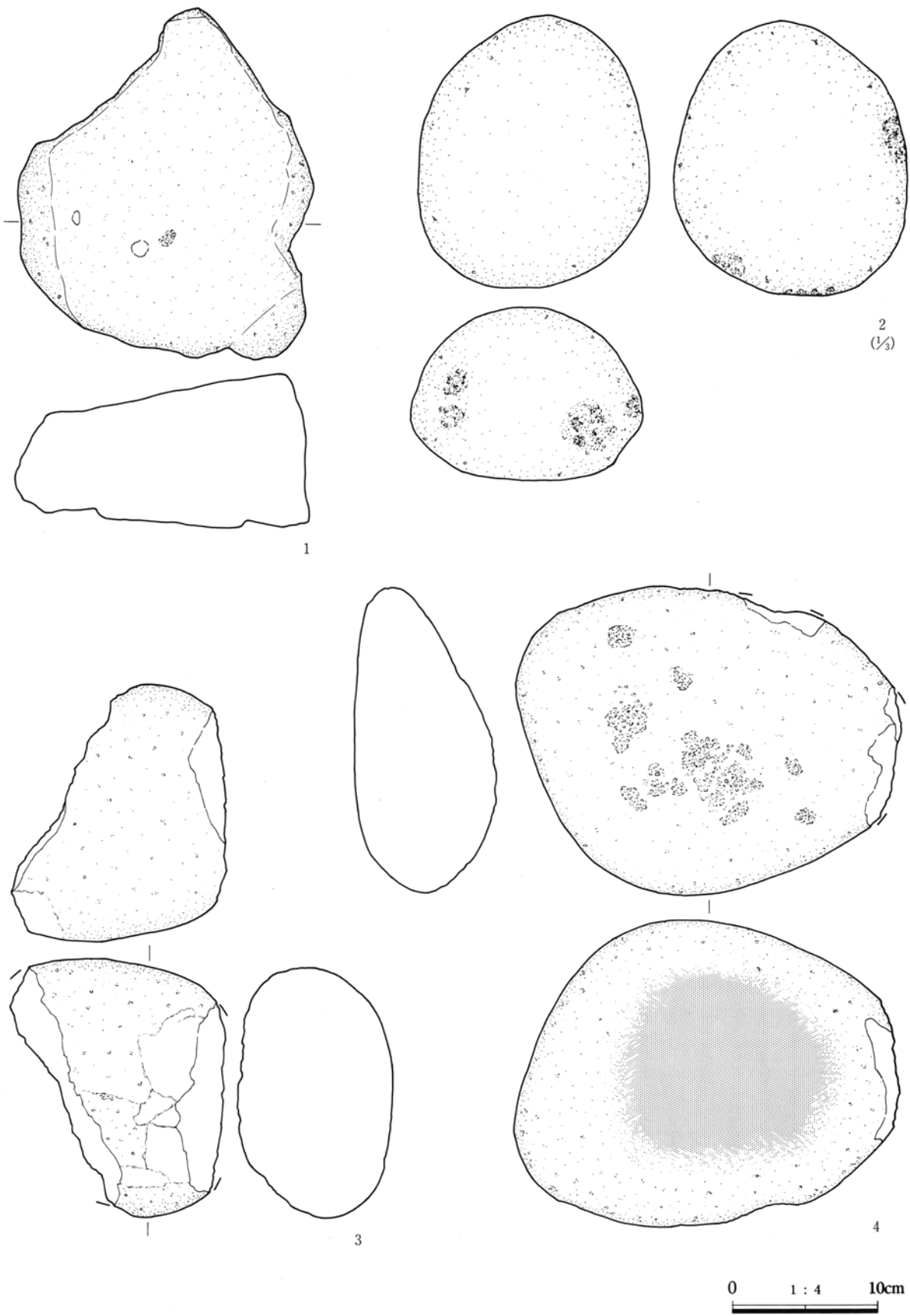
第51図1は、中形の敲石で重さ733gを測る。右側縁には部分的に礫面が残る他は、熱を受け礫面が剥がれ落ち、ヒビ割れている。礫の小口部分に打痕が生じている。変質安山岩。2は、中形の敲石で重さ

II 調査の成果



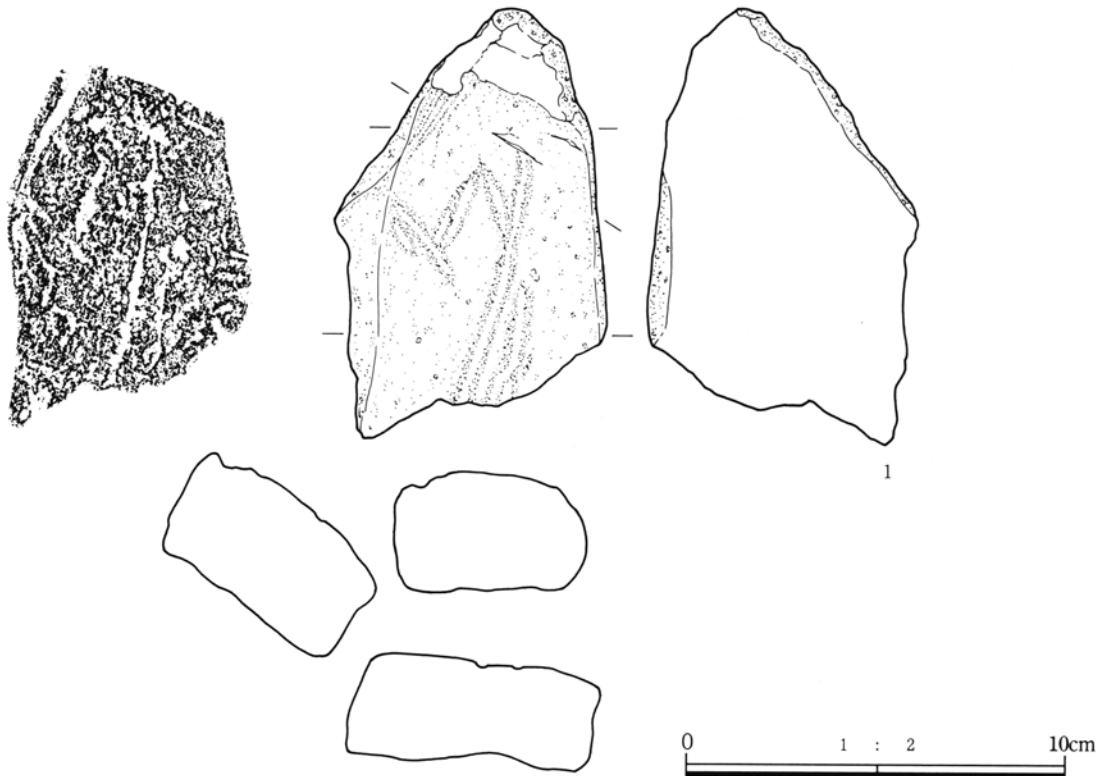
第51図 出土石器(14)

1. 旧石器時代



第52図 出土石器(15)

II 調査の成果



第53図 出土石器(16)

940gを測る。礫の小口部分・側縁に顕著な打痕が生じるほか、表裏両面とも礫・中央に打痕が生じ、さらには礫・表面は摩耗するようにも見える。粗粒輝石安山岩。3は、中形の敲石で重さ816gを測る。主に礫・上端の小口部分を使用しており、表裏両面ともこの部分で破損している。出土資料には2点の破片が接合(接合資料-42)する。石英閃緑岩。4は、出土資料の中で最も軽い敲石で重さ497gを測る。礫の小口部分に打痕が集中する。石英閃緑岩。5は、大形の敲石で重さ1011gを測る。礫・上端に打痕が集中する。また、下端は大きく打ち欠かれ、ここにも打痕が生じており、礫器的に使用した可能性も想定されよう。粗粒輝石安山岩。6は、上端を欠損する、推定重量は1kgを越える大形の敲石。礫・下端の小口部分には打痕が集中する。粗粒輝石安山岩。第52図2は、大形の敲石で重さ2300gを測る。礫・下端の小口部分には顕著な打痕が生じる他、表裏両面とも礫面は摩耗している。粗粒輝石安山岩。

台石(第52図1・3・4)

3点が出土している。礫の上下両端を欠損する例を除き、台石には重さ5kg以上を測る、平坦な礫面を有する大形の礫を用いる。

第52図1は、重さ6.7kgを測る。礫の片側に平坦な礫面を有し、礫・中央付近に僅か打痕を残している。粗粒輝石安山岩。3は、礫の上下両端を欠損する。現状では、重さ3.5kgを測る。打痕は明瞭ではなく、形状・重量から判断した。礫面はヒビ割れている。粗粒輝石安山岩。4は、重さ8kgを測る。片側に打痕が生じるほか、片側は摩耗が著しい。石英閃緑岩。

不明石製品(第53図)

1点が出土した。稜の摩耗状況から裏面側は破損している可能性が強い。図示した通り、表面には浅い「凹み」が見られ、注意を引いた。やや深い「凹み」は長軸に並行する反面、浅い条は斜交するようにも見える。角閃石の混入の少ない軽石。

接合資料

既に述べた通り、516点(出土位置不明の27点を含む)の出土資料を対象に接合作業を試みた結果、42例182点の接合資料を確認した。接合率は37%に達し、原石の消費実態や剥片剥離の在り方を知る上で良好な資料と評価されよう。

接合資料—1 (第54～56図)

19点からなる接合資料。原石を大きく二分した後、分割した石核単位で剥片剥離は進む。残存する礫面の形状から判断して、原石は推定で25cm～30cmを測る大形の原石が想定されよう。接合状況からみて、分割した一方は少なくともこの遺跡では消費せず、一方(図示した接合資料)は石核の周辺部分を消費し、中心部分は遺跡外に持ち出した可能性を示していた。

原石の分割→①・②(⇒は作業面を打面に剥離を行う打面転移を示す)

①遺跡外(未確認)

②○→1⇒○⇒2→3⇒4⇒9(5→○⇒6→7→8)→10⇒11→12⇒○⇒○⇒13→○→・・・→14→(遺跡外に持ち出す)

剥片剥離は原石を大きく二分、分割して石核素材を獲得したあと、各々の石核で剥離が進む。接合資料は二分してえた石核素材の1つで、残る1つは出土資料の中には全く痕跡が見られない。剥離は、まず大形の剥片を剥離した後に、この剥片を石核に用い1を剥離することから始まる。大形剥片を剥離した剥離面(作業面)を打面に剥片を剥離する打面転移を繰り返した後に、2・3の剥片を打点を左右に大きく振り剥離、さらには作業面を固定し打面を90°左に大きく振り4を剥離している。5～8の剥片が接合する9は大形剥片を石核に用いる例で、4の剥片を剥離したあと対辺に打面を移し剥離しており、更に打点を大きく振り10の剥片を連続剥離する。5～8の剥片は5の剥片を剥ぎ更に1枚の剥片を剥離した後に打面を入れ換え6～8を打面を固定して剥離する。10の剥離以後、再び、打面を入れ換え11・

12を剥離、13の剥離に至る間、3度に及ぶ作業面と打面を入れ換える打面転移を繰り返している。13の剥離以後は剥離した剥片の数は不明だが、13と同じ打面から14を剥離して剥離を終えており、残る石核の中心部分は出土資料の中にはなく遺跡の外に持ち出している。黒色安山岩。

接合資料—2 (第57・58図)

13点からなる接合資料。原石を大きく分割した後、基本的に分割面を打面に剥片剥離を行う。残存する礫面の形状からみて、石核は推定で高さ11cm・幅15cm・厚さ10cmは優に越える石核形状が想定されよう。剥片剥離の初期段階を示す礫面を大きく残す剥片は見られないことから、礫面を除去する剥離は遺跡の外で終えている、と判断している。

原石の分割→①・②

①遺跡外(未確認)

②分割→1→○→○→○→2→○・・・○→3⇒4→5⇒○→○→○→6→○⇒7○→○→○⇒○→○→8

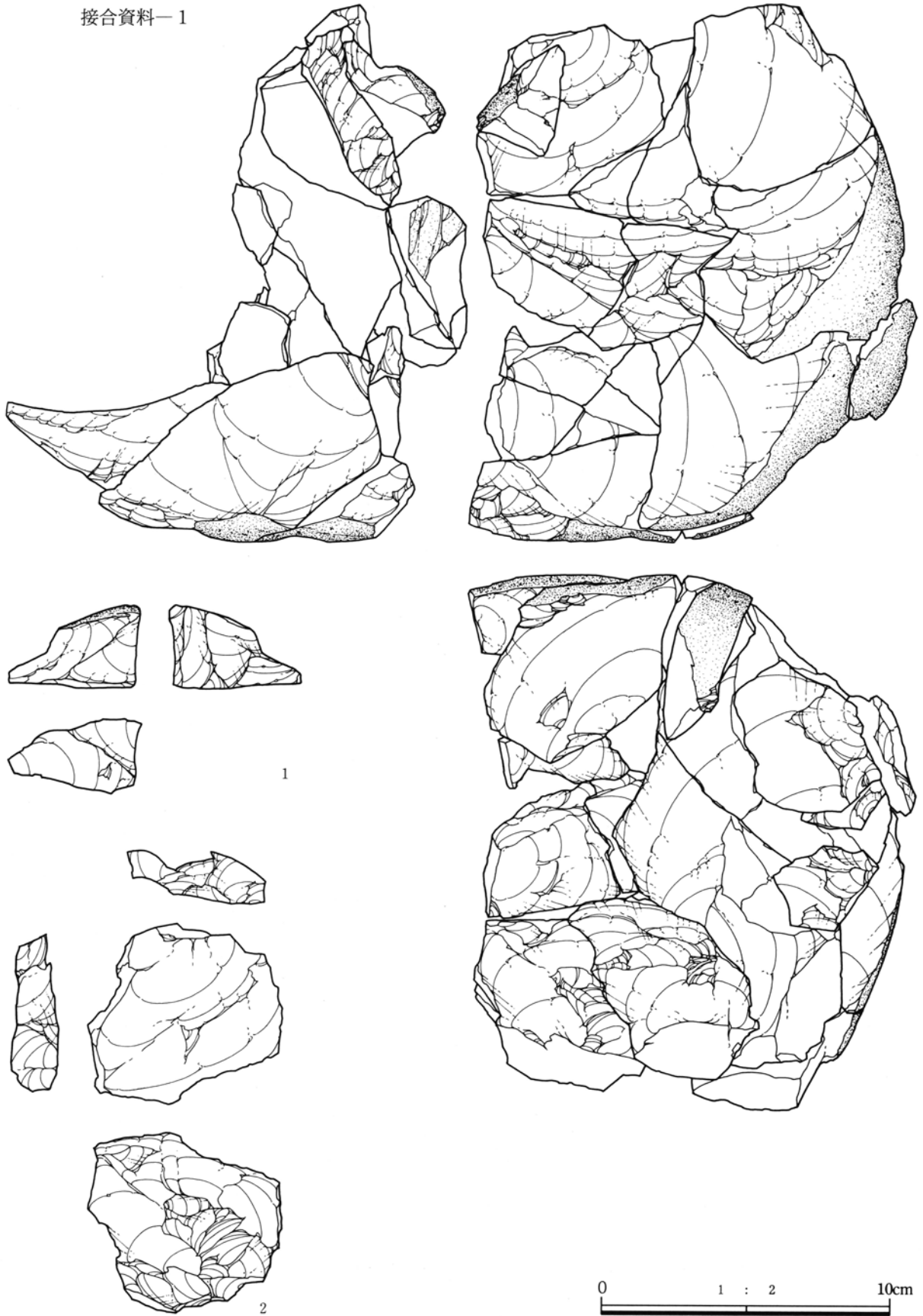
原石を二分して石核素材を獲得したあと、遺跡外で礫面を除去するよう石核周辺を剥離する。接合資料の示す剥離は、まず、正面左側から剥離を行い1を剥離、以後同一打面から打点を大きく左右に振り2・3の剥片を剥離(剥離面の在り方からみて少なくとも5枚以上の剥片を剥離)する。3の剥片を剥離したあと、打面を正面左側の側面に移し、4・5の剥片を剥離、再び、打面を下の位置に戻して剥片を3枚ほど剥離して、正面部分の剥離を終えている。以後の剥離は石核裏面に作業面を移し、剥片を剥離する。7は石核の側縁調整だが、打面調整と切り合い関係が見られないため、現状では、調整剥離の前後関係は判断できない。裏面では少なくとも3枚の縦長剥片を剥離しており、8は恐らくこの時の剥離で剥片の端部が弾け飛んでいる可能性が高い。黒色安山岩。

接合資料—3 (第59図)

6点からなる接合資料。礫面を大きく残している接合資料で、剥片剥離の初期段階に属す資料と判断

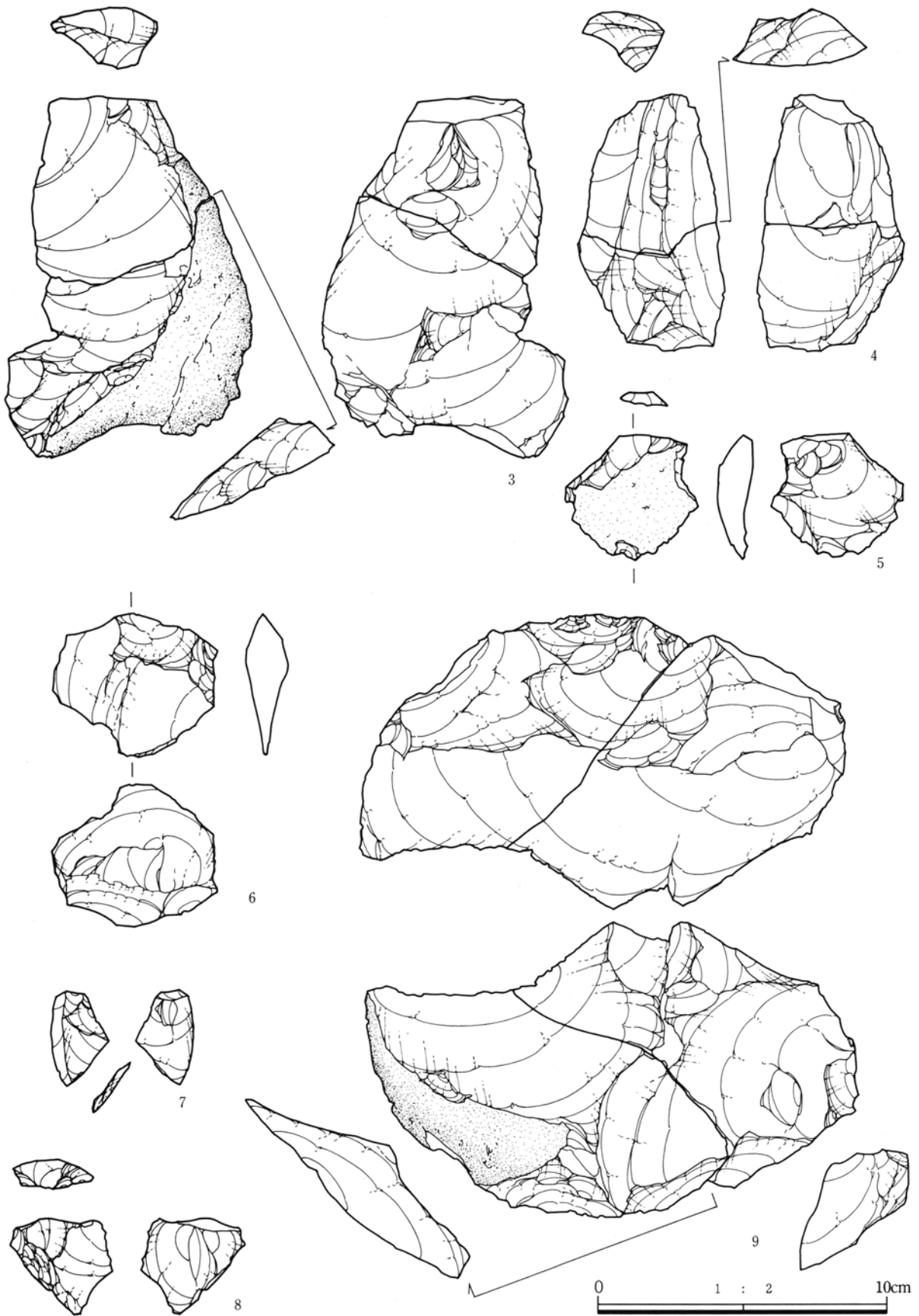
II 調査の成果

接合資料-1



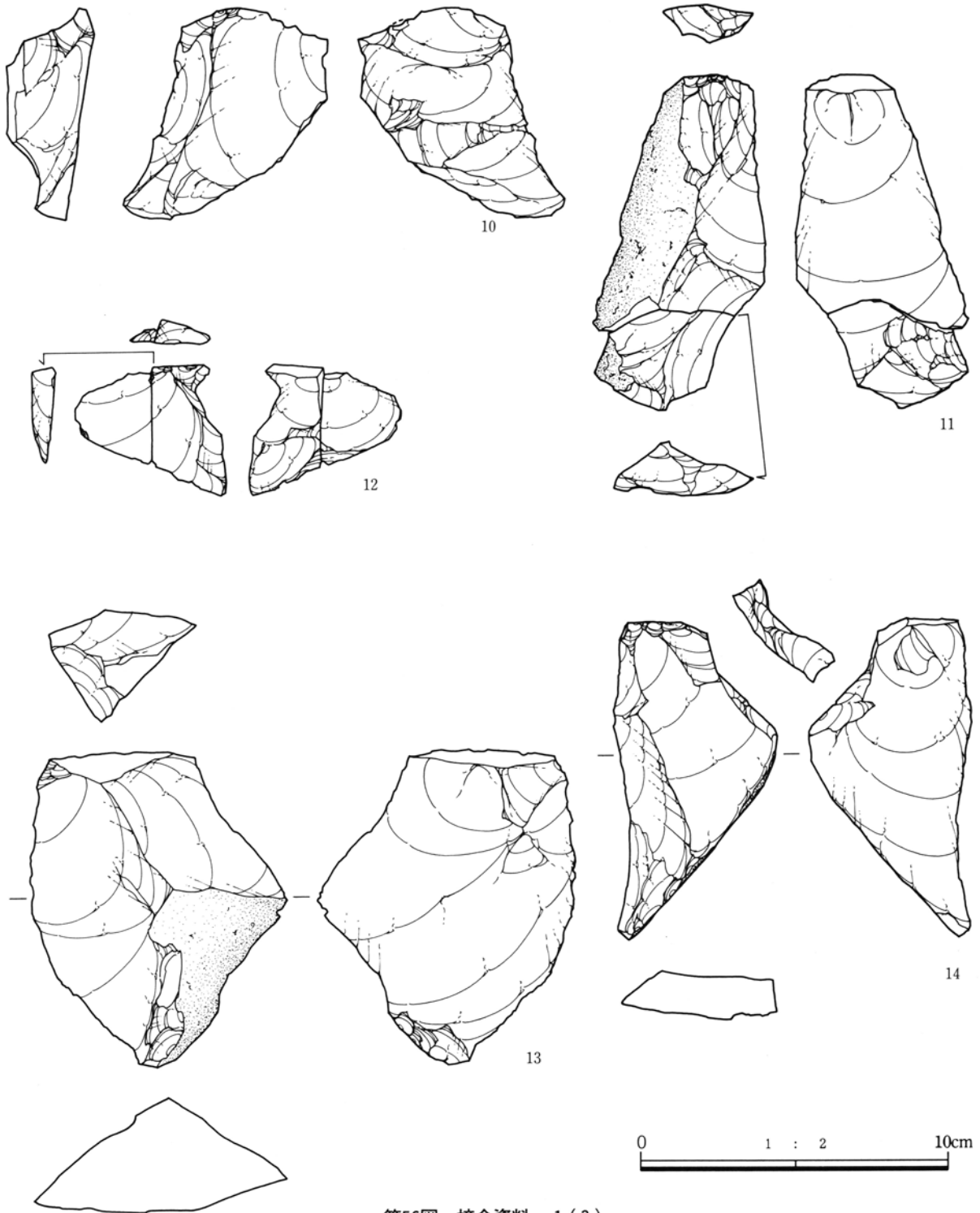
第54図 接合資料-1(1)

1. 旧石器時代

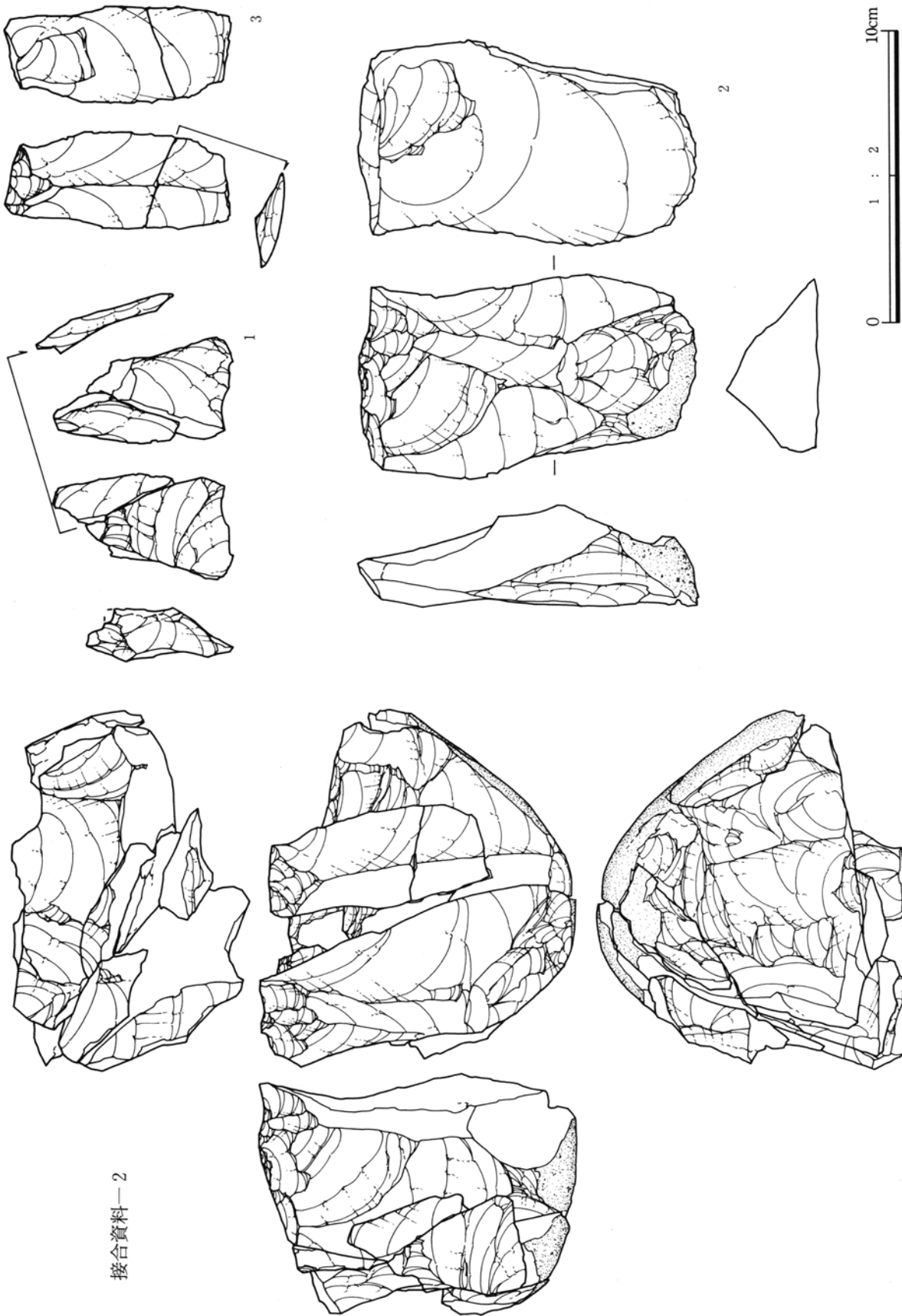


第55図 接合資料一(2)

II 調査の成果

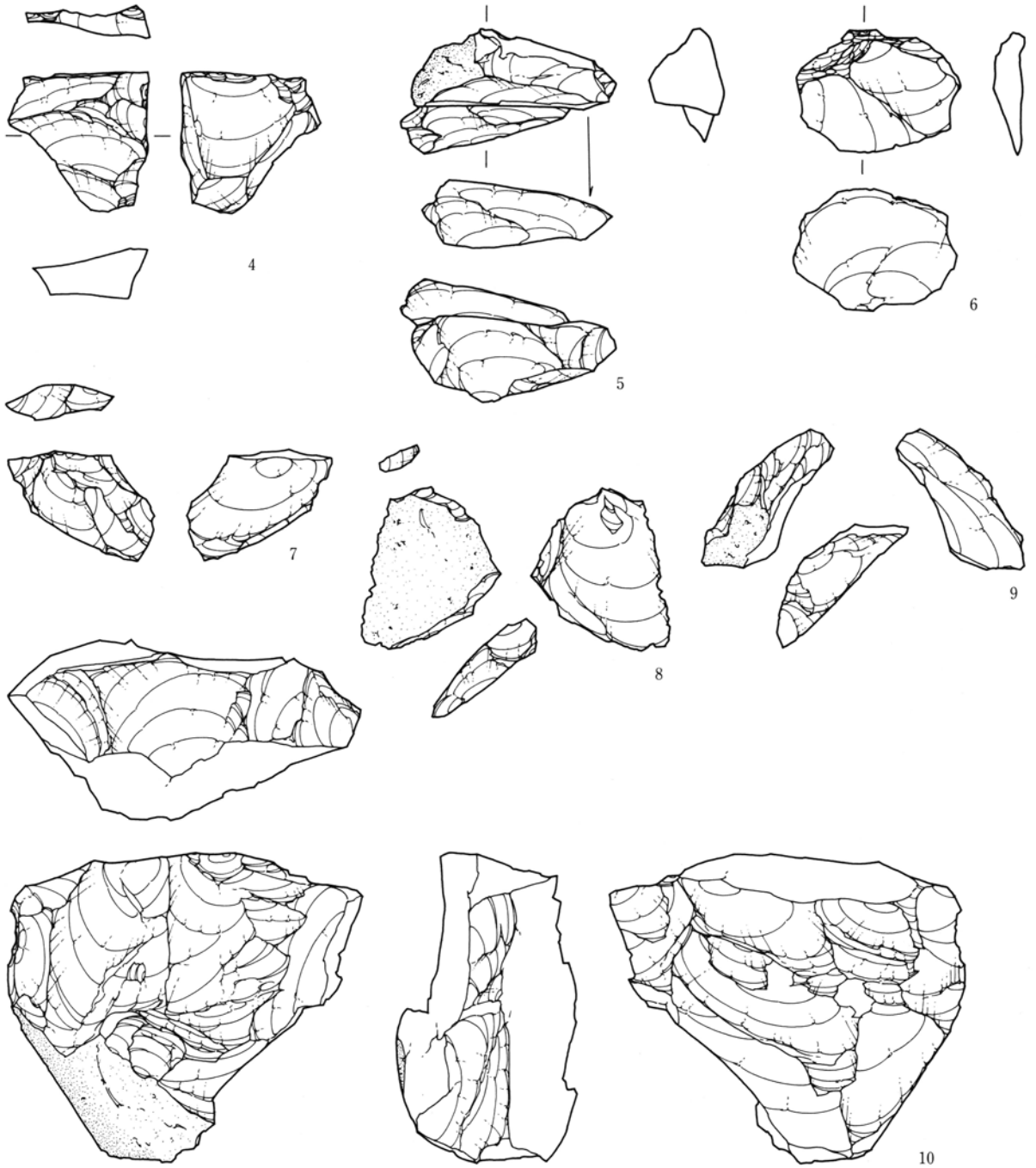


第56図 接合資料一(3)



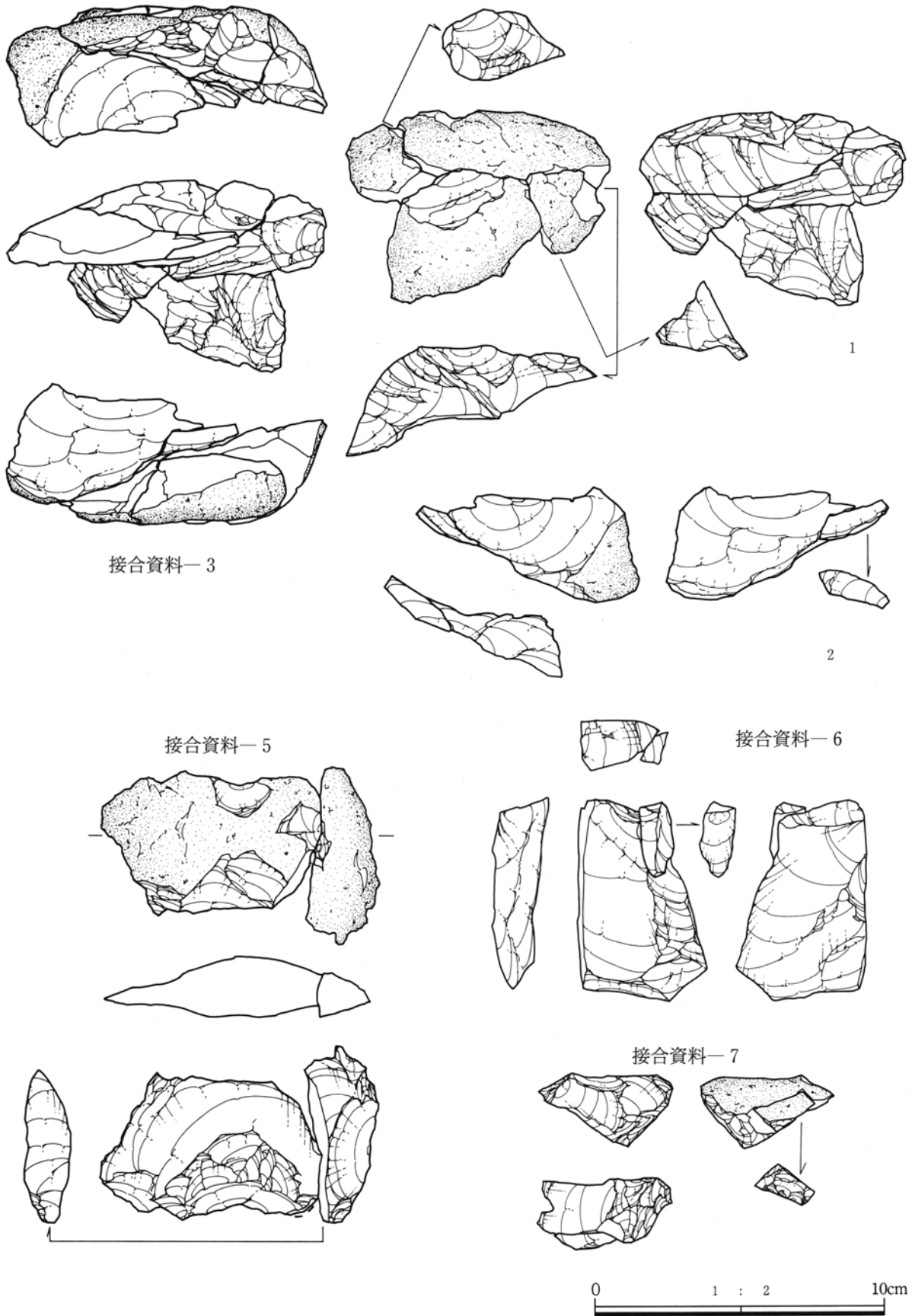
第57図 接合資料-2 (1)

II 調査の成果



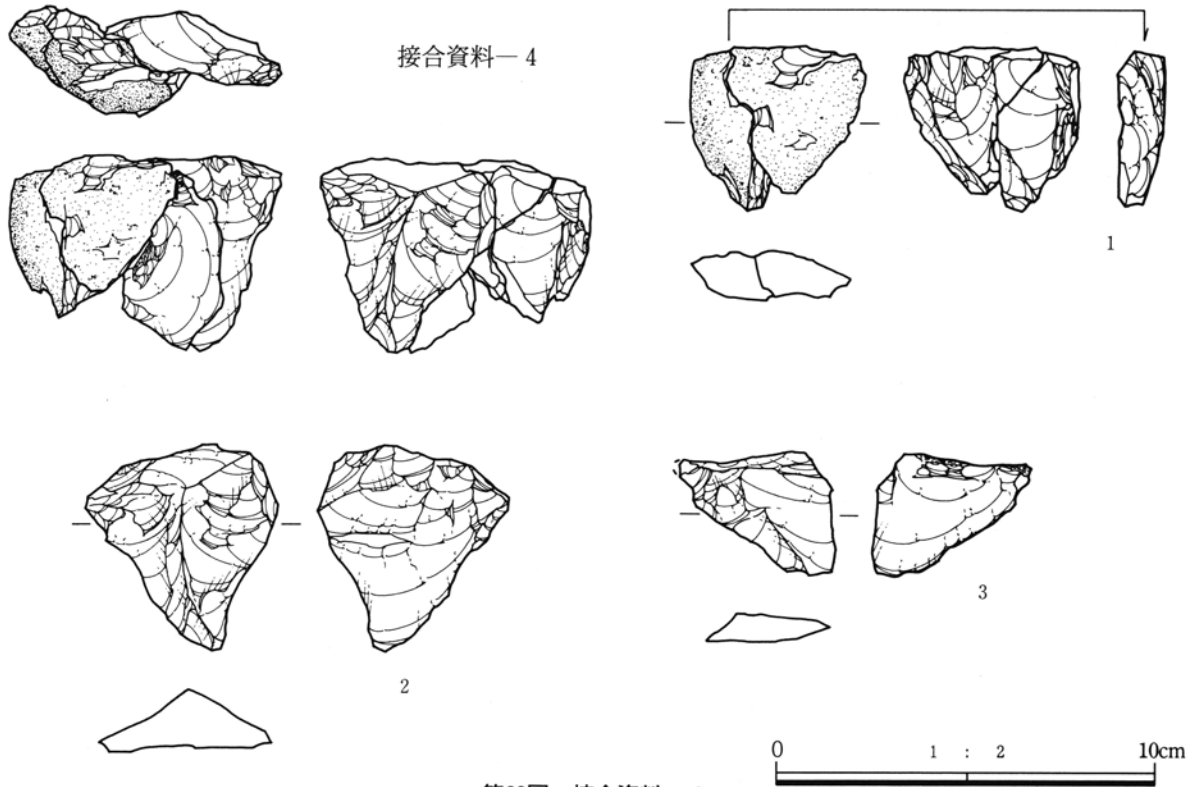
第58図 接合資料一2(2)

0 1 : 2 10cm



第59図 接合資料-3・5・6・7

II 調査の成果



第60図 接合資料-4

されよう。

剥片剥離は原石の礫面を剥ぎ取り開始され、まず、1の礫面を大きく残す剥片を剥離している。1は、やや厚い大形の剥片で6つに分割している。石材は粗く、良質の分割剥片の獲得には失敗しているようにも見える。2の剥片の打面は1の剥離面の逆の位置に置かれ、以上の在り方から原石は、やや厚い板状の石核から剥離する剥片剥離の在り方も想定されよう。黑色安山岩。

接合資料-5 (第59図)

2点からなる接合資料。礫面を大きく残している接合資料で、剥片剥離の初期段階に属す資料と判断されよう。

剥片剥離は90°の打面転移を伴う例で、正面・右の幅の狭い剥片を剥離した後に、打面を変えず90°作業面を大きく移動して幅広剥片を剥離する。黑色安山岩。

接合資料-6 (第59図)

2点からなる接合資料。上面の平坦な打面から打点を左右に振り剥片を剥離する。比較的幅広の剥片

を剥離している。2は剥離段階で打点より破損している。黑色安山岩。

接合資料-7 (第59図)

2点からなる接合資料。厚い板状の大形剥片を石核に用いる例で、石核の端部に近い。接合資料にはバルブ(ポジ)が残り、碎片は剥離の段階で弾け飛んだ可能性が強い。黑色安山岩。

接合資料-4 (第60図)

4点からなる接合資料。礫面を大きく残しており、剥片剥離の初期に位置づけられよう。

剥片剥離は平坦打面から1の剥片を剥離したのち、同じ打面から大形剥片(2や3を剥離した石核)を剥離している可能性が強い。2・3の剥片は、この大形剥片を石核に用い剥離した例と見られ、90°の打面転移を伴う。黑色安山岩。

接合資料— 8 (第61~64図)

29点からなる接合資料。長さ17cm・幅15cm・厚さ7cmを測る円礫を用い剥片剥離を行う。接合資料には本来ならある剥片が存在せず、大形剥片を中心に遺跡外へ搬出している。

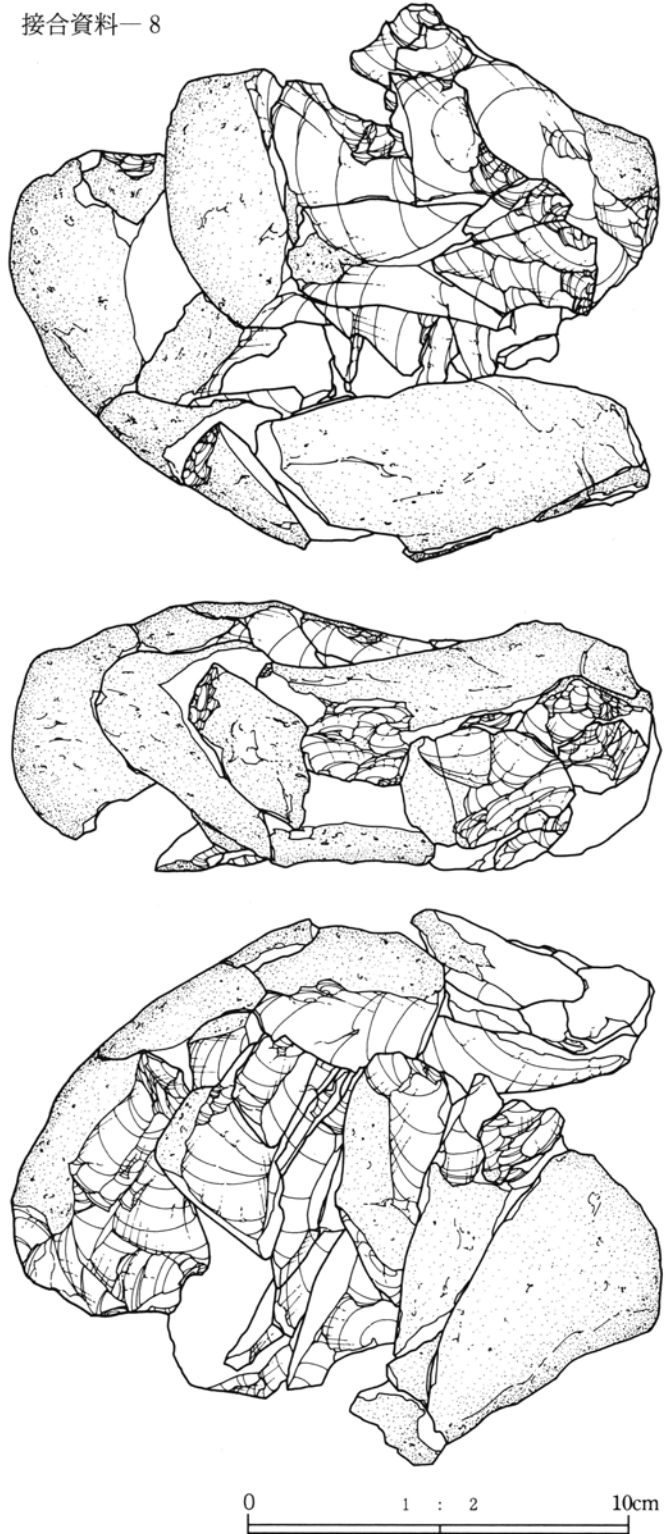
① 1 + 6 (2 → 3 → 4 → 5) → … → 7 → 8

② 9 → 10 ⇒ ○ ⇒ ○ → 11 → 12 → ○ → ○ ⇒ (13 → 14) → 15 ⇒ 16 ⇒ ○ ⇒ ○ → … → 17 → 18 → 19 → 20 ⇒ ○ → ○ → ○ → ○ ⇒ 23 → 24 → ○ → ○ → 25

剥片剥離は表面・右下(第61図、1 + 2 ~ 6)の剥離からはじまる。この礫面を大きく残す大形剥片の剥離に先行剥離した打面作出剥片は出土資料の中にはなく明確ではない。が、9の剥片に似た礫面を大きく残す剥片を剥離、打面を作出した後に1 + 6を剥離したもの、と容易に推定されよう。この大形剥片は剥離段階で剥片端部から破損(1)しており、1を2 ~ 5の剥片と同様に、6の調整剥片とは想定できない。7・8の縦長剥片は打面のみ90°振り剥離している。9・10は原石の小口部分を敲く打面作出剥片、以後11の剥片を剥離する間は、作業面を固定し、打面のみ90°振り剥離を進める。11の剥片は9を剥離してえた打面から剥離され、以後4枚の剥片(11・12ほか2枚)を剥離している。

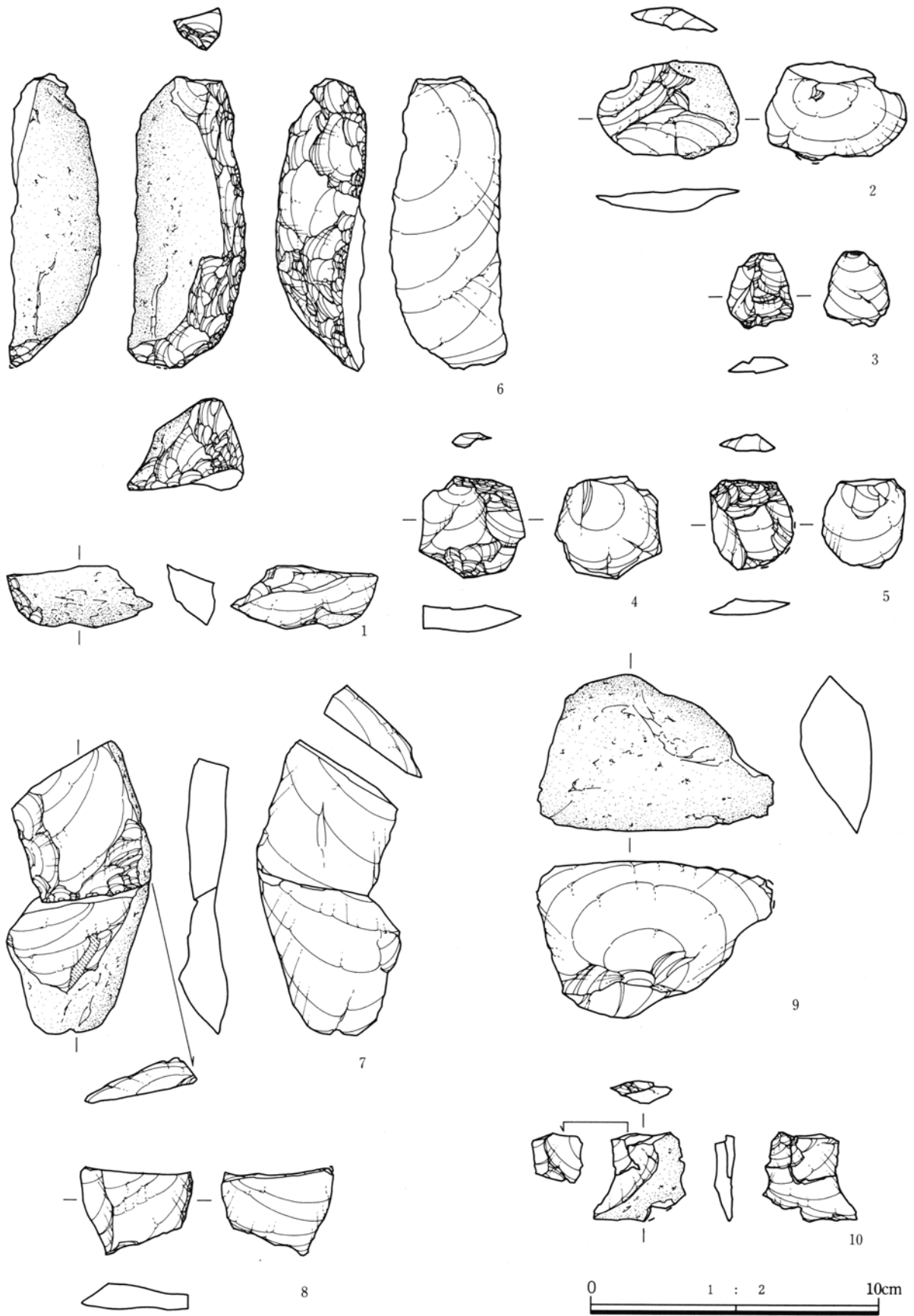
これより後は、作業面と打面を入れ換え13 + 14・15を、16は全く逆の対辺に打面を移し剥離している。17の剥離に至る間は、作業面を固定、打面のみ頻繁に90°転移する剥離が展開する。17 ~ 20の剥離は打面を固定し、連続剥離しており、比較的小形で形状の整う剥片を剥離している。これとは逆に21・22の剥片は打面を対辺に移動して剥離を試みている。以後の剥離は石核が小さくなり、剥離の最終段階に近づく。22の剥片を剥離したあと対辺に打面を移し4枚の剥片を剥離、再び、

接合資料— 8



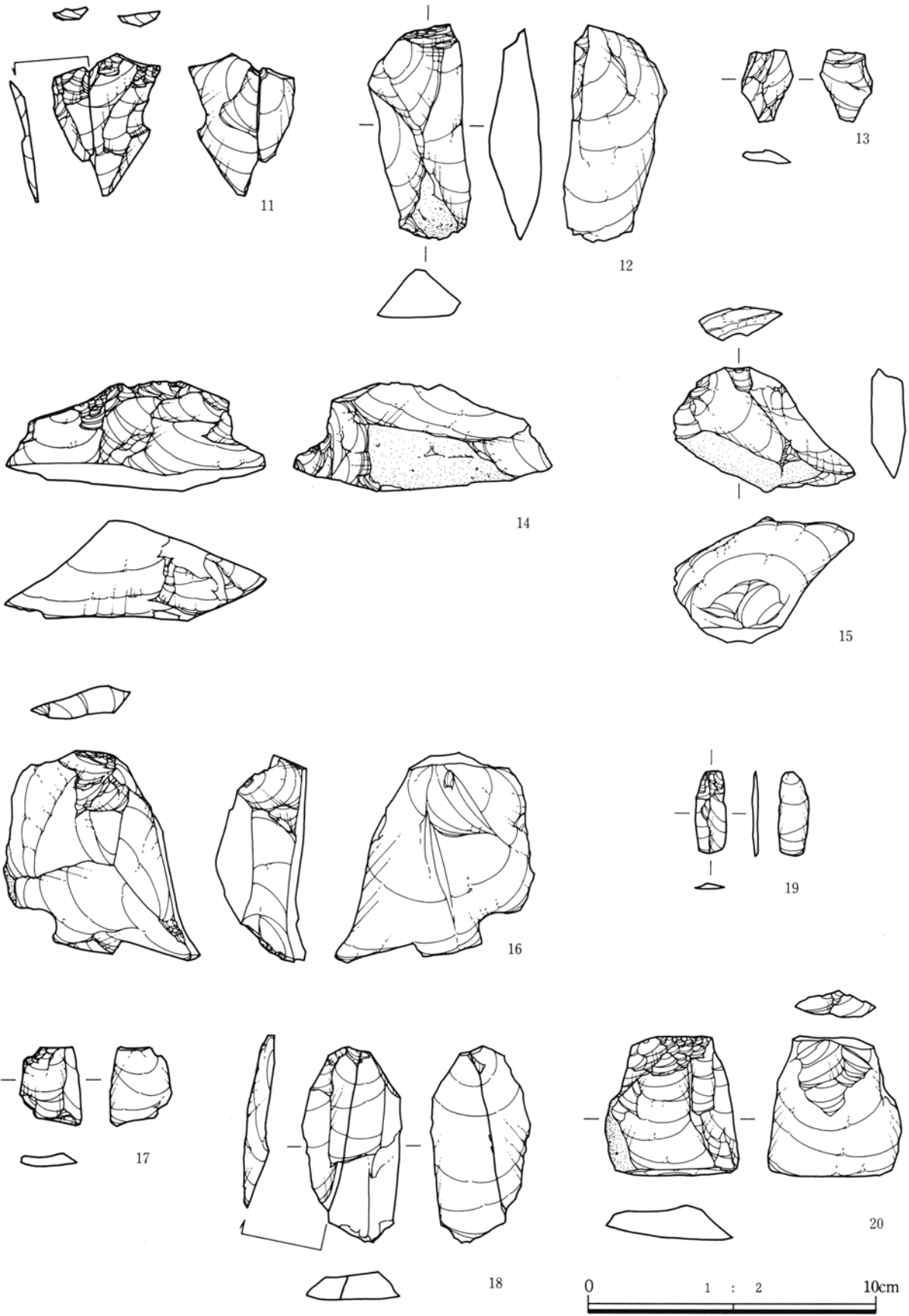
第61図 接合資料— 8(1)

II 調査の成果



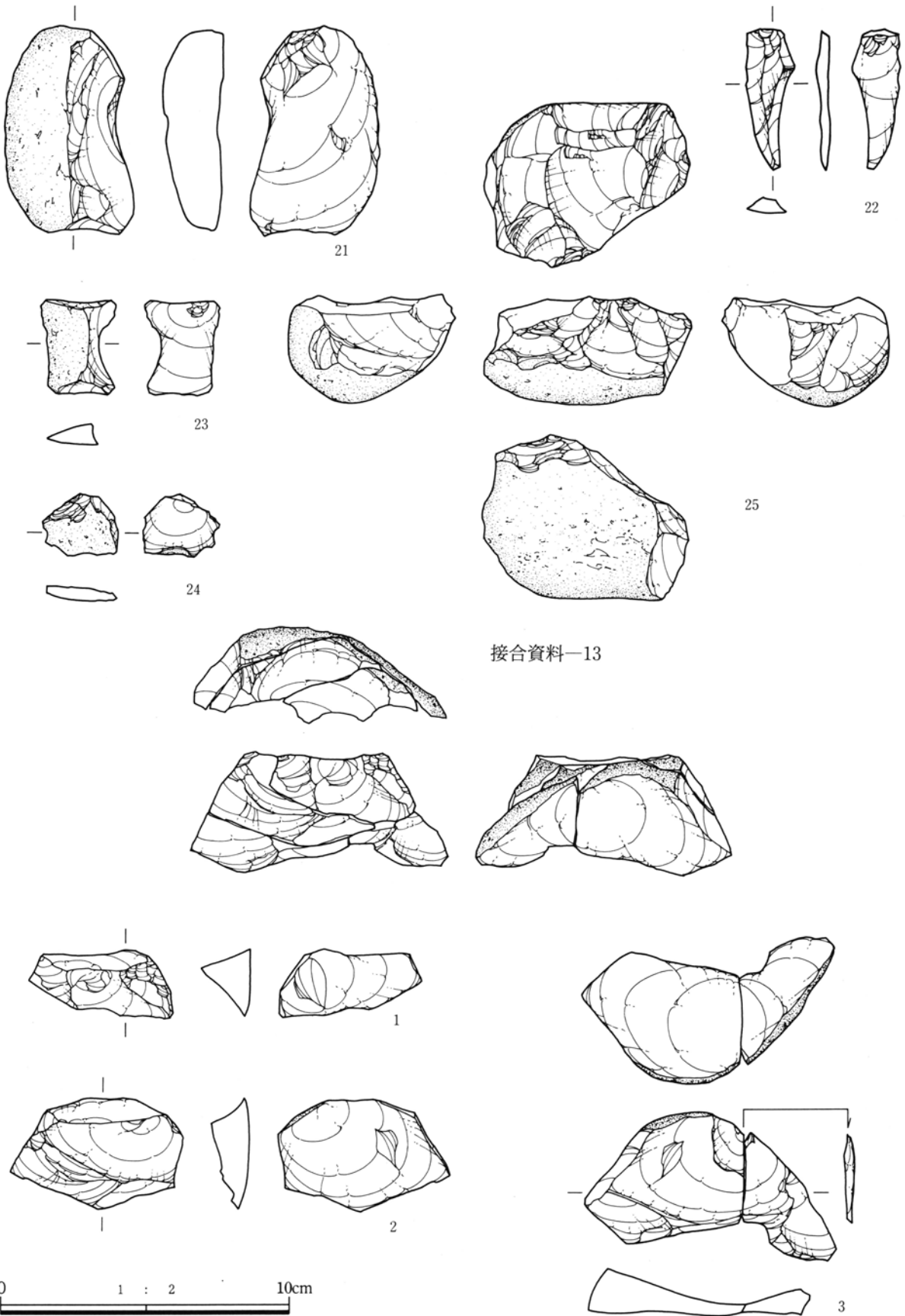
第62図 接合資料—8(2)

1. 旧石器時代



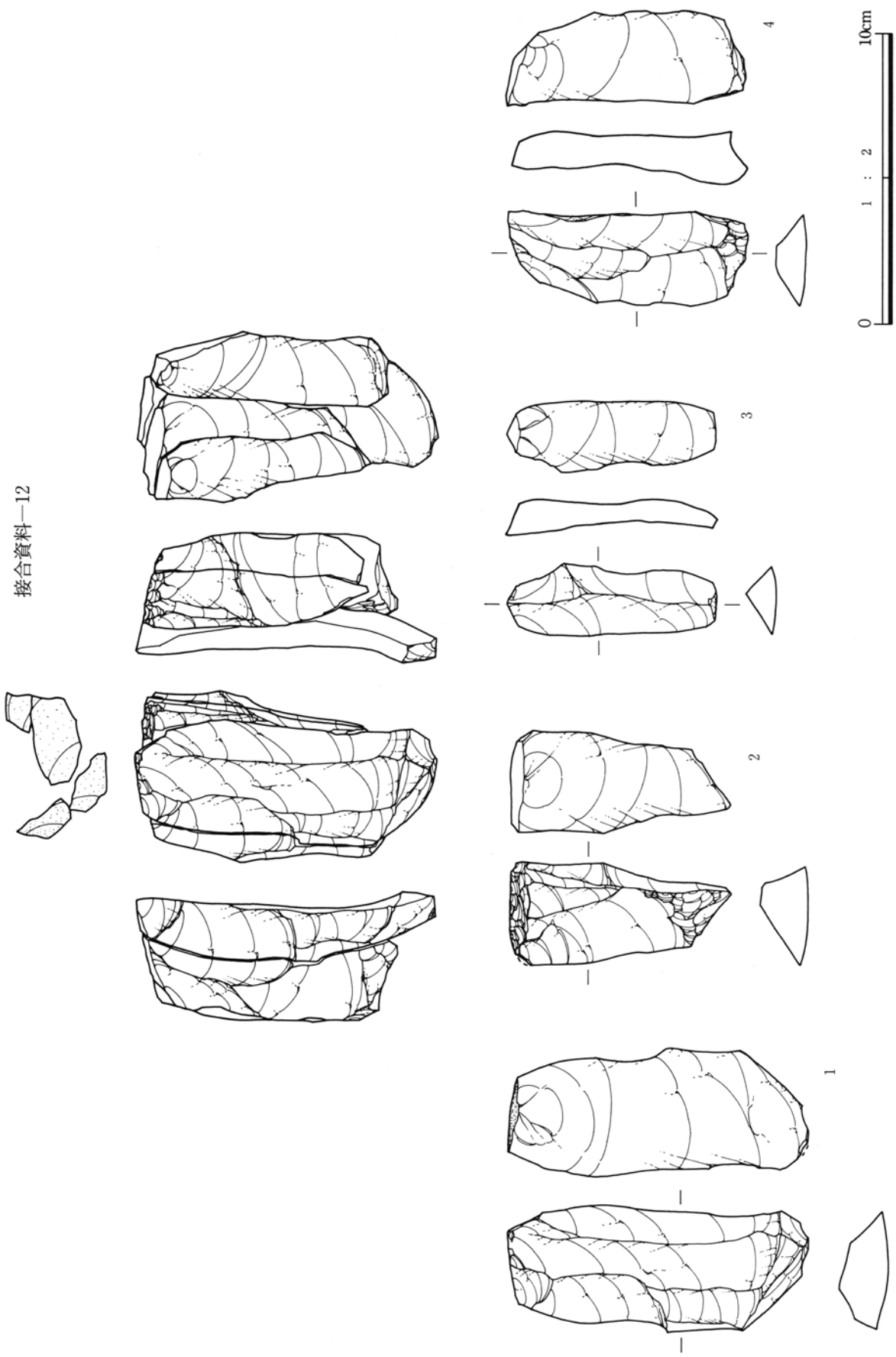
第63図 接合資料一8(3)

II 調査の成果



第64図 接合資料-8(4)・13

接合資料-12



1. 旧石器時代

第65図 接合資料-12

II 調査の成果

90°の打面転移を行い23・24を、最終的には更に2枚の剥片を剥離、石核を遺棄している。接合資料は剥離の初期に大形剥片を剥離し、以後の剥離は徐々に石刃を意識した剥離が展開する傾向を示している。黑色頁岩。

接合資料—13 (第64図)

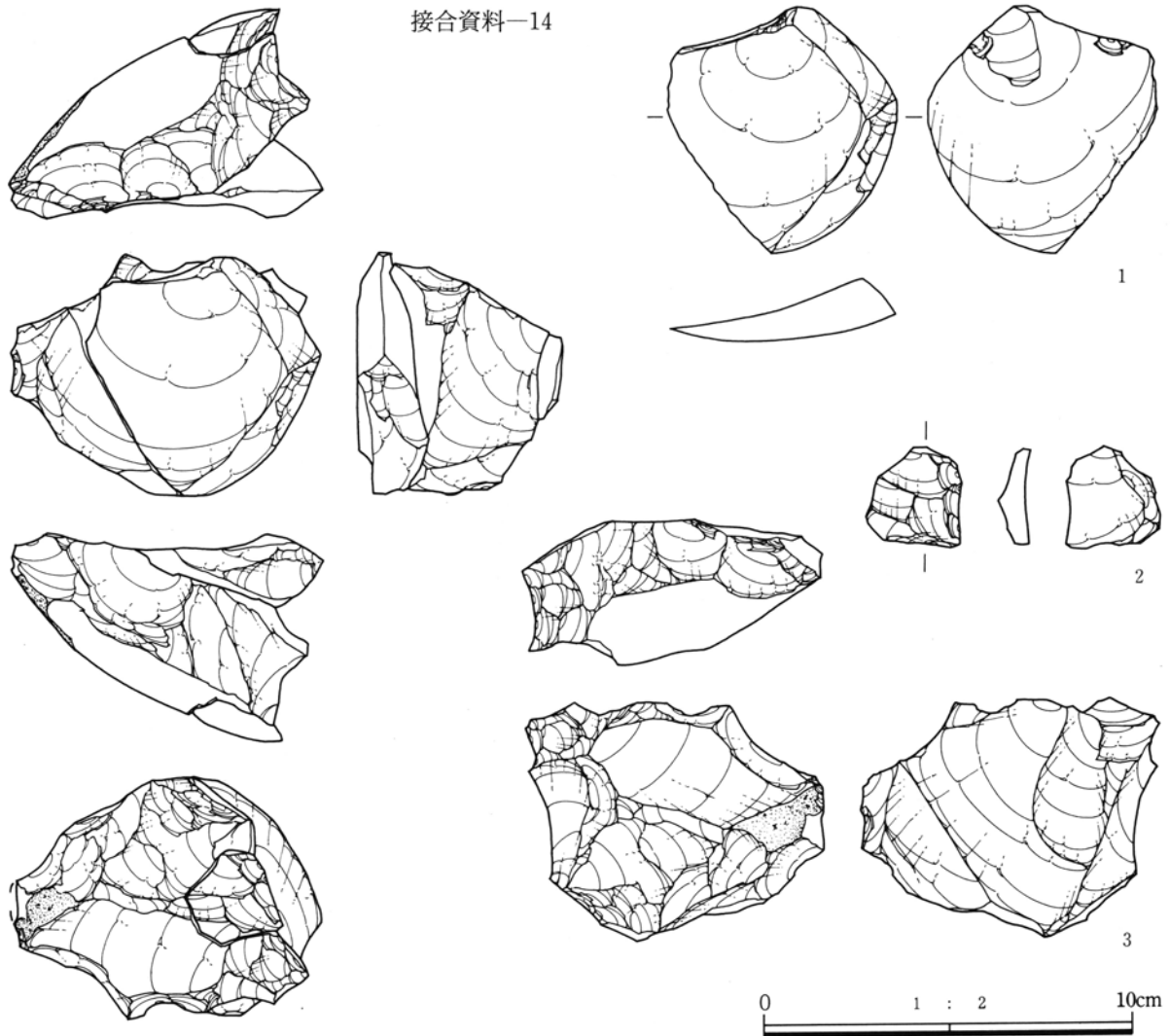
4点からなる接合資料。4点の剥片を剥離する以前の剥離は広く大きな剥離面を持ち、礫面の除去を目的に剥離を進めるようにも見える。1を剥離する前の剥離は、剥離面から打点を大きく振り剥片を剥離している。

1～4は、上面に残る礫面に打面を移し剥離する。打点は直線的に後退している。剥離した剥片の形状は幅広の剥片が多い。黑色頁岩。

接合資料—12 (第65図)

4点からなる接合資料。作出剥片は石刃に近く、比較的形狀は整う。が、断面は厚くナイフその他に用いる石刃とは異なる。当該期石器群は大形石刃に用いる例の多い段階でもあり、段階的特徴からみるなら、かならずしも目的剥片の剥離に失敗したとはいえないのではないか。

剥片剥離は打面を固定、打点を左右に大きく振り進み、やや厚い石刃を連続剥離する。出土資料の1枚(2)には著しい頭部調整を施している。剥片剥離の最終段階に極めて近く、残核の幅は5cm程度と狭い。剥片の1枚(4)は打面部分を中心にヒビ割れており、火熱を受けヒビ割れた可能性が指摘されよう。黑色頁岩。



第66図 接合資料—14

接合資料—14 (第66図)

2点の剥片と1点の石核からなる接合資料。裏面には礫面を部分的に残しており、剥離の最終段階を示す。

1 → ○ ⇒ ○ → … → 2 ⇒ ○ → ○ ⇒ ○ → ○ → …

1の幅広剥片を剥離する前の剥離面は大きく、幅広の剥片を多く剥離している。1を剥離したあと、打面と作業面を入れ換え2を剥離する。この段階の剥離は小形で1とは大きく異なる剥片形状を呈する。2の剥離直後剥離した剥片は1に近く、前の段階の剥離(2の剥片を含む)は打面調整に伴う剥片と位置づけられよう。以後の剥離は裏面に移り小形剥片を剥離する。この剥離は前出(1の剥片を剥離した後の打面転移以後から2の剥離まで)の打面調整と把えるには凹凸が激しく、剥片剥離を意図するかもしれない。黒色頁岩。

接合資料—15 (第67図)

削器1・剥片1からなる接合資料。礫面を部分的に残す。剥片剥離は背面に残る剥離面の在り方から90°の打面転移を伴う。

1は節理で割れた可能性が強く、上端の剥離面を打面に剥離され、2も打点を殆ど移動することなく同じ打面から剥離を試みている。黒色頁岩。

接合資料—16 (第67図)

3点からなる接合資料。接合した剥片は小形で、概して不定形な例が多い。剥離は180°の打面転移を伴い、3は全く逆から剥離している。黒色頁岩。

接合資料—17 (第68～70図)

14点からなる接合資料。礫面を大きく残す剥離の初期段階を示す接合資料で、比較的大形の剥片を剥離している。途中、衝撃で不意に割れた部分が介在するため、剥離は正確には把えられない。残存礫面の形状から推定して、原石は長さ30cmを優に越える大形の原石を用いる、と推定されよう。

① 1 → …

② 2 → ○ … 3 → ○ → 4 ⇒ 5 + 6 → 7

③ 8 → ○ → 9 → 10 ⇒ ○ ⇒ (11 → 12 → 13) + 14

剥離は、まず正面上端の左側側面の礫面を加撃し、

大形剥片を剥離する。1は、この厚い大形剥片を石核に用い剥離した剥片で、剥片端部には石核調整に伴う微細な剥離を残す。2は、1の剥離面を打面に剥離され、と同時に、恐らく古い衝撃でヒビ割れた3～7を剥離することにもなる大形の剥片も剥がれ落ちている可能性が強い。以下、この剥がれ落ちた古い衝撃面を打面に3・4を、更に打面を移動して5 + 6・7を剥離している。8～10の剥片は、1の剥離面を打面に打点を左右に振り連続して剥離され、打面再生を行い大形剥片を剥離したあと、再び打面を元に戻して剥片(11～14)を剥離している。このとき剥離した剥片は剥片中央付近で分割され、厚い上半部分は石核に転用され、11・12の小形剥片を剥離している。黒色頁岩。

接合資料—19 (第71図)

3点からなる接合資料。背面に残る剥離から頻繁な打面転移を伴う剥離が想定され、1・2は上面の平坦な打面から、3は全く逆に下端の平坦打面から剥離している。黒色頁岩。

接合資料—21 (第71図)

3点からなる接合資料。上端の打面から連続剥離する。打点は背面に生じた稜を選び剥片を剥離しており、石刃剥離を行う際の典型的な打点の選択が指摘できよう。なお、2の剥片は剥離段階でバルバスターが生じ剥片の中央付近から破損している。黒色頁岩。

接合資料—31 (第72・73図)

11点からなる接合資料。作出した剥片は概して幅広の剥片が多く、打点は作業面を構成する稜を選ぶ例は少なく、以前に剥離した打点の後を選択する傾向を示していた。原石は接合状態で長さ10cm・幅11cm・厚さ10cmを測る。原石の分割・二分して剥離を進める場合を想定するなら、長さ20cmを越える原石が想定されよう。

平坦な打面の作出(原石の分割?)

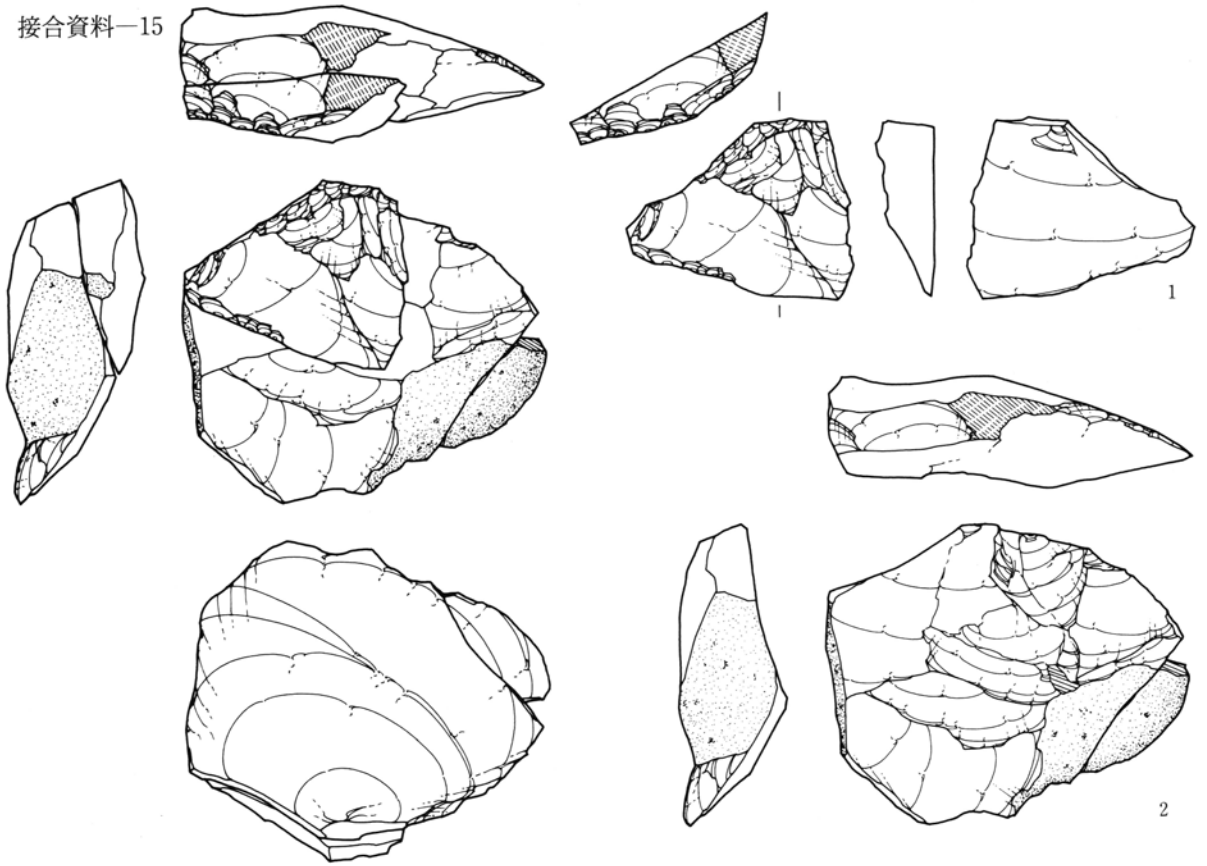
○ … → 1 ⇒ ○ → 2 ⇒ 3 → 4 ⇒ 5 …

⇒ ○ … ⇒ ○ → ○ → ○ ⇒ ○ ⇒ 6 → 7 → 8 ⇒ ○ → ○

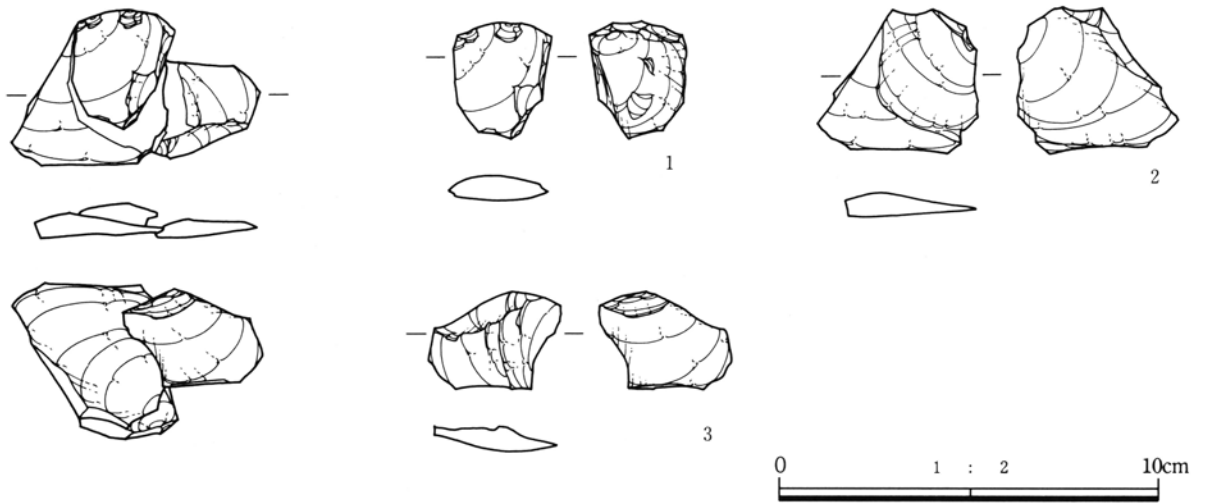
→ ○ → ○ → 9

II 調査の成果

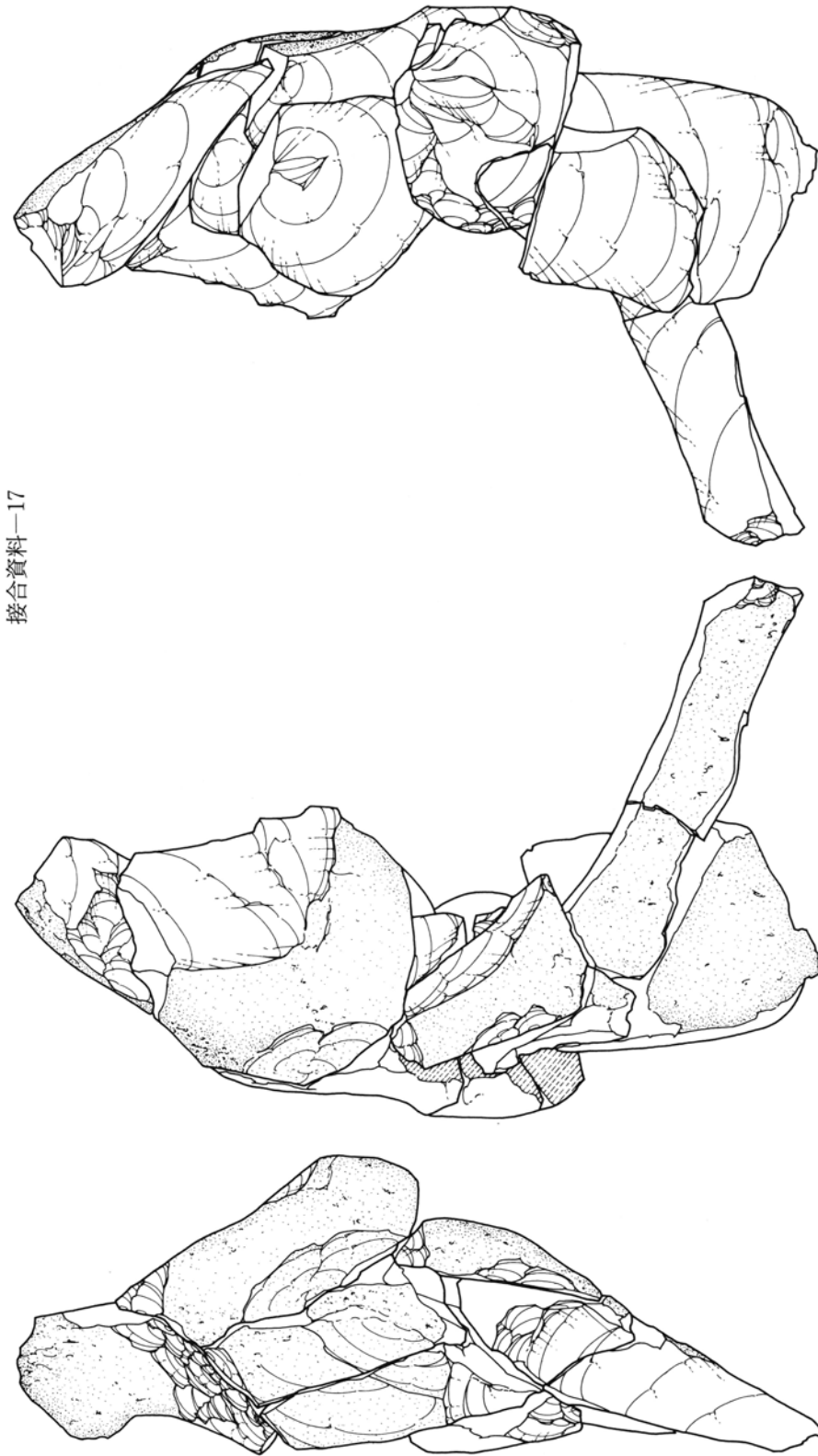
接合資料-15



接合資料-16



第67図 接合資料-15・16

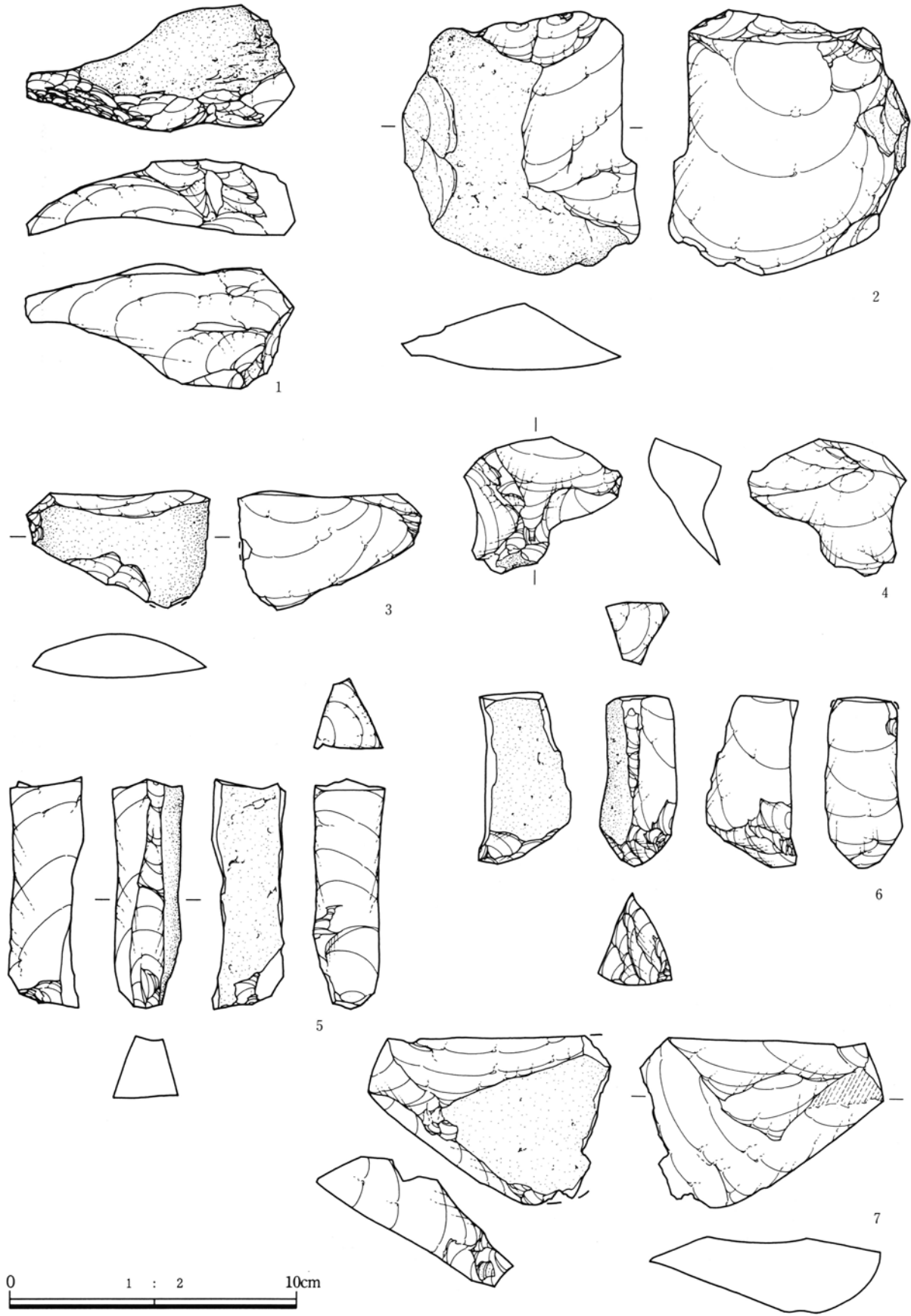


接合資料-17



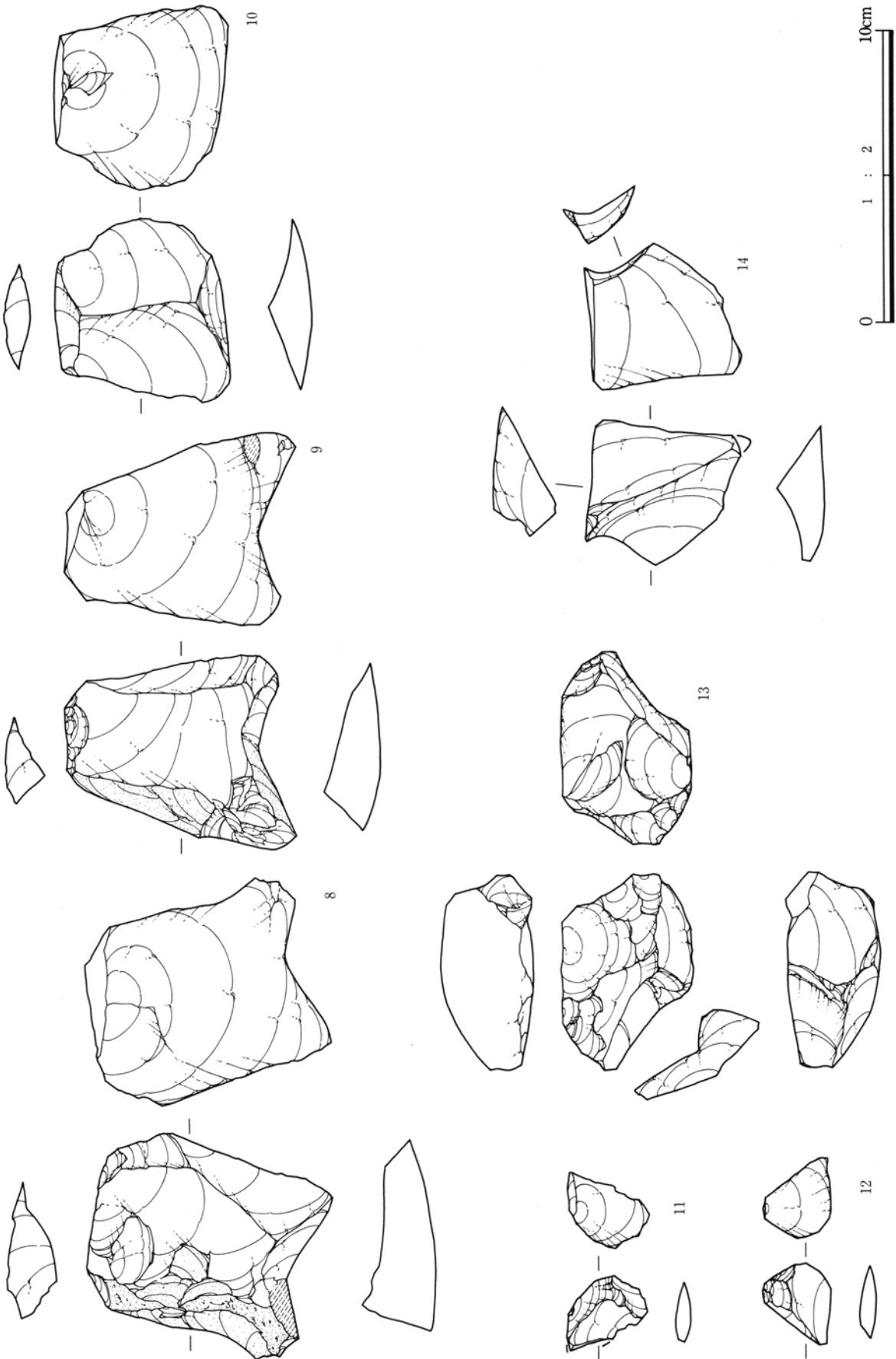
第68図 接合資料-17(1)

II 調査の成果



第69図 接合資料一17(2)

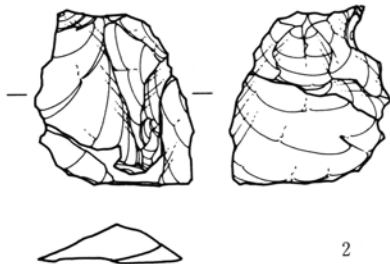
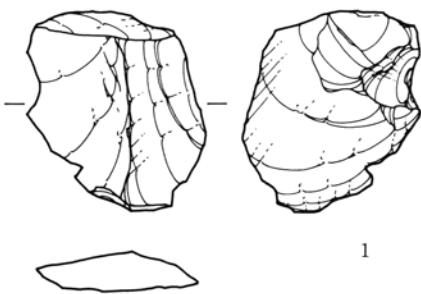
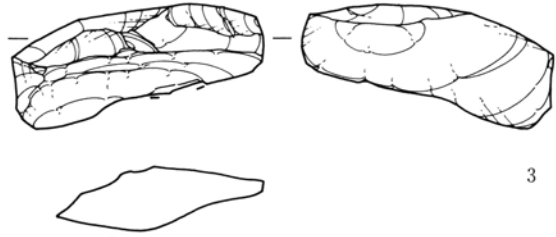
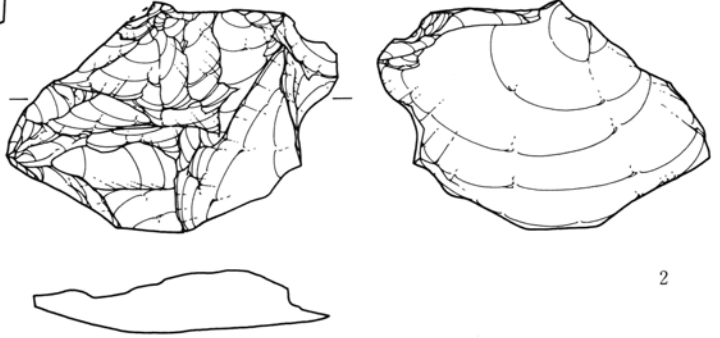
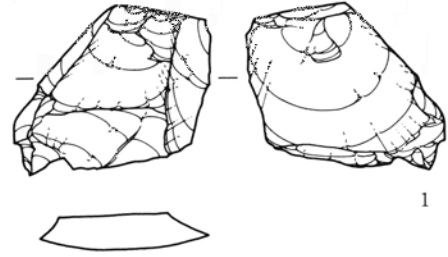
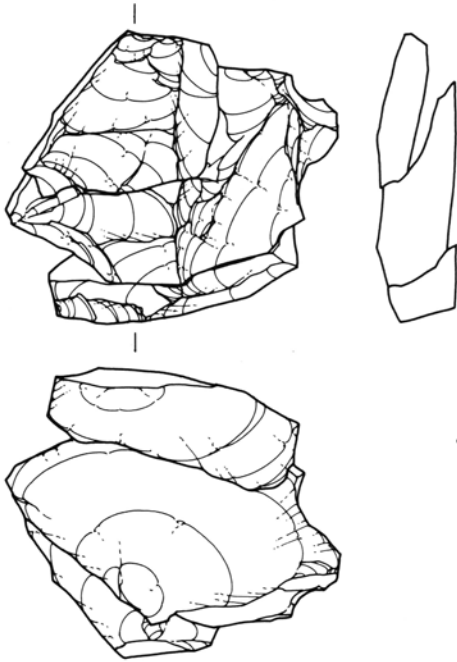
1. 旧石器時代



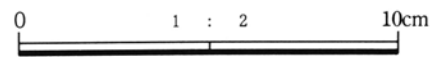
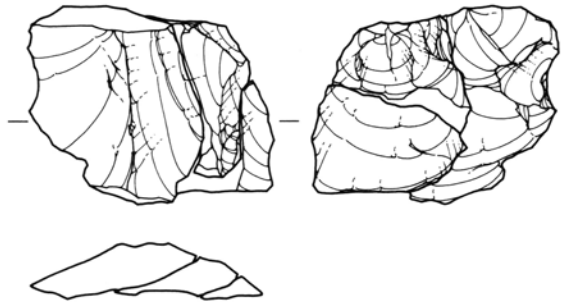
第70図 接合資料一17(3)

II 調査の成果

接合資料-19

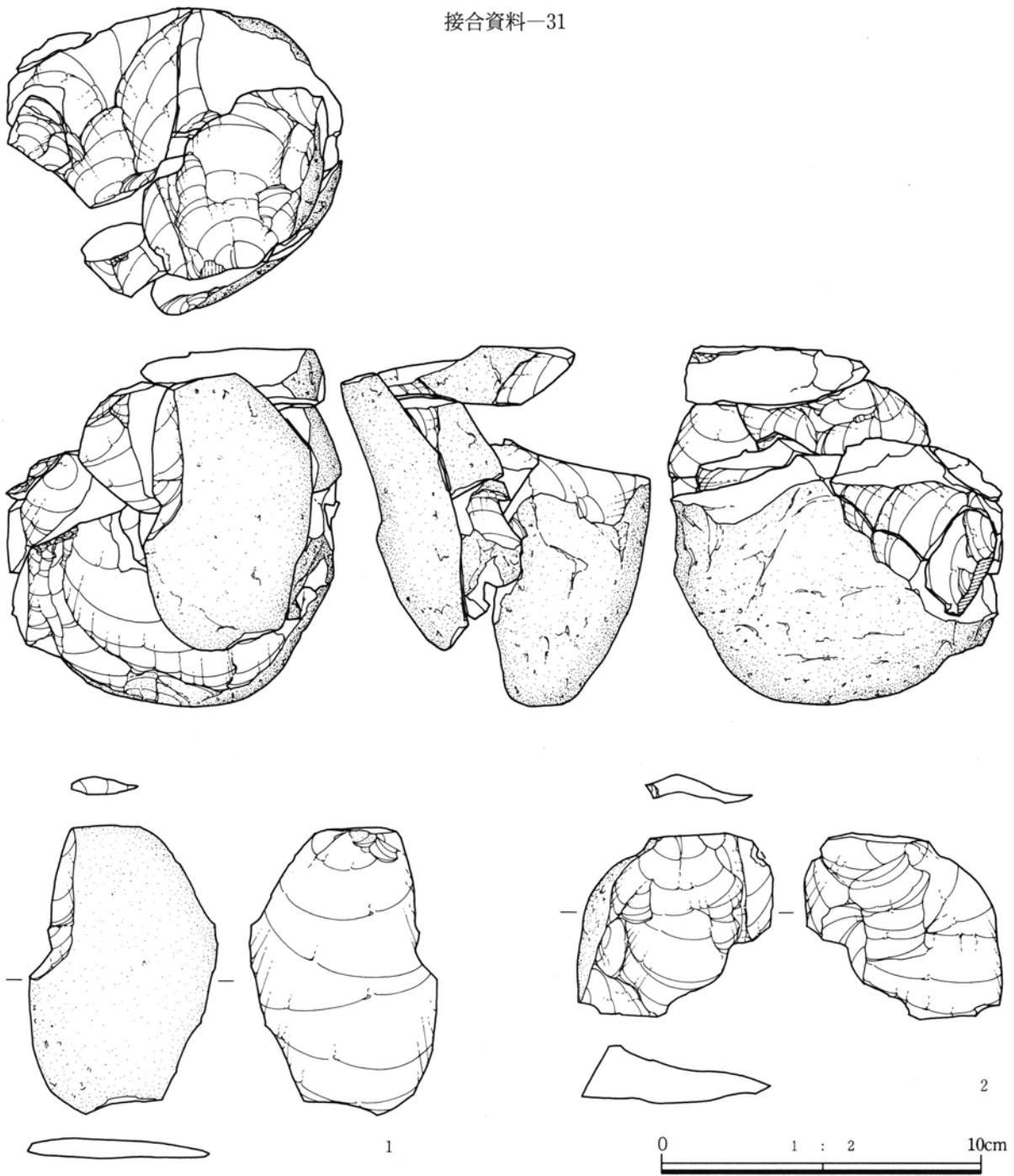


接合資料-21



第71図 接合資料-19・21

接合資料-31

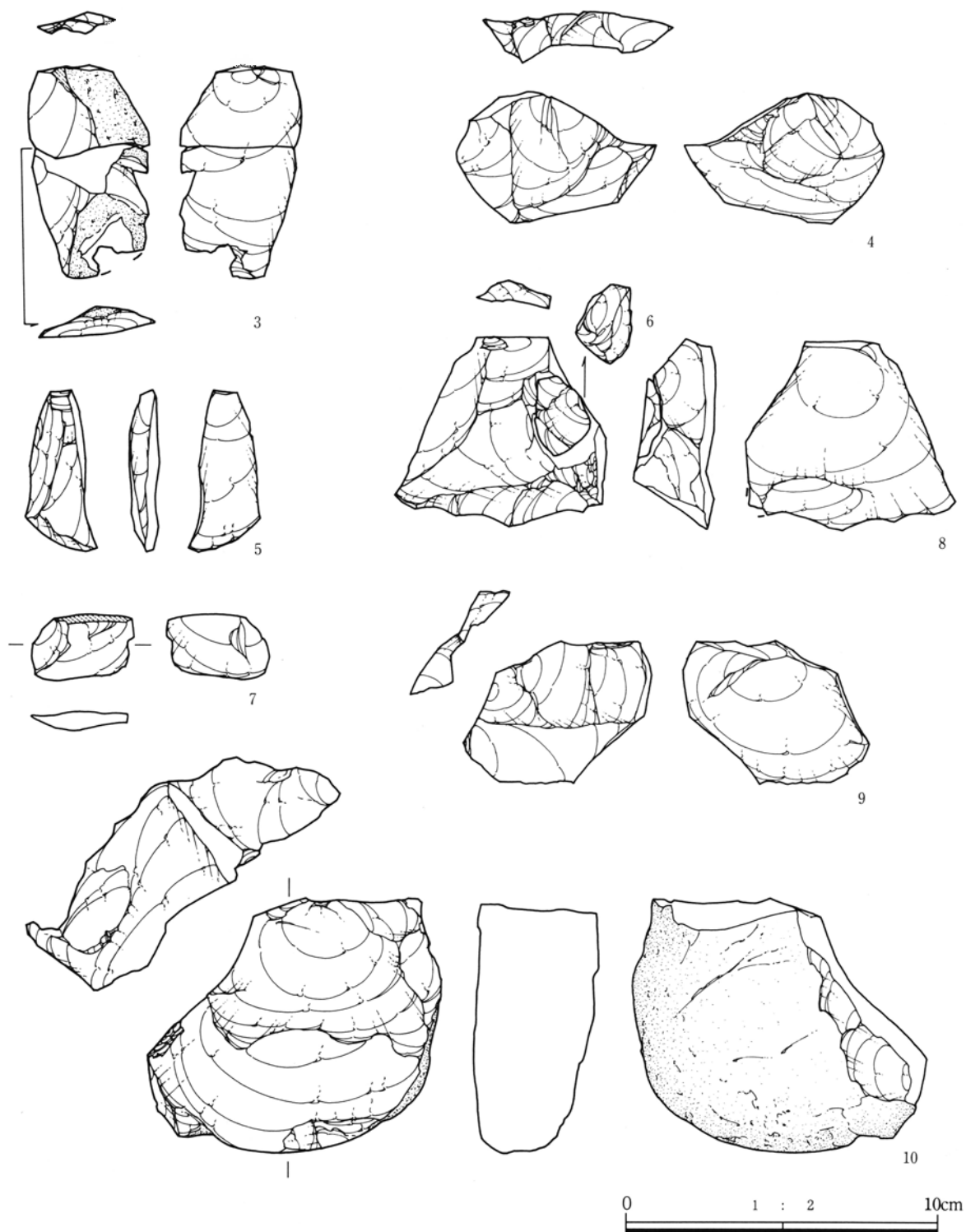


第72図 接合資料-31(1)

剥片剥離は原石の上端を大きく打ち欠き、平坦打面を作出して進む。まず、剥離は上端の平坦打面から正面の礫面を除去するよう行われ比較的大形の剥片(1)を剥離する。この後、打面転移を行い上端で2の剥片を剥離、再び、打面を元に戻し3・4を剥離する。4を剥離したあと剥離した5の剥片は打面

を右側に大きく振り(90°打面転移)剥離している。5の剥離に引き続き、何枚か剥片を剥離したあと、打面を上面に移し剥片を剥離する。この資料に限り剥離した剥片の形状から想定するなら、やや厚い剥片を剥離する傾向が指摘され、この段階で剥離した剥片は3枚と推定されよう。想定可能な3枚の剥片

II 調査の成果



第73図 接合資料-31(2)

を剥離した後の剥離は、打面転移を行い剥片を剥いだあと再び打面を戻し6~8を剥離、最終的には正面に作業面を戻し9の幅広剥片を剥離して剥離を終える。黒色頁岩。

接合資料-32 (第74図)

4点からなる接合資料。礫面を大きく残しており、剥離の初期段階を示す。剥離した剥片は大形で、厚い剥片が多い。剥片剥離は上端の平坦打面から剥離

され、大形の剥片2枚を剥離したあと同じ打面から縦長の長形剥片(2+4)を剥離、続けて3を剥離している。1はこの連続剥離が済んだあと、打面を大きく転移する剥離で、礫面の除去を試みた例と判断されよう。既に述べた通り4は側縁調整が施されないため断言は困難だが、剥片端部に加工を撻器的加工とは把えず、石核調整と把えた。剥片2を接合させ判明する石核原形4の加工は、単体で想像するより加工量が多い。そこには明確な加工意図さえ感じるのであり、仮に、撻器的刃部の作出を意図するのなら、これほど先端が尖る形状にはならないのではないかと考えている。黒色頁岩。

接合資料—33 (第75図)

6点からなる接合資料。礫面を大きく残していることから、剥離の初期段階を示す。剥離した剥片は概して大形の例が多い。剥片剥離は上端の平坦な打面から連続剥離され、何枚か剥片を剥離したあと、1の大形剥片を剥離している。2は、3の剥離より確実に先行する剥離だが、節理で割れている。このあと剥離は打面転移を行い大形剥片を剥離、再び、打面を戻して3を剥離する。4も同じ打面から剥離するものだが、3と4の剥離の間に打面転移を行い複数の剥片を剥離している。剥片剥離は、基本的に90°の打面転移を行い展開する、と判断されよう。黒色頁岩。

接合資料—34 (第76図)

4点からなる接合資料。打点を左右に振り、平坦な打面から縦長剥片を連続剥離する。剥片1は剥離段階で打点部分・剥片の中央付近から破損、剥片2は剥片左側中央の古い衝撃痕から破損している。2点とも頭部調整が著しい。黒色頁岩。

接合資料—35 (第76図)

2点からなる接合資料。礫面を大きく残しており、剥片剥離の初期段階を示す。剥片剥離は、1を剥離して礫面を除去、この剥離面を打面に剥離を行い、再び、打面を元の位置に戻し、2を剥離する。黒色頁岩。

接合資料—25 (第77図)

2点からなる接合資料。礫面を大きく残しており、剥片剥離の初期段階を示す。大形の剥片が剥離段階で打点部分から破損しており、破損した剥片の1つを石核に用いる。この石核では、上端の平坦な打面から小形の剥片2を剥離している。黒色頁岩。

接合資料—37 (第77図)

5点からなる接合資料。珪化の進んだ頁岩で、節理が著しく発達、背面にも大きく広がる。この節理は剥片の表面だけではなく剥片の内部にも入り込み、剥片中央の「折れ」は、この節理が強く影響している。剥片上端部分は極端にバルブが発達するのに対し、下端は均等な厚味を持ち、折断を試みている。

接合資料—9 (第78図)

2点からなる接合資料。剥片の剥離段階で、打点部分から破損した可能性が強い。礫面を剥片端部に部分的に残す。黒色頁岩。

接合資料—10 (第78図)

2点からなる接合資料。剥片の中央付近で横位に破損する。黒色頁岩。

接合資料—11 (第78図)

2点からなる接合資料。作業面を変えず打面を大きく移動、剥離している。剥片は比較的小形で、1は剥離段階で打点から破損している。黒色頁岩。

接合資料—18 (第78図)

2点からなる接合資料。背面に大きく礫面を残す大形の縦長剥片を用いる石核で、側縁の平坦面を打面に小形剥片を剥離する。剥離は2度に及ぶ。黒色頁岩。

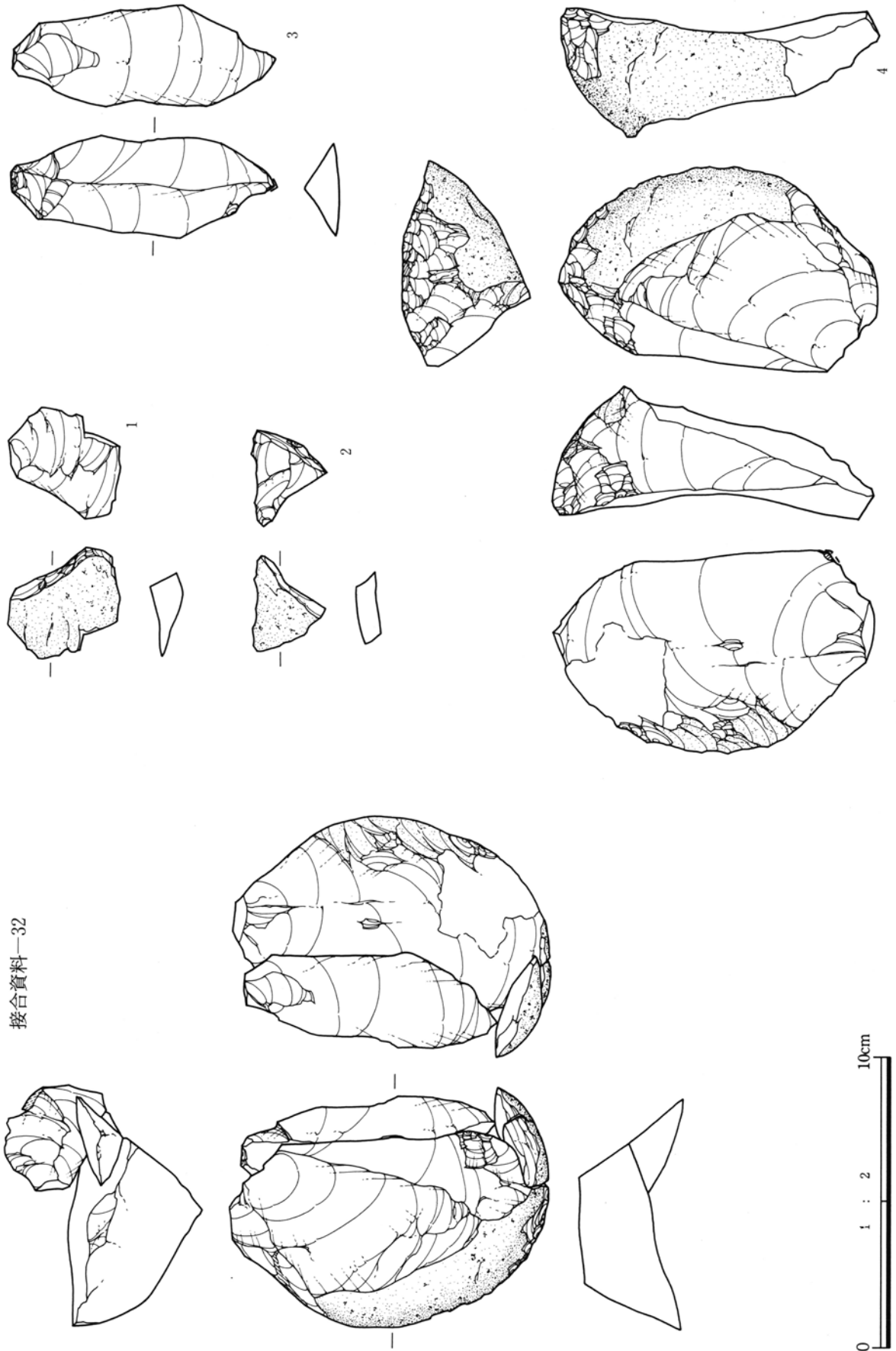
接合資料—20 (第78図)

2点からなる接合資料。剥離段階で破損しており、更に左側の剥片は節理部分で折れている。剥片は狭い平坦打面から剥離され、頭部調整も著しい。黒色頁岩。

接合資料—22 (第78図)

3点からなる接合資料。打面を固定し、作業面を大きく変え剥片を剥離する。1は剥片の上端部分を欠き、2は剥片端部で破損する。黒色頁岩。

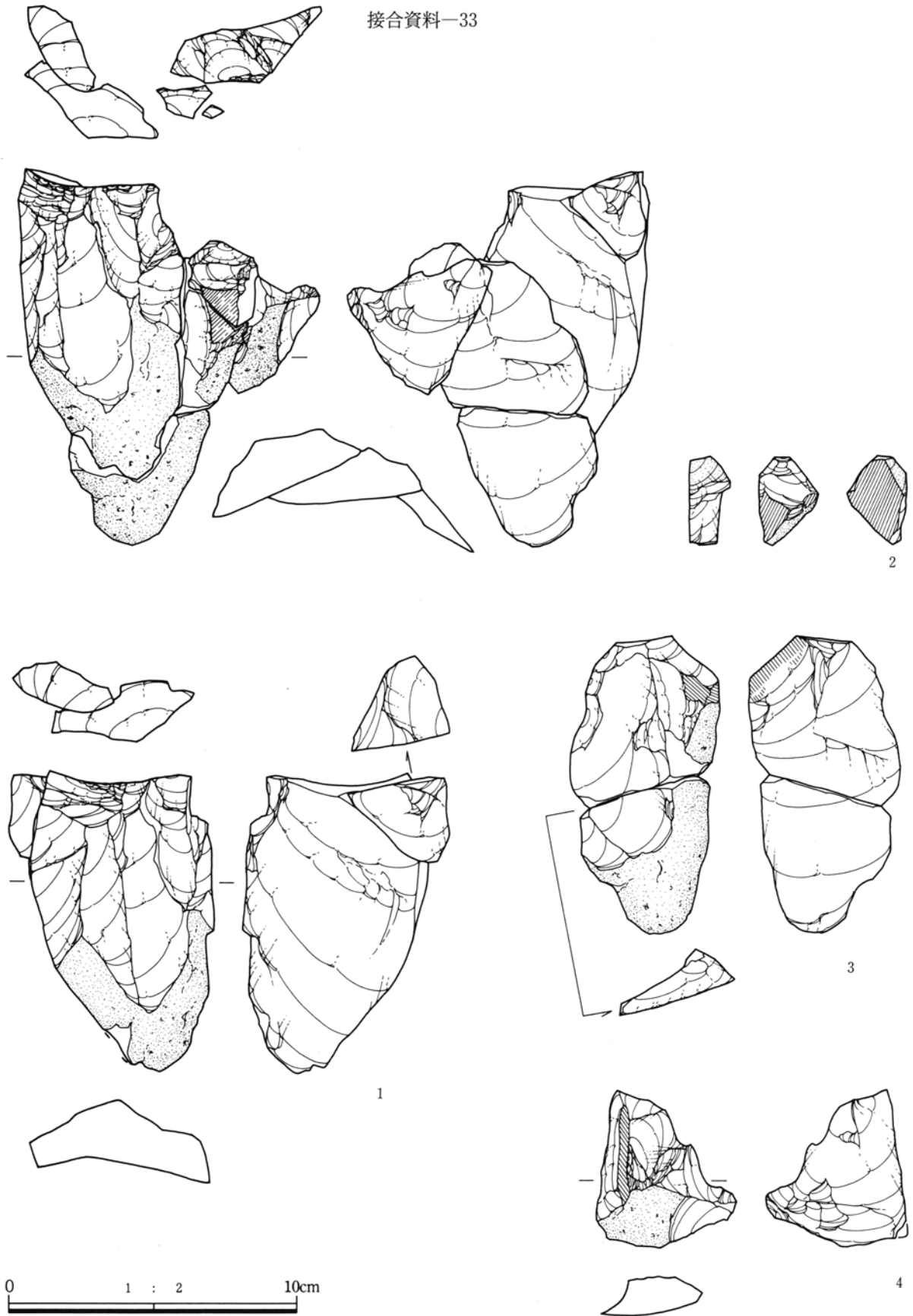
II 調査の成果



第74図 接合資料-32

接合資料-32

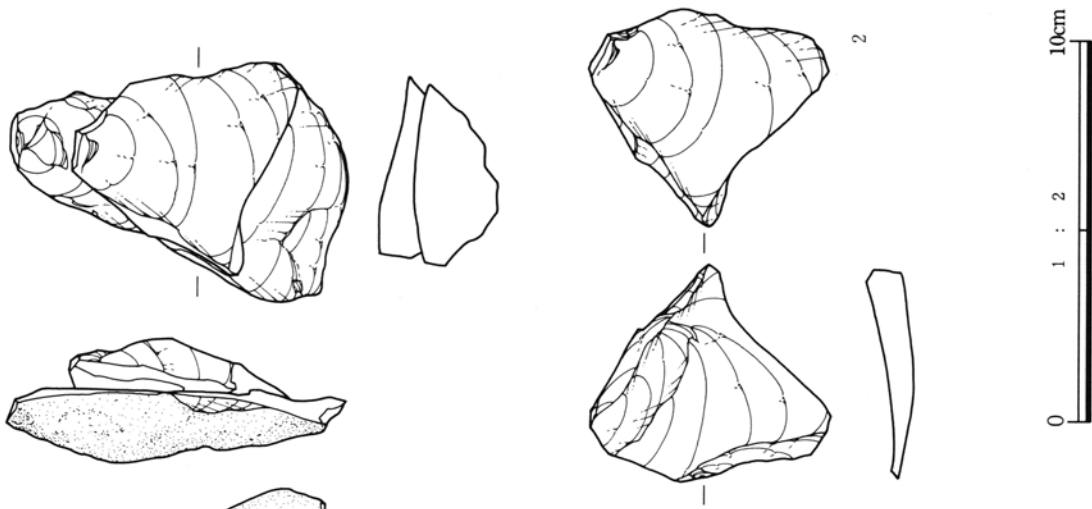
接合資料—33



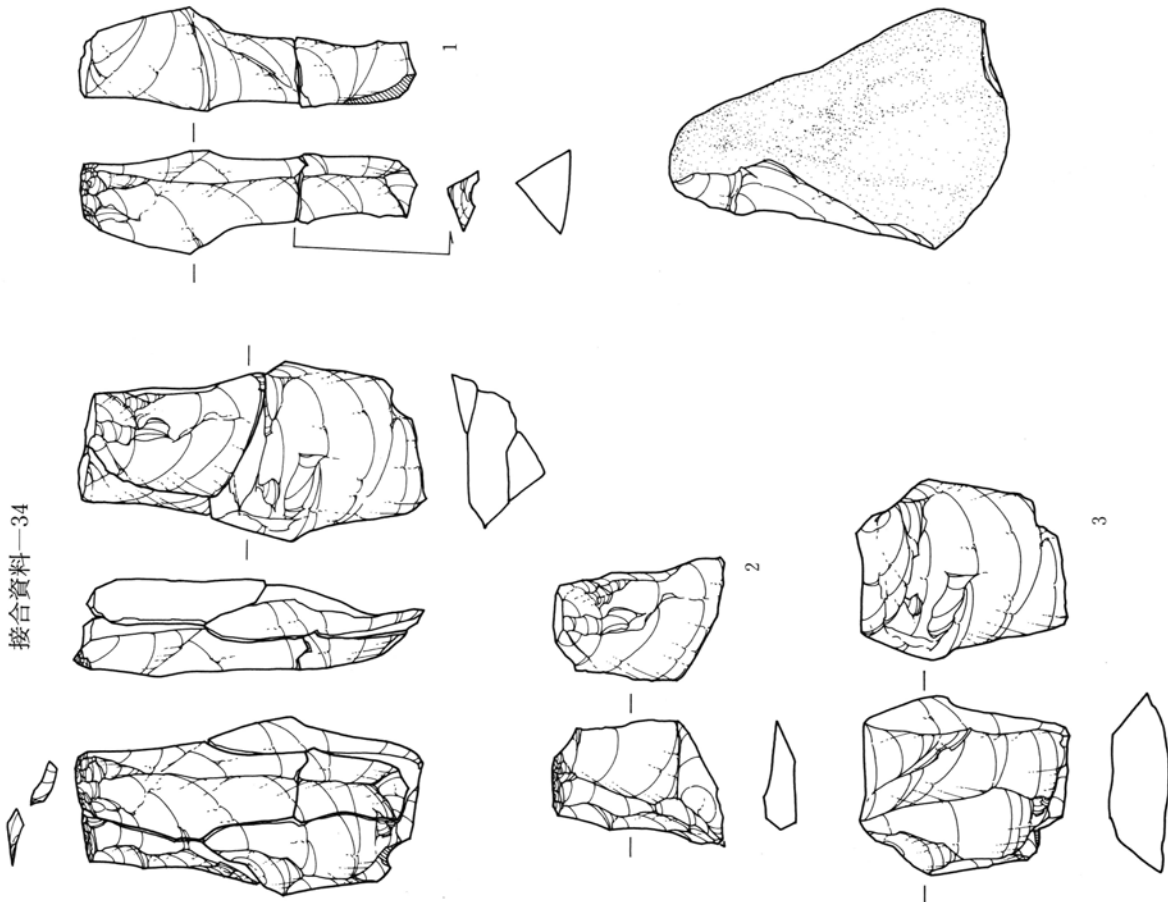
第75図 接合資料—33

II 調査の成果

接合資料-35

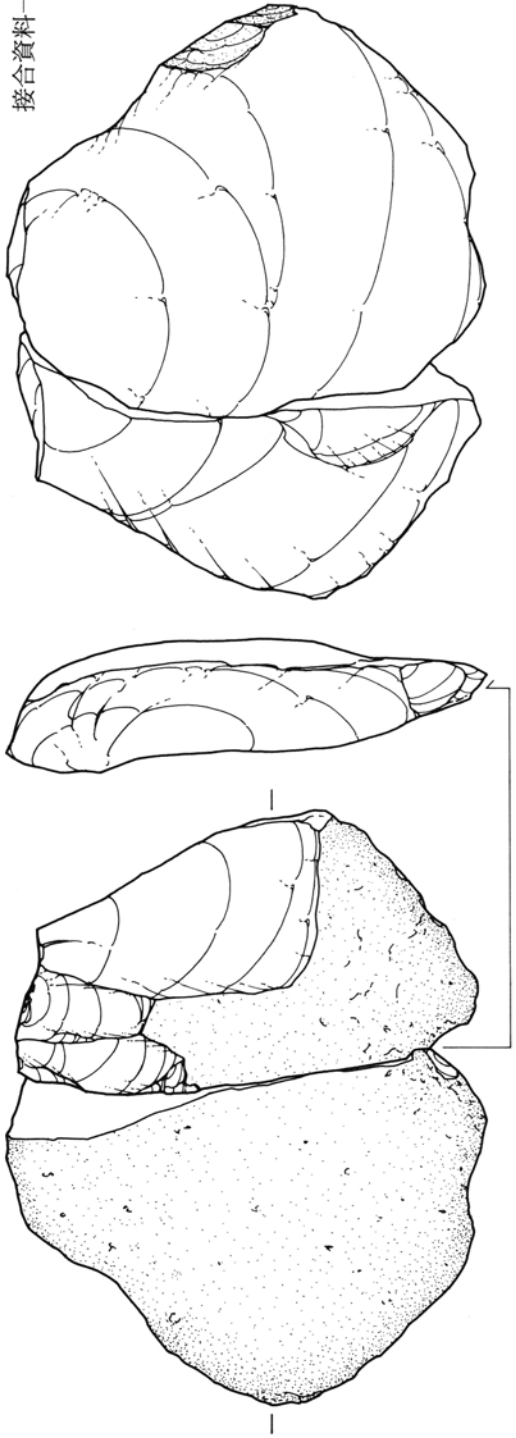


接合資料-34

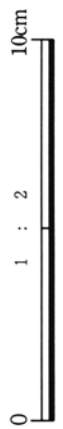
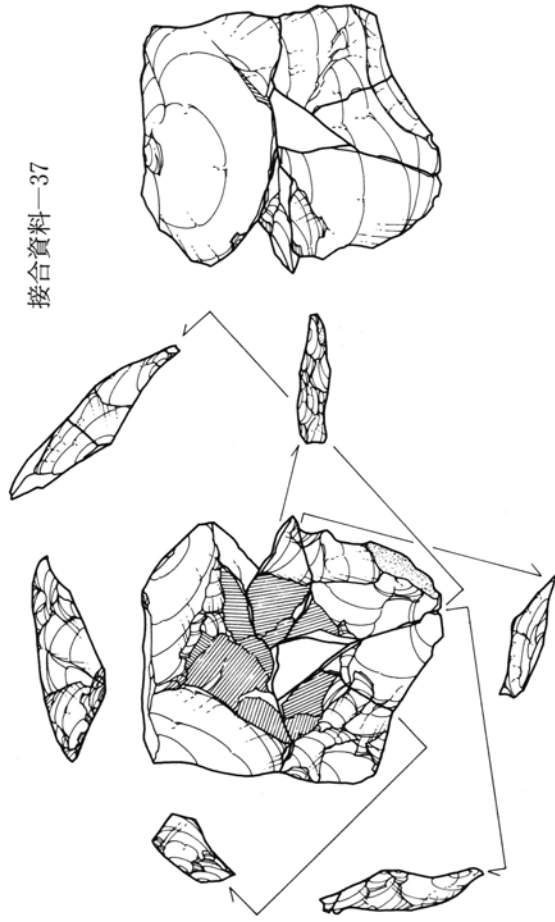


第76図 接合資料-34・35

接合資料-25

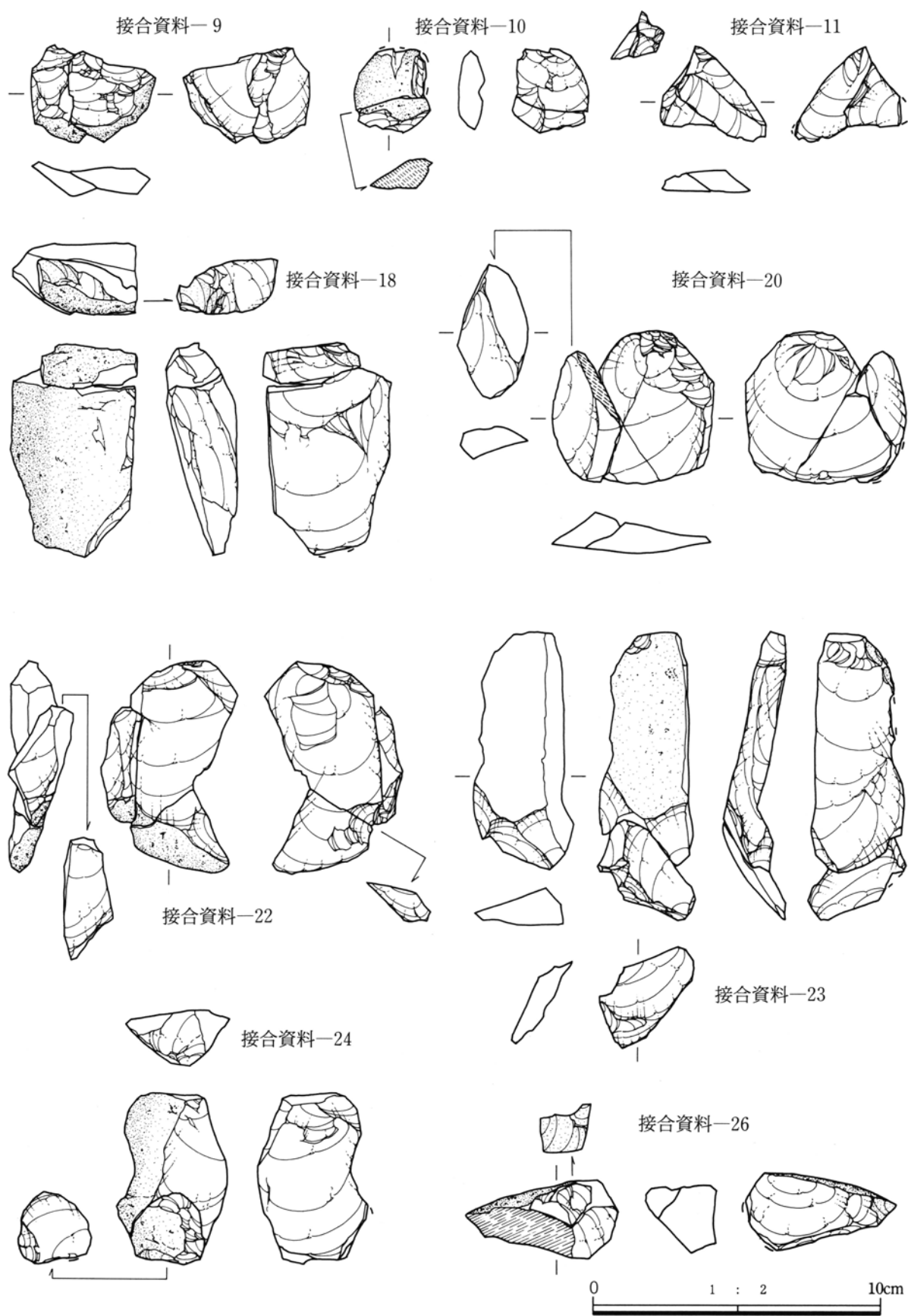


接合資料-37



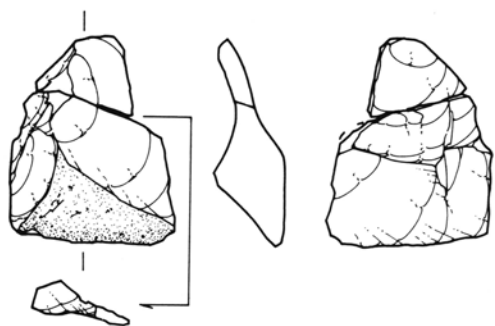
第77図 接合資料-25・37

II 調査の成果

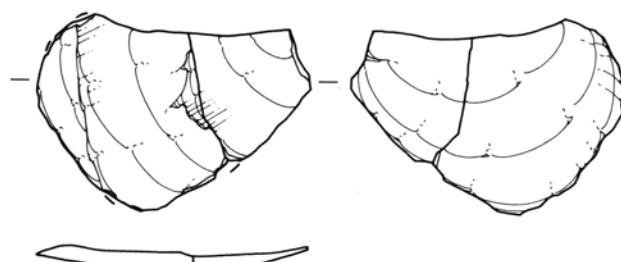


第78図 接合資料-9~11・18・20・22~24・26

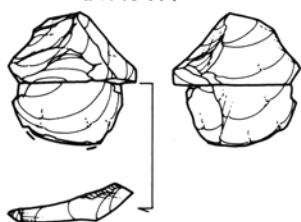
接合資料—27



接合資料—28



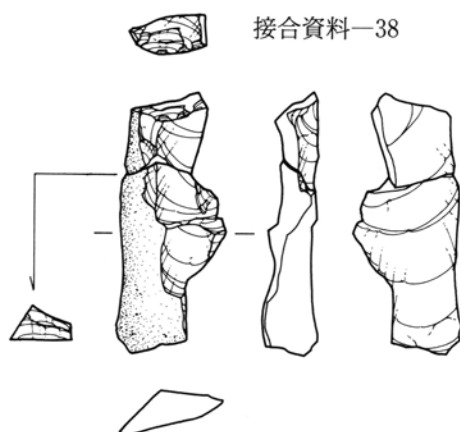
接合資料—29



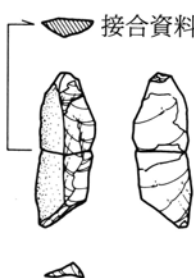
接合資料—30



接合資料—38



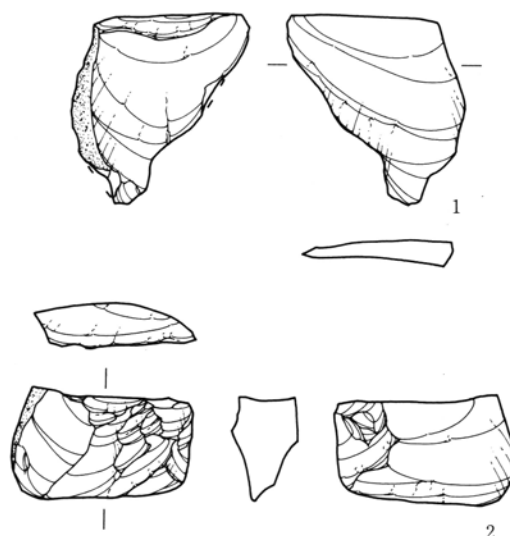
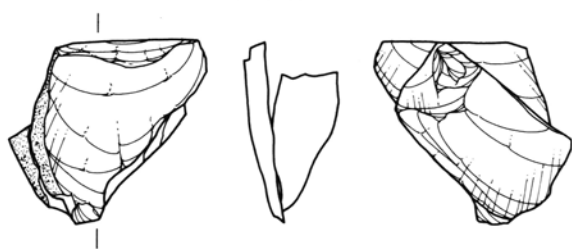
接合資料—39



接合資料—40



接合資料—36



0 1 : 2 10cm

第79図 接合資料—27~30・36・38~40

II 調査の成果

接合資料—23 (第78図)

2点からなる接合資料。礫面を大きく残す剥離の初期段階を示す接合資料で、上下両端より剥片剥離を行う。剥離は下端の剥離が先行、続いて上端に剥離を移動する。黒色頁岩。

接合資料—24 (第78図)

2点からなる接合資料。礫面を大きく残す剥離の初期段階を示す接合資料で、上下両端に打面を持つ。剥離は下端の剥離が先行、上端の剥離が続く。黒色頁岩。

接合資料—26 (第78図)

2点からなる接合資料。礫面を残す碎片2が接合する。黒色頁岩。

接合資料—27 (第79図)

横位に折断した端部に礫面を残す剥片の接合資料。横位の「折れ」は古い打撃が影響している可能性が強い。黒色頁岩。

接合資料—28 (第79図)

2点からなる接合資料。剥片は縦位に破損する。黒色頁岩。

接合資料—29・38・40 (第79図)

横位に折断する剥片の接合資料。折断位置には古い打痕が介在しており、意図的折断(29・38)とは思われない。40の折断部分には古い打痕が見られないことから折断剥片と見た。黒色頁岩。

接合資料—30・39 (第79図)

横位に破損した剥片。2例とも節理で欠けている可能性が強い。黒色頁岩。

接合資料—36 (第79図)

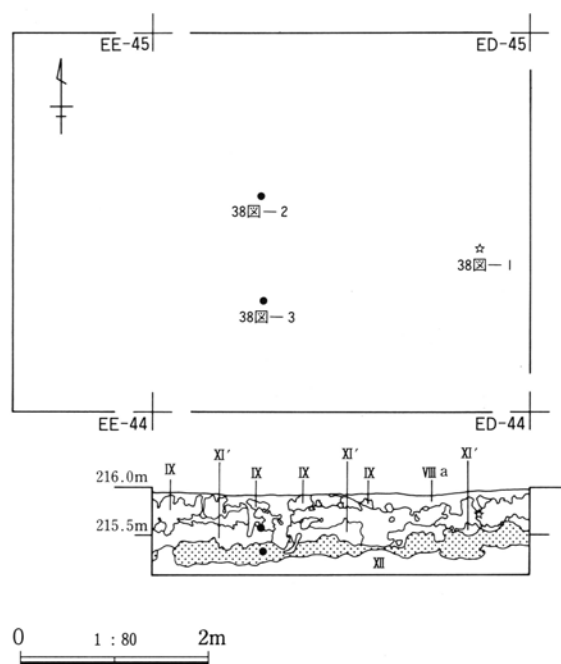
2点からなる接合資料。剥片は2点とも礫面を側縁に残しており、やや幅広の剥片形状を呈する。背面の示す剥離の方向は概ね一致している。が、1と2は剥離の方向が若干ことなり、途中打面転移を介在させ、剥離を進めた可能性が指摘されよう。黒色頁岩。

(3) 石器の分布

石器群は最も標高の高い、丘陵性台地の尾根上に濃く分布(II区)したほか、I区・III区にも1点~3点の石器が分布していた。

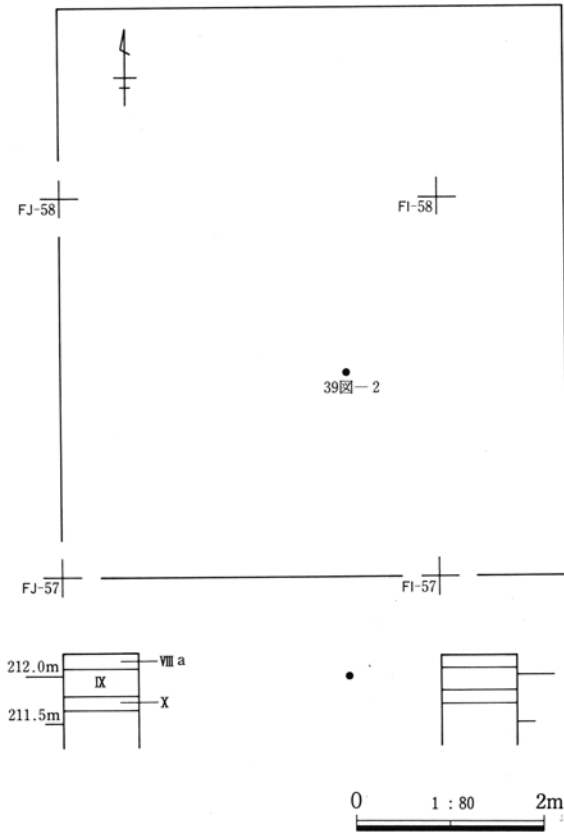
I区の石器分布 Hr-FA下の水田を確認した犬子塚V区の浅い谷に近い尾根の先端部分(FP-45G)に分布していた。出土資料点数は3点と少なく、単独出土に近い状態で出土した。出土層位はⅧ(第80図)にも示した通り、やや低い位置から出土した第38図2もAs-SPが攪拌堆積したX層に極めて近い暗褐色ロームに出土しており、概ねIX層の下部からX層に出土した、と判断されよう。出土資料は石器の形態的・母岩の特徴からこの地点で製作放棄したとは思われないこと、石器が集中出土したII区から持ち込んだ確証にも乏しいことから、現状では別の地点で製作搬入、使用廃棄した可能性が想定されよう。

III区の石器分布 南北に延びる尾根からやや西側に張り出した狭い尾根の先端部分(FI-58G)に分布していた。出土資料点数は2点だが、2点ともIX層の上部に出土している。



第80図 石器の分布(中原遺跡I区)

1. 旧石器時代



第81図 石器の分布（中原遺跡Ⅲ区）

Ⅱ区の石器分布 石器群は路線の際に近い、調査区の北に出土した。石器群は3ヶ所の集中部からなり、標高の最も高い尾根の頂部から尾根の西側斜面に分布していた。

1号ブロック（第82図）

EK・EL-55Gに分布していた。石器群は北西側に濃く南東側に薄く分布する傾向を示しており、北側が高く南側が低い地形を反映した分布状況を呈していた。図にも示した通り、石器の出土層位はIX層の下部からX層の上部で、約30cmの高低差を以て出土した。石器の垂直分布は土層の堆積状況を観察した55ラインから南に1mの幅で作成しており、IX層の中程に堆積するAs-YPより下層に出土した、と確実に断言できよう。

出土した119点の石器には、削器3・使用痕ある剥片3・石核4・剥片59・碎片47・敲石2・台石1が組成しており、削器や使用痕ある剥片は南側に分布する傾向が指摘されよう。石器石材は黒色頁岩が圧

倒的に多く、黒色安山岩は5点と極めて少ない。接合資料は11例を確認している。ブロック内で接合するものよりブロック間で接合する例が特徴的で、比較的明瞭に搬入・搬出の関係が理解できよう。

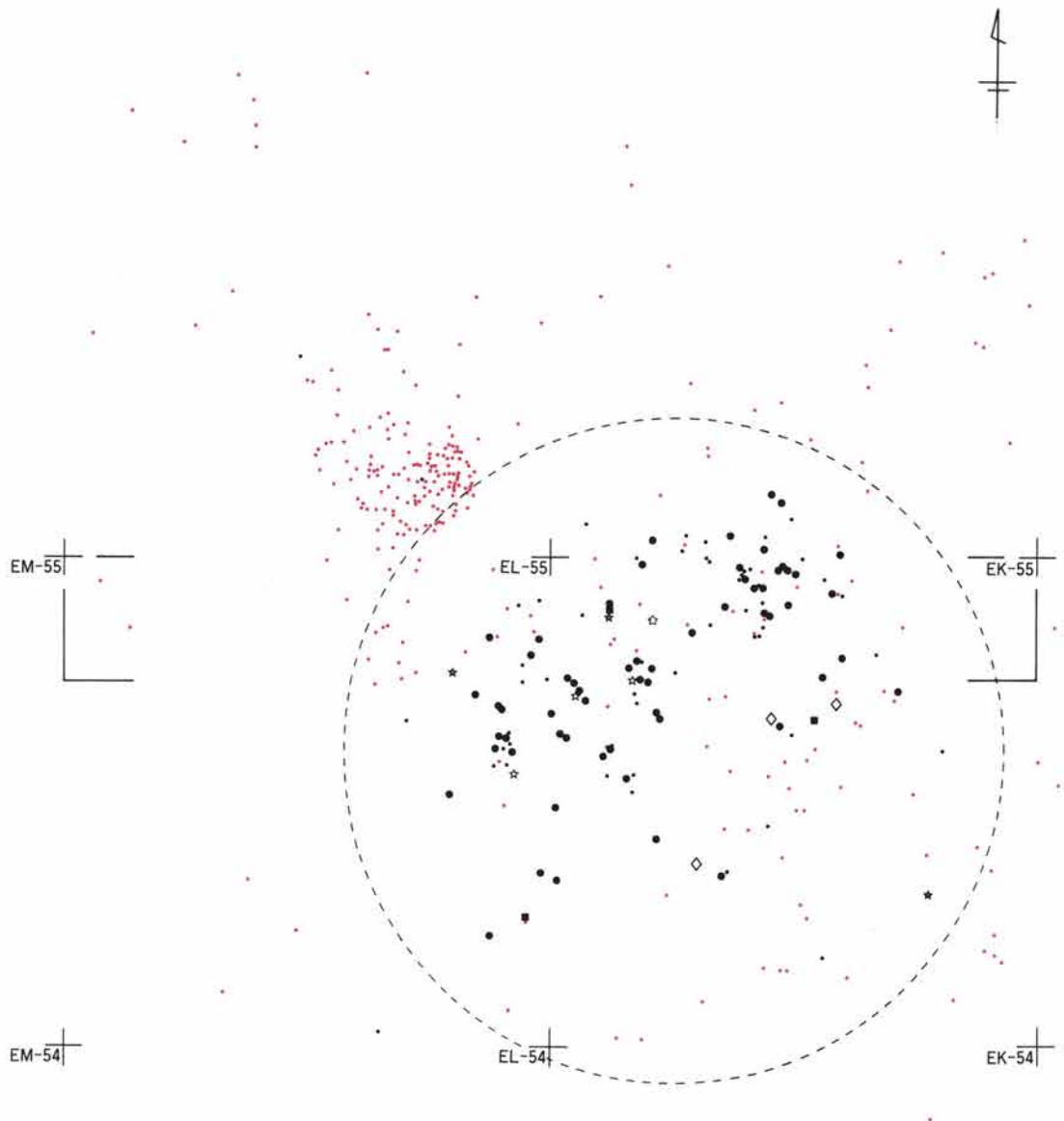
石器群の分布域に隣接したEL-56Gで、礫の集中出土を確認している。礫は粗粒輝石安山岩で、礫群を想定し調査を進めた。出土点数は148点を数え、概して小形の礫（20g以下の礫が69%、50g以下の礫を含めるなら89%）が多い。大形の礫は犬子塚V区・第1文化層に比べ極めて少なく、500gを越える礫は1点と少ない。写真図版（PL6-4・5）にも示した通り、礫の分布域には下層のAs-SP（XI層）が見られないこと、下層にも礫が混入すること、礫は熱を受けた痕跡が見られないことなどから、礫群とは把えず「土壌攪乱」に起因するもの、と把えた。

2号ブロック（第83図）

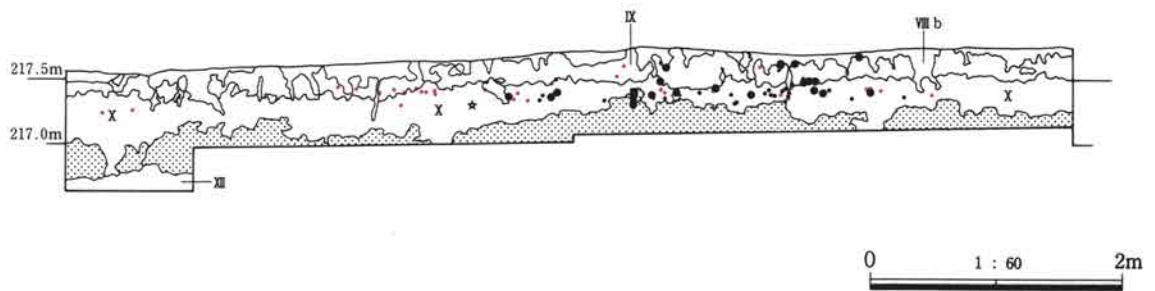
EN・EO-56G～58Gに分布していた。石器群は路線の際に近い西側斜面に広がり、1号ブロックから15mほど離れた地点に分布していた。分布域の中央付近には石器分布の希薄な傾向が、北側より南側に密に分布する傾向が指摘されよう。石器の出土層位はIX層を主体で40cmの高低差を以て出土しており、1号ブロックや3号ブロックより若干だが上位に出土するようにも見える。3ヶ所の集中部には複数の接合資料を確認しており、現状では石器群の時期的な差は想定できない。ここでは、調査区・北の土層図を57ラインに移動、垂直分布を土層図に投影したため、移動に無理が生じているかもしれない。

出土した石器は191点で、加工痕ある剥片3・使用痕ある剥片2・石核4・剥片87・碎片92・敲石2・台石1が組成する。南側分布域には北側の分布域にはない石核や敲石が特徴的に見られ、さらには、搬入石器に位置づく使用痕ある剥片（第41図1・第42図1）が分布の薄い地点に出土する傾向も併せて指摘されよう。石器石材は黒色頁岩が圧倒的に多く、黒色安山岩は1点と極めて少ない。接合資料は17例を確認しており、13例がブロック内で、残る4例がブロック間で接合する。

II 調査の成果

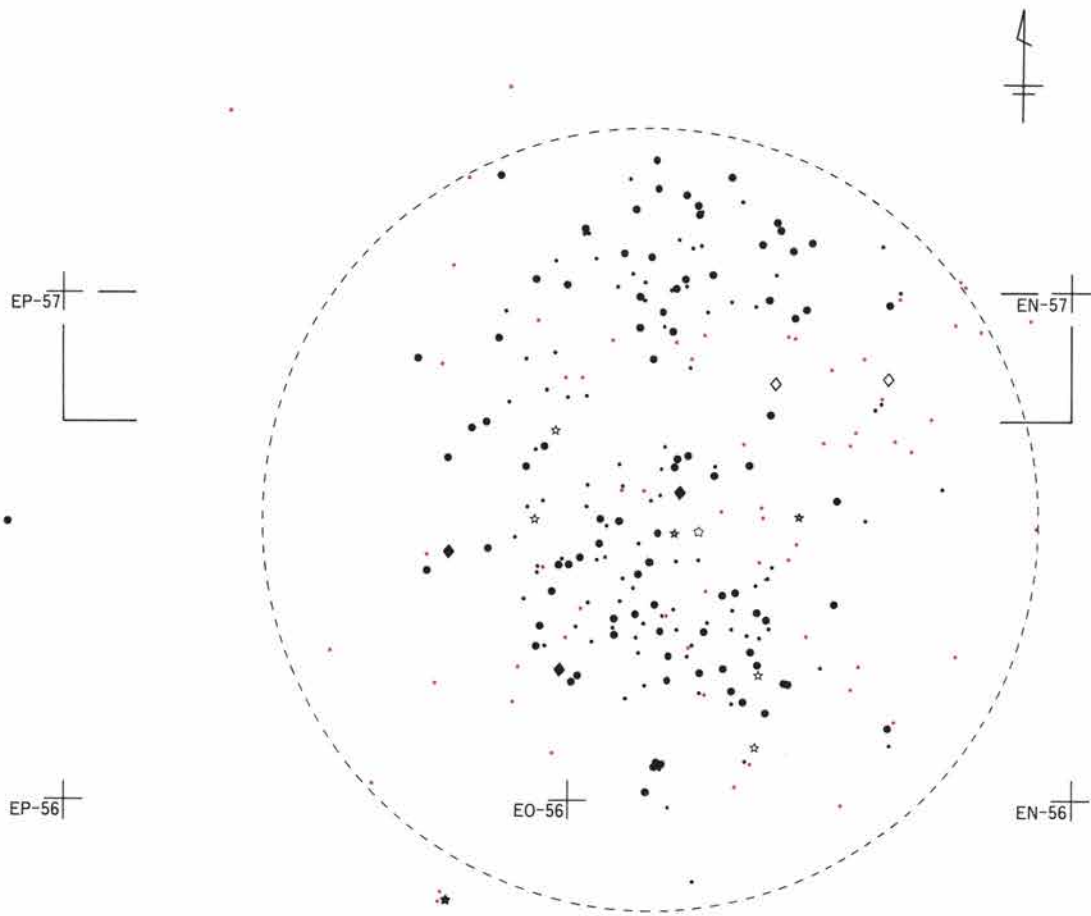


図中の赤丸印は自然礫を示す

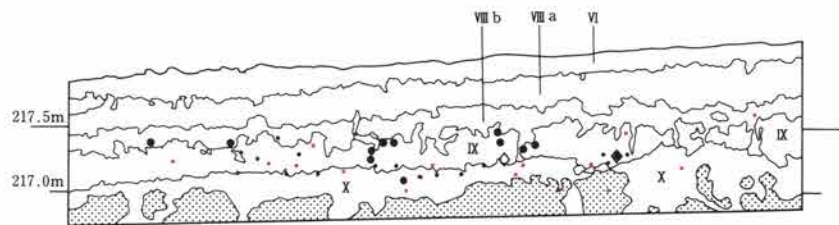


第82図 石器の分布（1号ブロック）

1. 旧石器時代

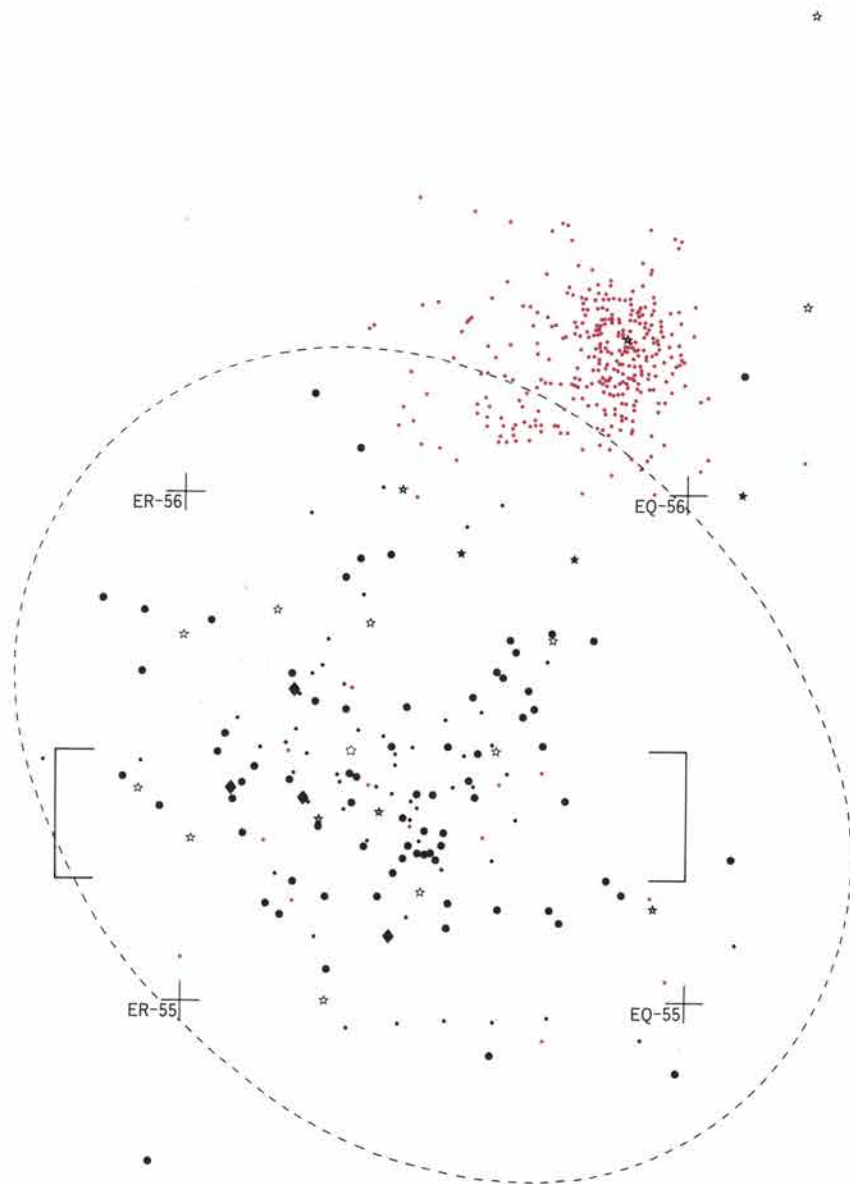


図中の赤丸印は自然礫を示す

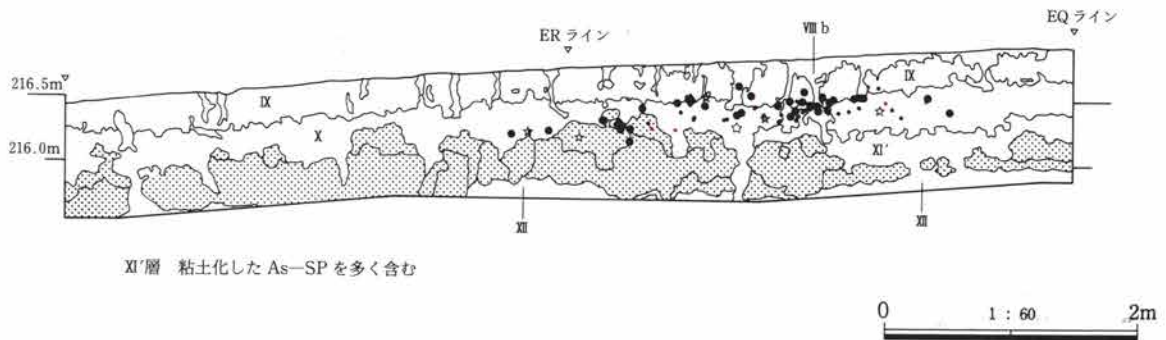


第83図 石器の分布 (2号ブロック)

II 調査の成果

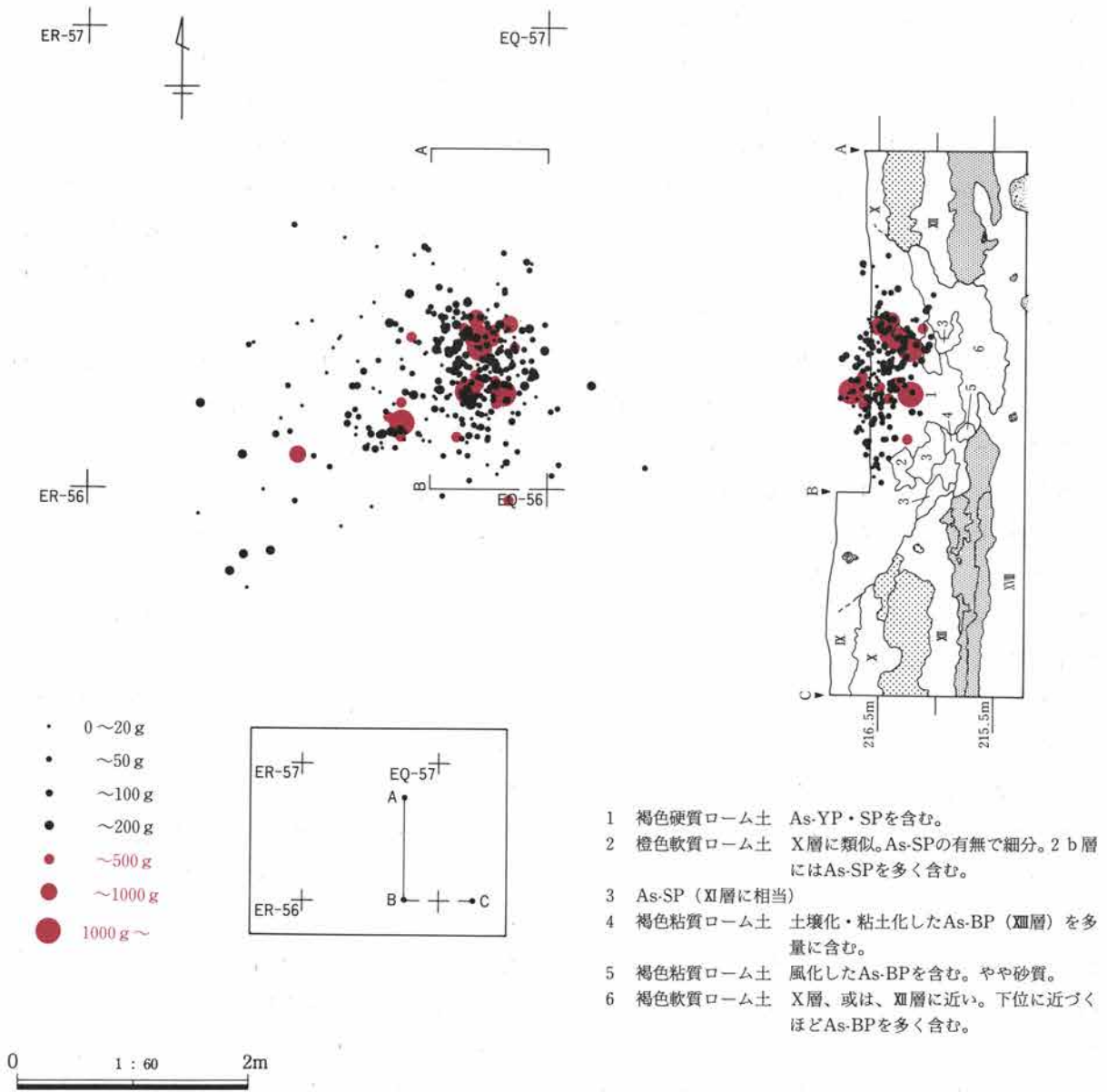


図中の赤丸印は自然礫を示す



XI'層 粘土化したAs-SPを多く含む

第84図 石器の分布 (3号グロンク)



第85図 礫の分布 (EQ-57G)

3号ブロック (第84図)

EP・EQ-55G、EP・EQ・ER-56G、EQ-57Gに分布していた。石器群は比較的傾斜の強い尾根の西側斜面に分布しており、2号ブロックとは10mほど、1号ブロックとは直線距離で25mほど離れた地点に確認され、最も西側に位置している。石器分布は台石を中心に、特に南西側に密に分布しており、台石から離れるほど密度が低下する傾向を示していた。石器の出土層位はIX層の下部からX層の上部で、40cmの高低差を以て出土している。石器の垂直分布

は分布の最も濃い55ライン・56ラインの間で作成、地形・傾斜を勘案して55ラインで作成した土層図に投影した。

出土した144点の石器には、加工痕ある剥片4・石核11・剥片73・碎片52・敲石3・台石1が組成しており、台石を中心に剥片や碎片が、周辺に石核が分布する傾向を示していた。石器石材は黒色頁岩が76点・黒色安山岩が66点と拮抗している。石材別に見た分布は、黒色頁岩が石器分布の濃い地点から北に、黒色安山岩が南に分布する傾向を示し、若干だが微

II 調査の成果

妙に分布状態が異なる。接合資料は19例を確認しており、11例がブロック内で、1例がブロックから少し離れて、残る7例がブロック間で接合する。

この地点には2号ブロックで剥離、3号ブロックに持ち込んだ石核(第45図1・2)や、剥片(第70図10)など、石器の搬入・搬出の関係が比較的明瞭に把握できる。

このほかこの地点の調査では、石器群の分布域に隣接したEQ-57Gで、礫の集中分布を確認している。礫の出土状況は1号ブロックの礫の出土状況と全く同じ状況を呈しており、ここでも礫群を想定して調査を進めている。礫の分布範囲は長径3.0m・短径2.5mを測る。礫の分布は東側に濃く、西側に薄い状況を呈するようにも見える。が、調査途上で幅1mのトレンチ調査に調査を切り換えたこと、また、標高216m以下の礫は、時間の関係で出土地点を記録せず取り上げたため結果的に偏在するようみえるだけで、本来的な礫の分布状態を示しているわけではない。

石材は粗粒輝石安山岩で、礫の出土点数は、332点を数える。概して小形の礫(20g以下の礫が30%、50g以下の礫まで含めるなら65%)が多い。大形礫の占める比率は概して少なく、1kgを越える礫は4点(最大重量は4.4kgを測る)と少ない。土層図(第85図を参照)が示す通り、礫の分布する地点の土層は大きく乱れており、この土壤攪乱は基盤の「前橋泥流層」に達していたこと、礫の垂直分布は上層では凸状を呈し下層から捲き上がるよう出土すること、礫には熱を受けた痕跡はみられないことなどから、礫群とは把握せず、ここでは「土壤攪乱」に起因するもの、と把握した。以上に述べた通り、礫の集中分布は礫群と把握する積極的理由に乏しく、現状では土壤攪乱と把握報告した。なお、礫が捲き上がる現象は、土壤攪乱の他にも「倒木」に起因する土層の反転も想定可能だが、土層を観察した地点の土層は全く反転しているようには見えないこと、仮に、反転しているならAs-YPを多量に含む1層(本来的に礫が含まれないIX層に起源する褐色硬質ローム土)に礫が出土する現象が説明できない、と考えた。

(4) 接合資料の分布

489点を数える石器群は黒色頁岩が大部分を占め、16%を占める黒色安山岩を加えた総量は、総量の94%にも達する。接合資料は42例182点を確認しており、接合率は37%と高い数値を示していた。接合資料は比較的集中して1ヶ所に分布する個体(接合資料-1・8)や、剥離した地点と剥片を搬出した地点が判明している個体(接合資料-2・17)など、剥片剥離その他の原石消費実態が比較的容易に理解され、ある意味では良好な単位的石器群を得た、と考えている。以下には個別接合資料の分布の概要を記していきたい。

接合資料-1の分布(黒色安山岩)

加工痕ある剥片1・石核2・剥片16からなる接合資料。主たる分布域は3号ブロックで、西側に偏在する傾向が指摘されよう。このほかには約3mほど離れてEP-57Gに1点が、遠く20m以上も離れて1号ブロックに1点が分布している。EP-57Gの1点(第55図8)や1号ブロックに出土した剥片(第56図11)は、小形幅広の剥片や剥片端部で折れた破片で、現状では剥片の移動する理由は明確ではない。黒色安山岩。

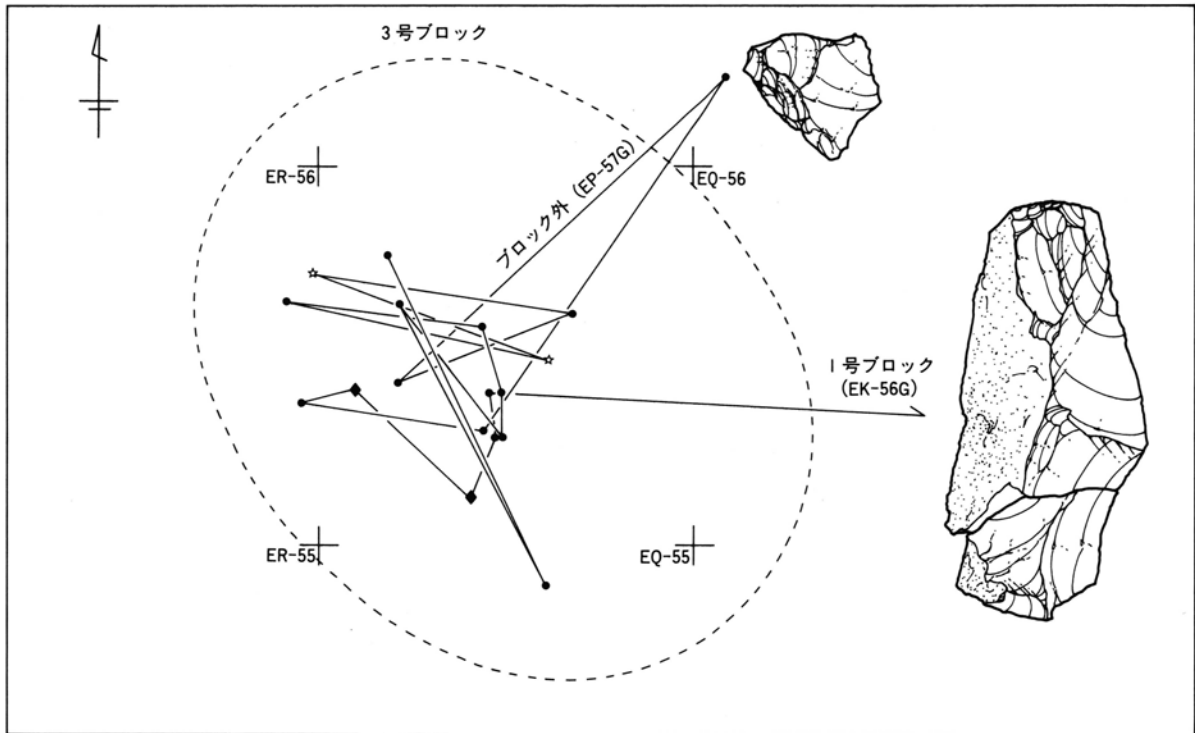
接合資料-3~7(第86図)

接合資料の主たる分布域は3号ブロックで、やや西側に偏在する傾向を示している。分布状況は、概ね、接合資料-1の分布と同様な在り方を呈する。資料点数は、接合資料-3が6点・接合資料-4が4点・接合資料-5が2点・接合資料-6が2点・接合資料-7が2点と少なく、1例(接合資料-6)のみブロック外の剥片と接合している。接合資料-6を除いて、他の接合資料の母岩的特徴は接合資料-1に類似しており、同一母岩に分類可能かもしれない。

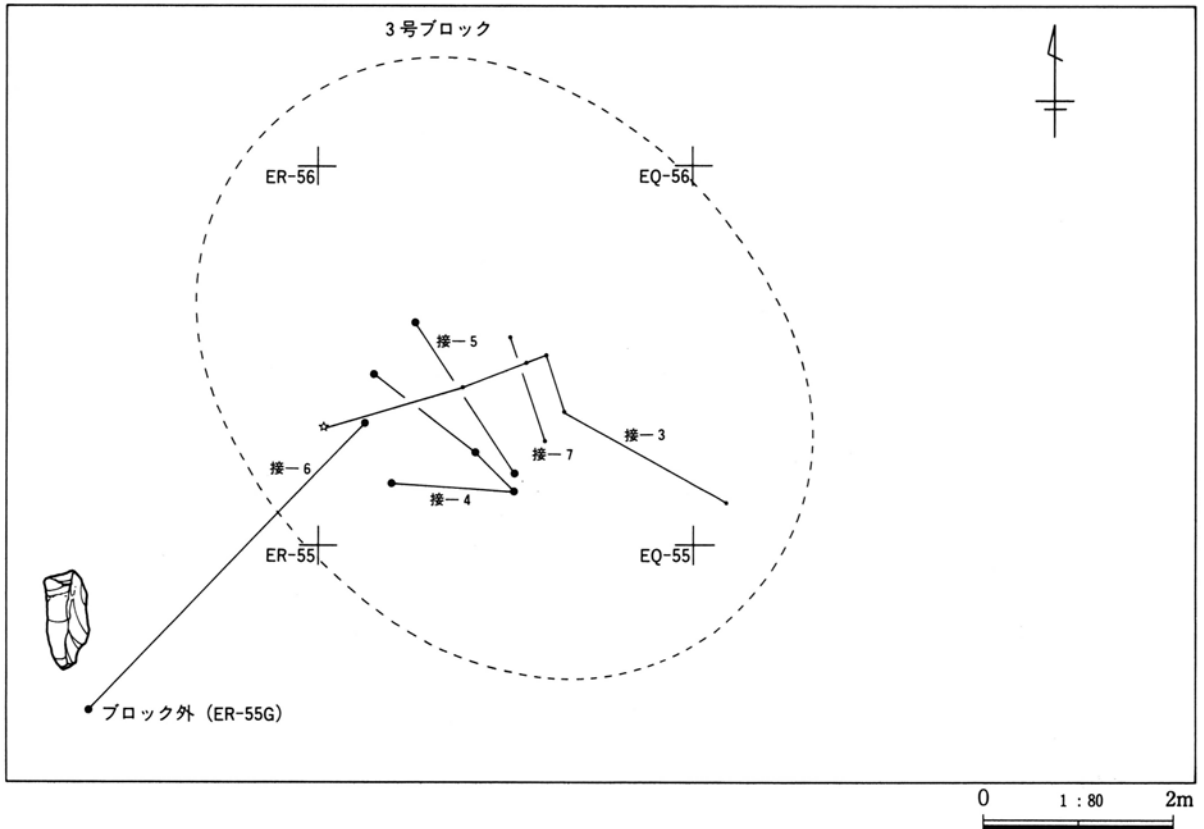
接合資料-2(第87図)

石核3・剥片10からなる接合資料。主たる分布域は3号ブロックで、分布域の南に偏在する傾向が指摘されよう。このほかには1号ブロックに1点が、ブロック外(EQ-54G)にも1点が出土している。

接合資料-1 (黒色安山岩)



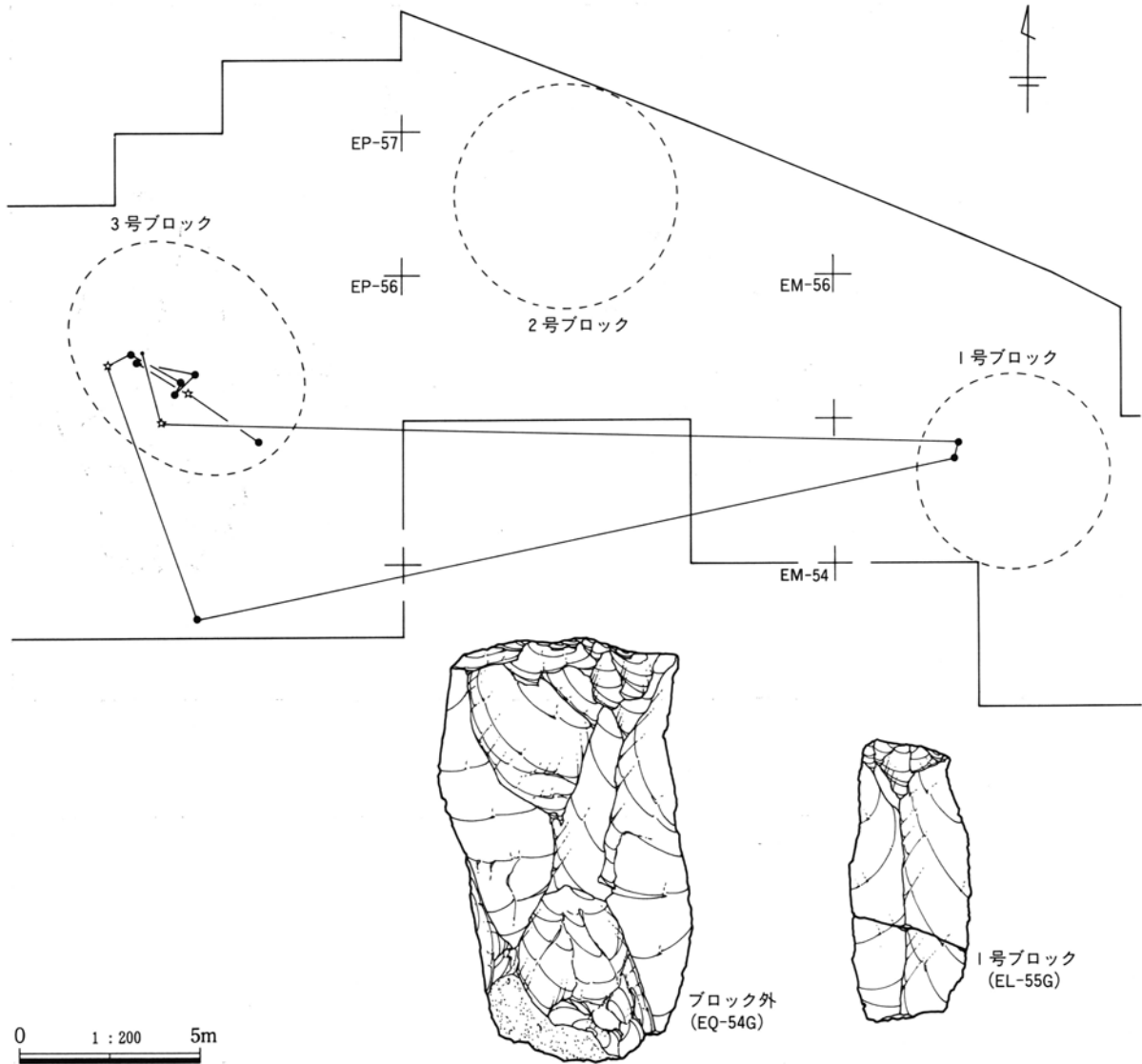
接合資料-3~7 (黒色安山岩)



第86図 接合資料の分布(1)

II 調査の成果

接合資料—2 (黒色安山岩)



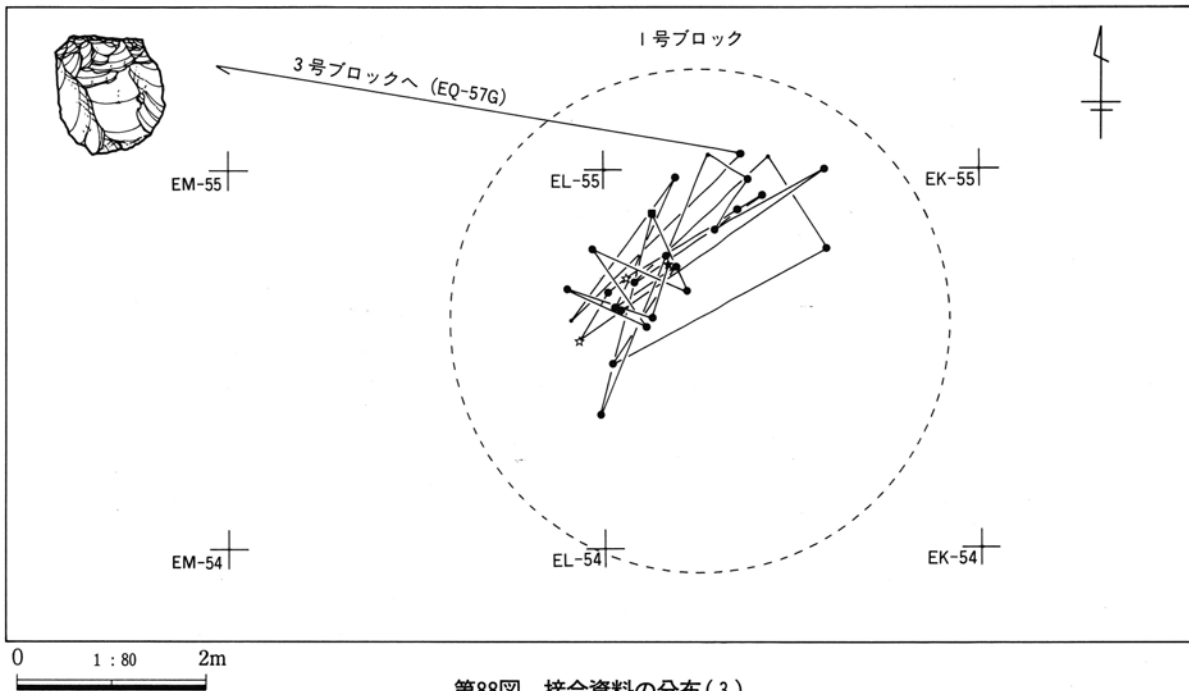
第87図 接合資料の分布(2)

1号ブロックに出土した1点(第57図3)は比較的
形状の整う縦長剥片で、剥片の移動が比較的容易に
推定可能な資料と判断されよう。また、約5mほど
離れて出土した1点(第57図2)も縦長の大型剥片
で、形態的には移動する理由も想定可能だが、現状
では移動した先の「場」の機能は不明で、移動する
理由は明確ではない。大枠では3号ブロックで剥片
剥離を行い、比較的形状の整う剥片を選択的に他の
地点に持ち出す、と判断されよう。黒色安山岩。

接合資料—8 (第88図)

削器1・石核3・剥片25からなる接合資料。接合
資料の主たる分布域は1号ブロックで、分布の密な
分布域の北西側に偏在する傾向が指摘されよう。ま
た、このほかには遠く20m以上も離れた地点(3号
ブロック)に1点が分布している。この剥片(第62
図5)は剥離の初期段階に剥離した大型剥片を石核
に用いる石核(同図・6)の調整剥片で、目的剥片
とは異なる。剥片形状は概して小形だが、剥片形状
は整い「便宜的」には使用可能な剥片と言える。が、

接合資料—8 (黒色頁岩)



第88図 接合資料の分布(3)

先にも述べた通り、剥片は「便宜的石器」の範疇を出ないものでもあり、単純には剥片の搬出とはいいきれないため、ここでは二次的・副次的要因で移動したもの、と考えておきたい。黒色頁岩。

接合資料—9 (第89図)

剥離段階で破損した剥片(第78図)の接合資料。1号ブロックに分布しており、分布の密な分布域の北東側に分布していた。黒色頁岩。

接合資料—10 (第89図)

節理で破損した剥片(第78図)の接合資料。1号ブロックに分布しており、比較的分布の密な分布域の北東側に分布していた。黒色頁岩。

接合資料—11 (第89図)

剥片2からなる接合資料。分布域は接合資料—9・10と同様に分布域の北東側に分布しており、母岩の特徴から同一母岩に分類可能かもしれない。黒色頁岩。

接合資料—12 (第89図)

剥片4からなる接合資料。石器の主たる分布域は2号ブロックで、比較的分布の薄い中央より南側の、より分布の濃い地点に剥片3が分布していたほか、

10m以上も離れて1号ブロックに剥片1(第65図3)が分布していた。形態的には4点とも石刃に近い形状の整う剥片だが、2号ブロックの剥片は厚く台形状の断面形状を呈するのに対し、1号ブロックの剥片は断面三角形状を呈するより形状の整う石刃の剥離に成功しており、剥片の剥離地点と搬出地点を示す典型例と判断されよう。黒色頁岩。

接合資料—13 (第89図)

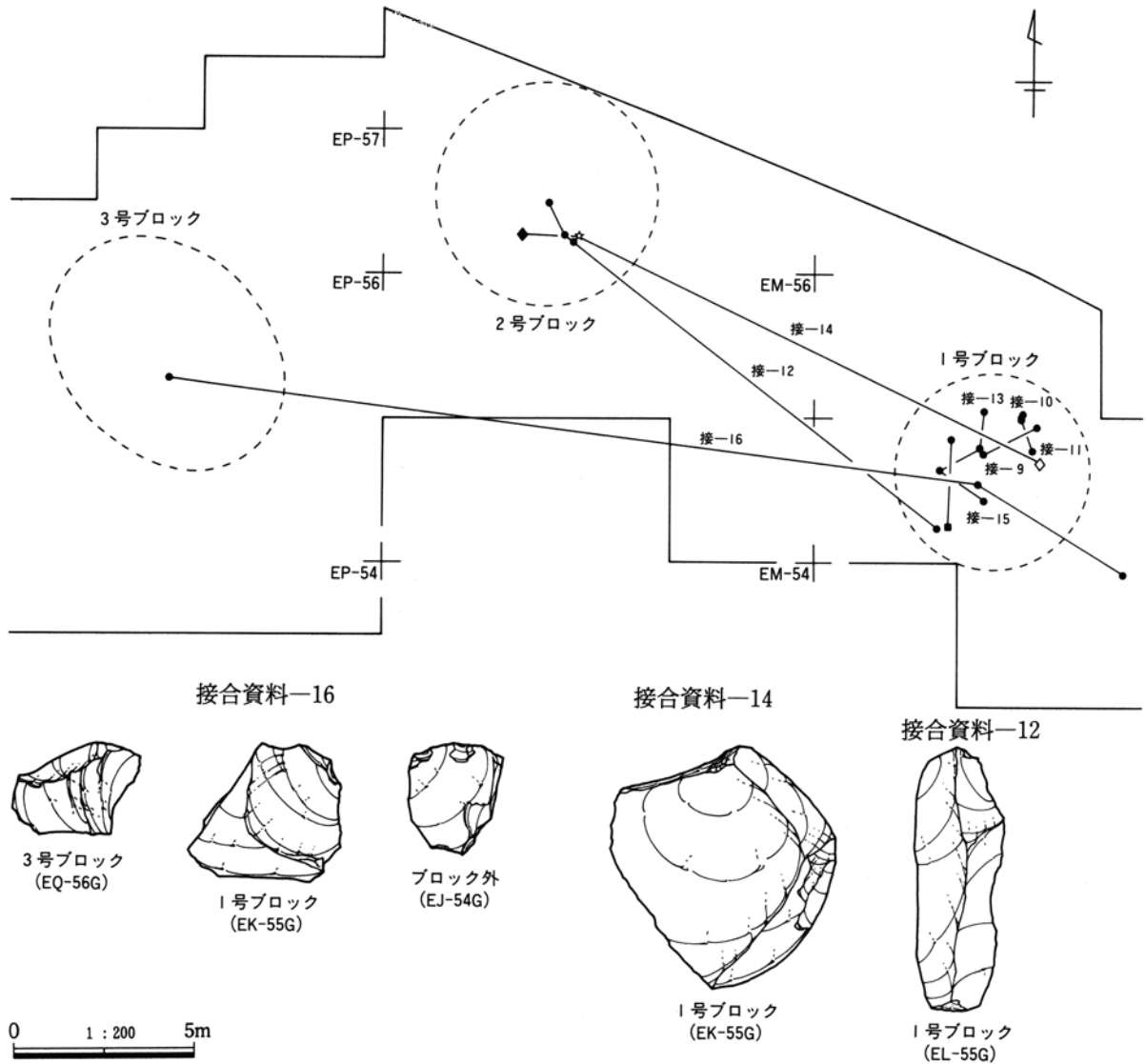
剥片4からなる接合資料。石器の主たる分布域は1号ブロックで、分布の濃い北西側に3点が、分布の薄い南東側に1点(第64図2)が分布している。黒色頁岩。

接合資料—14 (第89図)

加工痕ある剥片(?)1・使用痕ある剥片1・石核1からなる接合資料。主たる分布域は2号ブロックで、比較的分布の薄い中央より南側の、より分布の濃い地点に2点(第66図2・3)が、遠く15mほど離れた1号ブロックに1点(第66図1)が分布していた。石核の残存状況から、剥片剥離の主体は2号ブロックと見られ、この地点で剥離した剥片を1号ブロックに持ち込み使用したもの、と判断されよう。

II 調査の成果

接合資料—9～16 (黒色頁岩)



第89図 接合資料の分布(4)

黒色頁岩。

接合資料—15 (第89図)

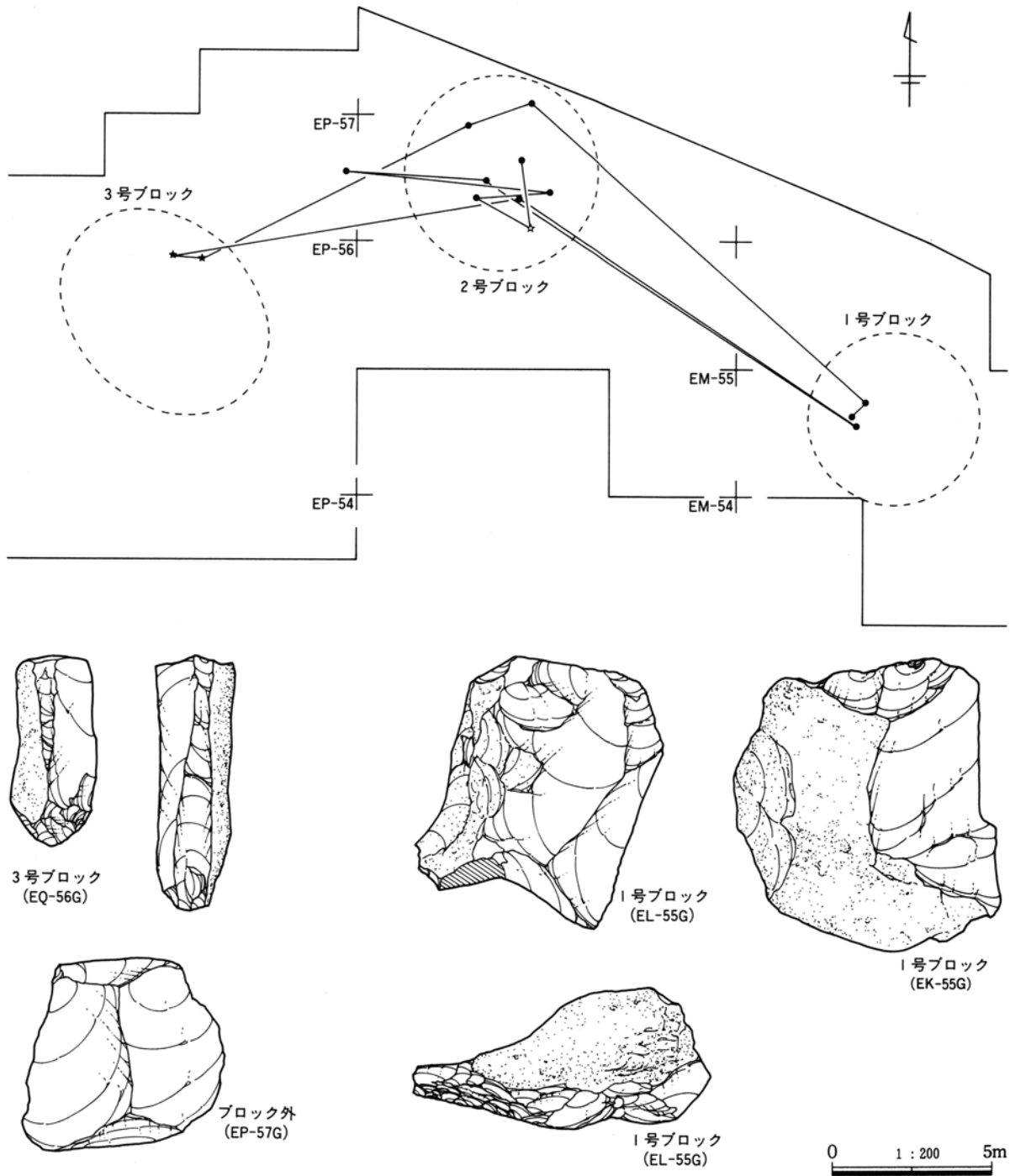
削器1・剥片1からなる接合資料。石器の主たる分布域は1号ブロックで、分布の濃い北西側に剥片1(第67図2)が、分布の薄い南東側に削器1(同・1)が分布した。分布の濃い地点には剥片類が、分布の薄い周辺域にtoolが分布する在り方を、ここでも指摘できよう。黒色頁岩。

接合資料—16 (第89図)

剥片3からなる接合資料。1号ブロックに剥片1(第67図2)・3号ブロックに剥片1(同図3)が分布

したほか、1号ブロックから南東に少し離れた地点にも剥片1(EJ-54G、同図1)が分布していた。移動理由の明確ではない3号ブロックの剥片には、二次的・副次的要因も考慮するべきだが、接合した3点の剥片形状は形態的にはかならずしも良好とはいえないこと、3号ブロックに出土した剥片は打面転移を行い剥離していることから、ここでは敢えて地点を変え剥片剥離を行う可能性、即ち、母岩の移動を伴う剥片剥離を示唆するもの、と評価しておきたい。黒色頁岩。

接合資料-17 (黒色頁岩)



第90図 接合資料の分布(5)

接合資料-17 (第90図)

石核3・剥片11からなる接合資料。ただ1つ分布が各ブロックに及ぶ接合資料で、1号ブロックに3点・2号ブロックに8点・3号ブロックに2点が分布するほか、2号ブロックから少し離れた地点(EP

-57G)にも剥片1が分布していた。量的にも接合資料の多く分布していた2号ブロックに剥離地点の想定が可能だが、先にも述べた通り、節理で不意に破損しており、このため正確な剥離の順は明確ではなく、断定できない要素を残している。接合資料の

II 調査の成果

項で述べた通り、ここでは剥離を①～③の3段階に把えた。以下に、この記載に倣い分布の在り方を記していきたい。

1号ブロックに出土した剥片は計3点で、礫面を大きく残す剥片が多い。剥離の順は、①の1(第69図1)、②の2(同図2)、③の8(第70図8)と①～③の早い段階に剥離した剥片が分布している。先に述べた不意の破損は②の2を剥離した段階で生じた可能性が高く、②の3～7の剥離と③の剥離は絶対的な時間差を示しているわけではない。

2号ブロックに出土した石核(第70図13)や剥片は計14点で、剥離の初期段階を除く各々の段階の剥片が分布している。分布は分布域の南側に集中分布する傾向指摘され、この地点には③で剥離した剥片が集中する。また、北側には②の3・4(第69図3・4)が分布している。

3号ブロックに出土した石核2(第69図5・6)は②の剥離の最終段階に剥離した大形石刃を石核に用いる。分布地点は3号ブロックで、剥片類(碎片を含む)の集中域からやや北東へ外れた地点に分布しており、2号ブロックから石核を持ち込んでいる可能性が高い。現状では、石核の出土地点には碎片の類が見られないことから、石核調整や小形石刃の剥離地点の想定は難しい。

ブロック外に出土した剥片(第70図10)は大形の幅広剥片で、比較的形状も整い、充分使用に耐え得る。他の地点で剥離、理由は不明だが剥離地点から離れて出土している。

既に述べた通り、剥離は節理から不意に破損しており、正確には剥離の順を限定できないため断言は困難だが、現状で想定した剥片剥離の過程と分布は全く無関係とも思われない。黒色頁岩。

接合資料—23～30(第91図)

分布域は2号ブロックで、接合資料—23・29・30が北側の集中部に、接合資料—25～28が南側の集中部に分布していた。接合資料は剥離段階で破損する例が多く、打面転移を行う例は接合資料—23・24の2例で、1例(接合資料—24)のみ南北の集中部に

跨り接合している。黒色頁岩。

接合資料—37・40(第91図)

分布域は2号ブロックで、接合資料—40が北側の集中部に、接合資料—37が南側の集中部に分布していた。黒色頁岩。

接合資料—18～22(第91図)

分布域は2号ブロックで、接合資料—18・21が南側の集中部に、接合資料—20・22が南北の集中部に跨り分布している。このほか、接合資料—19は北側の集中部の2点が10m以上も離れて1号ブロックの剥片(第71図2)と接合している。この剥片は打面転移を伴う剥離の中で剥離され、1号ブロックに持ち出した可能性が高い。黒色頁岩。

接合資料—31(第92図)

主たる分布域は3号ブロックだが、1号ブロックにも剥片が分布する。1号ブロックに出土した剥片(第72図2)は剥離の初期に剥離した大形の剥片だが、剥片形状は良好ではなく、現状では剥片の移動理由は明確ではない。黒色頁岩。

接合資料—32(第92図)

石核1・剥片2からなる接合資料。剥片3は3号ブロックに、石核1(第74図3)のみ3号ブロックから少し離れて分布(EP—56G)する。黒色頁岩。

接合資料—33(第92図)

剥片6からなる接合資料。礫面を大きく残す剥離の初期段階を示す例で、この地点で剥離は完結している。黒色頁岩。

接合資料—34～36(第92図)

接合資料—34・35は3号ブロックに、接合資料—36は遠く20m以上も離れて1号ブロックの剥片(第79図2)と接合する。1号ブロックに出土した剥片は直線的な剥片端部を有する。黒色頁岩。

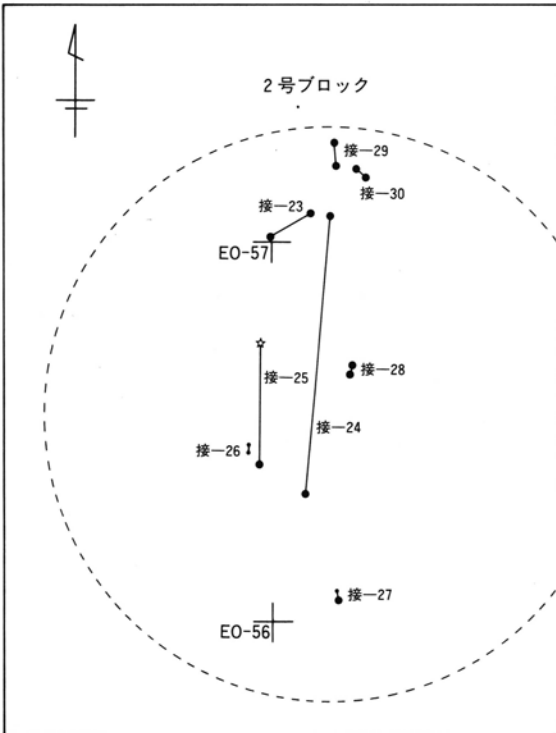
接合資料—38・39(第93図)

3号ブロックに分布する。節理面や折れ面で接合する例で、分布域の中心部に分布する。黒色頁岩。

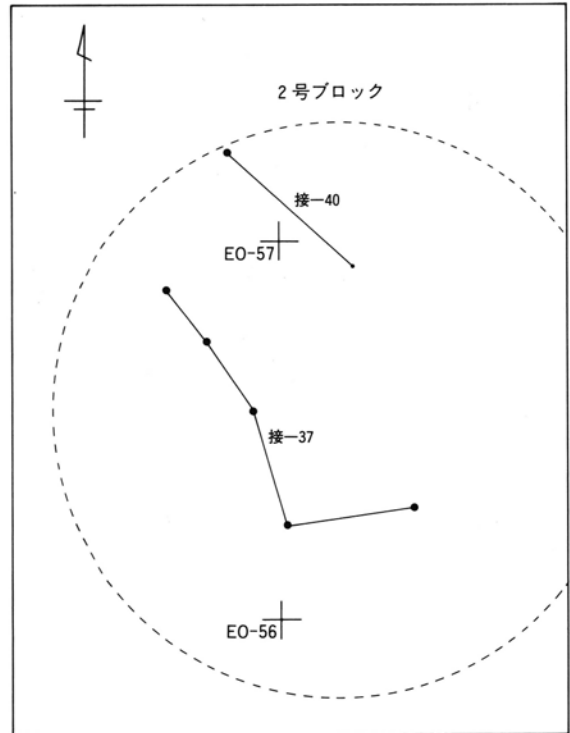
接合資料—42(第93図)

3号ブロックに分布する。使用で破損した敲石の接合例で、剥片類の集中部に分布する。石英閃緑岩。

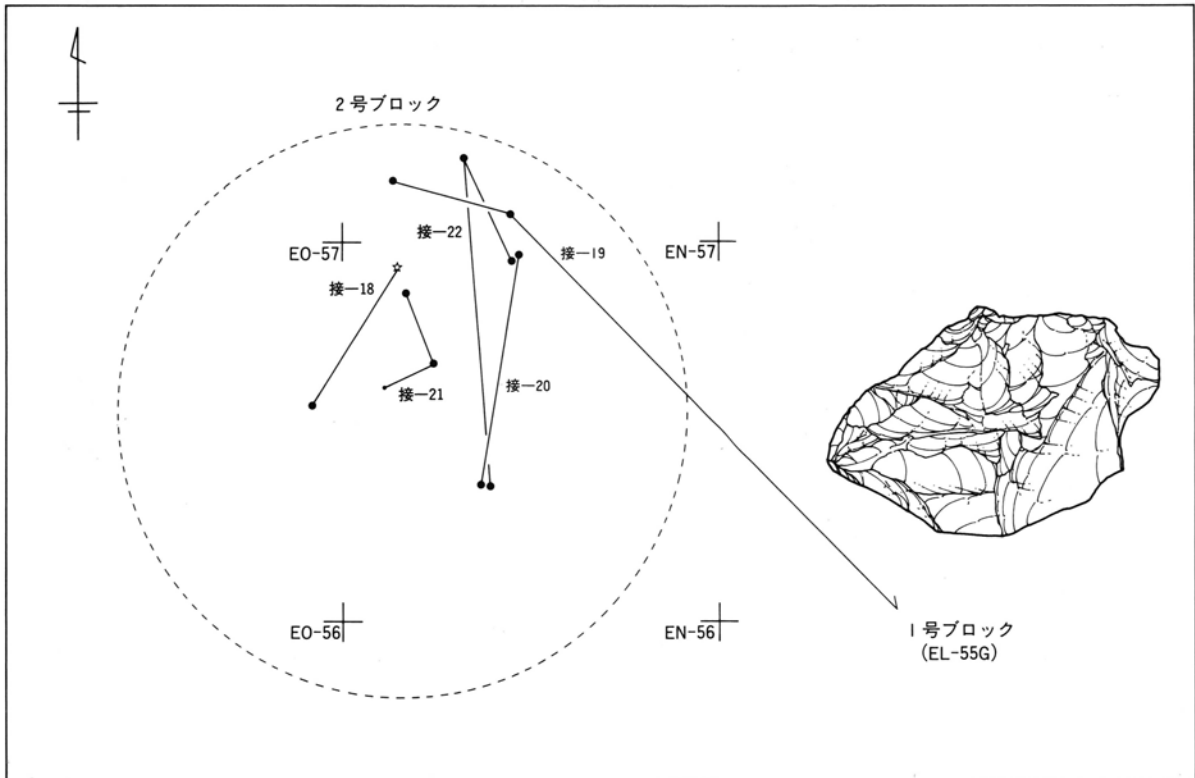
接合資料—23～30 (黒色頁岩)



接合資料—37・40 (黒色頁岩)



接合資料—18～22 (黒色頁岩)

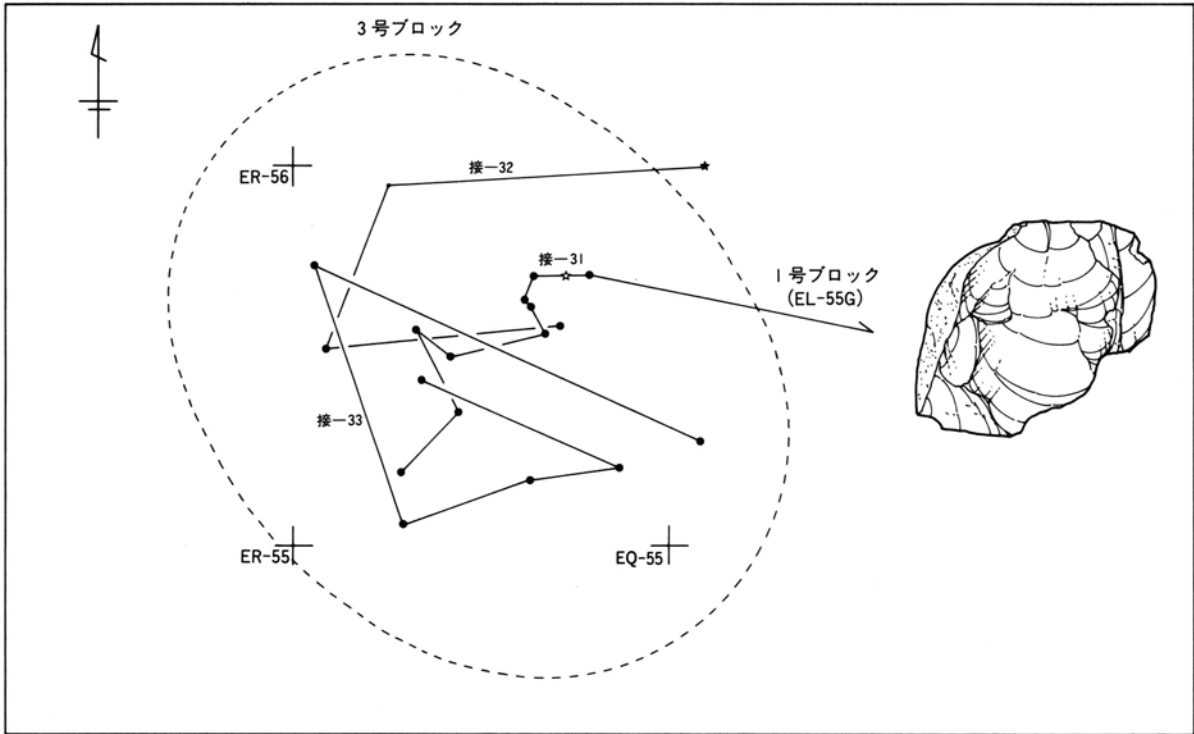


0 1 : 80 2m

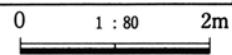
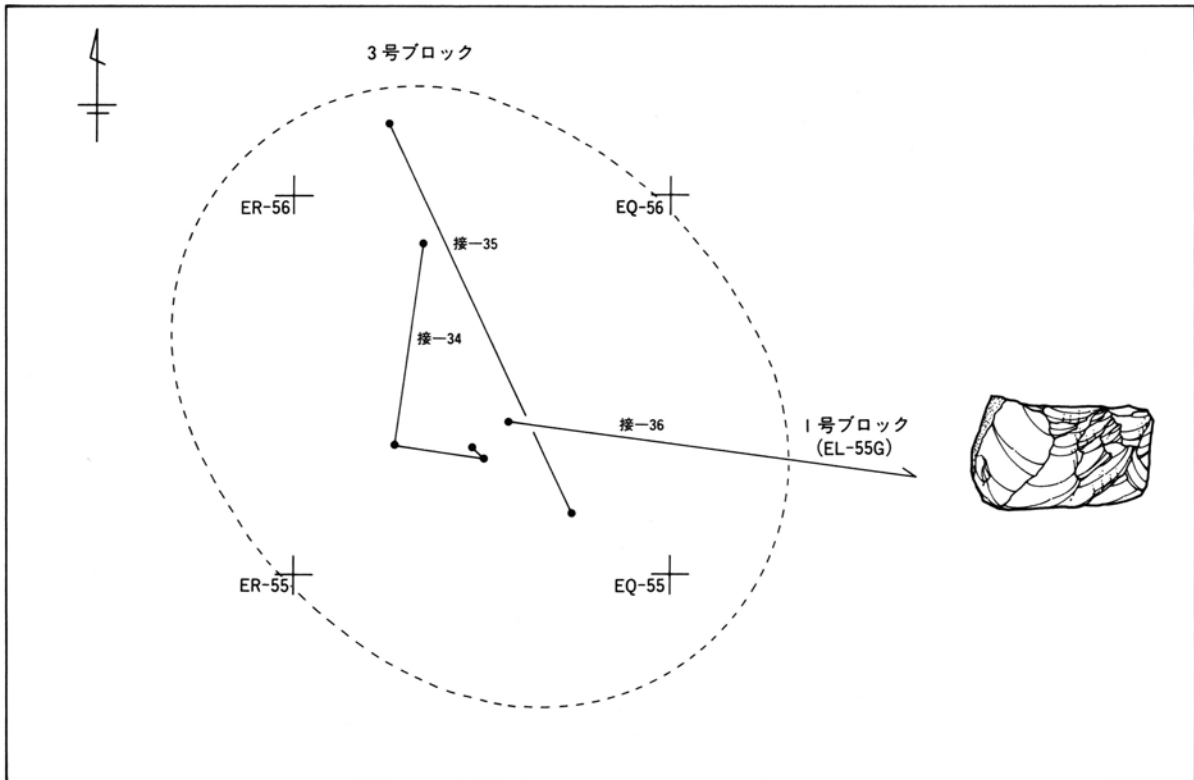
第91図 接合資料の分布(6)

II 調査の成果

接合資料-31~33 (黒色頁岩)

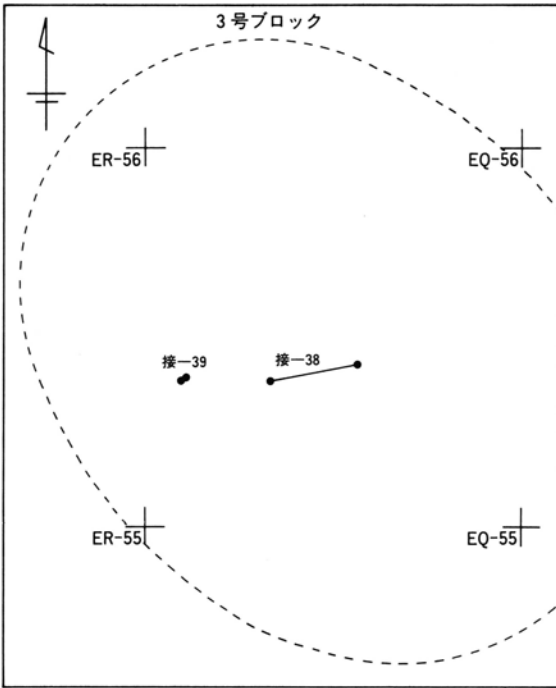


接合資料-34~36 (黒色頁岩)

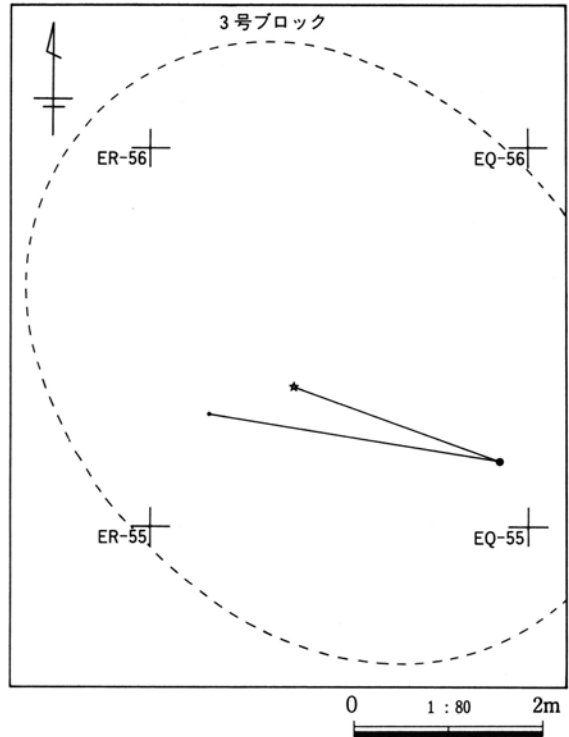


第92図 接合資料の分布(7)

接合資料—38・39 (黒色頁岩)



接合資料—42 (石英閃緑岩)



第93図 接合資料の分布(8)

(5) 石材分布

既に述べた通り、石材別に見た出土資料は総量の約80%を黒色頁岩が占め、次には黒色安山岩が16% (78点)で続き、2種類の石材が95%占める。残る5%には9種類の石材が含まれ、石材構成は多様性に富む。が、このなかには敲石その他を含む石材の数で、剥片系石器に限れば、実際には上述した2種類の石材の他は頁岩・細粒安山岩が各1点・珪質頁岩2点が組成、これ以外の石材は全く見られないのであり、石材構成は極めて単純・限定的な在り方を呈する。出土資料は、風化が激しく母岩分類が難しいこと、接合作業の結果、得た接合資料の中には原石の状態に復原可能な例も見られ、剥離地点の特定も可能だが、厳密な意味では同一母岩に分類できないため、ここでは石材別に見た分布を示しておく。

黒色頁岩の分布 計381点を確認している。1号ブロックに113点(約30%)・2号ブロックに183点(約50%)・3号ブロックに75点(約20%)と万遍なく分布する。各々の地点には剥片だけではなく碎片も分

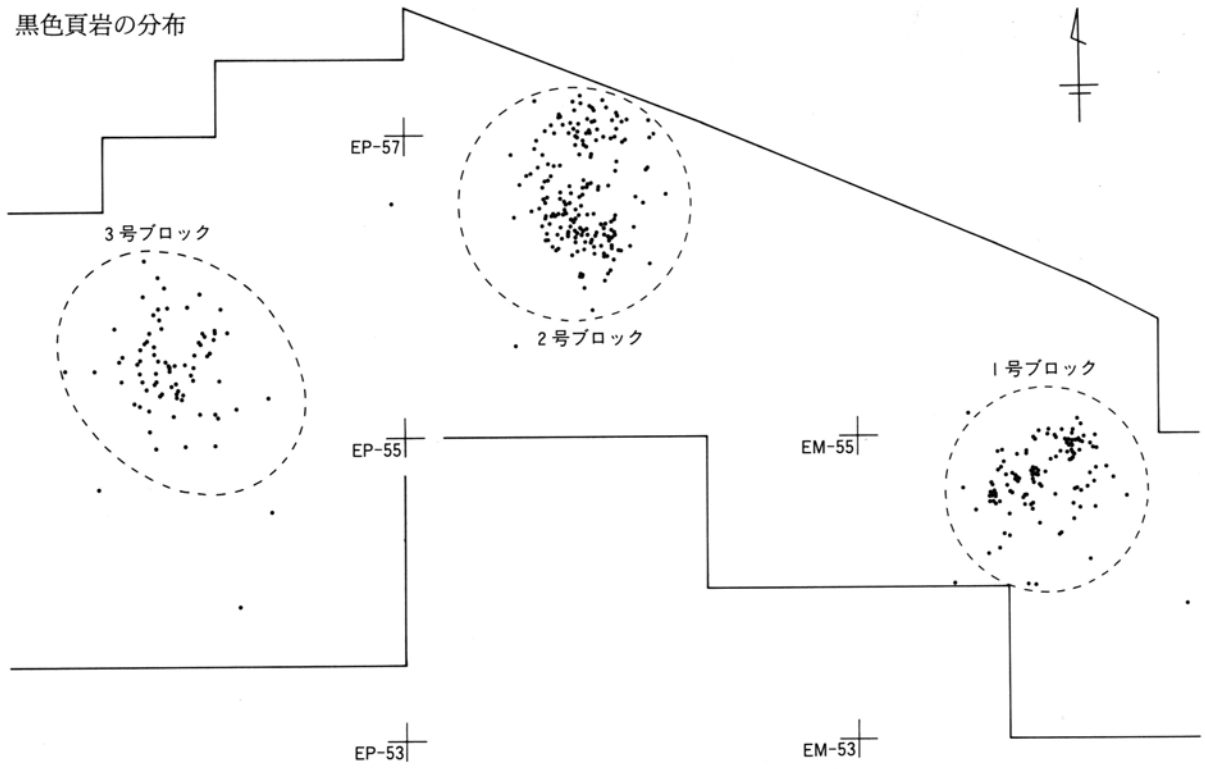
布しており、ある程度均質に剥片剥離が展開したものと想定できよう。接合資料が示す通り、剥離は各々の地点で独立して展開したのではなく、剥片(石核)移動の在り方は各々の地点の補完関係(1号→3号へ移動するもの3例、3号→1号へ移動するもの2例、2号→1号へ移動するもの3例、2号→1号・3号へ移動するもの1例)を示唆していた。

黒色安山岩の分布 78点を確認している。1号ブロックに5点・2号ブロックに1点・3号ブロックに67点が分布しており、分布には偏在する傾向が指摘されよう。

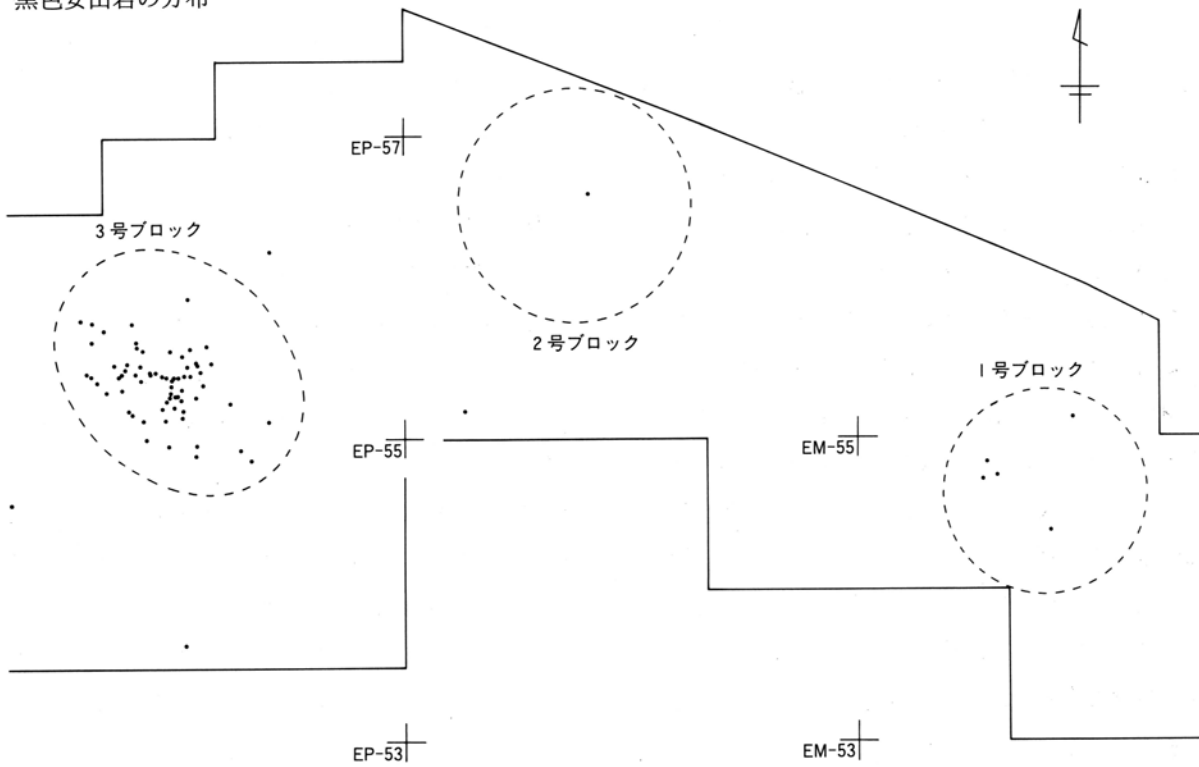
その他の石材 粗粒輝石安山岩や石英閃緑岩・溶結凝灰岩は敲石や台石に選択使用され、基本的に各ブロックに均等分布する。剥片系石器に限れば2号ブロックに分布した珪質頁岩(第40図6、第42図)、ブロック外に分布した礫器の可能性も否定できない3点(第46図)や、軽石(第53図)は分布が偏り、注意しておきたい。

II 調査の成果

黒色頁岩の分布



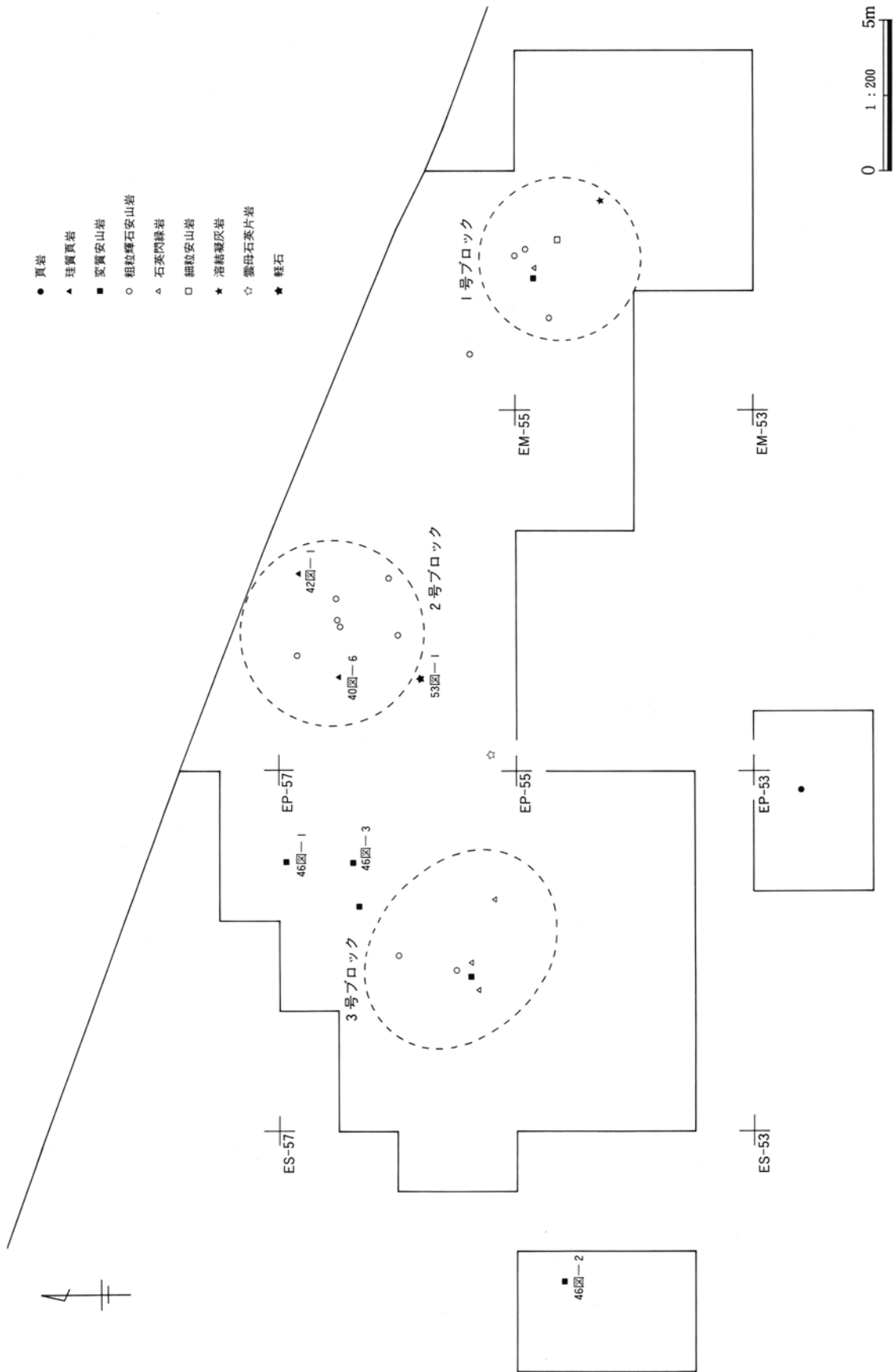
黒色安山岩の分布



0 1 : 200 5m

第94図 石材別分布図(1)

1. 旧石器時代



第95図 石材別分布図(2)

計測値一覧表

凡 例

1. 長さ・幅は、小数点の第二位を四捨五入し、それぞれcm単位で表示した。
2. 遺物重量の計測には電磁式はかり(EY-2200 A)を使用し、小数点の第二位を四捨五入し、g単位で表示した。また、計測範囲を越える重量の遺物は、LIBROR EL-6000を用い1g単位で計測した。
3. 器種名称は以下の通り略して掲載した。
加工痕ある剥片：加工痕 縦長剥片：縦剥
使用痕ある剥片：使用痕
4. 石材名称は以下の通り略して掲載した。
黒色安山岩：黒安 黒色頁岩：黒頁
細粒安山岩：細安 珪質頁岩：珪頁
石英閃緑岩：石閃 粗粒輝石安山岩：粗安
変質安山岩：変安 溶結凝灰岩：溶凝

吹屋犬子塚遺跡・III区(第1文化層)

図版番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第11図-1	BT-25G	石刃	10.0	3.0	41.9	黒頁
2	BU-26G	縦剥	(5.6)	4.1	25.4	黒安
第12図-1	BU-25G	剥片	6.7	9.4	103.3	黒安
2	BT-25G	剥片	4.6	6.9	37.8	黒頁
3	BT-25G	剥片	9.0	10.2	240.1	黒頁
第13図-1	BU-25G	敲石	15.5	11.5	1434.5	粗安
2	BT-25G	敲石	10.0	12.0	1032.1	粗安
3	BU-25G	台石	12.4	11.6	1801.1	粗安
第15図-1	BR-25G	自然礫	22.7	32.5	20300.0	粗安
2	BS-25G	自然礫	7.0	5.5	157.3	粗安
3	BS-25G	自然礫	6.7	7.5	116.3	粗安
4	BR-25G	自然礫	6.8	5.7	83.6	粗安
5	BR-25G	自然礫	5.0	7.8	137.1	粗安
6	BR-25G	自然礫	15.0	11.7	2380.0	粗安

吹屋犬子塚遺跡・IV区(第2文化層)

図版番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第18図-1	CX-36G	尖頭器	(3.7)	(3.5)	11.7	黒安
2	CX-37G	削器	2.8	3.2	6.2	黒曜石
3	CX-38G	使用痕	(1.5)	(4.0)	3.0	黒安
4	CY-37G	石刃	16.0	3.8	166.9	黒頁
5	CX-37G	縦剥	11.8	4.7	113.6	黒頁
第19図-1	CX-37G	剥片	8.6	5.4	81.1	黒頁
2	CX-37G	縦剥	(2.9)	1.8	4.7	黒頁
3	CX-37G	剥片	2.9	2.5	4.8	黒頁
4	CX-37G	剥片	(6.2)	5.1	63.2	黒安
5	CY-37G	剥片	(5.5)	6.1	37.9	黒安
第20図-1	DA-37G	剥片	6.3	4.2	19.9	黒安
2	CX-37G	縦剥	(4.4)	3.3	20.7	黒頁
第21図-1	CX-37G	敲石	6.3	4.8	90.5	粗安
2	CX-37G	敲石	9.0	6.0	219.5	粗安
3	CX-36G	敲石	7.8	7.8	201.9	粗安
4	CX-38G	敲石	9.5	5.4	236.7	粗安
5	CX-37G	敲石	8.3	4.6	149.3	粗安
6	CX-37G	敲石	13.0	7.6	613.9	変安
7	CY-38G	敲石	13.3	9.0	555.0	溶凝
8	DA-43G	敲石	(14.7)	13.3	1904.0	粗安
9	CX-37G	敲石	(8.8)	8.4	387.6	粗安
第22図-1	CY-36G	敲石	(15.0)	10.0	1084.0	粗安
2	CX-36G	敲石	(15.6)	(13.5)	1969.0	粗安
3	DA-37G	磨石	(13.2)	10.5	1388.0	ひん岩
4	CY-37G	磨石	19.3	16.4	4500.0	粗安
5	DA-37G	台石	(19.0)	(11.6)	1878.0	粗安
第23図-1	CW-36G	台石	24.0	19.2	8100.0	粗安
2	CY-38G	台石	24.0	31.0	10800.0	粗安

吹屋犬子塚遺跡・IV区(第2文化層 接合資料)

資料番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-1(第24~28図)						
1	CX-37G	剥片	7.0	8.3	103.4	黒安
2	CX-37G	剥片	3.5	5.0	19.6	黒安
3	CY-37G	剥片	6.9	6.3	45.7	黒安
4	CX-37G	剥片	2.8	4.1	7.7	黒安
5	CX-37G	剥片	6.4	6.2	67.2	黒安
6	CX-37G	剥片	6.0	8.6	74.8	黒安
7	CX-37G	剥片	8.4	4.2	58.4	黒安
8	CX-37G	剥片	12.6	7.3	154.2	黒安
9	CX-37G	剥片	3.7	8.0	37.9	黒安
10	CX-37G	剥片	2.3	2.9	2.8	黒安
11	CX-37G	剥片	6.0	6.5	54.2	黒安
12	CX-37G	剥片	(3.0)	3.1	3.7	黒安
13	CX-37G	剥片	(5.4)	5.7	50.4	黒安
14 a	CY-37G	剥片	11.2	7.0	99.4	黒安
14 b	CX-37G	碎片	3.0	(1.3)	2.3	黒安
15	CX-37G CX-38G	剥片	10.4	7.9	163.4	黒安
16	CX-37G	碎片	(2.3)	(2.5)	2.3	黒安
17	CW-37G	剥片	7.5	5.2	64.5	黒安
18 a	CX-36G CX-37G	剥片	8.4	4.3	45.5	黒安
18 b	CX-36G	碎片	(3.7)	1.5	3.8	黒安
19	CX-37G	剥片	3.8	2.8	7.6	黒安
20	CX-37G	剥片	4.5	4.6	20.7	黒安
21	CX-37G	剥片	4.4	6.0	35.9	黒安
22	CX-37G	剥片	11.2	5.4	113.4	黒安
23	CX-37G	剥片	(2.9)	2.9	7.8	黒安
24	CX-37G CX-38G	剥片	10.4	6.6	102.4	黒安
25	CX-36G CX-37G	剥片	(5.8)	3.1	24.0	黒安
26	CX-37G	剥片	7.0	3.5	22.6	黒安
27	DA-37G	剥片	6.3	4.2	54.7	黒安
28	CX-37G	剥片	(3.8)	3.3	15.7	黒安
接合資料-2(第28図)						
1	CX-37G	加工痕	6.7	3.1	52.5	黒安
2	CX-37G	碎片	2.7	2.9	5.8	黒安
3	CX-37G	剥片	5.9	4.8	48.8	黒安
接合資料-3(第29図)						
	CX-37G	剥片	6.4	3.8	22.2	黒安
接合資料-4(第29図)						
	CX-37G	剥片	4.7	3.6	17.1	黒安
接合資料-5(第29図)						
	CX-36G	使用痕	7.6	7.1	90.1	黒安

II 調査の成果

吹屋中原遺跡

図版番号	出土位置 (グリッド)	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材
第38図-1	ED-45G	石 核	6.4	9.8	221.1	黒 頁
2	ED-45G	剥 片	(6.5)	5.5	64.3	黒 頁
3	ED-45G	剥 片	(3.4)	2.8	5.9	黒 頁
第39図-1	FI-62G	加工痕	5.5	5.6	100.0	砂 岩
2	FI-58G	剥 片	5.3	3.9	25.6	黒 頁
第40図-1	EL-55G	削 器	4.8	6.1	38.9	黒 頁
2	EN-57G	加工痕	2.0	1.5	2.3	黒 安
3	EK-55G	削 器	6.2	6.3	88.0	黒 頁
4	EO-57G	加工痕	2.6	2.5	6.7	黒 頁
5	EQ-56G	加工痕	4.2	5.0	13.3	黒 安
6	EO-57G	加工痕	(5.1)	3.8	16.6	珪 頁
第41図-1	EN-57G	使用痕	6.4	4.7	35.0	黒 頁
2	EK-55G	使用痕	6.7	6.2	49.3	黒 頁
3	EK-55G	使用痕	(5.5)	3.1	23.2	細 安
4	EK-55G	使用痕	(4.7)	5.5	28.8	黒 安
第42図-1	EN-57G	使用痕	9.2	10.2	230.0	珪 頁
第43図-1	EK-55G	石 核	10.2	4.1	130.0	黒 頁
第44図-1	EP-56G	石 核	11.1	6.7	283.0	黒 頁
第45図-1	EQ-56G	石 核	8.0	2.3	63.3	黒 頁
2	EQ-56G	石 核	6.0	2.5	55.5	黒 頁
第46図-1	EP-57G	石 核	14.8	10.2	929.0	変 安
2	ET-55G	石 核	13.8	9.9	1026.0	変 安
3	EP-57G	石 核	14.4	11.4	1163.0	変 安
第47図-1	EQ-56G	石 核	8.2	4.9	136.5	黒 頁
2	EL-55G	縦 剥	5.5	2.7	14.4	黒 頁
3	EK-49G	縦 剥	(2.2)	2.1	1.7	黒 安
4	EK-55G	剥 片	4.0	3.3	8.3	黒 頁
5	ER-53G	剥 片	7.6	4.5	48.6	黒 安
6	EQ-56G	縦 剥	7.0	3.3	32.1	黒 頁
第48図-1	EK-55G	縦 剥	(4.7)	3.4	17.2	黒 頁
2	EK-55G	剥 片	6.2	3.7	24.7	黒 頁
3	EQ-56G	剥 片	4.1	3.6	15.1	黒 頁
4	EN-57G	縦 剥	9.5	5.2	92.0	黒 頁
5	EN-57G	剥 片	5.9	6.0	24.3	石 閃
第49図-1	EN-57G	剥 片	8.2	6.7	92.7	黒 頁
2	EN-57G	剥 片	10.4	8.5	252.7	粗 安
第50図-1	EN-57G	剥 片	12.9	7.1	355.7	黒 頁
第51図-1	EK-55G	敲 石	11.3	7.5	733.0	変 安
2	EN-57G	敲 石	12.7	9.4	940.2	粗 安
3	EQ-56G	敲 石	12.3	7.5	815.6	石 閃
4	EQ-55G	敲 石	10.0	6.3	497.5	石 閃
5	EQ-56G	敲 石	11.5	11.2	1011.0	粗 安
6	EL-55G	敲 石	(12.8)	(9.1)	845.3	粗 安
第52図-1	EQ-56G	台 石	24.2	20.5	6700.0	粗 安
2	EN-57G	敲 石	14.2	12.0	2300.0	粗 安
3	EN-57G	磨 石	(15.7)	17.7	3460.0	粗 安
4	EK-55G	台 石	26.8	21.2	8000.0	石 閃
第53図-1	EO-56G	石製品	11.4	7.2	132.0	軽 石

吹屋中原遺跡(接合資料)

資料番号	出土位置 (グリッド)	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材
接合資料-1(第54~56図)						
1	EQ-56G	剥 片	2.9	4.6	21.2	黒 安
2	EQ-55G	剥 片	6.2	6.8	77.3	黒 安
3	EQ-56G	剥 片	12.7	8.7	277.0	黒 安

資料番号	出土位置 (グリッド)	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材
4	EQ-56G	剥 片	9.0	5.2	108.3	黒 安
5	ER-56G	剥 片	4.3	4.6	23.4	黒 安
6	EQ-56G	剥 片	5.0	5.8	36.5	黒 安
7	EQ-56G	剥 片	(3.3)	2.0	3.4	黒 安
8	EP-57G	剥 片	3.3	3.6	10.4	黒 安
9	EQ-56G	石 核	17.2	10.4	496.4	黒 安
10	EQ-56G	剥 片	6.9	6.7	87.7	黒 安
11	EK-56G ER-56G	剥 片	10.9	5.7	112.8	黒 安
12	EO-56G	加工痕	4.2	5.0	13.3	黒 安
13	EQ-56G	剥 片	10.3	8.4	262.6	黒 安
14	EQ-56G	剥 片	10.4	5.4	96.0	黒 安
接合資料-2(第57~58図)						
1	EQ-56G	石 核	6.1	3.5	26.6	黒 安
2	EQ-54G	剥 片	11.8	7.1	263.0	黒 安
3	EL-55G	剥 片	7.7	3.4	31.6	黒 安
4	ER-56G	剥 片	4.4	4.4	27.7	黒 安
5	EQ-56G	剥 片	3.9	6.4	44.6	黒 安
6	EQ-56G	剥 片	3.8	4.1	16.5	黒 安
7	EQ-55G	剥 片	3.4	4.5	13.6	黒 安
8	EQ-56G	剥 片	5.0	4.3	25.4	黒 安
9	EQ-56G	剥 片	4.3	4.0	17.7	黒 安
10	EQ-56G	石 核	9.5	11.0	509.5	黒 安
接合資料-3(第59図)						
1	EQ-56G	剥 片	(6.7)	9.3	190.0	黒 安
2	EQ-56G	剥 片	4.0	7.8	37.4	黒 安
接合資料-5(第59図)						
1	EQ-56G	剥 片	5.0	7.8	78.5	黒 安
	EQ-56G	剥 片	6.2	2.7	21.8	黒 安
接合資料-6(第59図)						
1	ER-55G	剥 片	2.6	1.2	2.4	黒 安
	EQ-56G	剥 片	7.0	4.6	64.4	黒 安
接合資料-7(第59図)						
1	EQ-56G	碎 片	1.4	2.1	1.7	黒 安
	EQ-56G	剥 片	2.4	4.6	21.4	黒 安
接合資料-4(第60図)						
1	EQ-56G	剥 片	4.3	4.7	32.0	黒 安
2	EQ-56G	剥 片	5.5	5.1	31.0	黒 安
3	EQ-56G	剥 片	3.2	5.2	10.3	黒 安
接合資料-8(第61~64図)						
1	EK-55G	剥 片	2.2	5.2	15.6	黒 頁
2	EK-55G	剥 片	3.4	5.0	14.7	黒 頁
3	EL-55G	剥 片	2.5	2.3	3.7	黒 頁
4	EL-55G	剥 片	3.5	3.7	14.5	黒 頁
5	EQ-57G	剥 片	3.1	2.8	6.6	黒 頁
6	EK-55G	石 核	10.2	4.1	130.0	黒 頁
7	EK-55G	削 器	4.8	4.4	54.4	黒 頁
	EL-55G	剥 片	5.5	5.0	43.3	黒 頁
8	EK-55G	剥 片	(3.0)	3.9	11.2	黒 頁
9	EK-55G	剥 片	5.4	8.3	94.4	黒 頁
10	EK-56G	碎 片	1.7	1.8	1.4	黒 頁
	EK-56G	剥 片	3.2	3.2	6.1	黒 頁
11	EK-55G	剥 片	5.0	3.8	10.0	黒 頁
12	EK-55G	剥 片	7.5	3.6	43.1	黒 頁
13	EK-56G	碎 片	2.6	1.8	1.9	黒 頁
14	EK-55G	石 核	3.9	9.1	96.5	黒 頁
15	EK-55G	剥 片	4.4	5.4	31.1	黒 頁
16	EK-55G	剥 片	7.3	6.9	95.1	黒 頁
17	EK-55G	剥 片	2.7	2.1	2.9	黒 頁
18	EK-55G EL-55G	剥 片	6.8	3.5	24.8	黒 頁

1. 旧石器時代

資料番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
19	EK-55G	剥片	2.9	1.1	0.9	黒頁
20	EK-55G	剥片	4.9	4.8	35.3	黒頁
21	EK-55G	剥片	7.2	4.6	72.7	黒頁
22	EK-55G	剥片	4.9	1.8	3.8	黒頁
23	EK-55G	剥片	3.2	2.6	7.3	黒頁
24	EL-55G	砕片	2.2	2.7	3.3	黒頁
25	EL-55G	石核	3.8	7.2	197.8	黒頁
接合資料-13(第64図)						
1	EK-55G	剥片	5.0	2.3	15.9	黒頁
2	EL-55G	剥片	3.9	6.0	32.0	黒頁
3	EK-55G EK-56G	剥片	4.2	8.7	46.3	黒頁
接合資料-12(第65図)						
1	EN-57G	剥片	10.4	4.2	92.3	黒頁
2	EN-57G	剥片	7.6	3.5	53.7	黒頁
3	EL-55G	剥片	7.3	2.5	19.7	黒頁
4	EN-57G	剥片	8.3	3.2	49.2	黒頁
接合資料-14(第66図)						
1	EK-55G	使用痕	6.7	6.2	49.3	黒頁
2	EO-57G	加工痕	2.6	2.5	6.7	黒頁
3	EN-57G	石核	6.2	7.5	206.3	黒頁
接合資料-15(第67図)						
1	EL-55G	削器	4.8	6.1	38.9	黒頁
2	EL-55G	剥片	8.0	9.8	206.5	黒頁
接合資料-16(第67図)						
1	EJ-54G	剥片	3.0	2.5	6.3	黒頁
2	EK-55G	剥片	3.8	4.2	11.9	黒頁
3	EQ-56G	剥片	2.6	3.2	5.1	黒頁
接合資料-17(第68~70図)						
1	EL-55G	剥片	4.2	9.3	83.0	黒頁
2	EK-55G	剥片	9.2	8.1	196.5	黒頁
3	EN-58G	剥片	4.2	6.4	43.7	黒頁
4	EO-57G	剥片	4.5	5.5	41.6	黒頁
5	EQ-56G	石核	8.0	2.3	63.3	黒頁
6	EQ-56G	石核	6.0	2.5	55.5	黒頁
7	EN-57G	剥片	5.8	8.3	133.3	黒頁
8	EL-55G	剥片	8.0	6.2	155.6	黒頁
9	EN-57G	剥片	8.0	6.2	107.6	黒頁
10	EP-57G	剥片	5.8	6.1	60.3	黒頁
11	EN-57G	剥片	2.7	2.1	3.6	黒頁
12	EO-57G	剥片	2.4	2.5	4.4	黒頁
13	EN-57G	石核	4.7	6.1	99.1	黒頁
14	EN-57G	剥片	(5.1)	4.8	44.0	黒頁
接合資料-19(第71図)						
1	EN-58G	剥片	4.2	4.9	26.0	黒頁
2	EL-55G	剥片	6.0	7.9	100.7	黒頁
3	EN-58G	剥片	2.3	6.7	24.9	黒頁
接合資料-21(第71図)						
1	EN-57G	剥片	5.3	5.8	31.2	黒頁
2	EN-57G	剥片	4.6	4.3	23.3	黒頁
接合資料-31(第72・73図)						
1	EQ-56G	剥片	9.1	5.9	53.3	黒頁
2	EL-55G	剥片	5.8	6.2	54.4	黒頁
3	EQ-56G	剥片	6.9	3.9	30.1	黒頁
4	EQ-56G	剥片	4.2	6.4	43.0	黒頁
5	EQ-56G	剥片	5.2	2.3	10.0	黒頁
6	EQ-56G	剥片	1.8	2.6	3.4	黒頁
7	EQ-56G	剥片	2.2	3.4	5.8	黒頁
8	EQ-56G	剥片	6.1	6.8	96.1	黒頁
9	EQ-56G	剥片	4.6	6.0	30.9	黒頁

資料番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
10	EQ-56G	剥片	8.2	9.5	450.8	黒頁
接合資料-32(第74図)						
1	EQ-56G	剥片	3.8	(3.0)	16.0	黒頁
2	EQ-56G	砕片	2.5	(3.2)	6.3	黒頁
3	EQ-56G	剥片	9.2	3.5	42.0	黒頁
4	EP-56G	石核	11.1	6.7	283.0	黒頁
接合資料-33(第75図)						
1	EQ-56G	剥片	10.2	6.4	183.2	黒頁
	EQ-56G	剥片	3.0	3.5	12.5	黒頁
2	EP-56G	剥片	3.1	2.1	7.7	黒頁
3	EQ-56G	剥片	10.4	5.2	97.0	黒頁
4	EQ-56G	剥片	5.4	4.9	27.0	黒頁
接合資料-34(第76図)						
1	EQ-56G	剥片	8.9	2.7	26.0	黒頁
2	EQ-56G	剥片	4.5	2.9	15.3	黒頁
3	EQ-56G	剥片	5.5	4.7	43.4	黒頁
接合資料-35(第76図)						
1	EQ-56G	剥片	9.0	6.3	96.3	黒頁
2	EQ-56G	剥片	5.4	5.8	28.8	黒頁
接合資料-25(第77図)						
1	EO-57G	剥片	12.7	10.7	446.7	黒頁
	EO-57G	石核	12.3	6.8	276.4	黒頁
接合資料-37(第77図)						
1	EN-57G EO-57G	剥片	8.0	7.1	87.7	黒頁
接合資料-9(第78図)						
1	EK-55G	剥片	3.4	4.4	13.0	黒頁
接合資料-10(第78図)						
1	EK-55G	剥片	2.9	2.7	8.2	黒頁
接合資料-11(第78図)						
1	EK-55G	剥片	3.5	1.9	5.3	黒頁
	EK-55G	剥片	1.3	1.4	2.1	黒頁
接合資料-18(第78図)						
1	EN-57G	石核	6.3	4.3	81.1	黒頁
	EO-57G	剥片	1.8	3.5	9.7	黒頁
接合資料-20(第78図)						
1	EN-57G	剥片	5.3	5.6	42.4	黒頁
接合資料-22(第78図)						
1	EN-57G	剥片	4.2	1.9	7.9	黒頁
2	EN-57G	剥片	7.4	4.3	40.2	黒頁
接合資料-23(第78図)						
1	EO-58G	剥片	8.3	3.2	43.1	黒頁
2	EN-58G	剥片	3.5	2.5	7.9	黒頁
接合資料-24(第78図)						
1	EN-58G	剥片	2.5	2.5	8.5	黒頁
2	EN-57G	剥片	6.0	3.9	35.3	黒頁
接合資料-26(第78図)						
1	EO-57G	砕片	2.7	5.3	26.5	黒頁
	EO-57G	砕片	1.7	1.8	3.1	黒頁
接合資料-27(第79図)						
1	EN-57G	剥片	5.5	4.4	38.5	黒頁
接合資料-28(第79図)						
1	EN-57G	剥片	5.2	7.3	17.1	黒頁
接合資料-29(第79図)						
1	EN-57G	剥片	3.5	3.4	10.2	黒頁
接合資料-30(第79図)						
1	EN-58G	剥片	5.7	2.1	7.3	黒頁
接合資料-38(第79図)						
1	EQ-56G	剥片	6.8	2.8	19.8	黒頁

II 調査の成果

資料番号	出土位置 (グリッド)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-39(第79図)						
1	EQ-56G	剥片	4.1	1.6	3.6	黒頁
接合資料-40(第79図)						
1	EN-57G	碎片	(1.1)	2.0	1.2	黒頁
	EO-58G	剥片	2.4	2.1	2.3	黒頁
接合資料-36(第79図)						
1	EQ-56G	剥片	5.0	4.2	15.9	黒頁
2	EK-55G	剥片	3.0	4.8	26.4	黒頁

2. 縄文時代

2-1 白井北中道II遺跡

(1) 検出された遺構と遺物の概要

I～III区の約5,600㎡にわたる調査区内から検出された縄文時代の遺構は、時期不明の集石1基(1号集石)、前期の土坑2基(1・2号土坑)のみであり、遺構内容としては極めて希薄な状況であった。またその分布もI・II区に限定され、III区では上位段丘崖からの大きな礫塊の崩落もあり、何の遺構も検出できなかった。

それぞれの遺構の確認面は、1号集石がVII層上面であるが、1・2号土坑についてはIX層のローム層上面まで掘り下げた時点でようやく確認が可能となった。前項で述べたように、ローム層の上位には約50～80cm厚の縄文時代の遺物包含層(VI～VIII層)が存在しており、同層からは土器(3,400点)や石器(1,457点)などが多量に出土した。時期的には、草創期や早期の遺物が僅かに混じるが、そのほとんどは前期の諸磯b式期の新段階を主体とした遺物である。この包含層から出土する遺物の量的な多さから、VI～VIII層の各層中に竪穴住居を中心とした遺構が存在する可能性も想定して調査を進めたが、期待に反して集石以外の遺構を検出することはできなかった。こうした希薄な集石や土坑などの遺構により、多量の包含層出土遺物をもたらされたとは考え難いことから、隣接した調査区域外に竪穴住居を伴う集落が存在し、そこからの廃棄等により集積したものと想定される。

このような遺構・遺物の他に、IX層上面で24基の倒木痕が検出されている。埋没土の状況から見ると、その全てが同一時期に形成されたものではなく、複数の時期にわたるものと考えられる。いずれにしても、VIII層からVI層までの土層堆積期間中に形成され

ており、縄文時代の自然的環境を知る上でも重要であることから、転倒状況を中心に記録採取を行った。

(2) 土坑

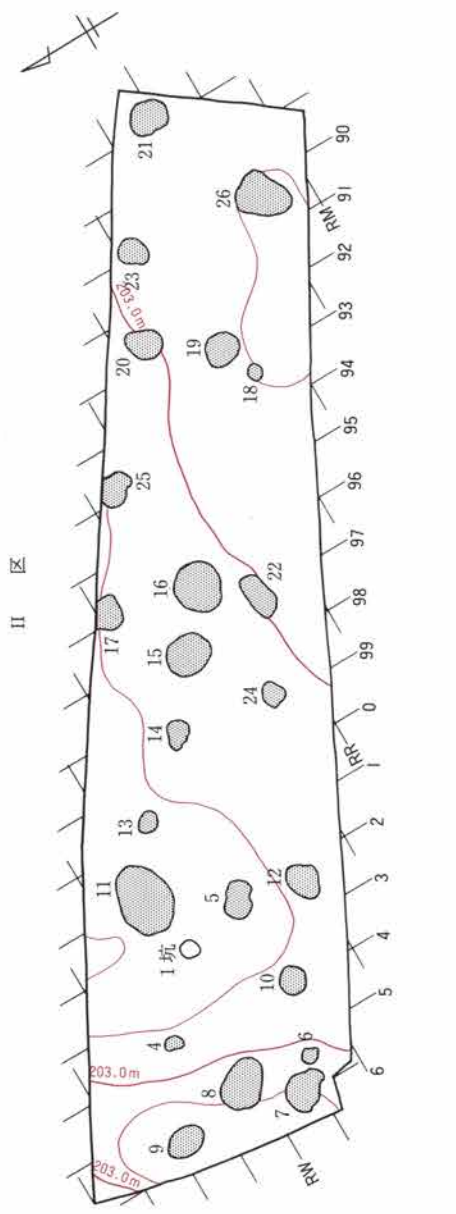
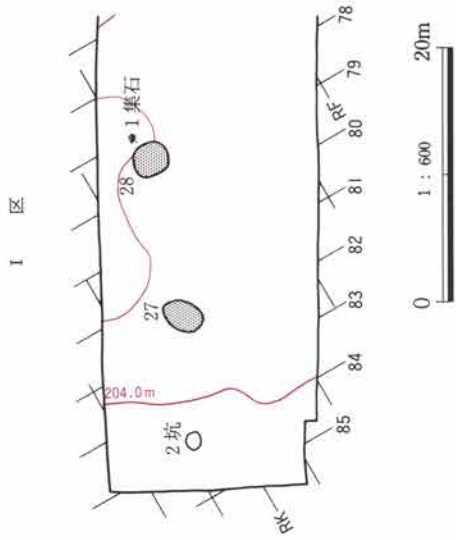
1・2区において、各1基の計2基(1・2号)が検出されている。各土坑ともにIX層上面にて確認したが、実際の掘り込み面が何層にあるのかは不明である。両坑の所属時期については、全く土器を伴出しないために特定することができないが、全体的な遺物包含層からの出土土器が前期諸磯b式期を主体とすることを重視すれば、同期の所産の可能性が高い。

その機能・用途については、形態的に1・2号ともに円形状を呈することや、埋没土の自然的堆積状況を加味すると、両坑ともに貯蔵穴として利用されたものと推定される。これら土坑の規模・形状等については、以下の通りである。

1号土坑 やや不整形な円形状の平面形を呈し、長軸1.44m×短軸1.40m、深さ25cmの規模を有する。黒褐色土を主体とする土層がレンズ状に堆積することから見て、自然的な埋没と考えられる。出土遺物には、埋没土中からの削器1点があるのみである。

2号土坑 正円に近い円形状の平面形を呈し、長軸1.2m×短軸1.08m、深さ35cmの規模を有する。坑内にはVI層やVIII層に類似した黒色土がレンズ状に堆積し、1号と同様に自然的な埋没状況を示す。尚、遺物の出土は、全く認められなかった。

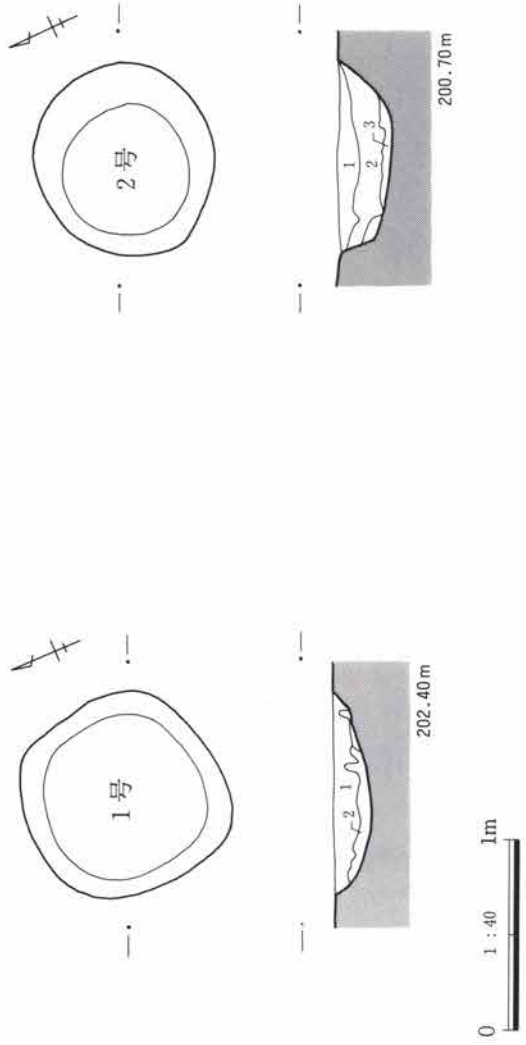
II 調査の結果



第96図 遺構の分布状況

埋没土層 (各土坑共通)

1. 黒褐色土 (10YR3/2) VI層に類似し、軽石粒 (As-D) を多量に含んだやや締まり良い土。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) VIIa層に類似し、軽石粒 (As-D) を少量含んだやや締まり良い土。
3. 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 2層にIX層ブロックが50%混入。締まり良い土。



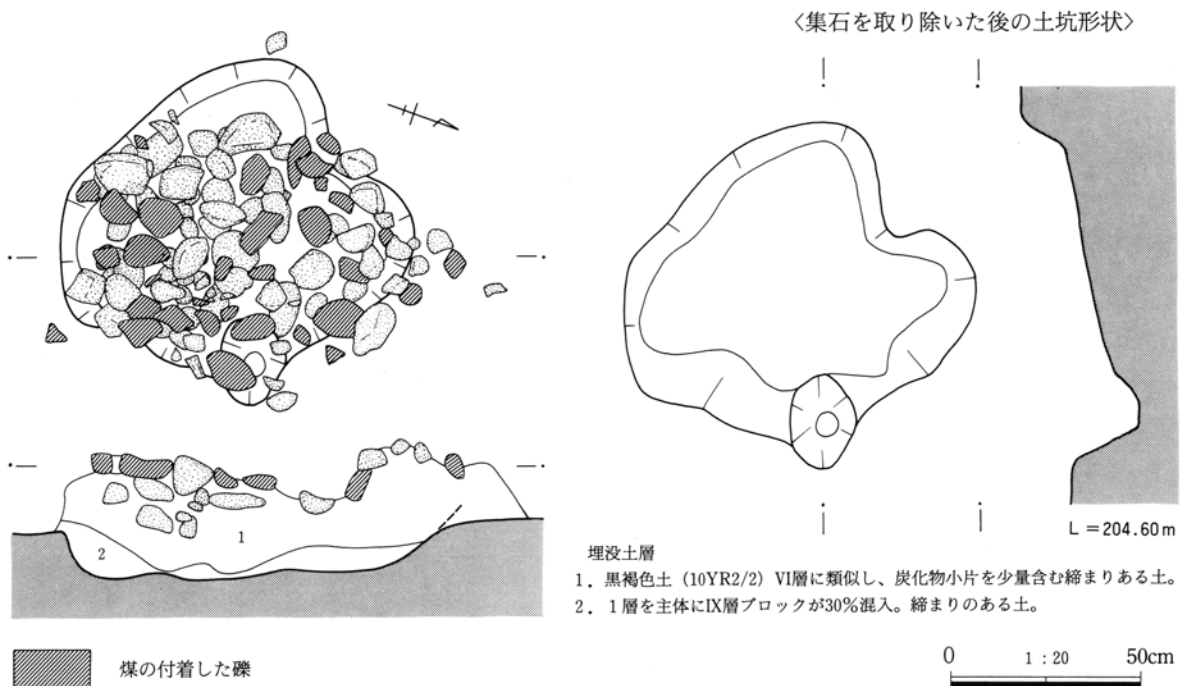
第97図 土坑と出土遺物

(3) 集石

1区において、1基(1号)が検出された。遺物包含層の層位的な調査過程で、VII層上面に数点の礫塊が集中していたことから、その存在を確認し得た。1号集石を構成する礫塊は総数127点、総重量約82kgであり、大きき的には径8~15cm、重さ300~1,000gとかなりのまとまりをもっている。石材には粗粒輝石安山岩(111点)の他に、砂岩・葉ろう石・珪質変質岩・流紋岩等(16点)があり、亜角礫状のものも若干認められるが、主体は河床礫である。これらほとんどの礫塊には、焼き火等の被熱によるひび割れや変色が認められ、割れた同一礫塊片が出土位置を違えて重層的に散在する状況も認められた。また、第98図のように、礫塊全体の58%にあたる74点に煤状の炭化物の付着が認められ、その多くは集石の表面に近い上位に位置していた。この集石下には、長径93cm×短径90cm、深さ約40cmの不正形な掘り込みが存在し、一部の礫塊はこの底面に密着していることから、集石と土坑状の掘り込みが有機的な関係を持つと考え

られる。この土坑状の掘り込み内からは、焼土・炭化物等は検出されていない。

こうした観察点を総合的に見ると、この集石はその上面で何らかの物質を加熱するために利用されたと考えるのが妥当であろう。しかし、掘り込み坑内に焼土・炭化物痕が見られないことや、被熱割れした礫が重層かつ散乱して出土している点は、これらの礫塊が別の地点で焼き火等により加熱された後に当箇所集積されて、加熱具として利用されたことを窺わせる。礫塊に付着した煤状炭化物の化学的分析を行っていないこともあり、その具体的な用途を特定することはできないが、早期に見られる「アース・オープン」に類似した機能が想定される。



第98図 1号集石

II 調査の結果

(4) 倒木痕

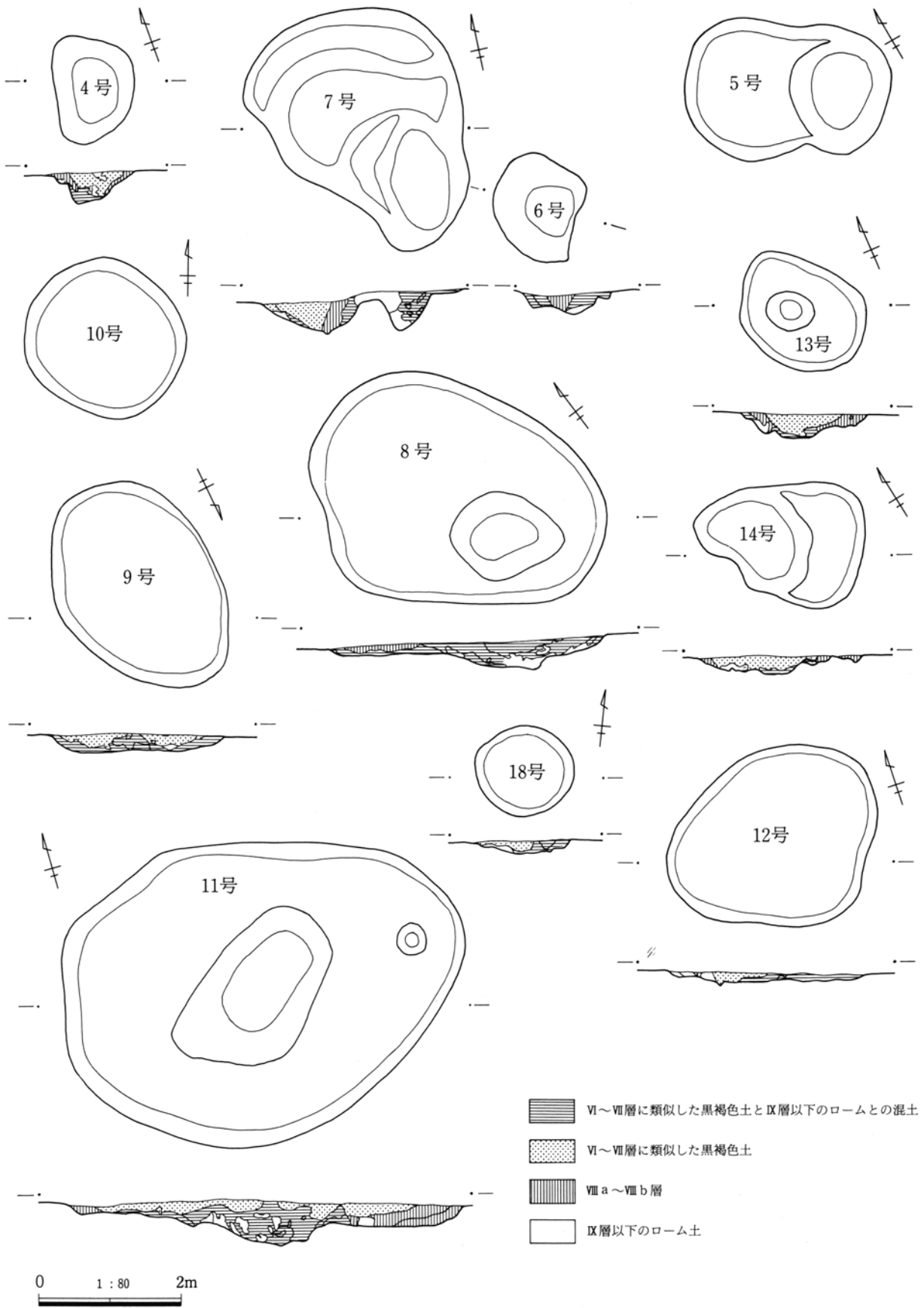
IX層のローム上面において、1区では2基、2区では22基の計24基の倒木痕を検出した。個々の規模や形状については第2表を参照されたいが、11号のように長径が約6mの大きなものから18号のように2mに満たない小さなものもある。形状も様々であるが、円形や楕円形を基調とするものが多く、底面は凹凸が激しいながらも浅いすり鉢状を呈している。倒木痕が前述の土坑と区別できるのは、こうした特徴とともに従来から言われているように、埋没土の観察において、標準土層に対比される土の堆積や黒色土の上位にピュアなローム土が逆転堆積するという状況が認められるからである。これらの諸様相は、人為的に生成されたとは考えにくく、むしろ現在でも台風の直撃などにより転倒した樹木の根が巻き上げる土のあり方に対比できる。従って、人為的な営為によるものではなく、基本的に遺物を伴うことはないために、その出来した時期を見定めるこ

とは難しい。しかし、逆転土層の堆積が良好なものは、それが標準土層のどれと対比されるかにより、ある程度推察が可能である。また、各土層内に包含された遺物から、より詳細な時期を推察する方法もあるが、各標準土層とも複数時期にわたる遺物を伴出しており、正確さを期すことは難しい。このような観点から各倒木痕の時期を見ると、5・9・10・12・17・18・20・21・23・26号を除いた他の全てが、VIII a層あるいはVIII b層以下を巻き込んでおり、同層の形成段階(縄文時代前期)に近接した時期が想定される。また、26号はVII層以下を巻き込んでいることから、時期的には前述の倒木痕よりも後出のものであり、かつ同層の形成段階(同中期)に近いと考えられる。その他の倒木痕についても、縄文時代の中で形成された可能性が高いと思われる。尚、当遺跡の倒木痕調査では、逆転埋没土層の断面観察を主体としたため、吹屋犬子塚・中原遺跡のように平面図にて表示することや、その転倒方向を割り出すことがなし得ていない。

第2表 倒木痕の規模一覧

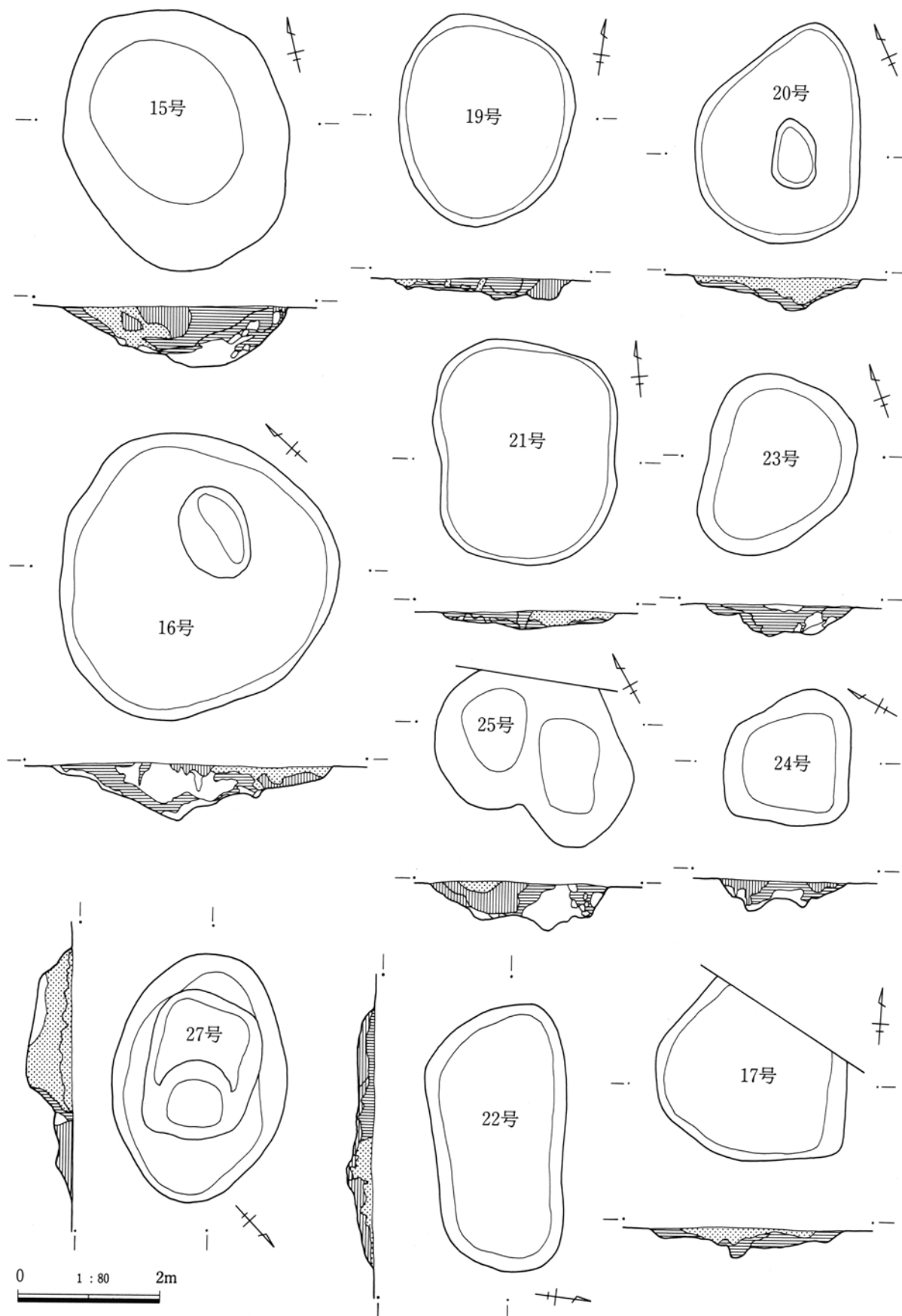
(単位: cm)

番号	位置	規模 長径×短径×深さ	埋没土 の内容	番号	位置	規模 長径×短径×深さ	埋没土 の内容
1		欠番		15	RS-98	360×320×84	VIII a~IX
2		欠番		16	RS-97	400×390×80	VIII b・IX
3		欠番		17	RT-96	300×210×40	IX
4	RX-04	150×110×44	VIII b・IX	18	RP-94	140×130×20	IX
5	RU-02	300×220×?	不明	19	RP-93	290×250×30	VIII b・IX
6	RU-06	160×140×30	VIII b・IX	20	RQ-92	310×230×44	IX
7	RV-06	340×270×60	VIII b・IX	21	RO-88	320×260×20	IX
8	RW-06	420×320×40	VIII b・IX	22	RR-97	370×200×36	VIII b・IX
9	RX-06	300×220×30	IX	23	RP-90	260×200×44	IX
10	RU-04	240×220×?	不明	24	RR-99	190×180×45	VIII b・IX
11	RW-02	560×430×60	VIII b・IX	25	RT-94	280×220×64	VIII a~IX
12	RT-03	310×250×20	IX	26	RN-91	440×330×80	VII~IX
13	RV-00	180×140×32	VIII b・IX	27	RJ-82	340×250×70	VIII b~XI
14	RV-99	240×180×30	VIII b・IX	28	RI-79	300×270×60	VIII b・IX

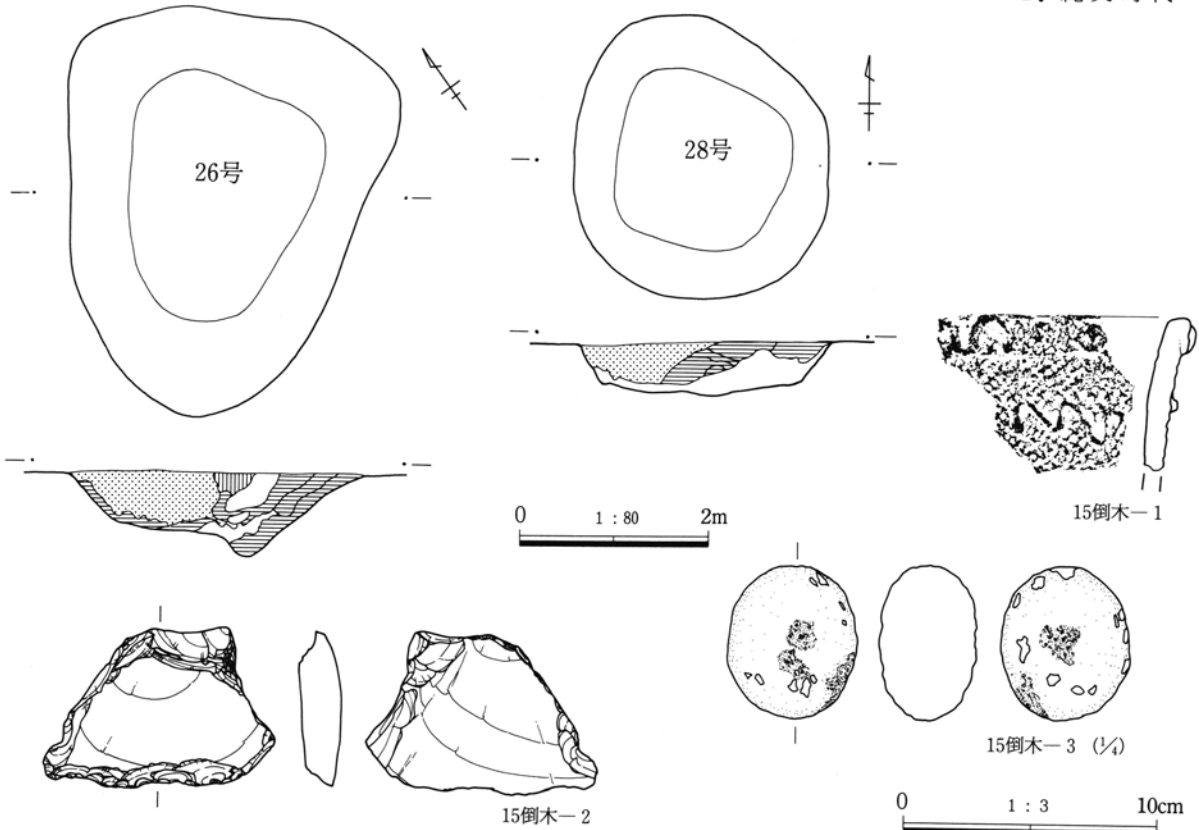


第99図 倒木痕(1)

II 調査の結果



第100図 倒木痕(2)



第101図 倒木痕と出土遺物

(5) 包含層の出土遺物

A. 出土状況

前項でも既述したように、I～III区の5,600㎡の範囲には、6世紀第2四半期に降下した榛名山二ツ岳軽石の下位に、50～80cm厚の縄文時代の遺物包含層が存在している。具体的には、VI層の黒ボク土、VII層の淡色黒ボク土、VIII層の黒褐色土の三層がそれに該当する。

時期的に見ると、草創期前半から後期までの長期にわたる土器や石器の出土が認められ、総量的には土器3,400点、石器1,457点を数える。それら遺物の帰属時期と出土層位との関係については、新旧段階のものが少なからず混在し、厳密には明確な相関性をとらえ難いが、総体的に見れば下層から上層への時間的変遷が認められる。こうした遺物の混在現象は、オープンサイトでは往々にして認められるものであり、基本的には後世での土壌攪乱が生じている

ためと考えられる。この一要因としては、調査区域内に24基検出されている倒木痕の存在を考慮する必要があるだろう。

土器の時期別の内訳は、第3表に示したように、草創期後半1点、早期前半2点、早期後半4点、前期3,341点、中期15点、後期37点であり、前期が最多数を占めている。また、前期の中で最多を数えるのは、諸磯b式の2,687点であり、諸磯c式の611点がこれに次ぐ。有尾式・黒浜式や諸磯a式などは、総計しても38点に止まり、当遺跡が諸磯b・c式期を主体としていることがわかる。各土器型式の層位別出土数については、諸磯b・c式ともにVI～VIIIb層にまでまたがっているものの、総量的にはVI・VII層を中心に出土しており、両層が当該期の文化層であった可能性が高い。中・後期の土器は52点と少量ではあるが、その出土層位は65%のものがVI層に集中しており、前期との比較においてはほぼ整合的である。草創期や早期については数量が少なく、出土層位の傾向把握はできない。

II 調査の結果

遺跡内における土器の総体的な分布傾向については、付図のドットマップに示したように、中位段丘のほぼ中央部に当たるII区を中心としており、I・III区は少数がその外縁的な散布をするに過ぎない。土器総数の97%を占める諸磯b・c式土器のII区における分布は、RR~RV-96~101グリッドの範囲にほぼ重複しており、両時期が継続的に同一地点を利用した状況が窺える。しかし、調査区内では遺構がほとんど検出されていないことから、その地点利用は廃棄場的なものであったことが想定される。

一方、石器については、器種別に見た場合、削器が356点(使用痕を持つ剥片144点を含む)と最も多く、打製石斧の127点、凹石・磨石類の54点がそれに次ぐ。石鏃をはじめ他の器種は僅少であるが、三角錐形石器1点やスタンプ形石器5点が認められることは注意される。

各石器を大工原豊氏の系列分類法(大工原：1996)に即してその石材を見ると、石鏃を除く石匙・削器・石斧などの「打製系列」の石器には黒色頁岩が多用され、全体の76%を占めている。またそれらの石核や剥片に占める黒色頁岩の比率も50%・71%とほぼ同様の傾向を見せており、「打製系列」における同石材の優位性を物語っている。石鏃は15点と少量ではあるが、黒曜石とチャートで80%を占め、他の「打製系列」の石材傾向とは際だった差異をみせる。磨石・石皿等の「使用痕系列」の石器には、粗粒輝石安山岩が50%と多用されており、「打製系列」とは明らかに性状の異なる石材を選定している。

出土層位では、石鏃やスタンプ形石器を除いて、石器の78%がVI・VII層を中心に検出されている。これとは対照的に、草創期後半の擦糸文土器群に共伴することが判明しているスタンプ形石器は、その90%がVIII a・VIII b層から出土しており、前述の石器とは所屬時期の異なることが想定される。

遺跡内での分布傾向は、II区を中心にして諸磯b・c式土器とほぼ同位置に散在している。こうした土器との層位、分布および総量的関係から見れば、従来の研究により時期の特定されるスタンプ形石器や

三角錐形石器、それにいわゆる鋏形鏃的な凹基や凸基の石鏃を除いて、大半の石器が諸磯b・c式段階に比定されると考えて良いだろう。

(写真：PL31~49)

B. 出土土器の概要

各土器の文様を主体とした分類や、縄文原体・胎土・大きさ・部位・出土位置・層位などについては351~356・359・360頁に一括してある。ここでは大別時期や細別型式を単位にして、概括的な特徴を述べるに止める。

a. 草創期後半の土器(第103図 1)

1点のみが検出されている。原体は、細かい節の絡条体Rがまばらに施文されており、稻荷台式の特徴を有する。

b. 早期の土器(第103図 2)

表裏面に2と同様の多截竹管状工具による条痕文を持つものが4点、無文が2点存在する。条痕文土器は胎土に結晶片岩や繊維を多量に含み、いずれも後半段階に比定される。無文土器は胎土に長石粒を含み無繊維であることや表裏面の丁寧な研磨状態などから、沈線文土器と併行期の前半段階であろう。

c. 前期の土器(第103~107図 3~106)

有尾式6点(3~5)、黒浜式21点、諸磯a式11点(7)、諸磯b式2,686点(6・8~66・77・95~99・101~104)、諸磯c式611点(67~76・78~94・100)、興津式5点(105・106)などが存在する。これらの数量からも明かのように、有尾式、黒浜式、諸磯a式の三型式の出土点数を総計しても40点に満たない。ここでは、量的に豊富な諸磯b・c式の特徴について記述しておきたい。

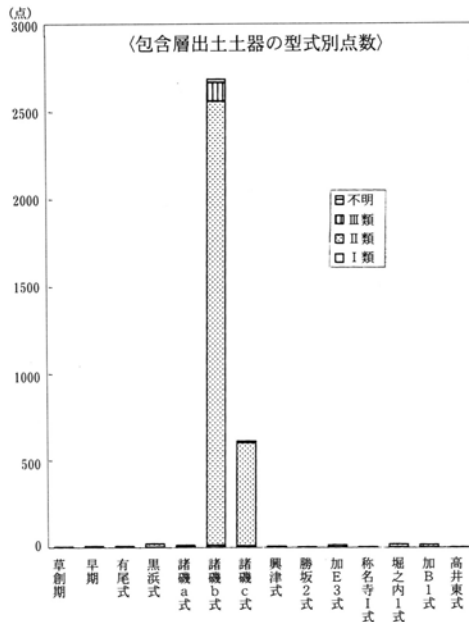
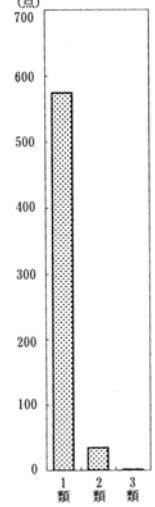
諸磯b式 類別不能な小破片953点を除いて、縄文地に対弧・凡字状や横位の平行集合沈線文を施す2類718点(8・9・12~37)、縄文地のための5類536点(48~57・95~99・101~104)、横位・斜行・矢羽根状などの平行集合沈線文を多段に施す4類372点(38~46)、浮線文をもつ3類36点(10・11)、爪形文の1類6点(6)などの深鉢のほか、浅鉢の7類65点

2. 縄文時代

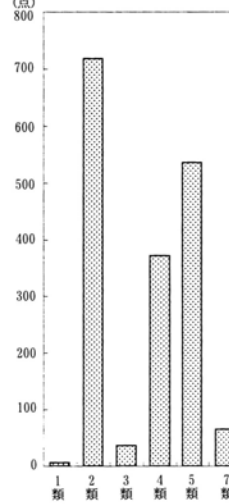
第3表 包含層出土土器の型式別・層位別一覧

	草創期	早期	前期					中期			後期				合計
			有尾	黒浜	諸a	諸b	諸c	興津	勝坂2	加E3	称I	堀1	加B1	高井東	
VI層	0	4	3	4	5	1038	238	0	0	11	0	12	10	1	1326
VII層	0	1	0	9	5	1007	238	3	1	2	1	5	4	0	1276
VIIIa層	0	0	2	4	0	455	93	1	1	0	0	2	1	0	559
VIIIb層	0	0	0	3	0	85	20	0	0	0	0	0	0	0	108
不明	1	1	1	1	1	102	22	1	0	0	0	0	1	0	131
合計	1	6	6	21	11	2687	611	5	2	13	1	19	16	1	3400
I区	0	0	1	0	0	11	8	0	0	0	0	0	0	0	20
II区	0	5	3	20	9	2551	593	5	2	12	1	19	16	1	3237
III区	1	1	2	1	2	107	2	0	0	1	0	0	0	0	117
不明	0	0	0	0	0	18	8	0	0	0	0	0	0	0	26
合計	1	6	6	21	11	2687	611	5	2	13	1	19	16	1	3400

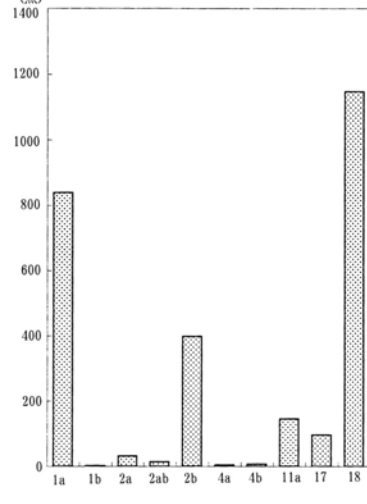
〈諸磯c式の類別点数〉



〈諸磯b式の類別点数〉



〈諸磯b式の縄文原体〉



第102図 包含層出土土器の器種組成と石材構成

諸磯b式の分類別点数

1類	2類			3類		4類	5類			7類	不明	合計
	a	b	不明	a	b		a	b	c			
6	16	337	365	31	5	372	294	125	117	65	953	2686

諸磯b式の原体種別点数

1類		2類			4類		11類	17類	18類	合計
a	b	a	ab	b	a	b				
839	2	31	14	398	4	7	145	99	1147	2686

諸磯c式の分類別点数

1類		2類	3類	不明	合計
a	b				
570	4	34	1	2	611

諸磯c式の原体種別点数

2a類	17類	18類	合計
1	2	608	611

(66)がある。

最多数を占める2類は、口頸部に凡字状や弧状の平行沈線文を施す2a類16点(9)を含むものの、口頸部から体部下半にかけて横位の集合沈線文を多段に施す2b類(12~37)が337点と主体を占める。こうした傾向から見て、文様構成の判別できない365点の大半は2b類に属すると考えられる。

4類はほぼ全面に集合沈線文が施文されて、縄文地の存在が不明瞭である。しかし、詳細に観察すると一部分には縄文

II 調査の結果

が痕跡的に残されており、基本的に地文を施すが、集合沈線文により掻き消されていると理解される。また口唇部には篋・竹管状工具による刻み目や横位の刺突が施され、耳状の縦位貼付文も付加される点で特徴的である。2類や4類の口頸部の器形を見ると、2類では「く」字状に内折するものが多く、4類では直立気味に外傾するという顕著な差異が認められる。

基本的に縄文のみを施す5類は、口唇部への加飾や耳状貼付文の有無によりa～cに細分類されるが、口唇部への無加飾の5a類(48～55)が294点と最多を数える。口唇外端に縦位の刻み目や刺突を施す5b類(56・57・97)の125点がこれに次ぎ、耳状・円形状の貼付文を付加する5c類(95・96)も117点存在する。この耳状貼付文や口唇部の刻み目・刺突文などは、4類にも認められる要素であり、両者の平行関係を示すものと考えられる。また5類の器形には、口縁部の外傾または外反するものが多いが、短く「く」字状に内折するもの(52・53)などは、先と同様に2類との時間的な近縁性を窺うことができる。

縄文原体は、無節が841点と全体の58%を占めるが、その内訳はLが839点とRを圧倒している。次いで多いのは、単節の443点(RL:398点、LR:31点、両者併用:14点)で、他に結束第1種の単節145点、0段多条の単節11点などがある。これらを基本撚り(0段時)に置き換えると $r:1=1:0.03$ となり、 r の卓越する状況が認められる。各類別単位で見ると、2類では無節が約7割強を占め、単節は3割に満たない。5類でもこれに類似し、無節8割強、単節2割弱である。4類では密集した集合沈線文により掻き消されて原体の判読できるものが少ないが、無節が約6割、単節が4割となる。しかし3類では無節は皆無であり、単節RLが9割弱を占める。

胎土については、84点のサンプリングによる結果ではあるが、各類を通じてBタイプが79点(94%)と最も多い。また、少量ながら各型式を通じて必ずといって良いほど組成の一部をなす結晶変岩を含むeタイプが全く存在しない点で、注意される。

当遺跡の諸磯b式は、1・3類が極めて少量で、かつ2・4類を中心に行っていることを考えれば、諸磯b式の中でも新しい段階に帰属すると見て良い。

諸磯c式 集合沈線文や耳状・円形状の貼付文をもつ1類574点(67～76・78～93)を主として、結節沈線文により渦巻文を描く2類34点(94)、口縁部に耳状貼付文をもつ縄文地文の3類1点(100)などがある。1類は文様構成や器形の判明するものが少ないが、貼付文の加飾や段状の屈曲に乏しい文様的な特徴から1a類に類別されるものが570点と99%を占め、結節浮線文の1b類は4点に止まる。耳状・円形状貼付文の付加が著しい88～90や折り返し状の口唇部を持ち口頸部に縦位の棒状貼付文を施す91・92などは、1a類の中でも新しい段階に位置付けられるが、数量的には1b類や2・3類などと同様に僅少である。全体的に1a類が主体を占める点は、諸磯c式の前段階を中心にしてそれ以降の活動が低調であることを示すものであろう。

胎土については、45点のサンプリングによる結果では、Bタイプが8割弱を占め、他にAタイプが1割強となる。

その他 興津式が総数5点(105・106)検出されているのみである。それらのいずれも小破片のために文様構成などの詳細は不明であるが、おそらく諸磯b式新段階や同c式に併行するものであろう。

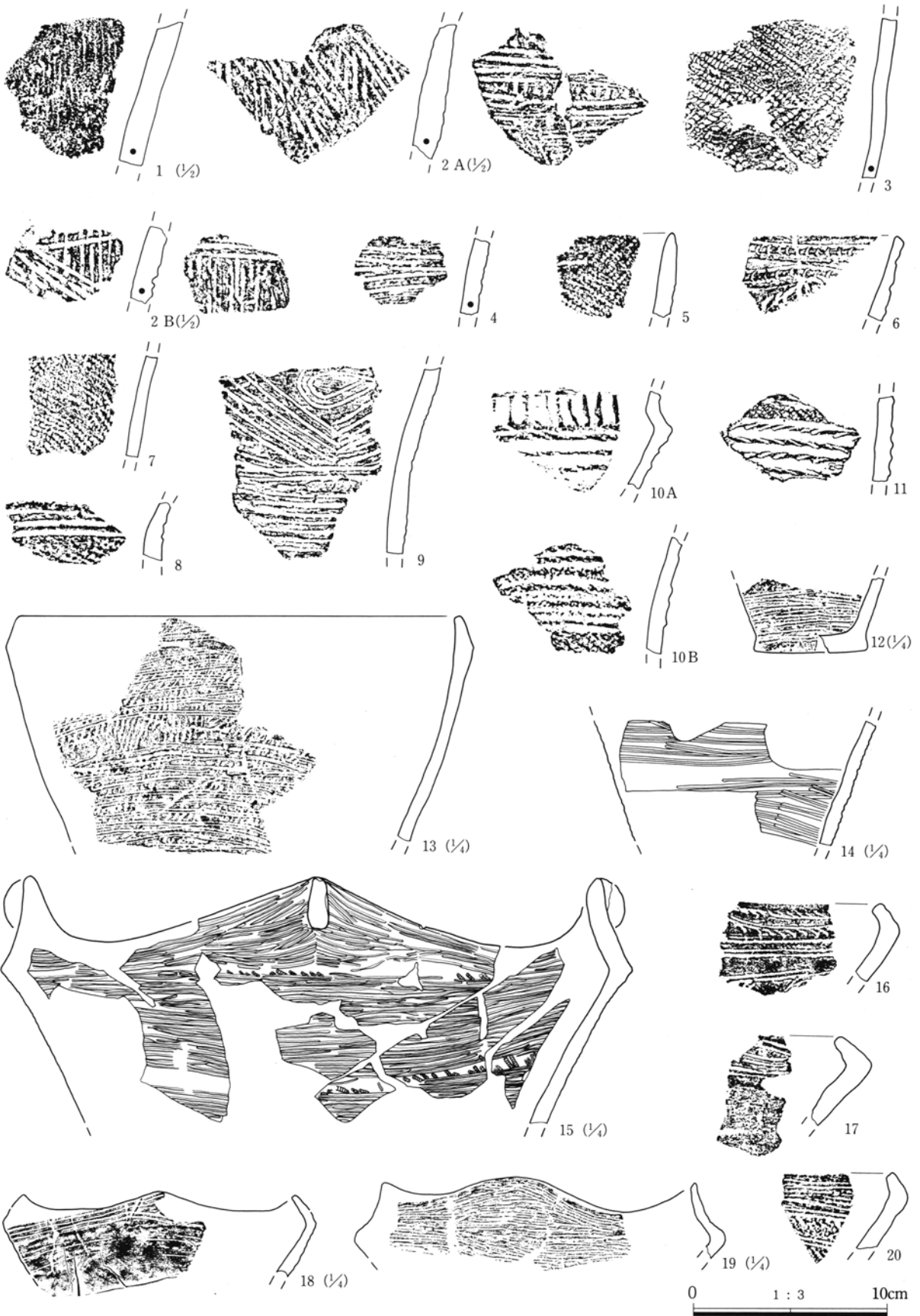
d. 中期の土器(第107図 107～109)

勝坂式2式は2点(107)、加曾利E3式は13点(108・109)が存在するのみである。出土層位は、加曾利E3式の場合、13点のうち11点がVI層中からの出土である。また縄文原体は単節RLが11点、無節Lが2点で複節はなく、単節が主体を占める。

e. 後期の土器

称名寺I式1点、堀之内1式19点、加曾利B1式16点、高井東式1点などがII区の西半部を中心に出土しているが、高井東式を除いていずれも小破片のため図としては掲載していない。出土層位は、62%がVI層に、27%がVII層に集中しており、他期に比べてより上層からの出土傾向が強い。

2. 縄文時代



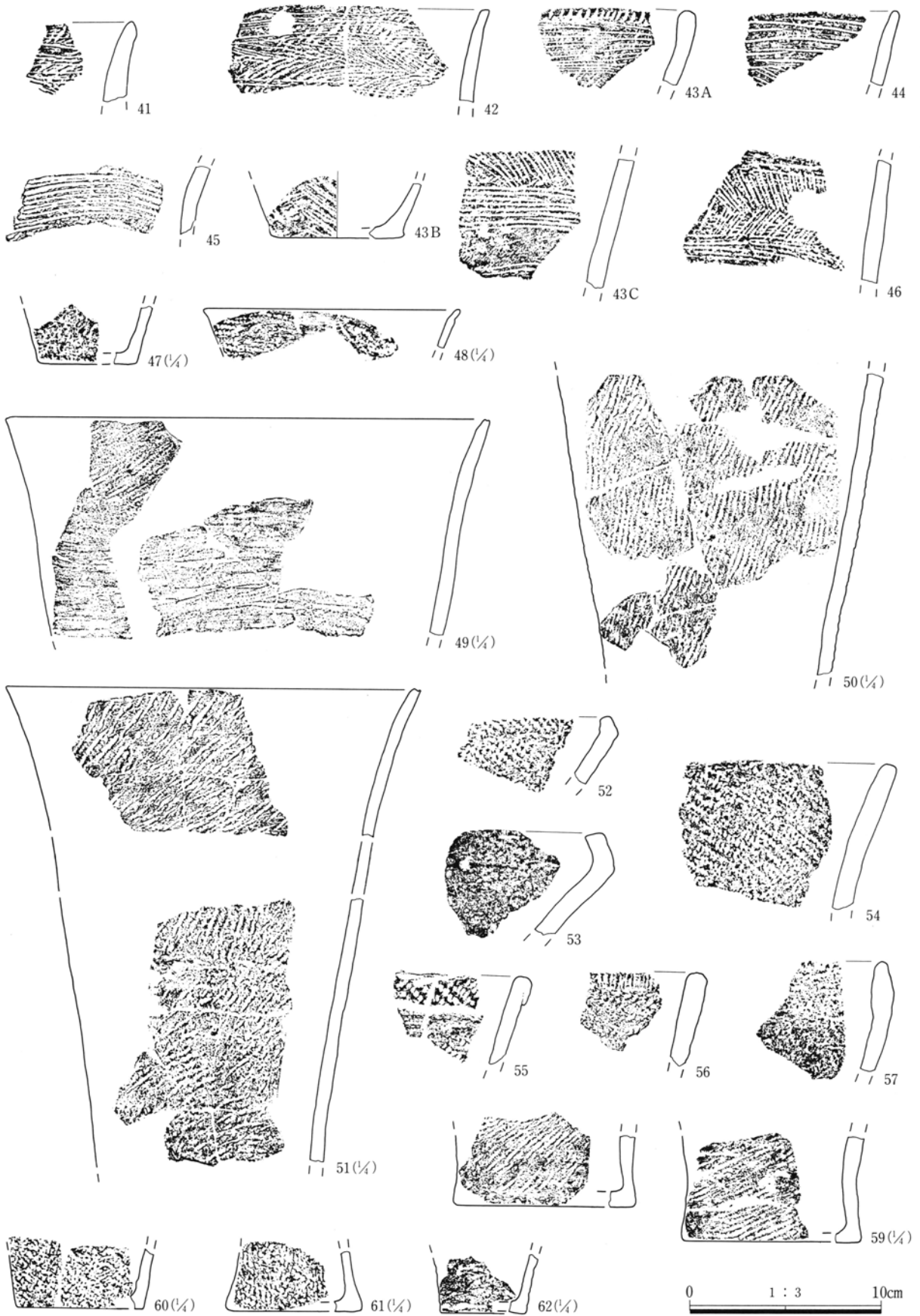
第103図 包含層出土の土器(1)

II 調査の結果



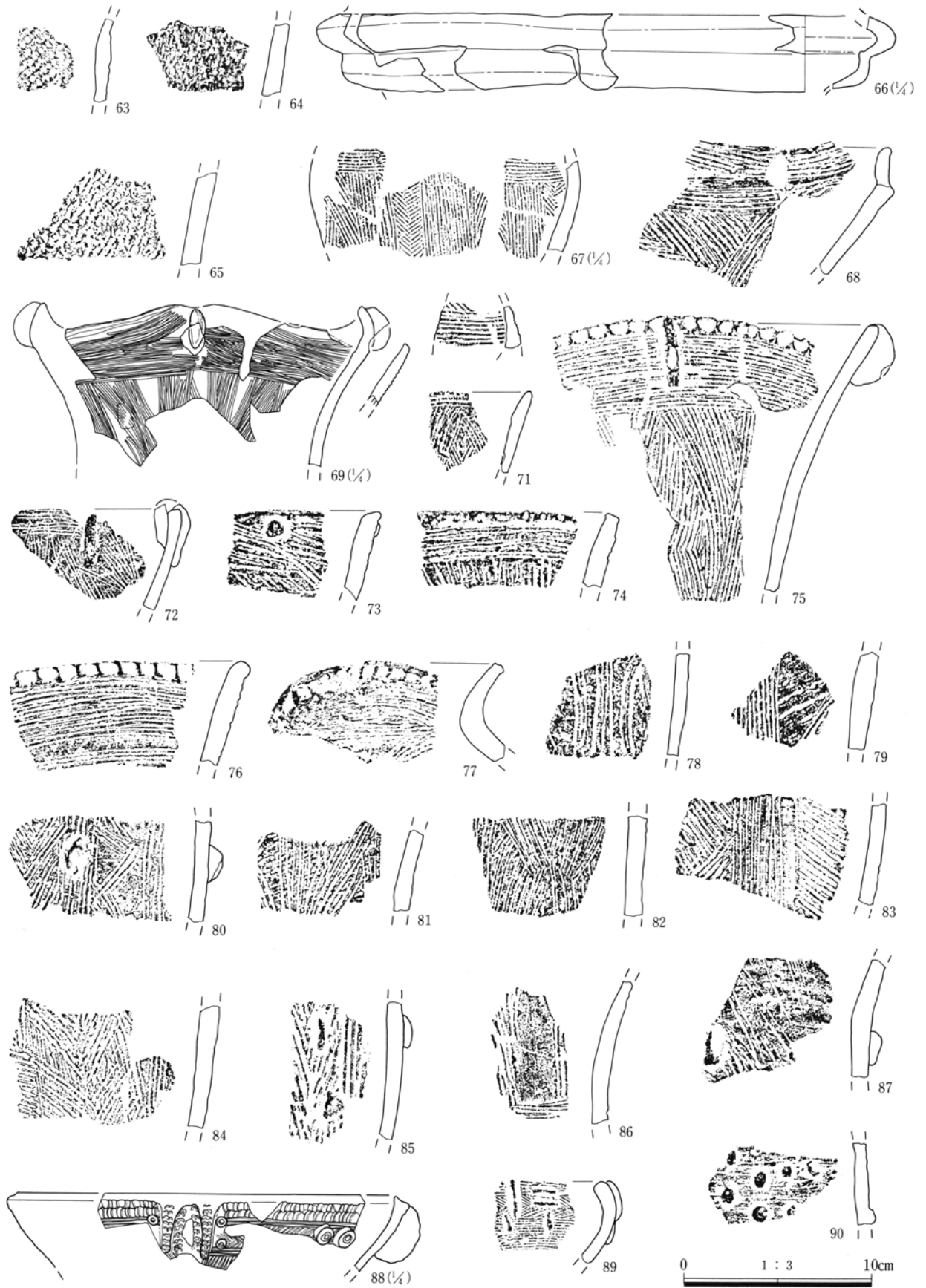
第104図 包含層出土の土器(2)

2. 縄文時代



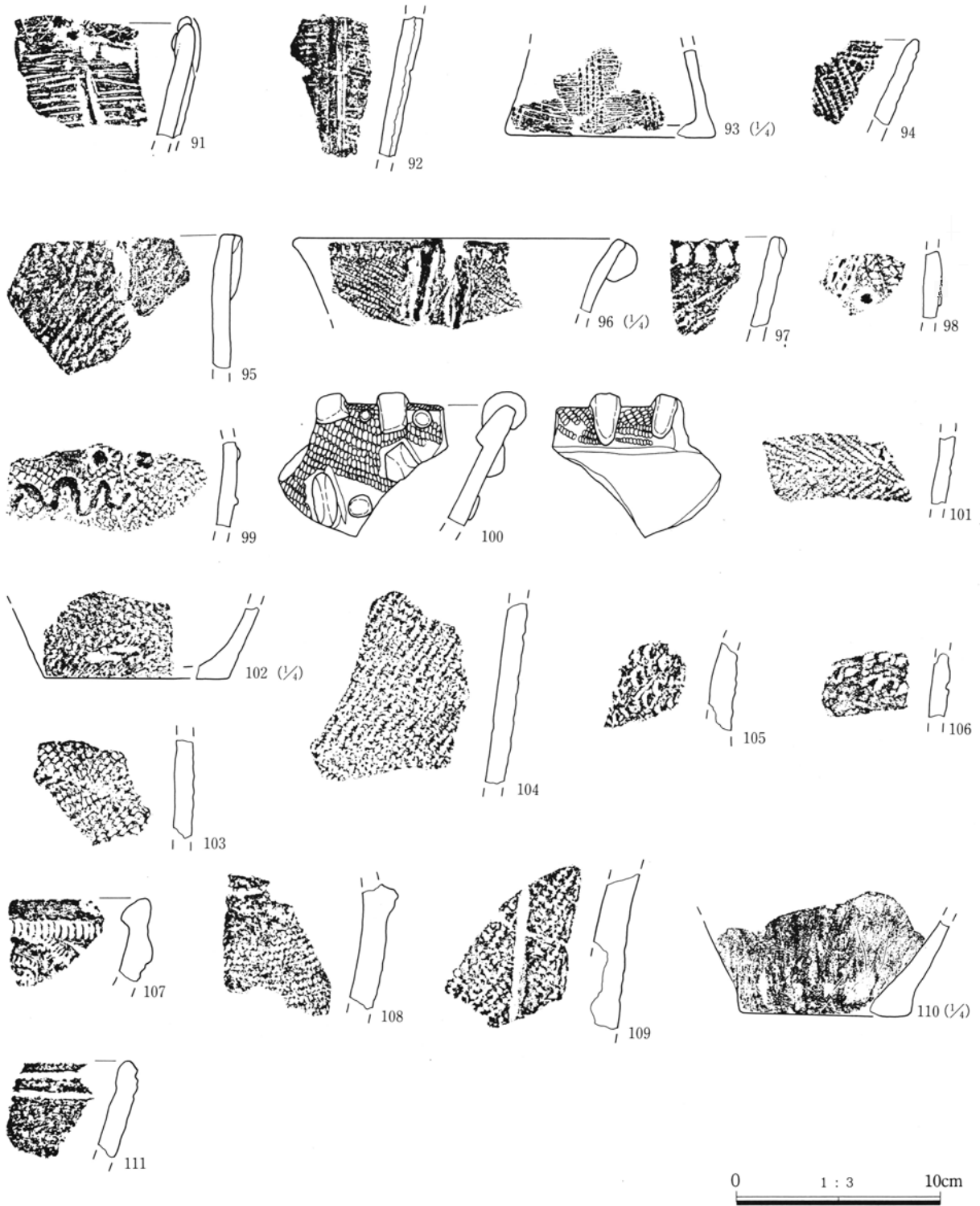
第105図 包含層出土の土器(3)

II 調査の結果



第106図 包含層出土の土器(4)

2. 縄文時代



第107図 包含層出土の土器(5)

II 調査の結果

C. 出土石器の概要

1,456点の石器・剥片の類が出土しているが、剥片類が全体の54%を占める。「打製系列」の中で主体となるのは、使用痕を有する剥片を含めた削器356点であり、打製石斧127点、礫器的なものを含めた器種の同定できない加工痕を有するもの48点、石鏃15点などがそれに次ぐ。「使用痕系列」では、凹石・敲き石を含めた磨石類が54点と最多を数え、スタンプ形石器5点などが主だったものである。「複合技術系列」では、磨製石斧4点、多孔石2点が存在するのみである。各石器の出土地点は、その81%がII区に限定され、また出土層位はVI層に43%、VII層に34%が集中している。

尚、各器種の分類基準や内容、計測値・石材等については、357・358・360～363頁を参照されたい。

a. 石 鏃(第113図 1～13)

欠損品6点を含めて15点が存在するが、ある程度形状の判別できるものは全て掲載した。大まかに見れば、無茎(1～5類)と有茎(6・7類)の二者に大別される。無茎の場合、基部が弱く湾曲状に挟れる2類(4～7)とノッチ状に挟れる鋏形鏃的な3類(1・2)、基部がV字状に深く挟れる4類(3)、それに基部が円弧状の5類(11・12)が認められる。有茎では、基部が平坦な6類(8)、基部が突出する7類(9・10)などがある。石材で見ると、黒曜石製9点(60%)、チャート製3点(20%)、黒色頁岩製と変質安山岩製が各1点であり、その内の2・5類は全て黒曜石製で、3類はチャート製という偏在性が認められる。何分にも点数が少ないことから、こうした傾向が有意なものか否か断定できないが、注意する必要があるだろう。また、黒曜石製のものの中に原石の表皮を残す例(6・12)があり、石核となる原石のサイズが極めて小振りであったことが想定される。各石材については、チャートを除いて石核や調整剥片が検出されており、当遺跡内での石鏃製作が想定できるが、チャート製については完成品としてもたらされている可能性が高い。

出土位置はII区11点、I区4点とほぼII区に限定されるが、出土層位はVI～VIII層にまたがり、各形態との有意な関係は認められない。

b. 石 槍(第113図 14)

黒色頁岩と黒曜石を用いた各1点の出土が確認されているが、いずれも欠損している。14は体部中位を残すのみで、先端部と基部を欠損している。両面に丁寧な押圧剥離を施しており、有舌尖頭器の可能性もある。

c. 石 錐(第113図 15～17)

黒曜石とチャートを用いた各2点の計4点が存在する。II区から2点、I・III区から各1点の出土で、層位はVI・VII層に集中する。横長あるいは縦長の不定形剥片を素材とし、機能部はやや粗雑な押圧剥離により作出されている。また「つまみ部」は剥片の打点側に位置するが、その作出はあまり顕著には認められない。

d. 石 匙(第113～114図 18～21)

横型1点(18)と縦型3点(19～21)の計4点が存在する。機能部は、剥片形状をあまり変えることなく、片面方向からのやや粗い加工により作出されている。石材は、黒色頁岩が3点、頁岩が1点である。

e. 削 器(第114～119図 22～116)

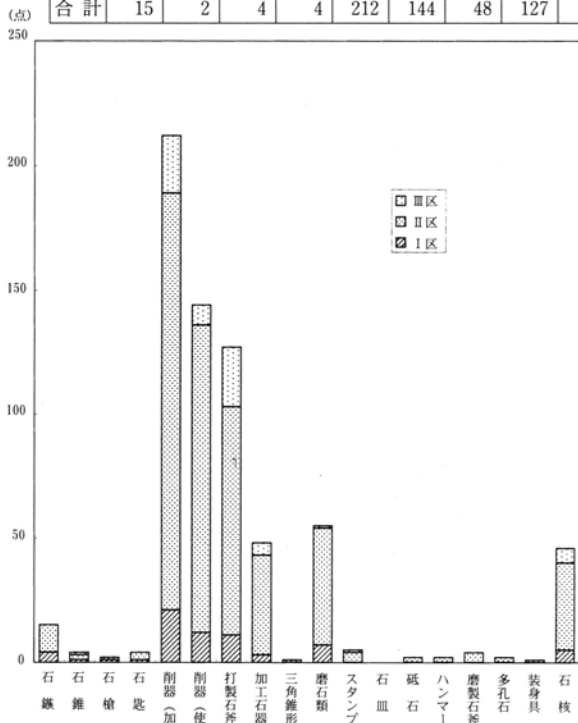
不定形の横長剥片や縦長剥片を用材として、その縁辺部に粗雑な刃部加工を施すもの(22～88)と、刃こぼれ状の使用痕を有するもの(89～116)の二者があるが、加工の有無に関わらず機能部の部位や全体形状などが共通することから、ここでは両者を併せて削器として分類しておきたい。各器種を通じて最も出土点数が多く、前者は212点、後者は144点が存在し、その81%がVI・VII層内からの出土である。

剥片形状による分類では、円・縦位楕円形状を1類、横位楕円形状を2類、台形状を3類、三角形状を4類、逆三角形状を5類、縦位長方形形状を6類とした。また、加工および使用痕の存在する部位による分類では、バルブ除去の加工を含めてA～K類まで11分類してある。

形状分類では、4類のバルブを除去するための加

第4表 包含層出土石器の器種別・層位別一覧

	打 製 系 列									使 用 痕 系 列				複 合 技 術 系 列			そ の 他		合計	
	石鏃	石槍	石錐	石匙	削器1	削器2	加工	打斧	三角錐	凹石類	スタンプ	石皿	砥石	ハンマー	磨斧	多孔	装身具	石核		剥片
VI層	4	0	2	1	107	59	26	56	1	20	0	0	1	2	1	0	1	19	335	635
VII層	3	1	2	2	65	57	7	54	0	21	1	0	1	0	3	0	0	18	255	490
VIIIa層	6	1	0	1	25	15	10	9	0	9	3	0	0	0	0	2	0	3	112	196
VIIIb層	2	0	0	0	10	10	3	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	4	58	92
不明	0	0	0	0	5	3	2	6	0	3	0	0	0	0	0	0	0	2	23	44
合計	15	2	4	4	212	144	48	127	1	55	5	0	2	2	4	2	1	46	783	1457
I区	4	1	1	1	21	12	3	11	0	7	0	0	0	0	0	0	0	5	94	160
II区	11	1	2	3	168	124	40	92	1	47	4	0	2	2	4	2	1	35	646	1185
III区	0	0	1	0	23	8	5	24	0	1	1	0	0	0	0	0	0	6	43	112
合計	15	2	4	4	212	144	48	127	1	55	5	0	2	2	4	2	1	46	783	1457



第108図 包含層出土石器の器種別点数

〈各種石器の分類別数量一覧〉

石 鏃

分類	2類	3類	4類	5類	6類	7類
合計	5	2	1	2	2	3

石 匙

分類	横型	縦型
合計	1	3

削器1(加工痕)

分類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	不明
合計	39	75	28	22	21	26	1

削器2(使用痕)

分類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	不明
合計	23	44	24	14	16	19	4

打製石斧

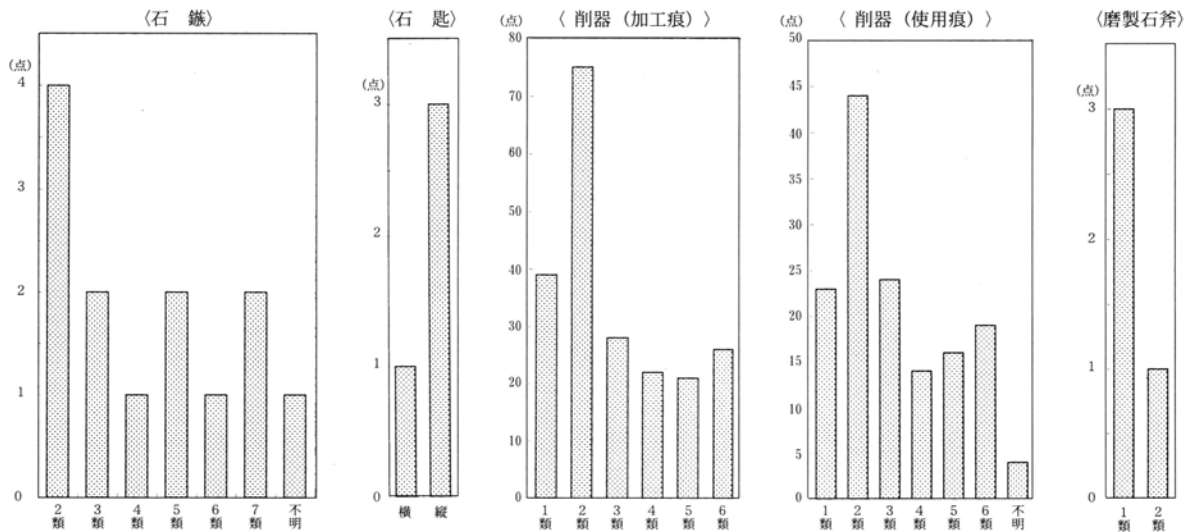
分類	1類	2類	3類	4類	5類	不明
合計	40	22	8	2	8	47

磨製石斧

分類	1類	2類
合計	3	1

凹石・磨石・敲石類

分類	1類	2類	3類	不明
合計	32	14	7	2



第109図 各種石器の分類別点数(1)

II 調査の結果

工や折除を行った場合は、3類に分類され、1類や5類の下半部を折除すれば6類に分類されるというように相互に関係性を有しており、元来の素材形状だけでなく加工による変形を含んだ分類となっている。素材形状を重視すれば、2～4類は横長剥片であり、1・5・6は縦長剥片を基本的に用いている。各類の中で最多となるのは2類の119点(34%)であるが、他も10～18%の比率で安定的に存在し、極端な数量偏差は認められない。横長剥片系は207点(59%)、縦長剥片系は144点(41%)である。

一方、加工・使用部位による分類では、下縁部を刃部とするA類の88点(26%)、片側縁部のB類68点(21%)、下縁部と片側縁部のD類40点(12%)などが主たるものであり、他はいずれも7%に満たない。横長剥片系ではA類が38%、縦長剥片系ではB類が37%と主体を占め、前者は下縁部を後者は片側縁部をそれぞれ機能部とする傾向をもつ。また約65%のものが、片面あるいは一部に原石の礫面を残している点で特徴的である。

平均的な大きさ(縦幅×横幅)や重量は、横長剥片系が52mm×70mm・重さ68g、縦長剥片系が63mm×50mm・重さ59gであり、両者ともに類似した大きさを有する。こうした点は、用材としての剥片に選択性が作用した結果と考えられる。

石材は、黒色頁岩を筆頭に黒色安山岩・黒曜石やその他の石材11種類が認められるが、黒色頁岩が全体の80%を占め、黒色安山岩は5%、黒曜石は4%に止まり、その他の石材は総計しても11%に過ぎない。黒曜石を用いるケースでは、22～24などに見られるようにいずれも大きさが2cm前後の小形品に限定されている。

f. 加工石器(第119～121図 117～131)

何らかの意図的な加工痕を有するが、機能部の角度・形態などから既存の器種に分類することが不適当なものや、搔器・礫器的なものなどを一括した。48点が存在し、礫核を素材とした礫器的なもの(121～128)は18点、器種の特定できないものは30点である。119は一部を欠損するが、鎌的な形態を有す

る。石材は74%が黒色頁岩で占められ、他に細粒輝石安山岩(10%)、珪質頁岩・黒色安山岩(各6%)など9種類が認められる。

g. 打製石斧(第121～129図 132～225)

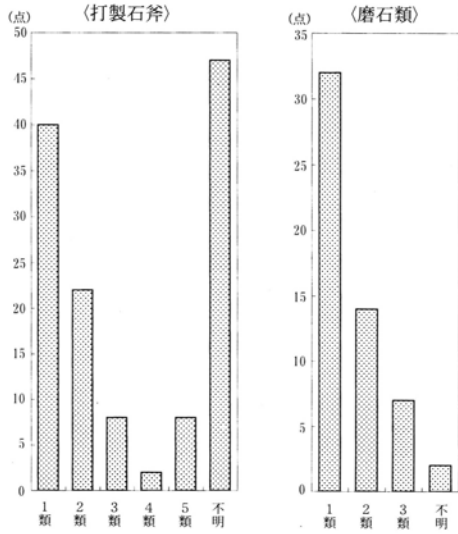
127点が存在するが、その87%はVI・VII層からの出土である。形態的には、短冊形、撥形、分銅形の三つに分けられるが、基部と刃部の寸法比率や側縁部の形状等を加味して1～5類に分類した。1類は基部・刃部幅比が1:1.5未満の短冊形、2類は同比が1:1.5以上の撥形、3類は同比が1:1.5以上で両側縁部が緩く湾曲する撥形、4類は「抉り」が浅い分銅形、5類は「抉り」が深くノッチ状となる分銅形である。

数量的に最も多いのは1類で、34点が確認されている。次いで3類の19点、2類が12点、5類が8点、4類が5点となり、残りの49点が欠損による分類不能品である。欠損品を除いた大きさ(長さ×刃部幅)や重量の平均値は、1類が108mm×45mm・121g、2類が99mm×48mm・99g、3類が115mm×57mm・139g、4類が160mm×72mm・437g、5類が120mm×74mm・300gを測る。各類ともに機能部再生による小形品を含むが、そのことを考慮しても1・3～5類には大形・小形の種別が存在しており、計測値にかなりの差異が認められる。それらに比して2類は小形品に限定される傾向にあり、数値のばらつきが少ない。

素材の面では、幅広の大形素材剥片の打点を長軸に対して斜め上方あるいは横位に置いて加工するケースが、第1次剥離面を残す石斧の約8割に認められる。また片面に原礫面を残すものが48%にも及んでいるが、その様相からしてかなり大きな原礫からの素材剥片を用いていることが推察される。尚、両面に原礫面を残すのは2点に過ぎない。

調整加工のあり方を見ると、1・3類では刃部とともに側縁部の加工が両面から行われ、特に側縁部の整形は片側縁を下にして垂直に立てた状態で敲打されており、エッジのつぶれや階段状剥離が高い頻度で認められる。2類では、側縁部を中心に片面調整による角度のやや急な剥離面が形成され、器厚の薄

2. 縄文時代



第110図 各種石器の分類別点数(2)

<各種石器の石材別数・重量一覧>

石 鏃

石材コード	17	64	65	66	67
点数	1	1	9	3	1
重量	1.9	1.1	7.5	2.8	3.7

石 槍

石材コード	64	65
点数	1	1
重量	0.3	6.0

石 錐

石材コード	64	65
点数	2	2
重量	5.0	2.5

石 錐

石材コード	64	65
点数	2	2
重量	5.0	2.5

石 匙

石材コード	16	64
点数	1	3
重量	9	38

加工石器

石材コード	4	7	16	17	19	27	28	64	65	67
点数	5	1	2	3	1	1	1	29	2	3
重量	1,302	266	1,265	27	360	315	198	6,970	8	105

削器 1 (加工痕)

石材コード	4	5	6	16	17	25	27	28	48	50	64	65	66	67	不明
点数	2	1	4	5	2	1	5	2	1	1	171	5	1	10	1
重量	418	55	232	84	42	362	946	133	31	51	11,992	41	2	547	

三角錐形石器

石材コード	64
点数	1
重量	43

削器 2 (使用痕)

石材	4	6	16	17	25	27	28	64	65	67	不明
点数	2	2	2	1	1	1	2	113	10	8	2
重量	170	225	63	27	300	300	122	4,937	28	89	

打製石斧

石材コード	4	5	6	13	16	17	27	46	48	50	64
点数	10	1	11	1	3	2	2	1	1	3	92
重量	1,339	120	2,595	16	188	210	1,333	69	143	378	7,858

砥 石

石材コード	65	67
点数	1	1
重量	2	8

凹石・磨石・敲石類

石材コード	1	5	20	27	33	34	44	50
点数	1	26	1	1	1	21	2	1
重量	665	10,991	223	203	260	9,180	577	619

スタンプ形石器

石材コード	5	28	44
点数	3	1	1
重量	2,271	700	676

ハンマーストーン

石材コード	5	27
点数	1	1
重量	1,186	176

剥 片

石材コード	4	5	6	7	13	15	16	17	25	26
点数	9	8	19	2	3	1	13	8	4	1
重量	272	369	1,159	153	930	22	162	254	37	2

石材コード	27	28	35	39	50	52	60	64	65	67	不明
点数	14	26	1	1	4	3	1	555	40	55	15
重量	506	961	14	1	109	98	82	12,661	86	1,299	

磨製石斧

石材コード	14	26
点数	1	3
重量	144	328

多孔石

石材コード	5
点数	2
重量	6,514

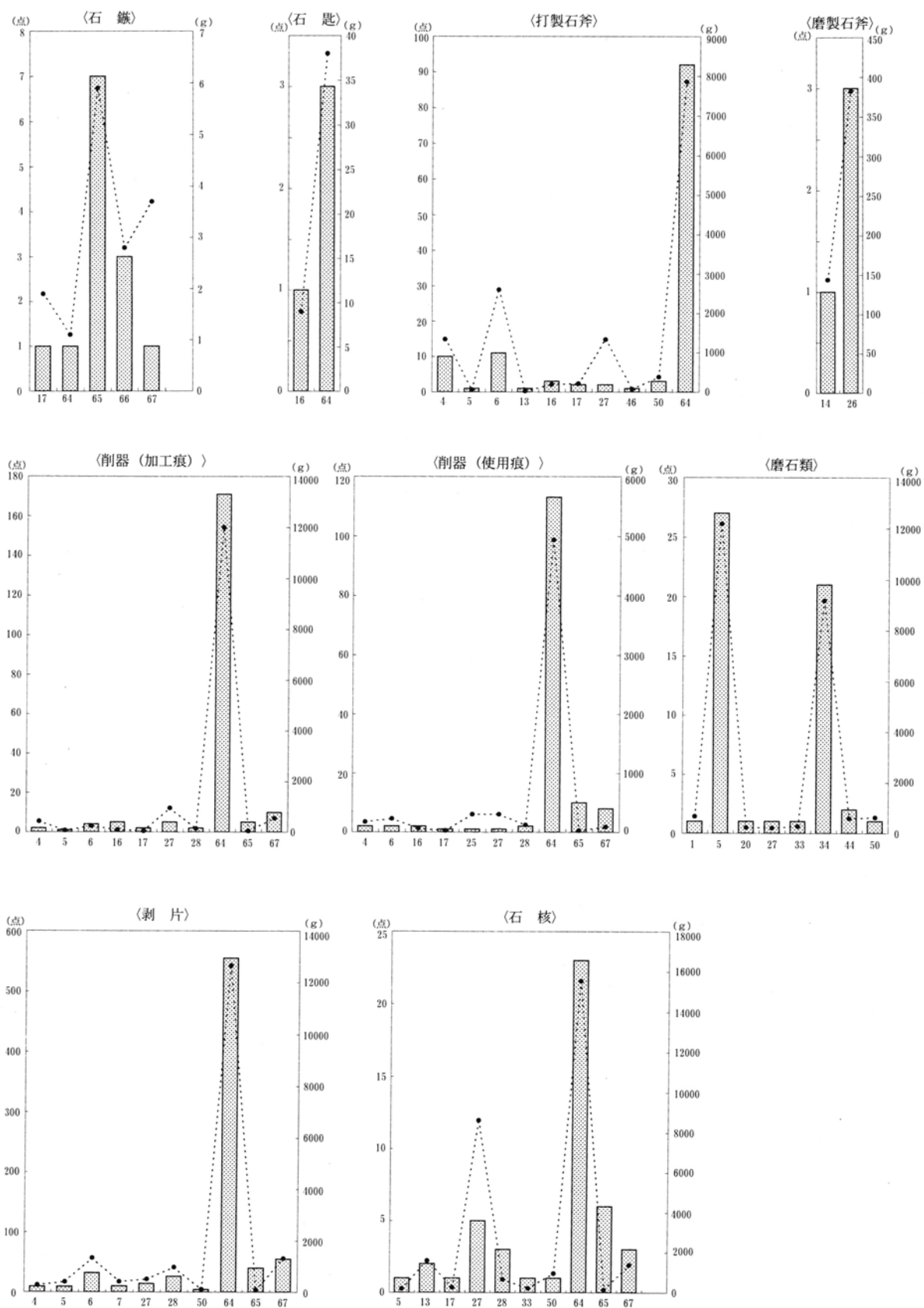
装身具

石材コード	42
点数	1
重量	3

石 核

石材コード	5	13	17	27	28	33	50	64	65	67
点数	1	2	1	5	3	1	1	23	6	3
重量	182	1,583	246	8,613	653	205	953	15,535	138	1,374

II 調査の結果



第111図 各種石器の石材別点数(折線は重量)

いものが多く認められる。1～3類の側縁部に加工が集中するのは、先の素材剥片の打瘤位置が側縁部に当たるために、器厚を減じる必要が生じたことと少なからず関係を有する。刃部形状は、各類を通じて円刃状となるものが58%と多く、直刃は24%、偏刃は18%となる。偏刃については、欠損後にほとんど再加工しないで継続使用したものも含まれており、製作当初の形態を直接反映した数値ではない。

1～3類の使用による磨耗痕は、全体の約60%に認められ、それらは主に刃部から体部中央にかけて残る縦方向の磨耗痕である。基本的に両面に残るケースがほとんどであるが、その程度はどちらかの片面が弱いものとなっている。欠損については62%のものに認められるが、リダクション等を考慮すれば実際の比率はさらに高まると考えられる。破断面での欠損方向は、基部から刃部への長軸方向の平坦面に対して、垂直方向からの加力によって折れた状態を示している。こうした磨耗痕や破断面のあり方は、縦斧での柄部との装着状況や掘り具としての上下・回転運動を想定させる。また1～3類の残存部位の比率は、リダクションによる調整剥片を含む部位の特定できない小破片40%、刃部～体部破片32%、体部～基部破片24%、体部中央破片4%などである。この数値が示すように、体部中央近辺を境にした刃部および基部の残存比率はほぼ拮抗した状況にある。欠損品が完形品を凌駕することや、残存部位の顕著な偏在性が認められない点などについては、石斧が遺跡の外部ではなく内部において使用・消費される機会が多かったことを示唆している。ただし、欠損品同士の接合例が3点(161・207・209)しか認められないことは、こうした見方に否定的な材料とも言えるが、欠損後の再生利用の頻度の高さが部位の特定できない小破片の多さから窺うことができ、このリダクションによって接合例の少なさを説明できよう。

石材に関しては、黒色頁岩の72%を筆頭に、灰色安山岩と粗粒安山岩の各9%などが主なものであり、他の8種類の石材は10%に過ぎない。黒色頁岩

を主体とする用材傾向は、削器や加工石器とも軌を一にするものである。

h. 三角錐形石器

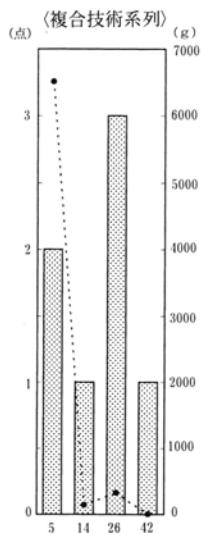
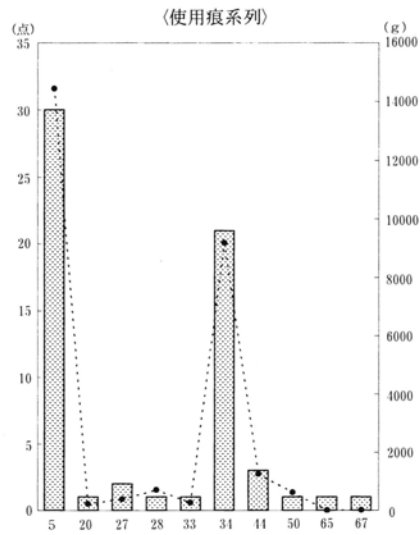
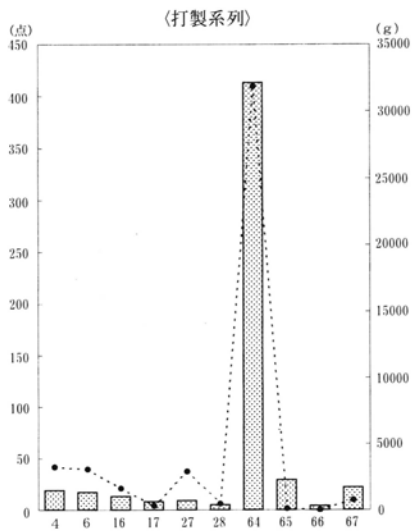
II区のVI層から1点出土しているが、欠損によって一部分しか残存しないため図示していない。従来の研究により、草創期後半の撚糸文土器段階の特徴的な石器であることが判明しているが、おそらく第103図1などの撚糸文土器に伴うものと考えられる。石材は黒色頁岩を使用している。

i. 石核(第131・132図 236～247)

II区のVI層(19点)とVII層(18点)を中心にして、10種類の石材の総計46点・29,483gが検出されている。石材別に見ると、黒色頁岩23点(数量比率50%、重量比率53%)、黒曜石6点(数量比率13%、重量比率0%)、変質玄武岩5点(数量比率11%、重量比率29%)、黒色安山岩3点(数量比率7%、重量比率5%)などが主なものである。黒色頁岩の占める比率の高さが目立つが、これら石核のほとんどが前述の「打製系列」の石器母材であることを考えれば当然の傾向であり、同時に原石を持ち込んでの石器製作がなされたことを示している。黒曜石は点数比率に較べて重量比率は1%に満たず、そのほとんどが小振りな原礫を用いていることが窺える。いずれの石材も、原礫面を残すものが多く認められる。

原礫形状をもとに大別すれば、①径20cm以上の分割礫の平坦面を打面にして大形剥片を剥離するもの(236・244)、②径10～15cmの分割礫や扁平な原礫を用いて中形剥片を剥離するもの(240～243・247)、③径5cm未満の原礫平坦面や剥離面から小形剥片を剥離するもの(237・238・246)、などに分けられる。数量的には②が多く、両面からの錯向状の剥片剥離(240・242・243・245)や片面方向からの剥片剥離(241)、それに周縁部を打面にした求心的な剥片剥離(245)などが認められるが、その大半は横長剥片の作出がなされている。①も基本的に横長剥片を作出しているが、横幅が20cm前後の大きさとなることからみて、石斧などの素材剥片の作出を目的としたことが窺える。③については黒曜石のみが用いられており、多方向

II 調査の結果



第5表 包含層出土石器の系列・石材別重量一覧 (単位：g)

石材名	石材コード	打製系列 点数	打製系列 重量	使用痕系列 点数	使用痕系列 重量	複合技術系列 点数	複合技術系列 重量	他(石核・剥片) 点数	他(石核・剥片) 重量
アブライト	1	0	0	1	665	0	0	0	0
安山岩ガラス	2	0	0	0	0	0	0	0	0
角閃石安山岩	3	0	0	0	0	0	0	0	0
細粒安山岩	4	19	3,229	0	0	0	0	9	272
粗粒輝石安山岩	5	2	175	30	14,448	2	6,514	9	551
灰色安山岩	6	19	3,052	0	0	0	0	19	1,159
変質安山岩	7	1	266	0	0	0	0	2	153
花崗岩	10	0	0	0	0	0	0	0	0
玉髓	12	0	0	0	0	0	0	0	0
輝緑岩	13	1	16	0	0	0	0	5	2,513
変輝緑岩	14	0	0	0	0	1	144	0	0
赤碧玉	15	0	0	0	0	0	0	1	22
頁岩	16	13	1,609	0	0	0	0	13	162
珪質頁岩	17	10	306	0	0	0	0	9	500
硬質頁岩	18	0	0	0	0	0	0	0	0
点紋頁岩	19	1	360	0	0	0	0	0	0
凝灰岩	20	0	0	1	223	0	0	0	0
珪質凝灰岩	22	0	0	0	0	0	0	0	0
流紋岩質凝灰岩	24	0	0	0	0	0	0	0	0
溶結凝灰岩	25	2	662	0	0	0	4	37	0
変玄武岩	26	0	0	0	0	3	328	1	2
変質玄武岩	27	9	2,894	2	379	0	0	19	9,119
砂岩	28	5	453	1	700	0	0	29	1,614
凝灰質砂岩	29	0	0	0	0	0	0	0	0
蛇紋岩	30	0	0	0	0	0	0	0	0
変質蛇紋岩	31	0	0	0	0	0	0	0	0
石英英岩	32	0	0	0	0	0	0	0	0
閃緑岩	33	0	0	1	260	0	0	1	205
石英閃緑岩	34	0	0	21	9,180	0	0	0	0
変閃緑岩	35	0	0	0	0	0	0	1	14
デイサイト	39	0	0	0	0	0	0	1	1
石英斑岩	40	0	0	0	0	0	0	0	0
変はんれい岩	41	0	0	0	0	0	0	0	0
葉ろう石	42	0	0	0	0	1	3	0	0
翡翠	43	0	0	0	0	0	0	0	0
ひん岩	44	0	0	3	1,253	0	0	0	0
珪質変質岩	45	0	0	0	0	0	0	0	0
雲母石英片岩	46	1	69	0	0	0	0	0	0
緑色片岩	48	2	194	0	0	0	0	0	0
ホルンヘルス	50	4	429	1	619	0	0	5	1,062
文象斑岩	51	0	0	0	0	0	0	0	0
流紋岩	52	0	0	0	0	0	0	3	99
白色硬質石英質岩	53	0	0	0	0	0	0	0	0
人工物	54	0	0	0	0	0	0	0	0
滑石	55	0	0	0	0	0	0	0	0
珪質準片岩	56	0	0	0	0	0	0	0	0
珪化木	57	0	0	0	0	0	0	0	0
変質凝灰岩	58	0	0	0	0	0	0	0	0
変質頁岩	60	0	0	0	0	0	0	1	82
緑泥片岩	61	0	0	0	0	0	0	0	0
緑色珪質岩	62	0	0	0	0	0	0	0	0
変質流紋岩	63	0	0	0	0	0	0	0	0
黒色頁岩	64	413	31,844	0	0	0	0	578	28,196
黒曜石	65	29	93	1	2	0	0	46	224
チャート	66	4	5	0	0	0	0	0	0
黒色安山岩	67	22	745	1	8	0	0	58	2,673
不	—							15	0
合計		557	46,401	63	27,737	7	6,989	829	48,660

第112図 各石器系列の石材別点数(折線は重量)

からの剥離作業が認められるが、主に縦長剥片の作出を意図している。推定3～4cmの剥片長からすれば、石鏃の素材剥片作出を目的としたと考えるのが妥当であろう。

j. 剥片

図としては掲載していないが、素材・調整剥片を含めて総数783点・19,178gが検出されている。出土層位はVI層335点(43%)、VII層255(33%)点、VIII a層112点(14%)、VIII b層58点(7%)であり、VI・VII層を中心としている。石材は黒色頁岩555点・12,661g(数量比率71%・重量比率66%)、黒色安山岩55点・1,299g(数量比率7%・重量比率7%)、黒曜石40点・86g(数量比率5%・重量比率0%)、砂岩26点・961g(数量比率3%・重量比率5%)、灰色安山岩19点・1,159g(数量比率2%・重量比率6%)、変質玄武岩14点・506g(数量比率2%・重量比率3%)、頁岩13点・162g(数量比率2%・重量比率1%)などが主なものであり、その他に13種類の石材46点・2,343g(数量比率6%・重量比率12%)が認められる。黒色頁岩が主体をしめる点は、先の「打製系列」の石器石材や石核石材のあり方と軌を一にしている。

石材別の平均的な大きさ(長径×短径)と重量は、黒色頁岩42mm×34mm・23g、黒色安山岩43mm×32mm・24g、黒曜石22mm×16mm・2g、砂岩48mm×33mm・37g、灰色安山岩59mm×48mm・61g、変質玄武岩54mm×41mm・36g、頁岩37mm×29mm・12gとなる。黒曜石や灰色安山岩を除けば、各石材ともに類似した数値となっているが、これらは打製石斧や削器・石匙などの主体的石材である。黒曜石の数値が他の石材を大きく下回るのは、先原礫自体が小振りであることや、それから作出される目的石器が石鏃のような小形品であることと相関性を有するだろう。灰色安山岩は、打製石斧の素材として黒色頁岩に次いで多用されているが、他の石器に使用される度合いは極めて低く(例えば削器では2%に満たない)、また石核は全く検出されていない。これらのことを考え合わせれば、灰色安山岩は打製石斧用に遺跡外から大形の素材剥片として持ち込まれて加工された可能性が高く、そ

の途上で派生する中形の調整剥片は、性状面から他の石器石材としては不向きであったことを示すものだろう。ちなみに同石材の中で最大の素材剥片は、長径110mm×短径71mm×厚さ30mm・重さ236gである。頁岩も石核が存在しないことから、灰色安山岩と同様に素材剥片としての搬入が想定されるが、その量的な僅少さは「打製系列」石器における同石材の利用状況と合致している。

k. 磨製石斧(第130図 226～229)

図に掲載した4点が出土したのみである。出土地点はII区に集中し、層位はVI・VII層に限定されている。いずれも使用により基部や刃部を欠損しているが、形態的には断面形が楕円形で、基部幅が狭くやや尖り気味の乳棒状を呈すると考えられる。6cm前後の刃部幅を考慮すれば、体長15cm前後の中形品と想定される。石材は、228が変輝緑岩のほかは全て変質玄武岩で構成される。これら石材の調整剥片や石核は皆無であり、遺跡外から完成品としてもたらされた可能性が高い。

l. スタンプ形石器(第130図 230～233)

II区より4点、III区より1点の合計5点が出土し、その層位はVIII a層が3点、VII層およびVIII b層が各1点である。側縁部の整形加工については、片側縁だけのもの(230)と両側縁とが各1点認められるが、他は加工の不要な棒状礫を素材に用いている。機能部の底面は、基本的に1回の打割によって作出され、使用による磨耗痕を有するもの(231・233)もある。大きさは体長12～15cm、底面幅7～9cm、重量500～700gの範囲にほぼ収まる。石材は粗粒輝石安山岩3点、砂岩とひん岩が各1点である。

m. ハンマーストーン(第131図 234・235)

棒状礫を素材として、先端部分に敲打痕のみを有するものであるが、II区のVI層中から図の2点が検出されたのみである。重量が180g弱の中形品(234)と1186gの大形品(235)が認められ、石器の製作工程や対象となる石器種に応じた用途差を反映していると考えられる。石材は234が変質玄武岩で、235が粗粒輝石安山岩である。

II 調査の結果

n. 凹石・磨石・敲打石類(第132～134図 248～267)

ほぼ片手の中に収まるサイズで、しかも円形や楕円形状を呈する扁平な河床礫を素材として、その表面に使用による窪み穴や磨り面(磨耗痕)を有するものを一括した。窪み穴と磨り面は複合することがかなりの頻度で認められ、また周縁部に敲打痕を持つものも多い。窪み穴は、微細な敲打痕の集合により形成されたものを主体とするが、回転動作によって形成されたすり鉢状を呈するものも僅かに認められる。総数54点が存在し、I区に7点、III区に1点が存在する他は全てII区からの出土である。出土層位は、VI層19点(35%)、VII層21点(39%)、VIII a層9点(17%)、VIII b層2点(4%)、不明3点であり、VI・VII層が8割弱を占めている。

素材形状は、楕円形の1類が31点(57%)と最多で、円形の2類が14点(26%)、不定形の3類が7点(13%)、不明2点となる。窪み穴の形成状況は、両面に付くもの(17点)が主体的で、片面のみのもの(8点)よりも2倍以上認められる。磨り面は、両面と片面のみとがほぼ拮抗している。窪み穴・磨り面・敲打痕が複合するもの8点(15%)、窪み穴・磨り面が複合するもの2点(4%)、窪み穴と敲打痕が複合するもの13点(24%)、磨り面と敲打痕が複合するもの8点(15%)の他に、窪み穴のみ2点(4%)、磨り面のみ9点(17%)、敲打痕のみ11点(20%)などがある。窪み穴と磨り面の形成における時間的關係は、ともに相前後する状況が認められ、「敲く」「磨る」という動作が相関した作業の中で行われたことを物語っている。平均的な大きさは、長径98mm×短径74mm・重さ459gである。石材は粗粒輝石安山岩(49%)と石英閃緑岩(38%)とが全体の9割近くを占め、磨石類における両石材の卓越した状況が窺える。その他にアブライト・凝灰岩・変質玄武岩・閃緑岩・ひん岩・ホルンフェルスなど(13%)が存在するが、少数に過ぎない。

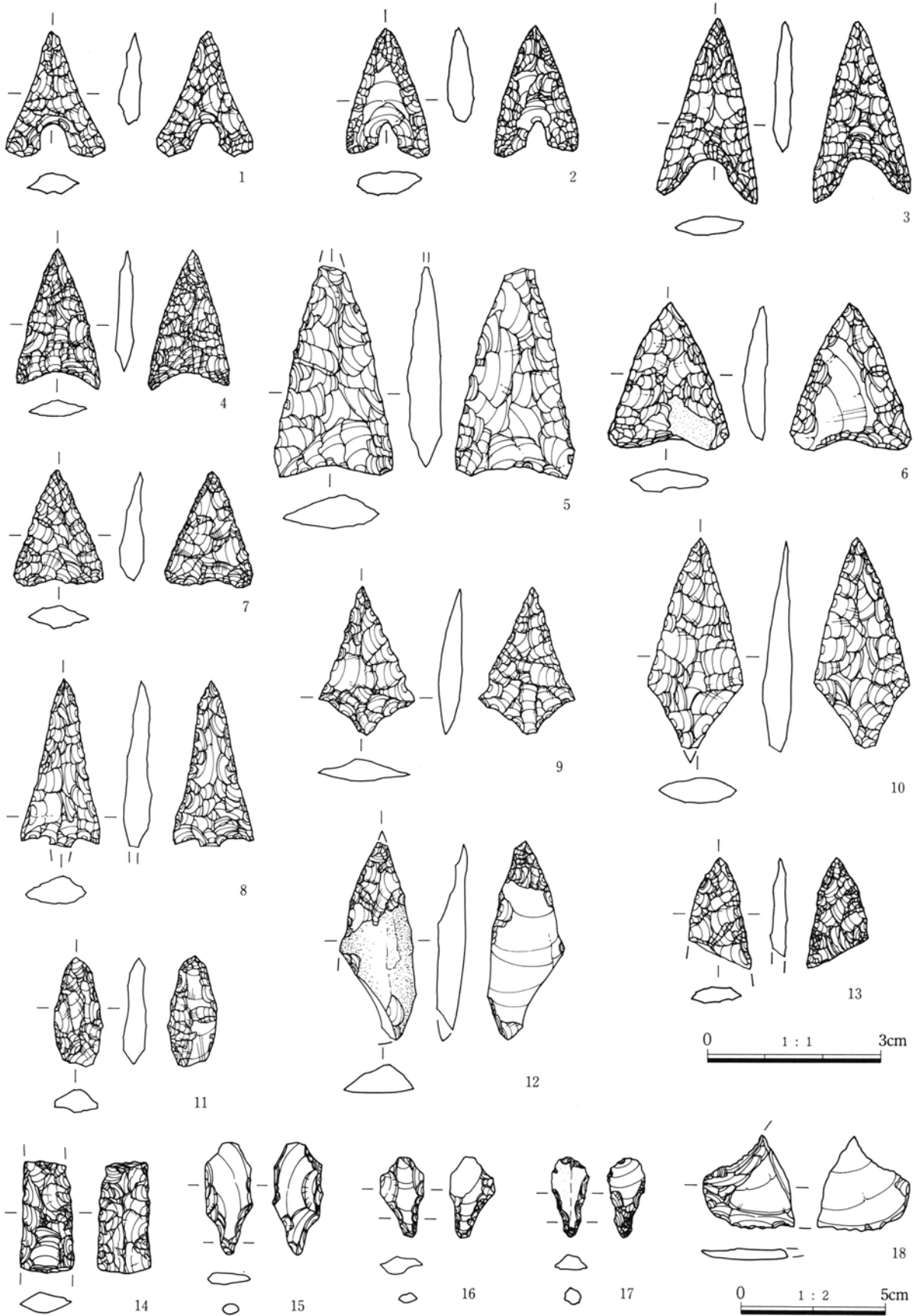
o. 多孔石(第134図 268・269)

II区のVIII a層から、図示した2点が出土したのみである。これらの各孔を観察すると、凹石に顕著な集合打痕による孔と、それをさらに錐揉み状の回転

動作により逆円錐形状に加工した孔に分けられる。逆円錐形の孔の表面に集合打痕が残存することから、①集合打痕の孔→②逆円錐形の孔という変遷過程が考えられる。②の孔が最終形態とすれば、①②の混在は多孔石の呪術具としての使用が中断されていると見なすことも可能であろう。また視点を変えれば、より硬度のある石材を用いて多数回の打撃による窪みを必要箇所につけておき、呪術的行為の段階で逆円錐形状の孔に加工されるという状況も想定できる。多孔石の逆円錐形状孔に類似したものは、堅果類の加工具である凹石にも認められる。これは、第一義的には実用的な作業の結果形成されたと思なすべきであろうが、多孔石とも通底した「第二の道具」としての使われ方が存在したことも考慮する必要があるだろう。

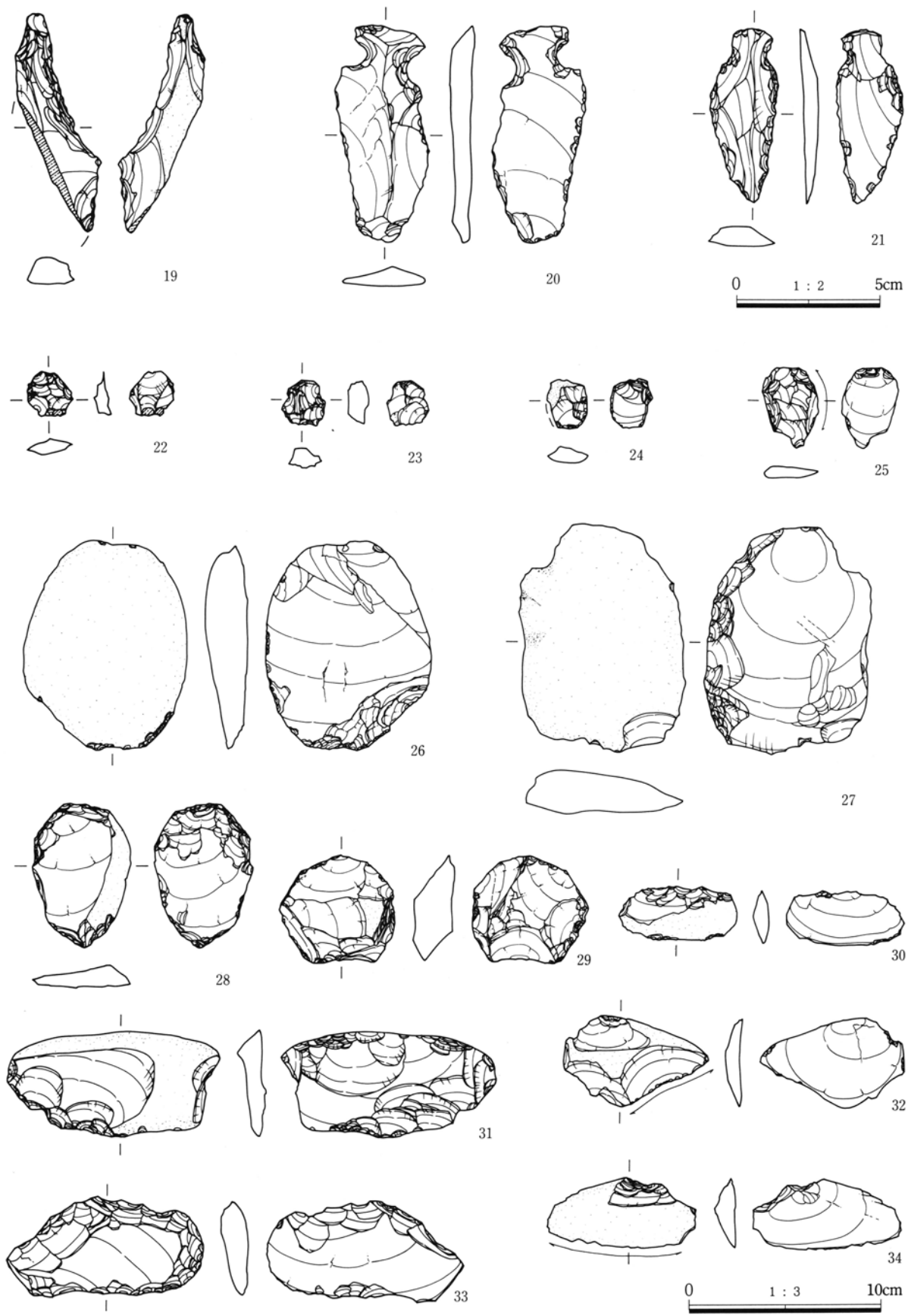
p. 球状耳飾り(第134図 270)

II区のVI層内より1点出土したのみで、片側を欠損している。石材は葉ろう石を用いており、北陸地方とは異なった地域で製作されたものが、当遺跡にもたらされたと考えられる。

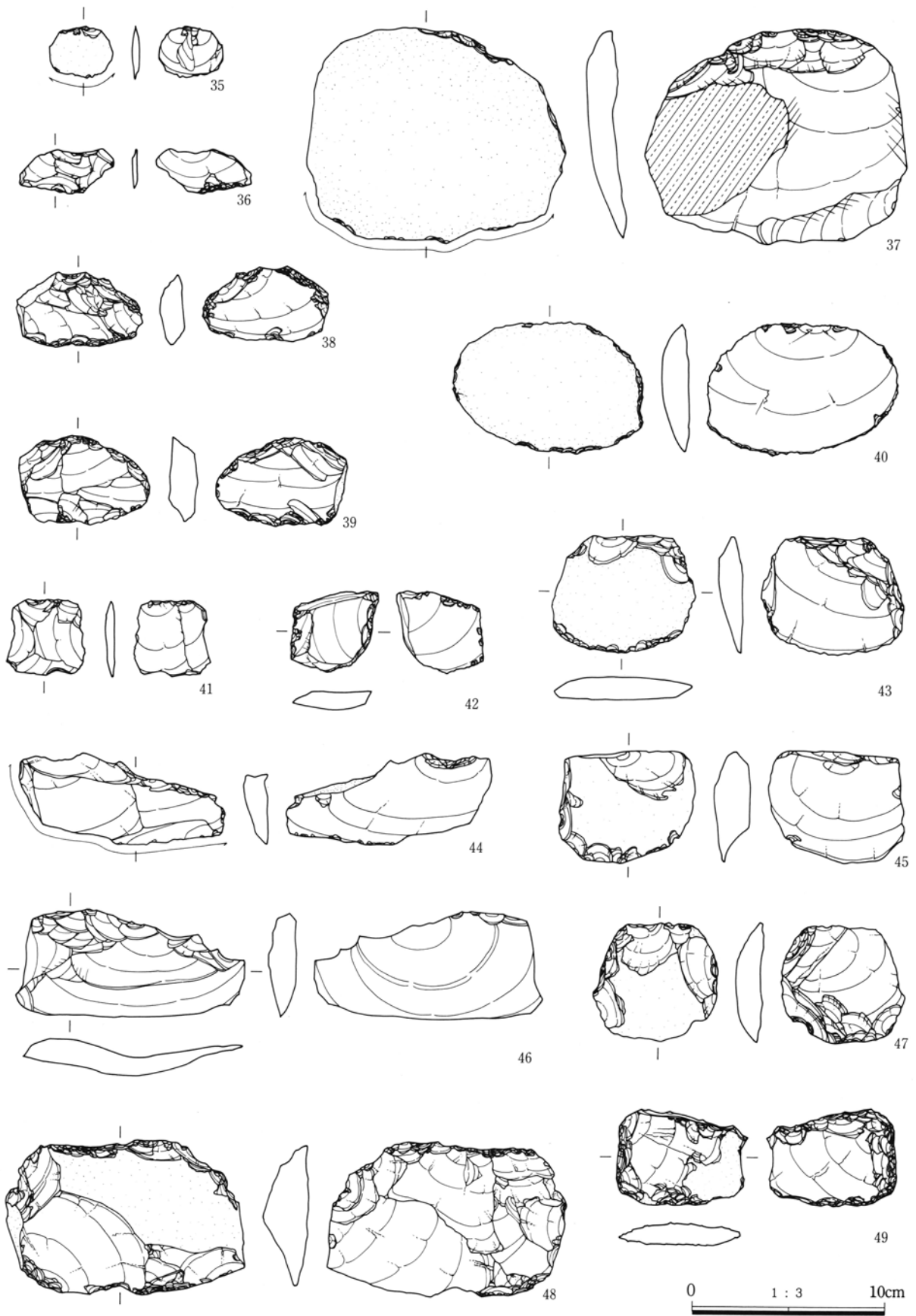


第113図 包含層出土の石器(1)

II 調査の結果

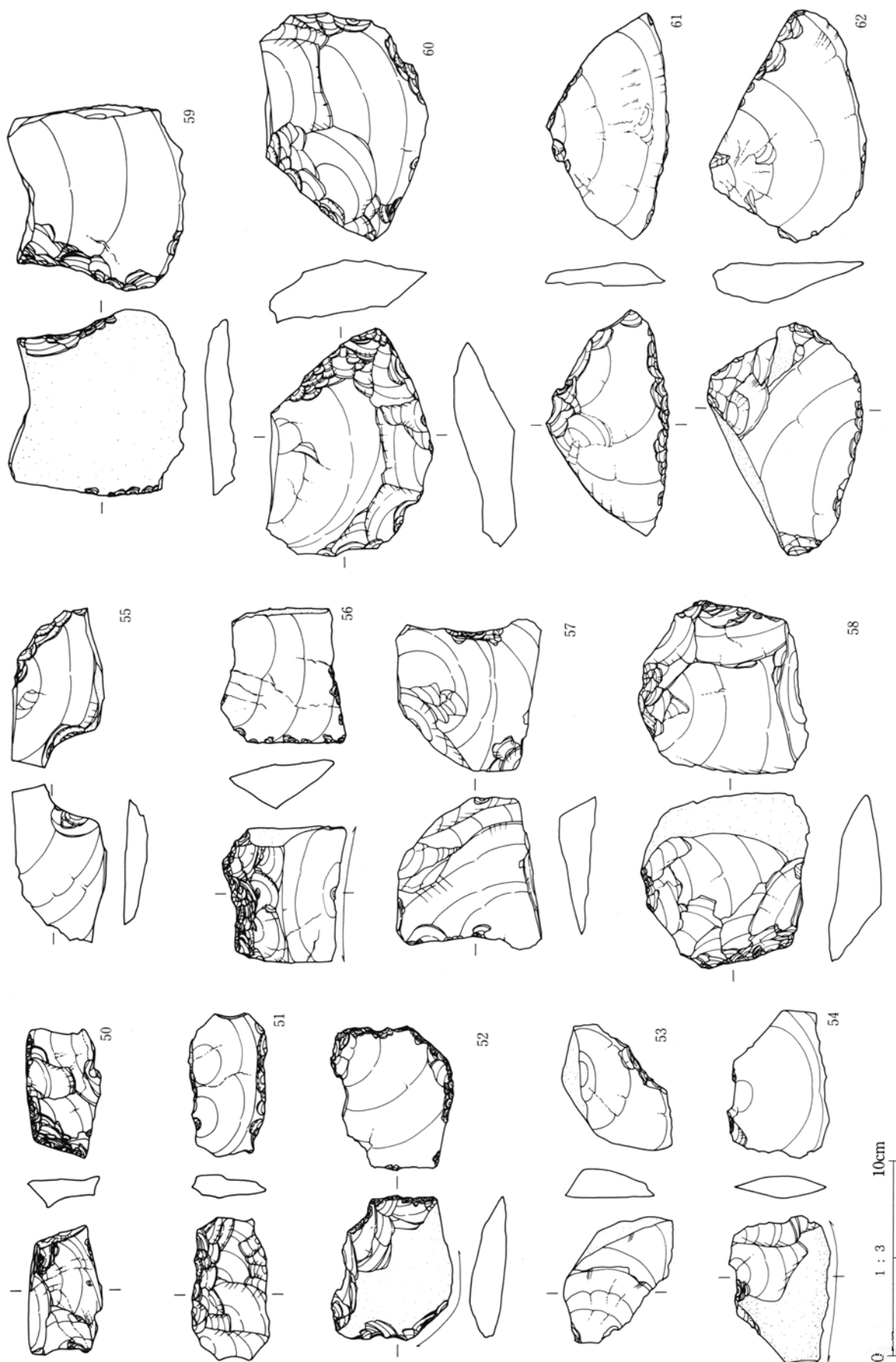


第114図 包含層出土の石器(2)



第115図 包含層出土の石器(3)

II 調査の結果



第116図 包含層出土の石器(4)

2. 縄文時代



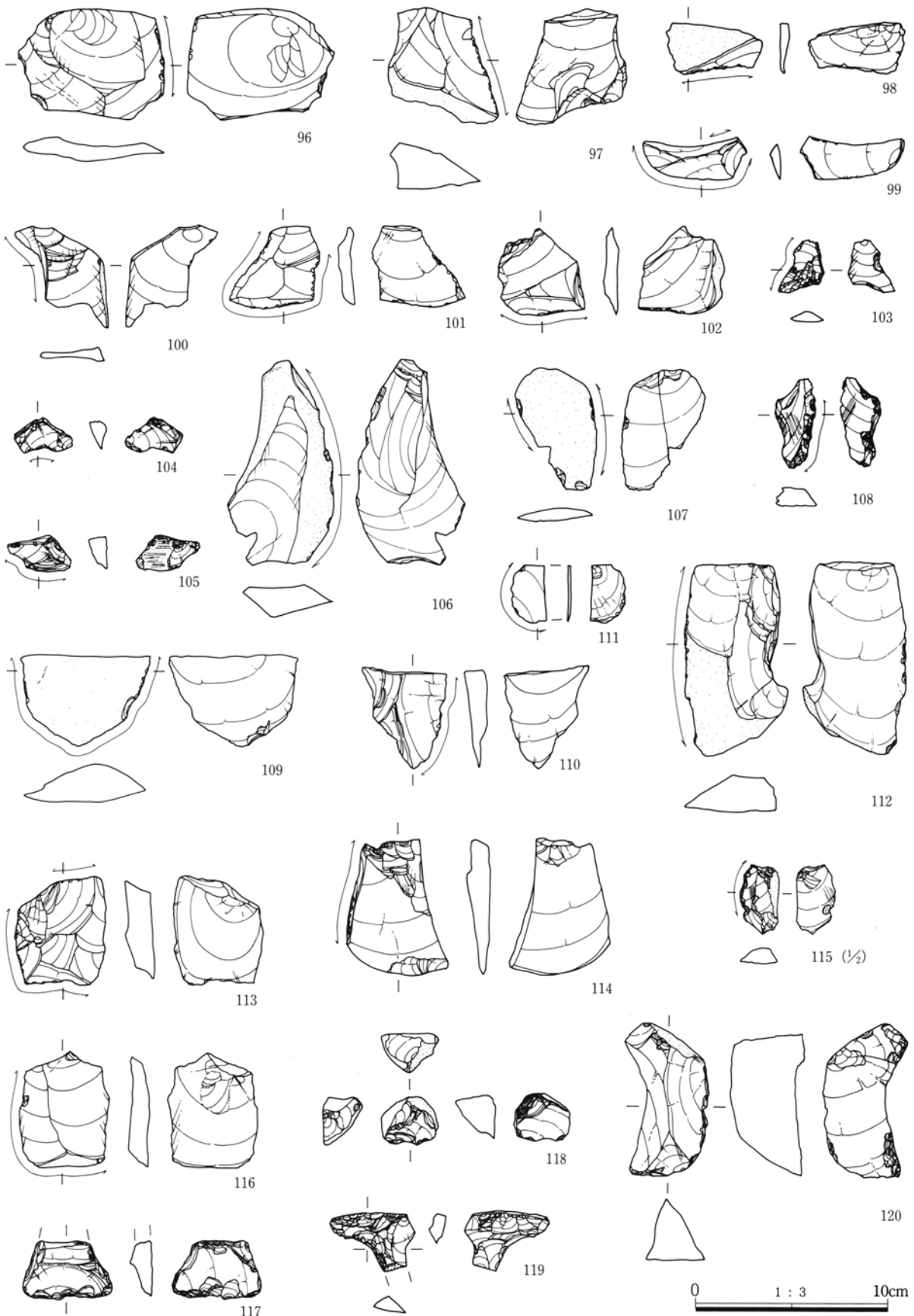
第117図 包含層出土の石器(5)

II 調査の結果



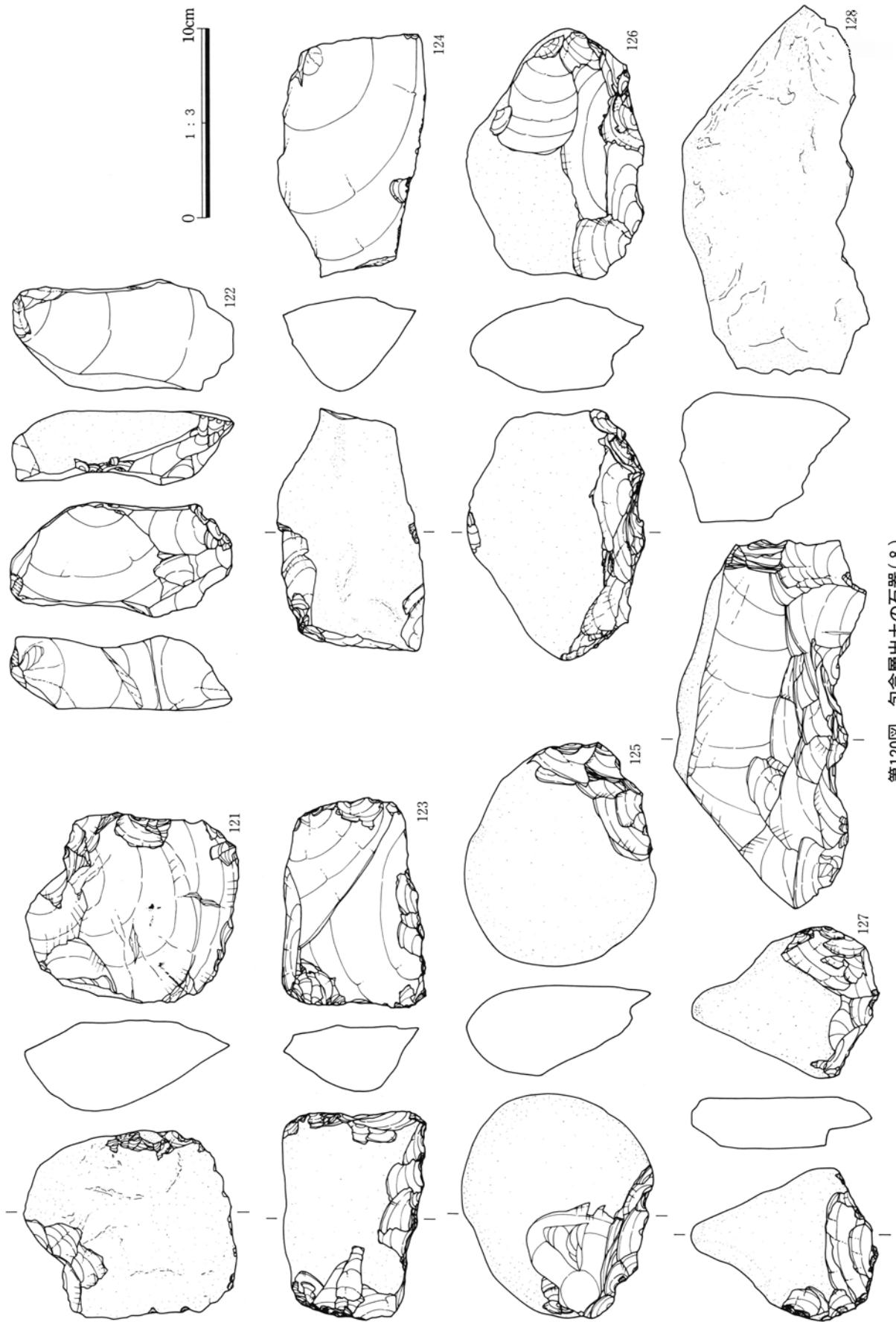
第118図 包含層出土の石器(6)

2. 縄文時代



第119図 包含層出土の石器(7)

II 調査の結果

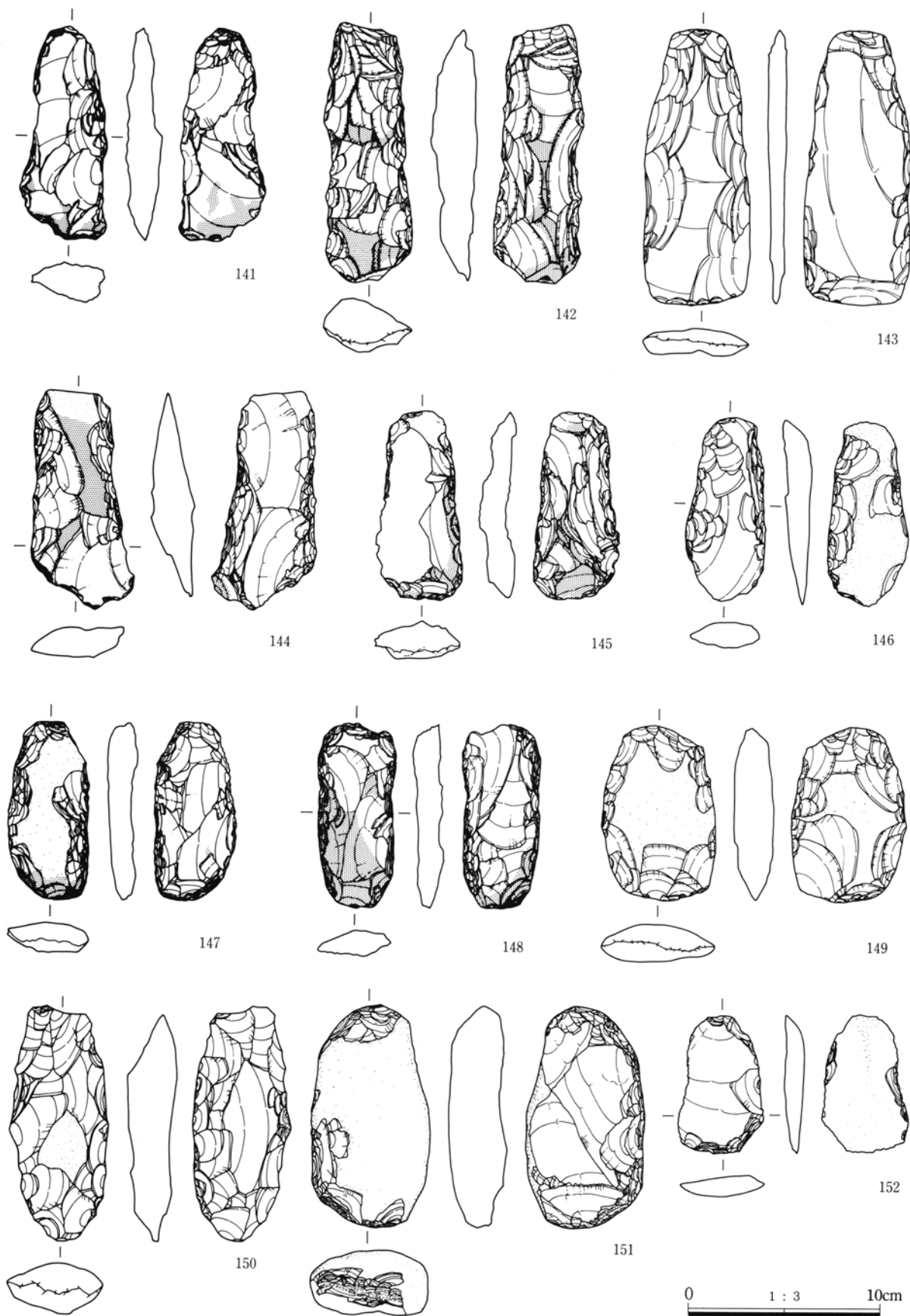


第120図 包含層出土の石器(8)

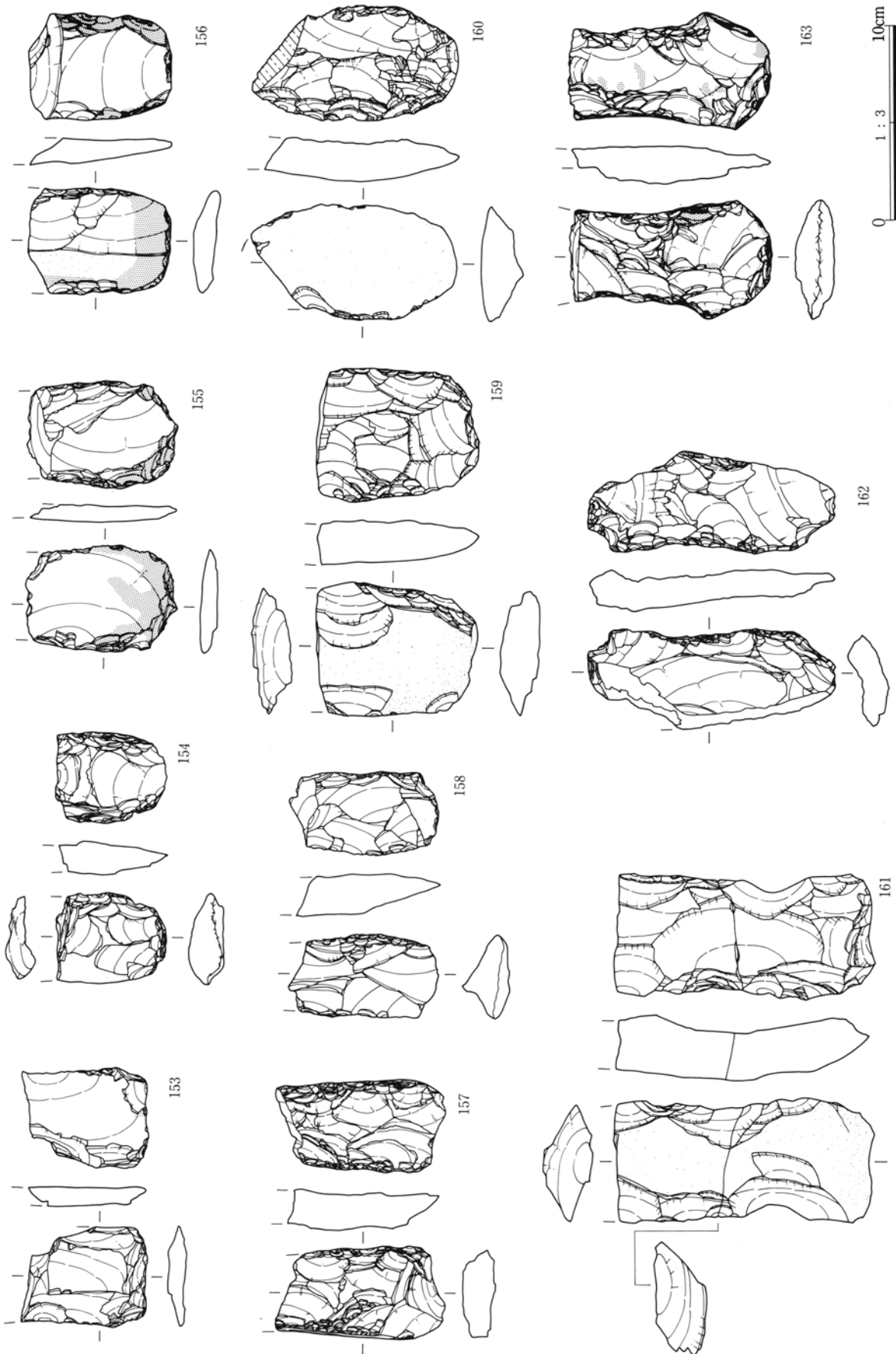


第121図 包含層出土の石器(9)

II 調査の結果

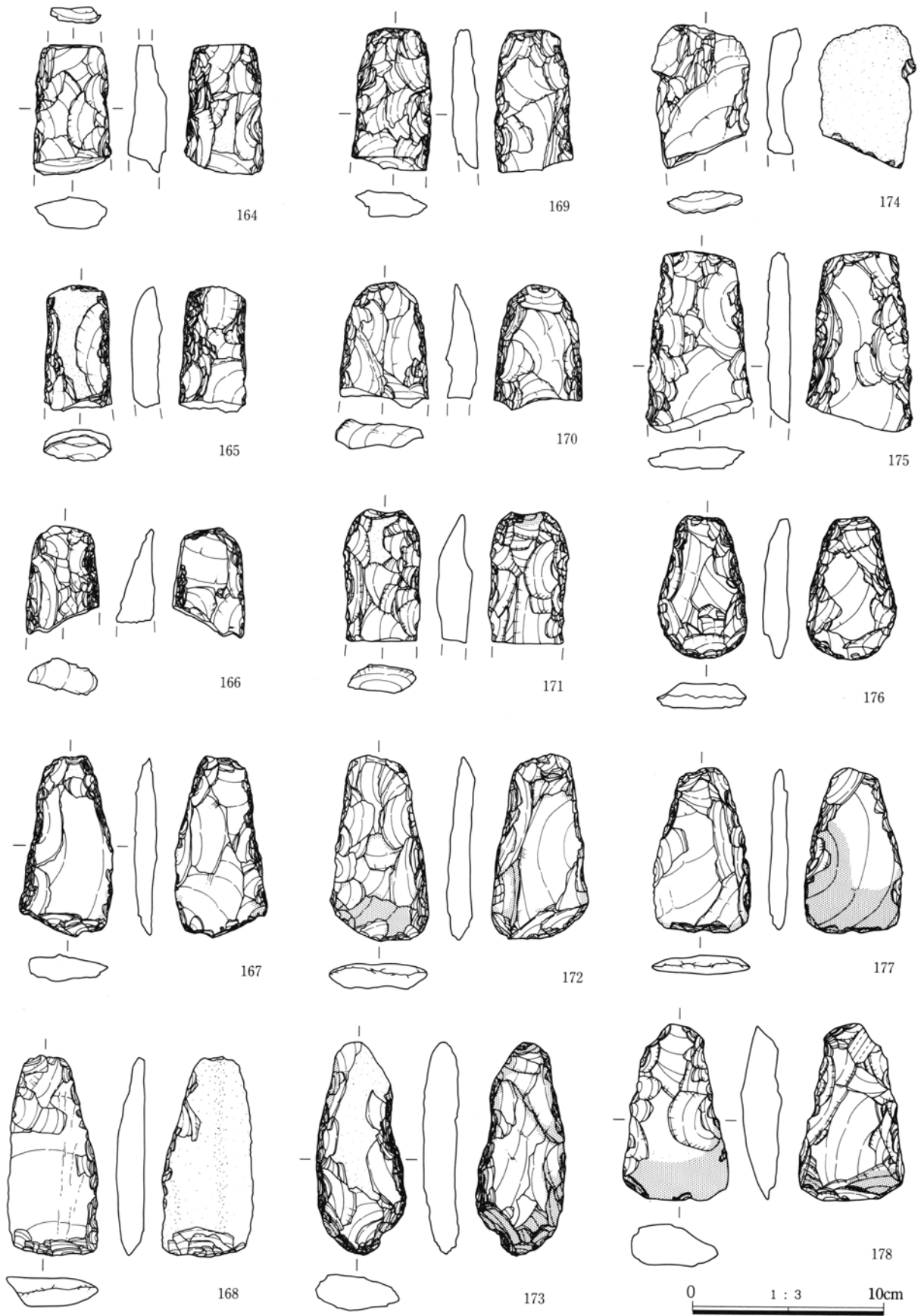


第122図 包含層出土の石器(10)

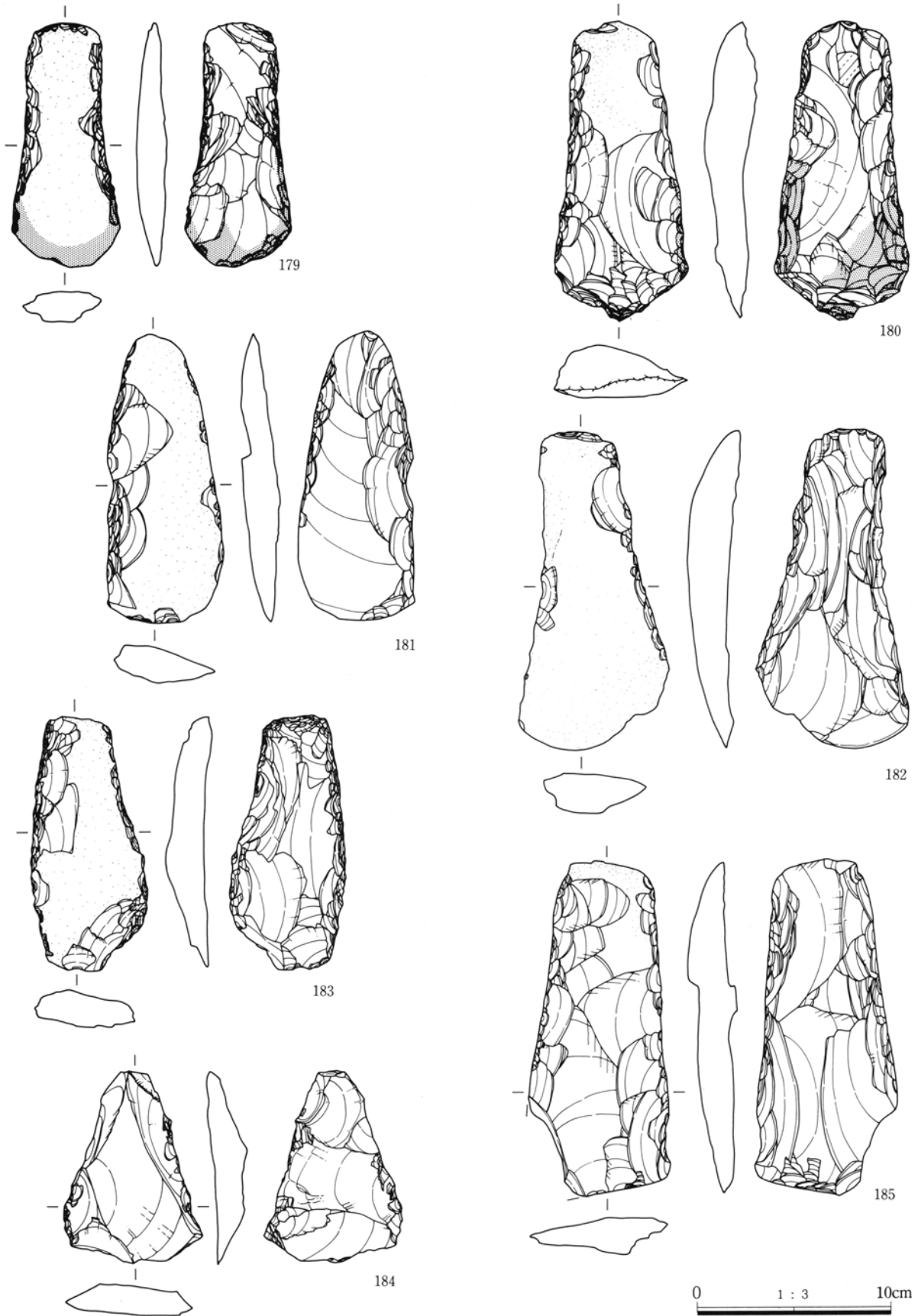


第123図 包含層出土の石器(11)

II 調査の結果

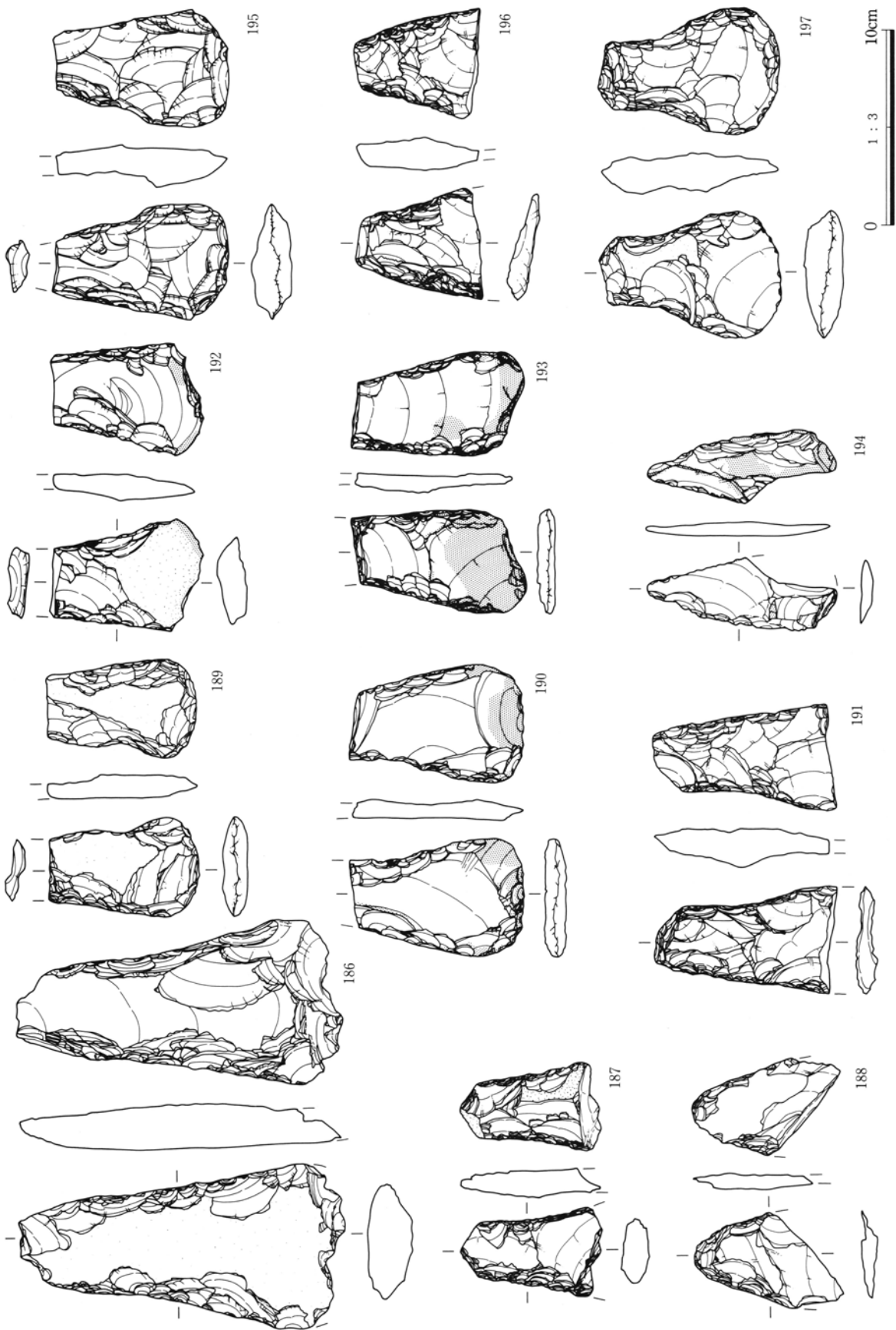


第124図 包含層出土の石器(12)

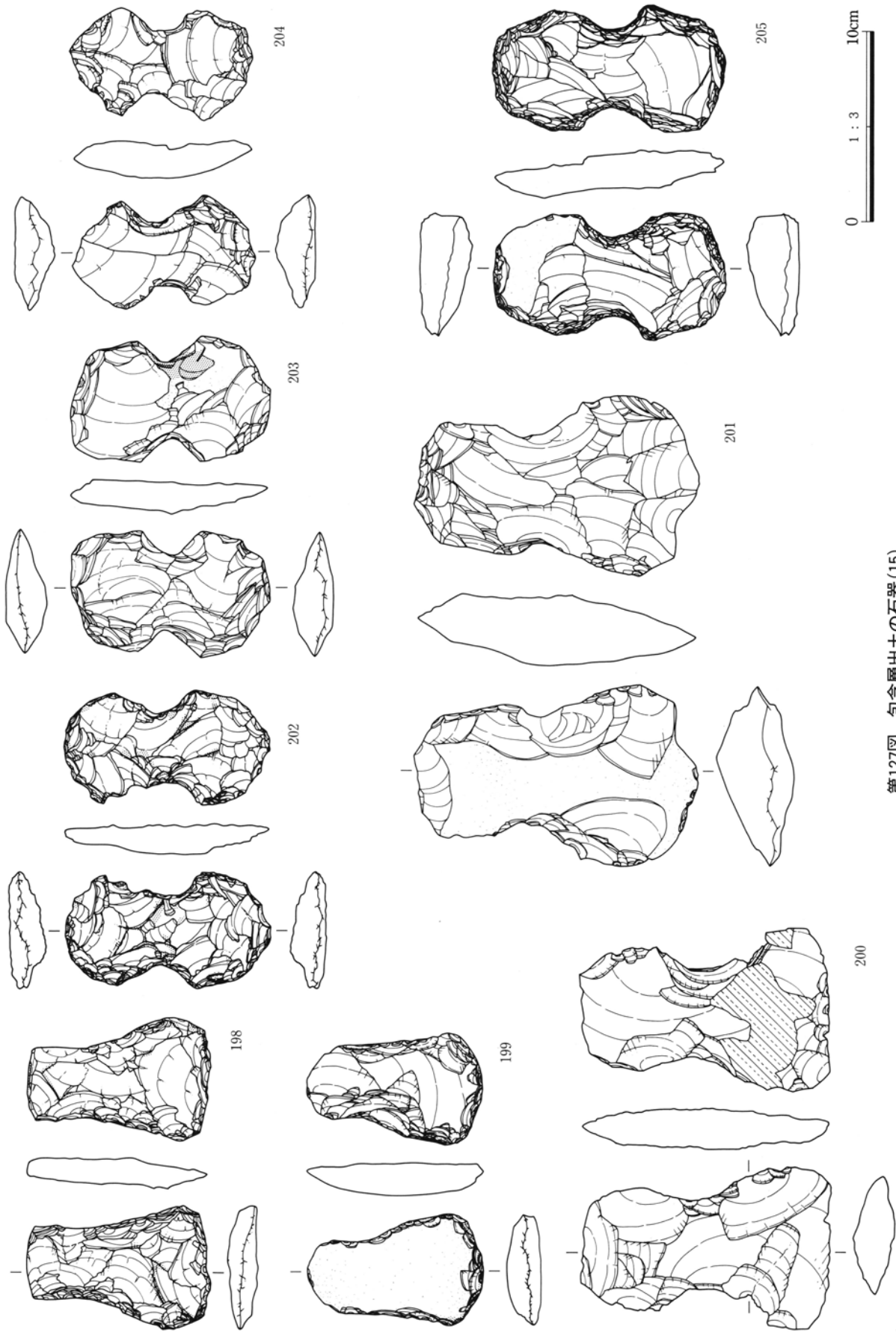


第125図 包含層出土の石器(13)

II 調査の結果



第126図 包含層出土の石器(14)



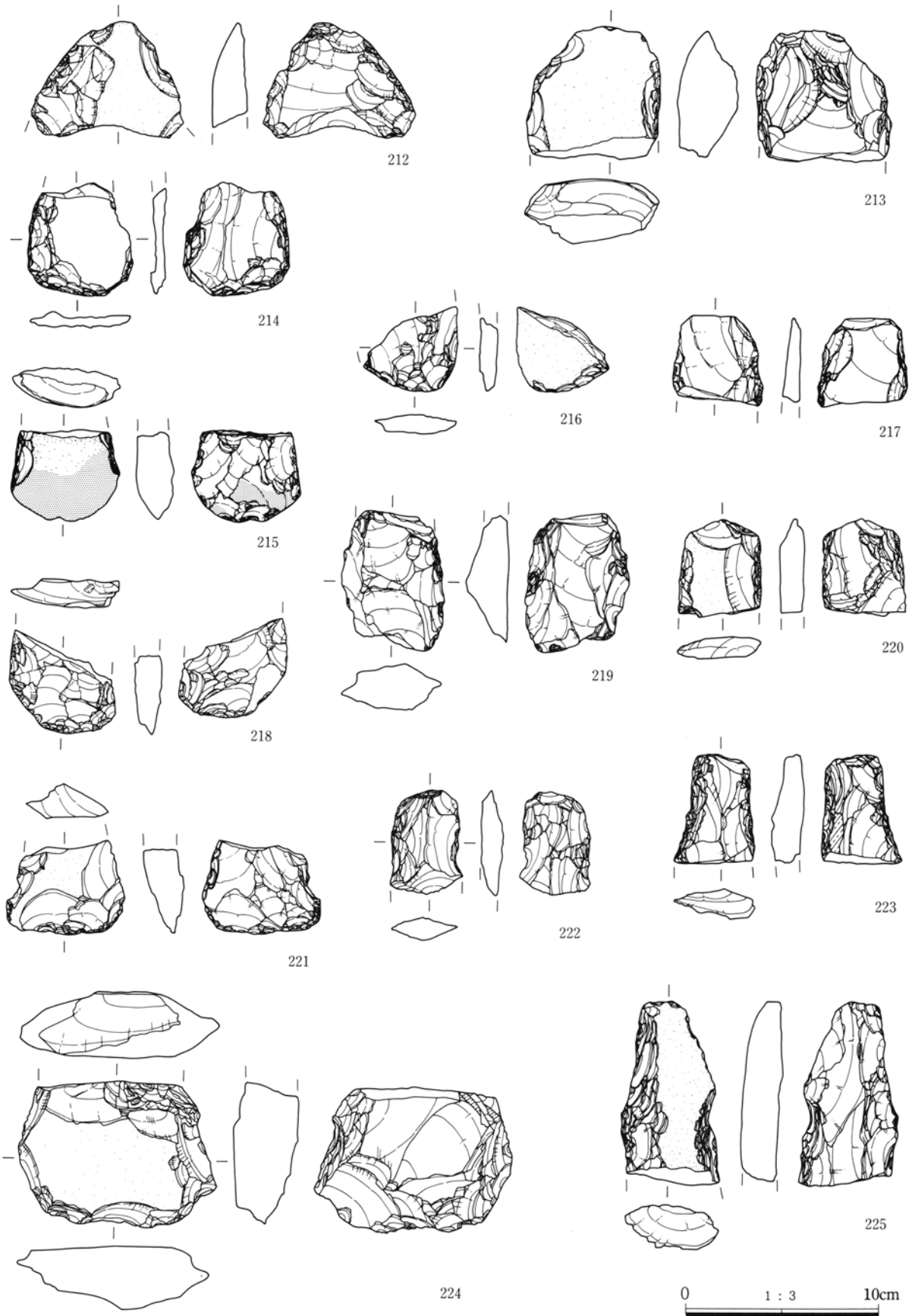
第127図 包含層出土の石器(15)

II 調査の結果



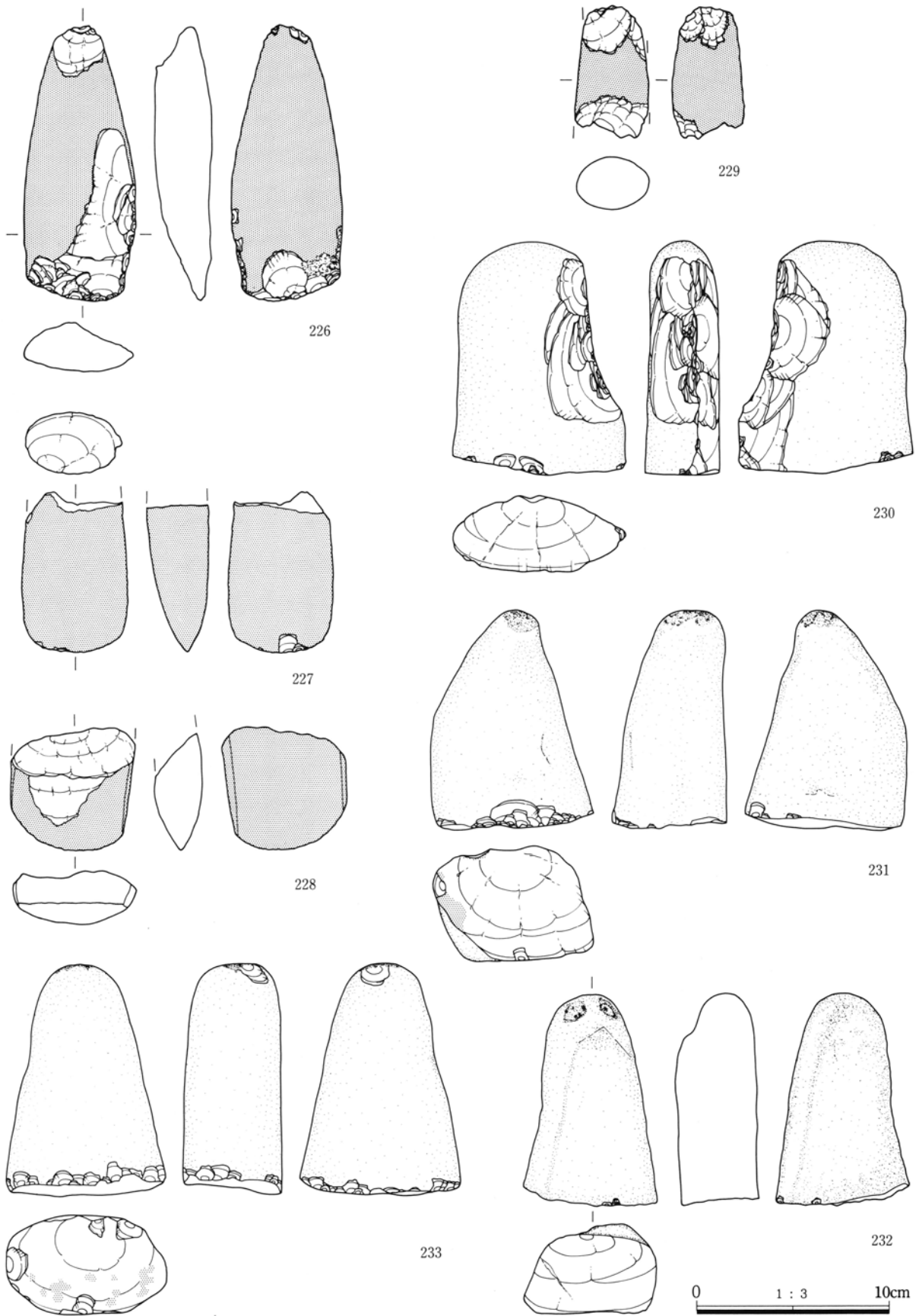
第128図 包含層出土の石器(16)

2. 縄文時代

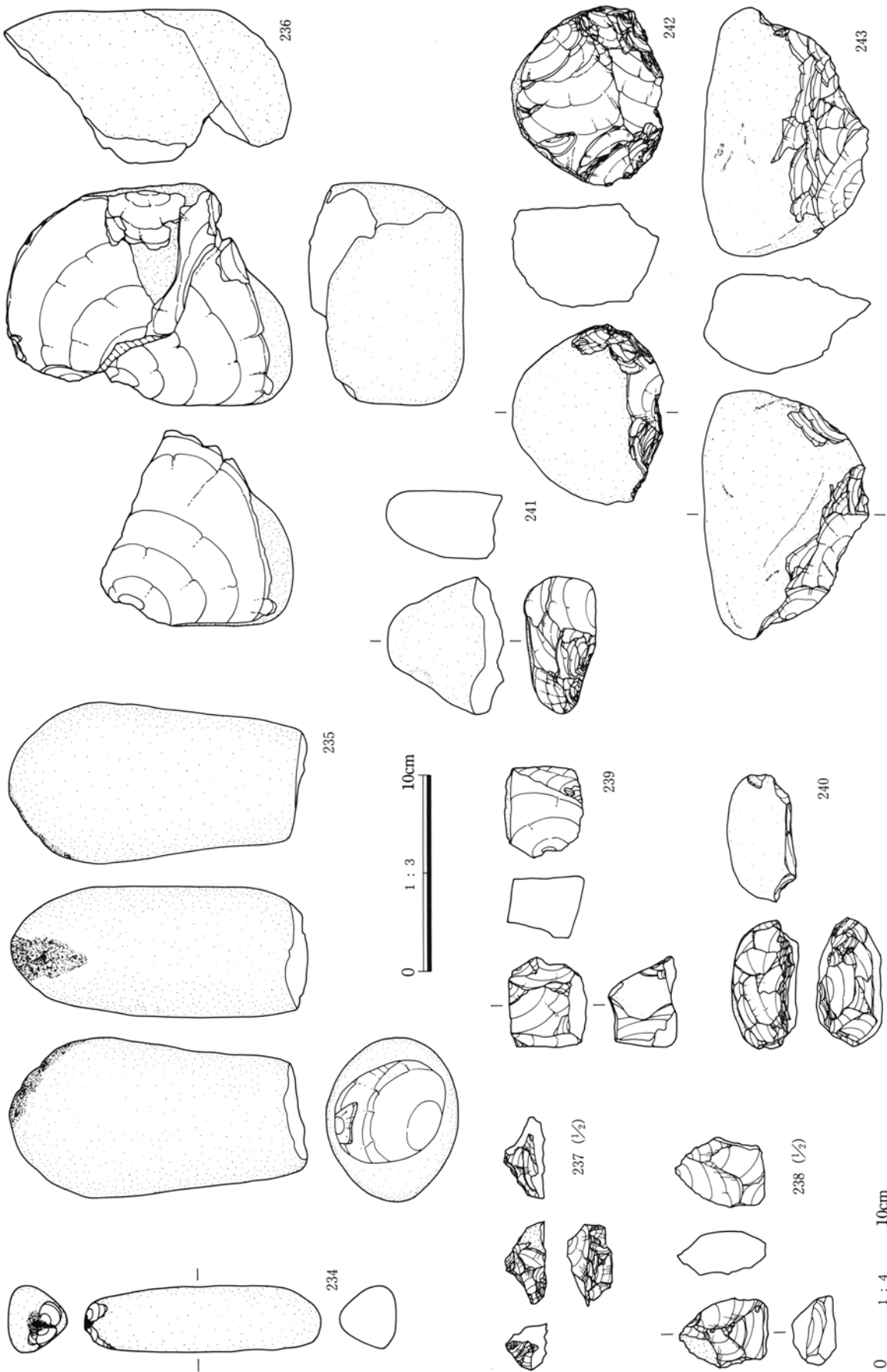


第129図 包含層出土の石器(17)

II 調査の結果

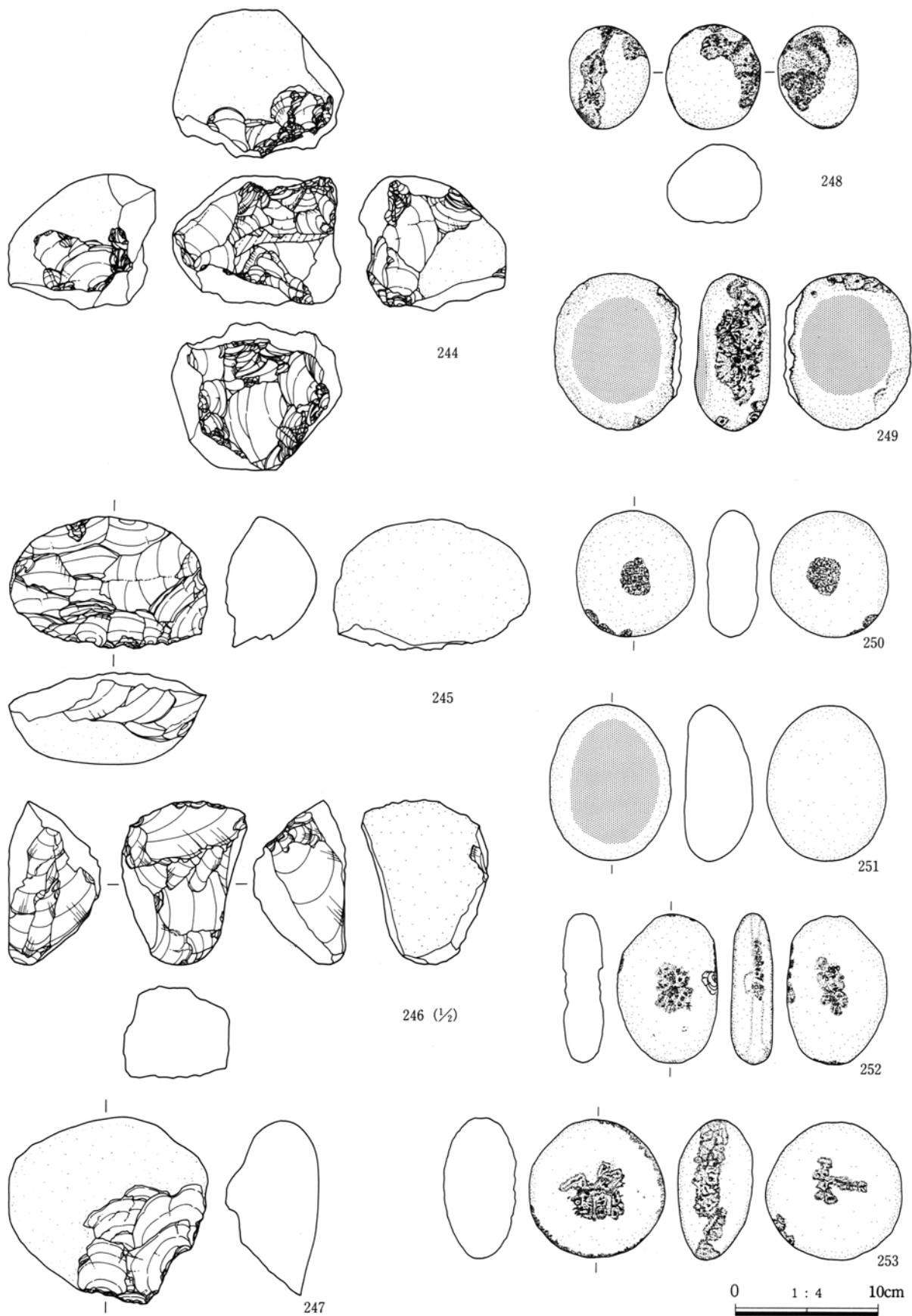


第130図 包含層出土の石器(18)



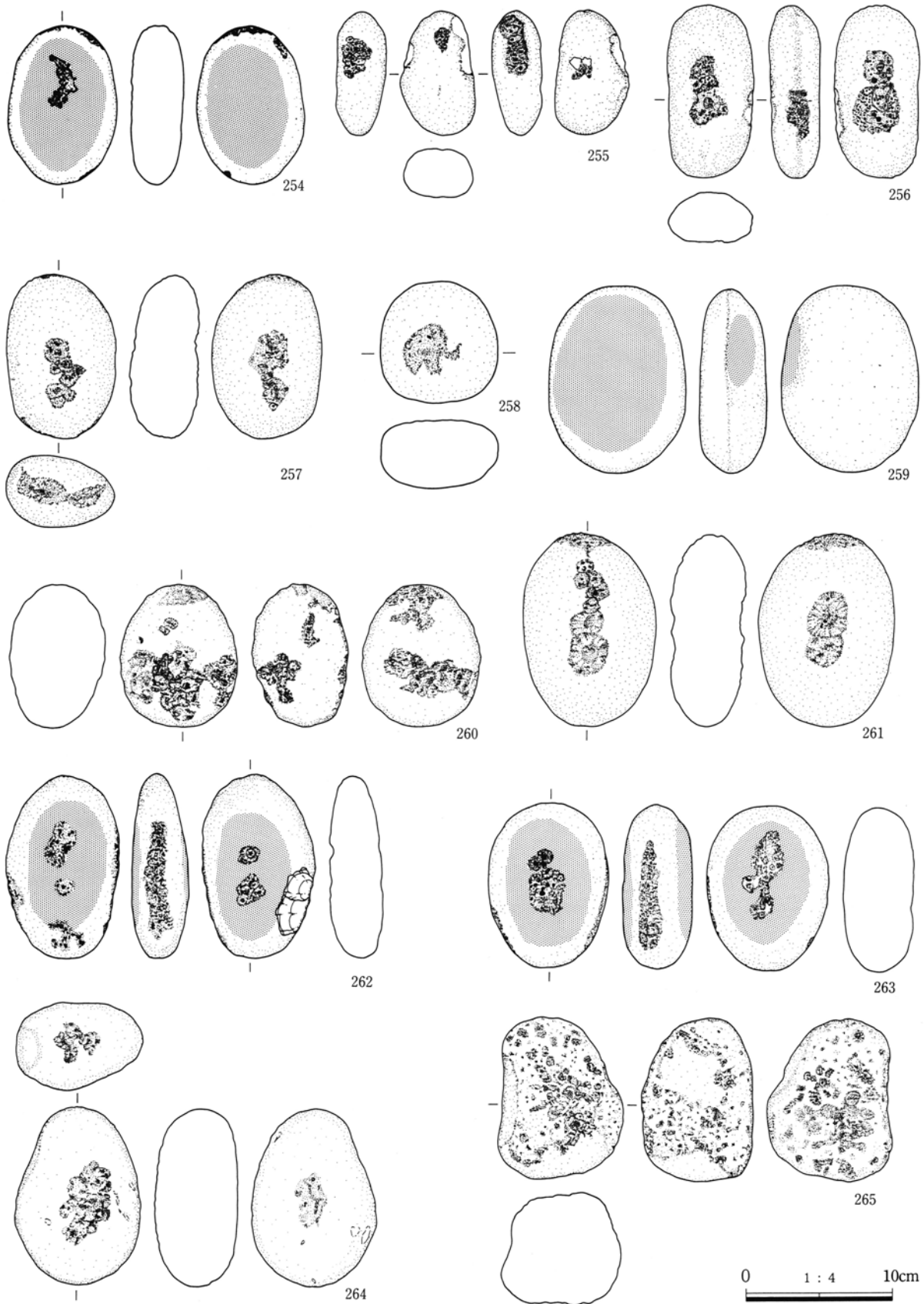
第131図 包含層出土の石器(19)

II 調査の結果



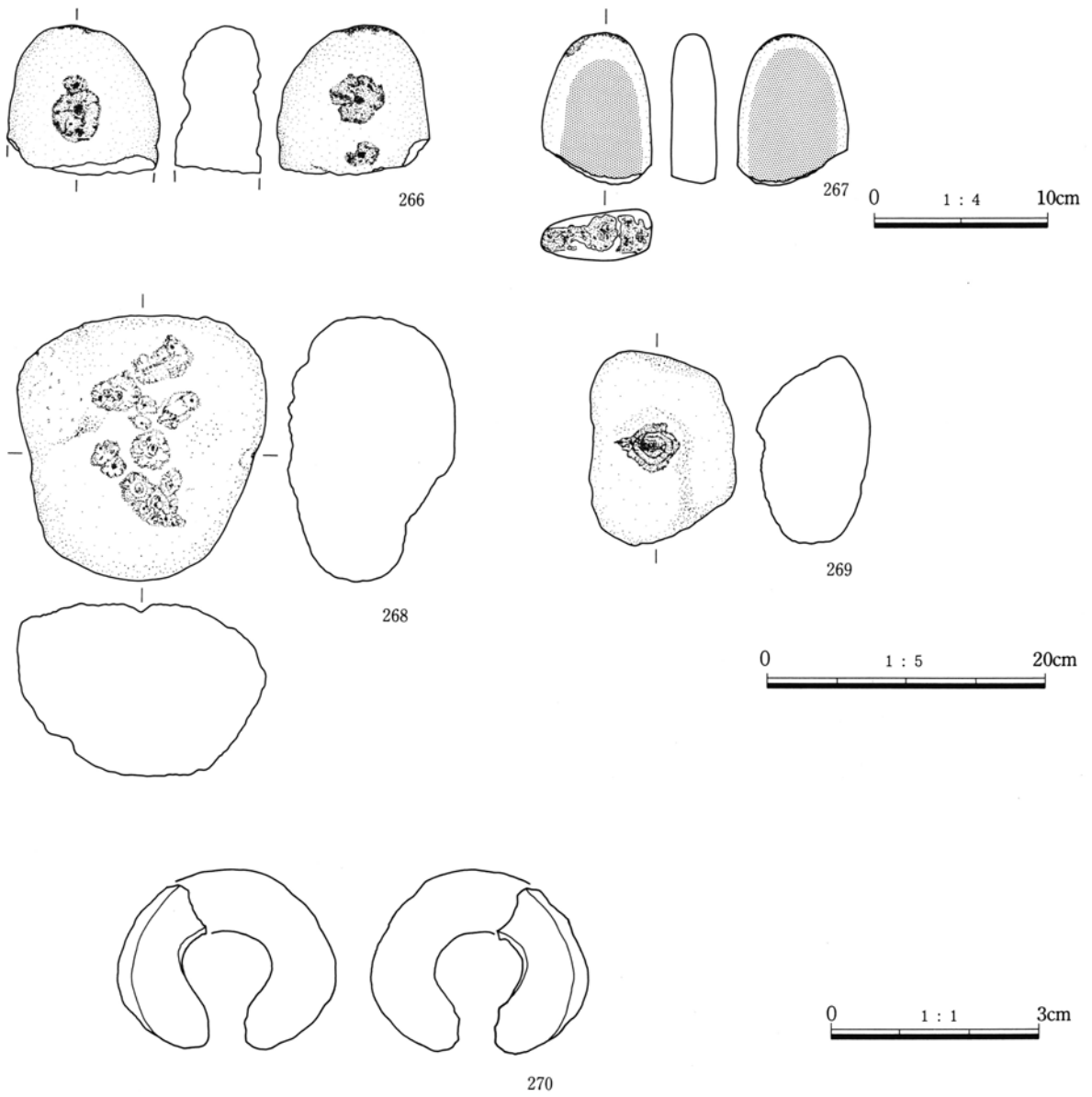
第132図 包含層出土の石器(20)

2. 縄文時代



第133図 包含層出土の石器 (21)

II 調査の結果

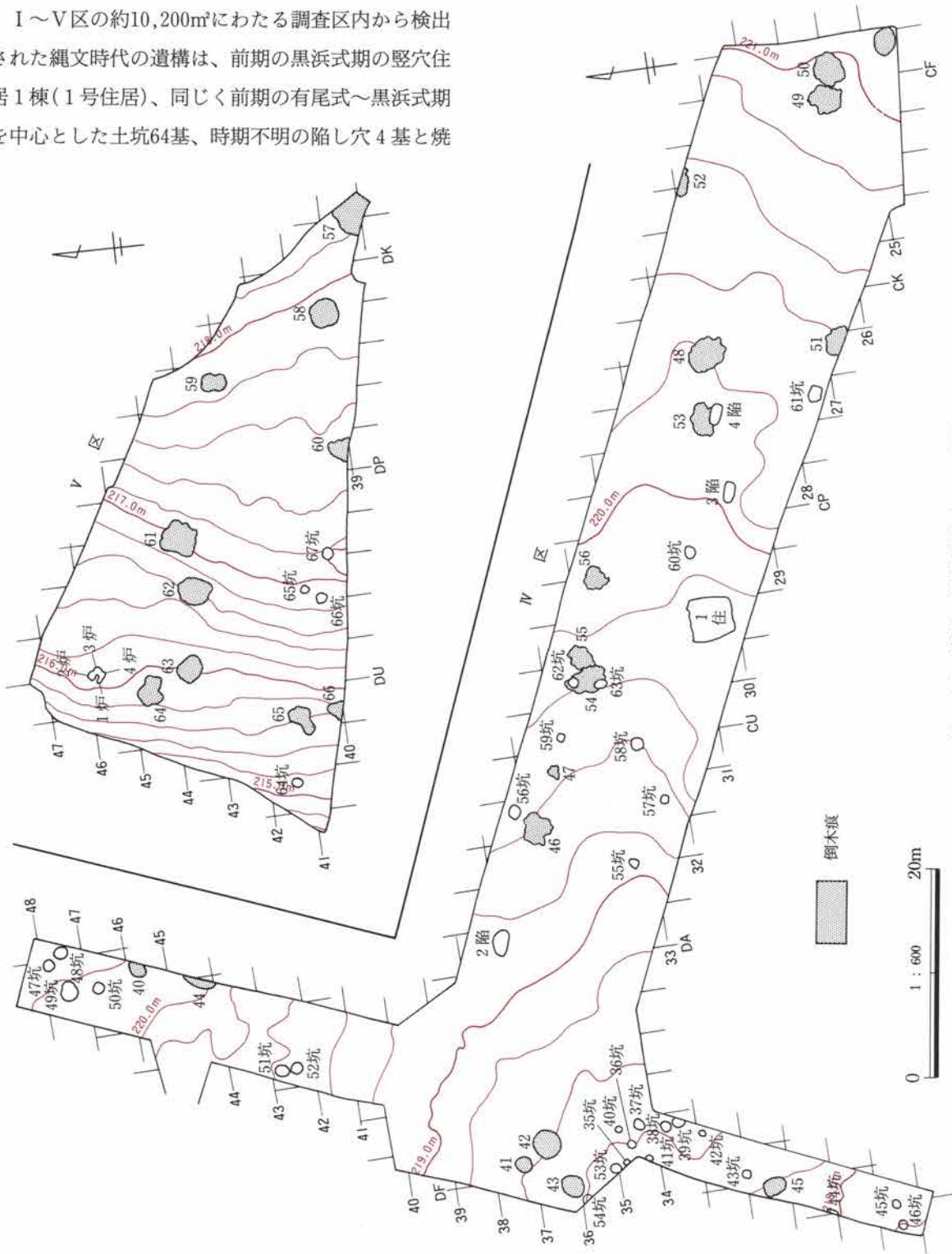


第134図 包含層出土の石器 (22)

2-2 吹屋犬子塚遺跡

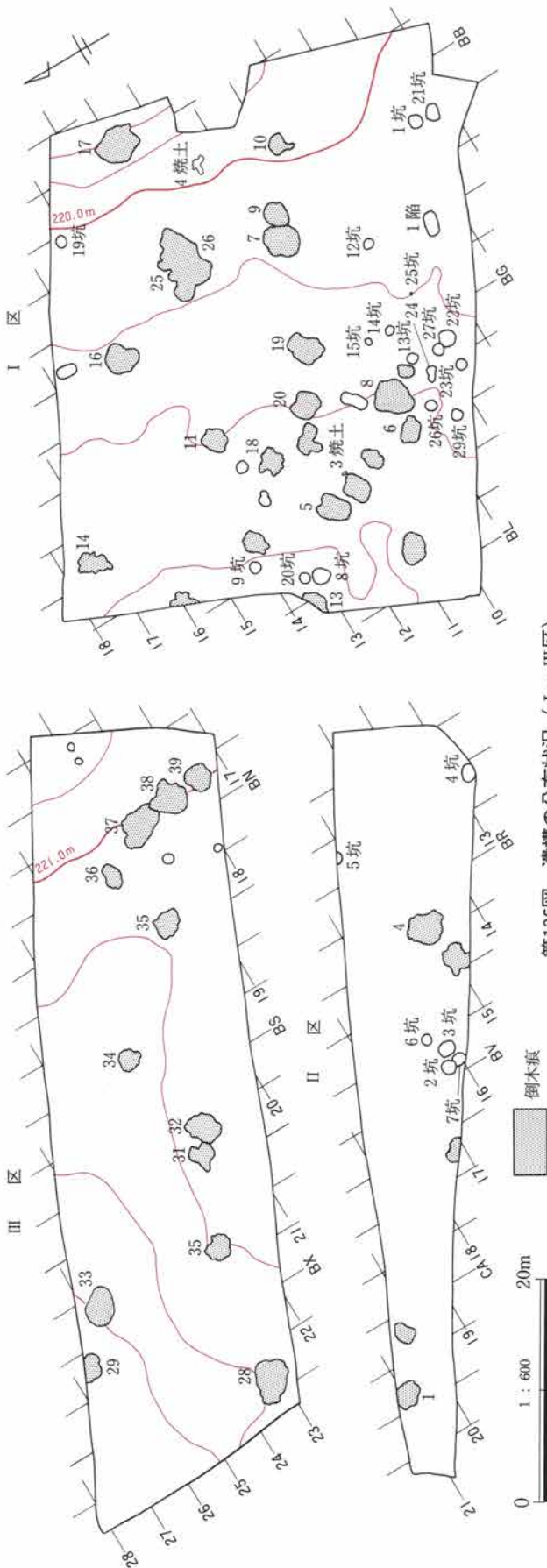
(1) 検出された遺構と遺物の概要

I～V区の約10,200㎡にわたる調査区内から検出された縄文時代の遺構は、前期の黒浜式期の竪穴住居1棟(1号住居)、同じく前期の有尾式～黒浜式期を中心とした土坑64基、時期不明の陥し穴4基と焼



第135図 遺構の分布状況 (N・V区)

II 調査の結果

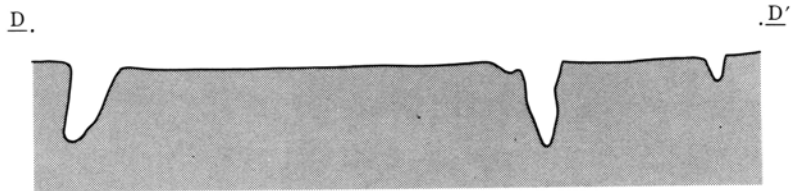
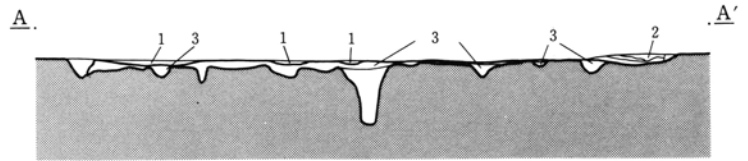
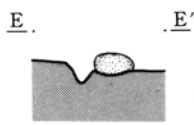
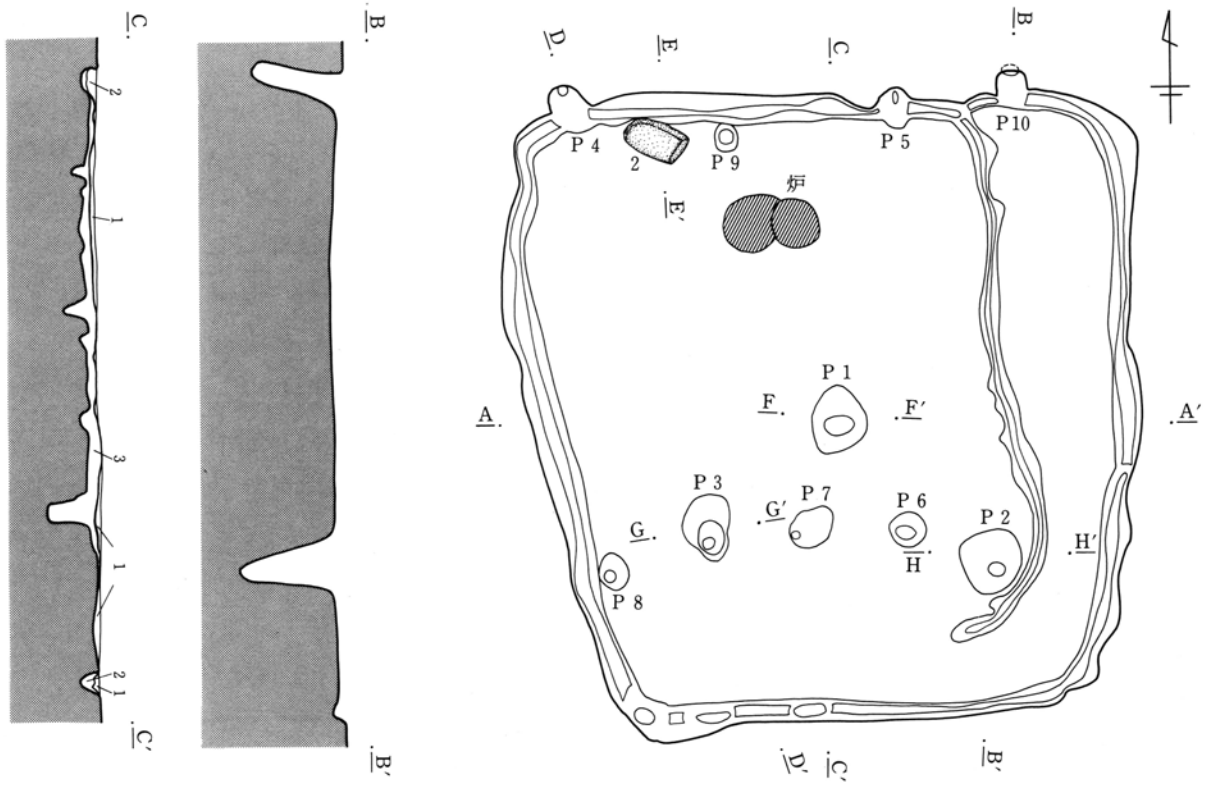


第136図 遺構の分布状況 (I～III区)

土痕6箇所である。各遺構の確認面は、5・6号焼土痕がVII～VIII a層内である他は、全てIX層のローム層上面である。II区の調査区域境界にかかる5号土坑の場合、その掘り込みはVIII a層上面より行われていることが、かろうじてではあるが確認されている。赤城山南麓を中心とした周辺遺跡の調査事例から、VII層の淡色黒ボク土の堆積時期が縄文時代中期にあることが判明しているが、上記の遺構のほとんどが前期に帰属することを考えれば、VIII a層上面が当時の生活面であり、かつ各遺構の掘り込み面であったと推定される。

竪穴住居の僅少さに比べて、土坑の多さが目立つが、その分布は利根川の段丘崖に近接したI区や、吹屋中原遺跡とを画する湧水により形成された小規模な開析谷に近接するIV区南西部および北部にかなり集中する傾向が認められる。発掘調査では未確認ではあるが、外観的にはおそらく集落の展開も両地点に分かれるものと思われる。特にIV区での竪穴住居の検出は、開析谷の西方に隣接する吹屋中原遺跡でも同期段階の竪穴住居が存在することを考慮すると、北方約100mほどのところにある湧水点を圍繞するように集落が展開する可能性を示唆するものであろう。しかし、その集落規模については、既存の竪穴住居の分布密度が極めて薄いことから、小規模であったことが窺える。

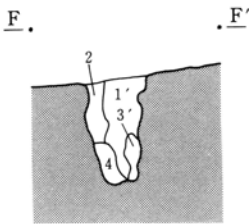
遺構確認面のローム層の上位には、当遺跡より1段下位の中位段丘上に立地する白井北中道II遺跡と同様に、約50～80cm厚の縄文時代の遺物包含層(VI～VIII層)が存在し、土器(17,478点)や石器(3,482点)などが多量に出土した。これらの遺物の分布状況を調査区単位で見ると、密度の高いのは遺構の密集するI区やIV区であり、II・III区やVI・VII区ではかなり散漫な状態であった。こうしたことは、遺物包含層の形成が遺構周辺での廃棄を含めた諸活動の中でなされたことを示すものであろう。时期的には中・後期の遺物が若干混じるが、前期の有尾式期や黒浜式期を主体としており、諸磯b式期が主体の白井北中道II遺跡や吹屋中原遺跡とはやや異なった様相を呈す



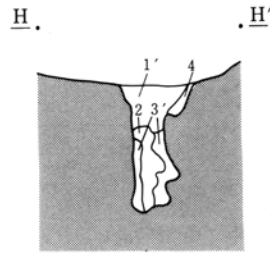
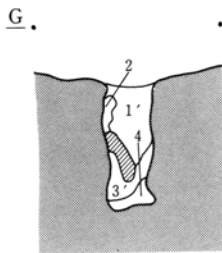
埋没土層

- 1. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体にロームブロックが10%混入。軽石粒 (As-D) を少量含む。
- 1'. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体にロームブロックが5%混入。若干の粘性を有する。
- 2. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体にロームブロックが30%混入。締まりに乏しい土。
- 3. ロームブロックを主体に2層が10%混入。貼床の土。
- 3'. 1'層に類似するが締まりに乏しい。
- 4. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体にロームブロックが40%混入。締まりに乏しい土。

0 1 : 50 2m



L = 219.90m



0 1 : 30 1m

第137図 1号住居

II 調査の結果

る。包含層遺物の出土量に比べて、遺構内出土遺物は極めて僅少であり、対照的な状況を示している。

この他に、IX層上面で66基の倒木痕が検出されている。当遺跡では、その形成時期や転倒方向を記録することを主眼として、調査を行った。

(2) 竪穴住居

IV区のほぼ中央部において、1棟(1号住居)が検出されたのみである。VI～VIII層の包含層内出土遺物の多さから見て、その掘り込みが浅いために確認面のIX層まで到達しない住居も存在する可能性も考慮して調査に望んだ。IX層上面での精査にもかかわらず、結果的には1号住居以外の痕跡を何ら検出することができなかったのであるが、柱穴と思しき落ち込み等の痕跡も認められなかったことから、調査区域内には1号住居以外の竪穴住居は存在しなかったと考えられる。

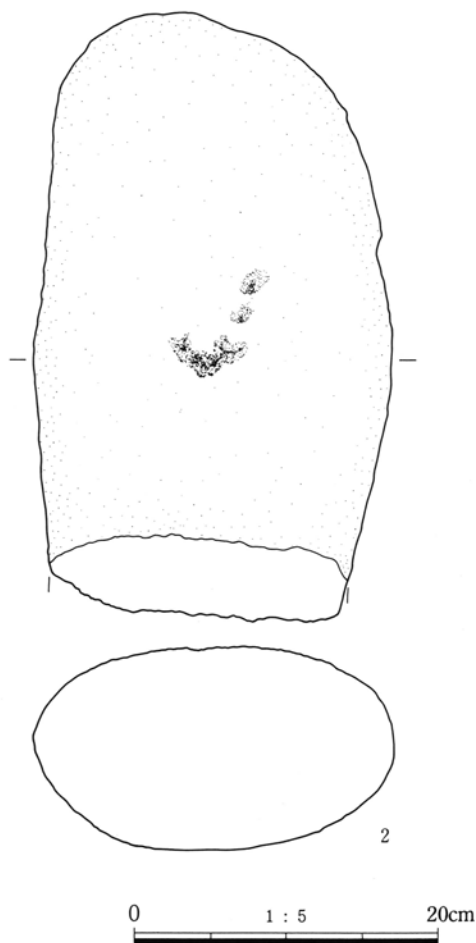
A. 1号住居

IV区のCS-30グリッドに位置している。ローム面(IX層)までの掘り込みが浅いために、周壁や埋没土はほとんど残存していないが、周溝の重複状態から西・北壁を基軸にした1回の拡張を有すると判断される。

古段階の形状は、南北方向に長軸を持つ平行四辺形状を呈する。規模は、長軸3.7×短軸3.3m、面積約10m²である。これに伴う支柱穴は、P4～P6・P8の4本と考えられるが、P4・P5は北壁に接して内傾気味に穿たれ、床面との傾斜角は約75度である。各々の規模(直径×深さ)は、P4:30×49cm、P5:25×48cm、P6:25×50cm、P8:25×38cmである。また、各柱穴の芯心間を結んだ形状は住居の外形に近似し、それらの距離はP4～P5:2.25m、P5～P6:2.85m、P6～P8:2.0m、P8～P4:3.2mである。

新段階は東壁と南壁を50～90cmほど拡張しており、その形状は正方形が若干ゆがんだような台形状を呈する。規模は、北辺3.2×南辺4.2×南北軸長4.1m、面積13.46m²である。当段階の柱穴は、P2・P3・

P9・P10と考えられるが、P10は北壁に接してやはり内傾気味に穿たれている。各々の規模は、P2:42×62cm、P3:38×54cm、P9:18×43cm、P10:24×44cmである。また、各柱穴の芯心間を結んだ形状は住居の外形とは異なって長方形を呈し、それらの距離はP2～P3:1.95m、P3～P9:2.7m、P9～P10:1.95m、P10～P2:3.3mである。P1・P7については、補助柱穴の可能性もあるが、断定することはできない。その規模は、P1:43×40cm、P7:33×28cmである。P1～P3については断割り調査をしたが、柱痕と推定される埋没土は確認できなかった。



第138図 1号住居の出土遺物

炉は地床炉であり、住居中軸線上の北壁に近接して新・古両段階のものが各1基存在する。焼土痕の分布範囲で見た規模は、古段階が直径約40cm、その東に隣接する新段階が直径約30cmである。炉周辺の床面は、踏み固められてかなり堅緻であった。周溝は幅15～25cm、深さ4～10cmであり、古段階では南側で一部途切れて全周しないが、新段階のものは全周している。住居の方位を北辺壁面に直行する軸線で見ると、N90度Eである。

出土遺物は極めて僅少であるが、総数7点の土器片の全てが黒浜式であり、当住居の時期も同期に比定されよう。この他に、片面に敲打痕をもつやや大きめの河床礫(No2)が北壁際から出土しており、台石あるいは石柱としての用途が考えられる。各遺物は、床面密着かそれに近い状況で出土した。

(写真：PL52・53・67)

(3) 土 坑

I区21基、II区6基、III区4基、IV区29基、V区4基の計64基が検出されている。各土坑ともにIX層上面にて確認したが、「(1) 検出された遺構と遺物の概要」でも述べたように、II区の調査区域境界にかかる5号土坑の埋没土層断面を観察すると、実際の掘り込み面は約30～40cm上位のVIII a層の上面であり、規模についてはこの点を勘案する必要がある。

各土坑の規模については、第6表に記載してあるのでそちらを参照されたいが、直径が1m前後で平面形状は円形を基調とするものがほとんどである。また、断面形状は、掘削深度の深い5・11・12・19・26・27・29・37・39・44・49・50・63号などを見ると、いずれも壁面がかなりオーバーハングしており、いわゆる「袋状土坑」に近い形状を有している。こうした円形状土坑の他に、21号や53号などのように楕円形あるいは隅丸方形を呈するものも少数存在する。各土坑を埋める土は、個々に若干の相違はあるものの、基本的にVII層やVIII a層に類似した黒褐色土層を主体としてレンズ状に自然堆積しているものがほとんどであり、人為的に埋め戻しを行ったと想定されるよ

うな土坑は認められない。各土坑の埋没土の観察・注記にあたっては、その類似性を考慮して個別に行わず、165頁に記載したように統一的に記号化して表記した。

いずれの土坑も、土器片を中心とした遺物を少量出土しているが、そのほとんどが埋没土の上層中に包含されるケースが多い。それらの中でも、比較的少量(20点以上)の土器片を出土するものとして、1・29・39・63号などがある。おそらくこれらの遺物は、自然埋没する過程で窪地として残ったところへ、投棄されたものであろう。また、21号からは完形に近い深鉢形土器が横転して押しつぶされた状態で出土している。この土器は、底面から10cmほど浮き上がっており、土坑内に置かれていたものでないことは確実である。しかし、それが埋没過程で投棄されたものなのか、あるいは人為的に埋め戻された後にその上部に定置されたものであるのかは、埋没土層の残存状況が不良なこともあり、断定はできない。こうしたもの以外に、23・25・35・37・48号などは、坑内から径30cm前後の河床礫を出土している。48号を除いて、底面に密着するかあるいはそれに近い状態での出土であることや、37号出土の河床礫は片面に凹み穴をもつ棒状のものであること等を考慮すると、上記の21号も含めて他の土坑のような貯蔵穴的なものとは異なる、墓坑的な性格をもつ可能性が高い。墓的な土坑の分布的は、I区南側とIV区北西端および南西端の3地点に分かれているが、ともに1号住居の近隣に位置しない点は、居住域と墓域とを区別していたとも想定される。

前述の遺物を伴出する土坑の時期については、ほとんどの出土土器の型式が、前期の有尾式や黒浜式に比定されることから、当該期の所産と見て問題ないだろう。また、それ以外の土坑についても、形態や規模それに埋没土の類似性から、大半のものが同段階に位置づけることができよう。

(写真：PL54～68)

II 調査の結果

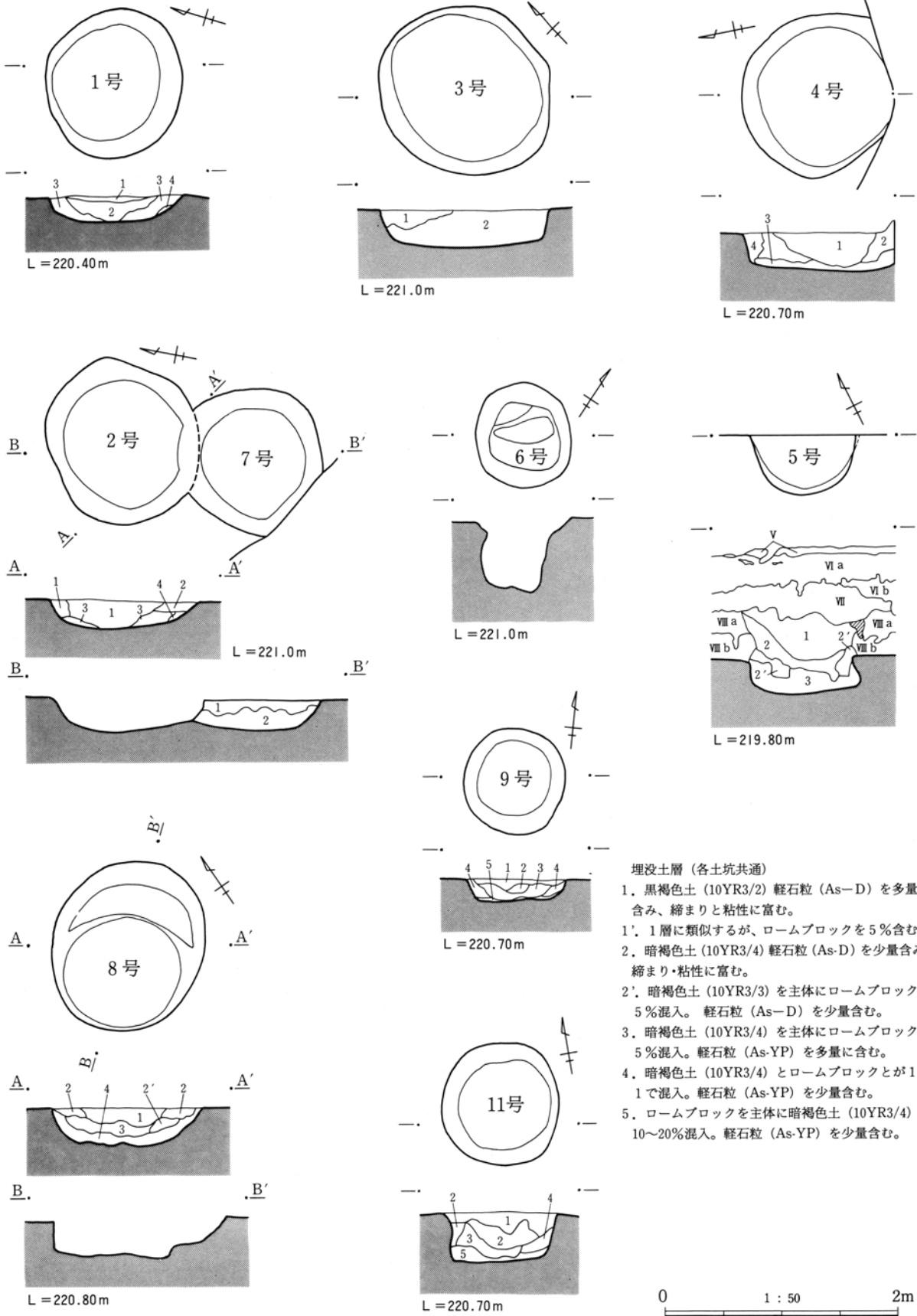
第6表 土坑の規模一覧

番号	位置	平面形	規模 長径×短径×深さ	時期	備考
1	BB-06	円形	132×120×19	有尾 (2a・2b・5類)・黒浜式期	
2	BU-17	円形	130×122×26	不明	7坑を切る
3	BU-17	円形	159×138×32	不明	
4	BP-13	円形	147×130×35	不明	
5	BP-17	円形	90×50×75	不明	VIII a層を掘り込む
6	BT-17	円形	92×85×60	不明	
7	BU-17	円形	90×88×25	不明	2坑が切る
8	BJ-13	円形	150×130×32	不明	
9	BI-15	円形	90×87×19	不明	
10	BH-14	円形	115×(100)×28	不明	16坑と重複
11	BG-14	円形	110×105×45	不明	
12	BD-09	円形	78×70×45	有尾式期 (2a・5類)	
13	BG-09	円形	90×87×18	有尾式期	
14	BF-09	円形	70×64×17	有尾式期	
15	BF-10	円形	64×59×10	不明	
16	BI-13	円形	75×73×41	黒浜式期 (3c類)	10坑と重複
17			欠	番号	
18			欠	番号	
19	BA-15	円形	98×90×48	不明	
20	BJ-14	円形	97×92×23	不明	
21	BB-06	楕円形	157×116×16	黒浜式期 (3c類)	
22	EG-07	円形	162×156×18	不明	27坑が切る
23	BH-08	円形	95×82×35	不明	
24	BI-08	円形	58×55×12	黒浜式期	25坑が切る
25	BH-08	円形	78×75×10	不明	24坑を切る
26	BH-09	円形	110×100×39	黒浜式期	
27	BG-08	円形	113×108×40	黒浜式期 (3類)	22坑を切る
28	BG-08	円形	67×55×22	有尾・黒浜式期	
29	BI-09	円形	110×100×30	有尾 (2b類)・黒浜式期	面型式拮抗
30			欠	番号	
31	BK-20	円形	60×56×15	不明	
32	BK-20	円形	53×46×20	不明	
33	BN-19	円形	90×80×9	不明	
34	BN-20	円形	94×90×25	不明	

(単位：cm)

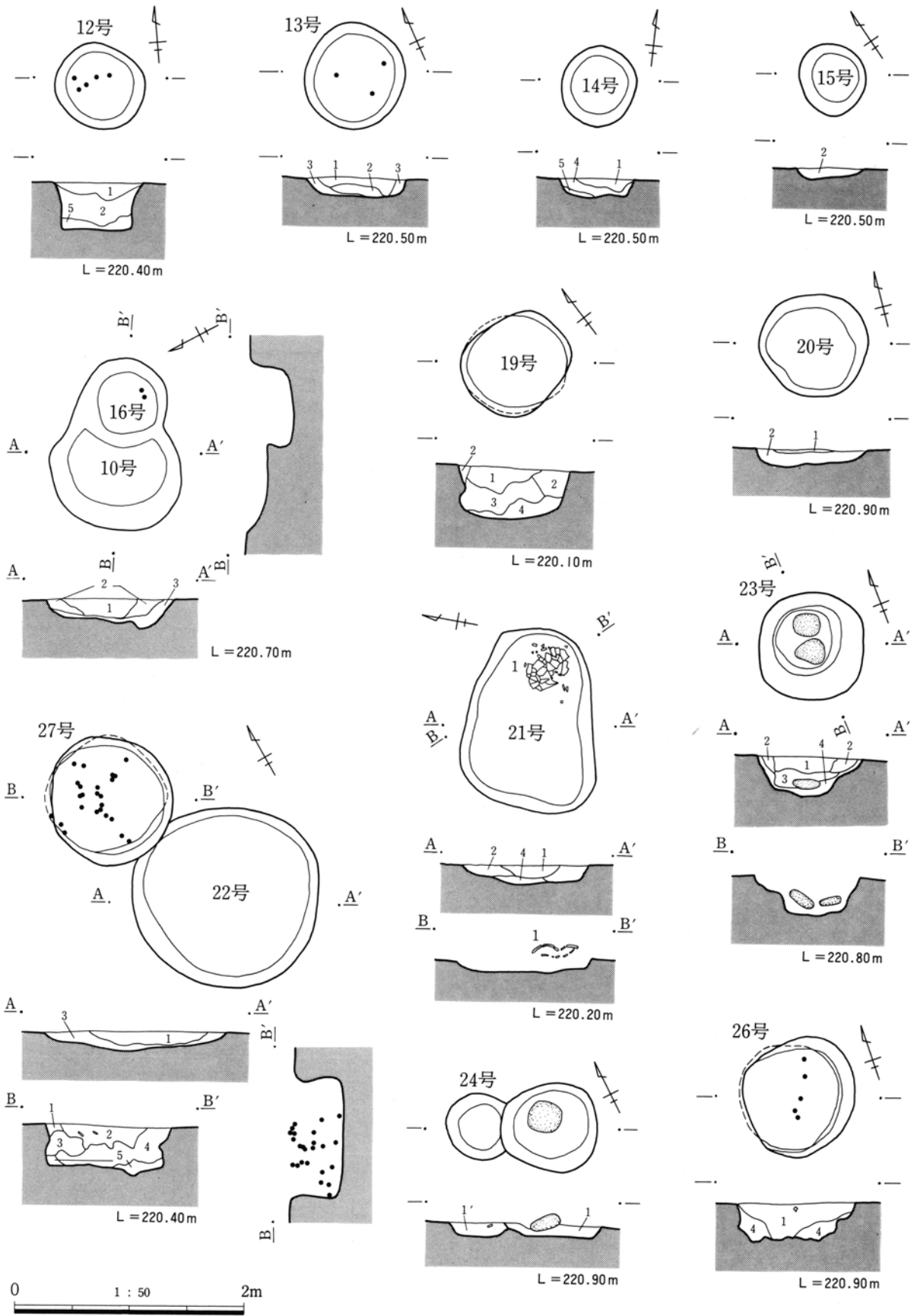
番号	位置	平面形	規模 長径×短径×深さ	時期	備考
35	DF-35	円形?	70×?×28	不明	
36	DE-35	円形	76×67×12	不明	
37	DE-35	円形	111×103×43	有尾 (5類)・黒浜式期	面型式拮抗
38	DE-34	円形	100×85×13	黒浜式期	
39	DE-34	円形?	117×92×62	有尾 (2a・b類)・黒浜式期	黒浜式主体
40	DE-35	円形	67×60×20	有尾式期 (2b類)	
41	DE-35	円形	48×45×18	不明	
42	DE-33	円形	54×46×10	不明	
43	DF-32	円形	84×80×7	不明	
44	DF-31	円形	100×70×60	不明	
45	DH-29	円形	53×52×9	不明	
46	DH-29	円形	91×75×12	不明	
47	CW-48	円形	118×97×20	有尾式期 (5類)	
48	CW-48	円形	124×116×26	不明	
49	CX-48	円形	178×162×55	黒浜式期	
50	CX-47	円形	118×107×60	黒浜式期	
51	DB-43	円形	127×106×44	不明	
52	DB-43	円形	126×111×51	不明	
53	DF-36	円形	110×90×10	有尾式期 (2c類)	
54	DF-36	円形	113×64×56	黒浜式期	
55	CW-34	円形	94×93×21	黒浜式期	
56	CV-37	円形	122×110×25	黒浜式期 (3c類)	
57	CV-33	円形	85×74×20	不明	
58	CV-32	円形	135×120×36	不明	
59	CT-35	円形	78×76×50	不明	
60	CP-31	円形	110×97×12	不明	
61	CM-28	楕円形	166×123×22	不明	
62	CS-34	円形	106×100×22	不明	
63	CS-35	円形	120×105×50	有尾式期 (5類)	
64	DW-42	円形	87×85×38	黒浜式期	
65	DR-41	円形	74×60×19	不明	
66	DR-41	円形	105×88×34	有尾・黒浜 (3a類) 式期	黒浜式主体
67	DQ-40	楕円形	107×77×31	不明	

2. 縄文時代



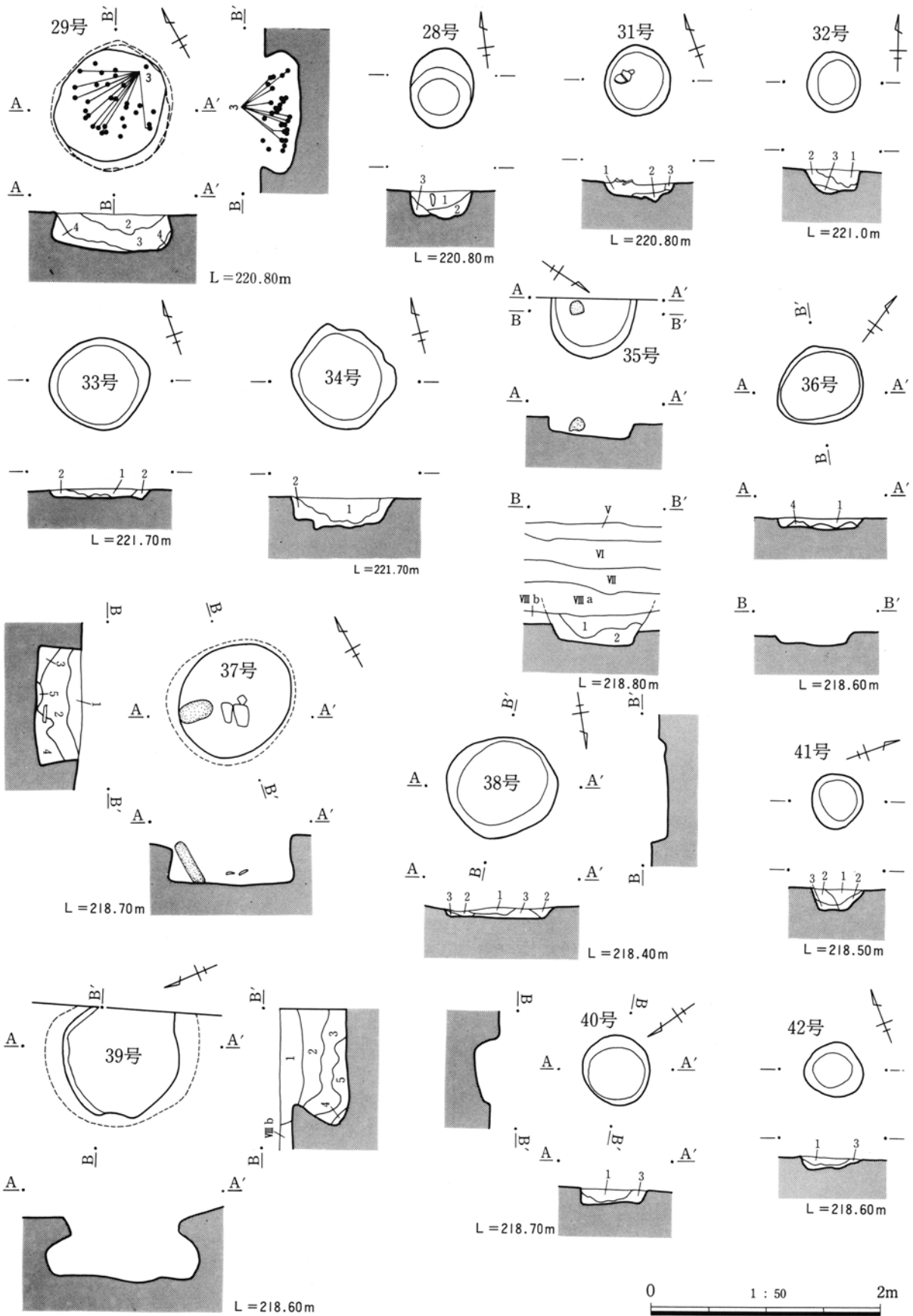
第139図 1~11号土坑

II 調査の結果



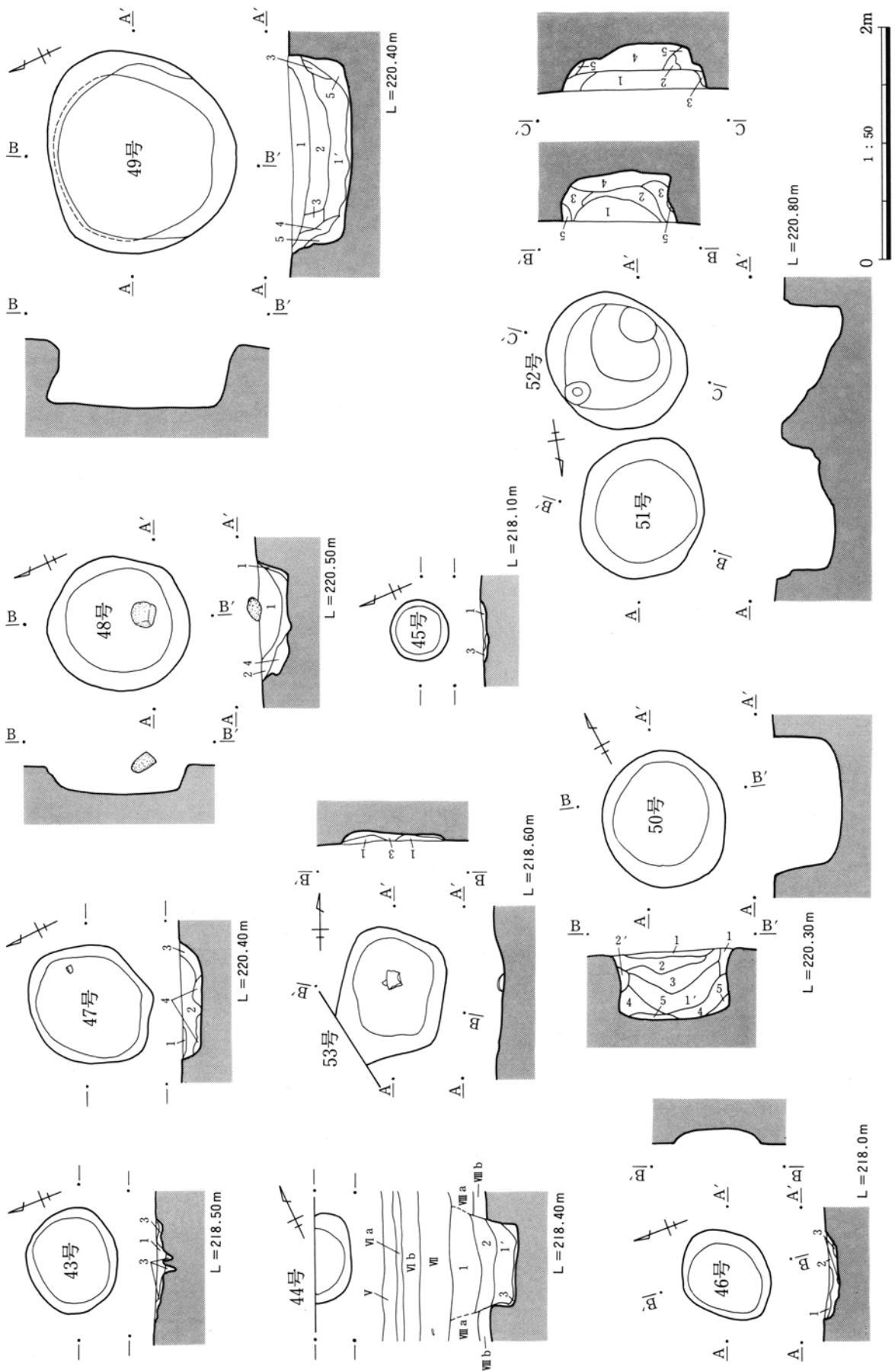
第140図 12~27号土坑

2. 縄文時代



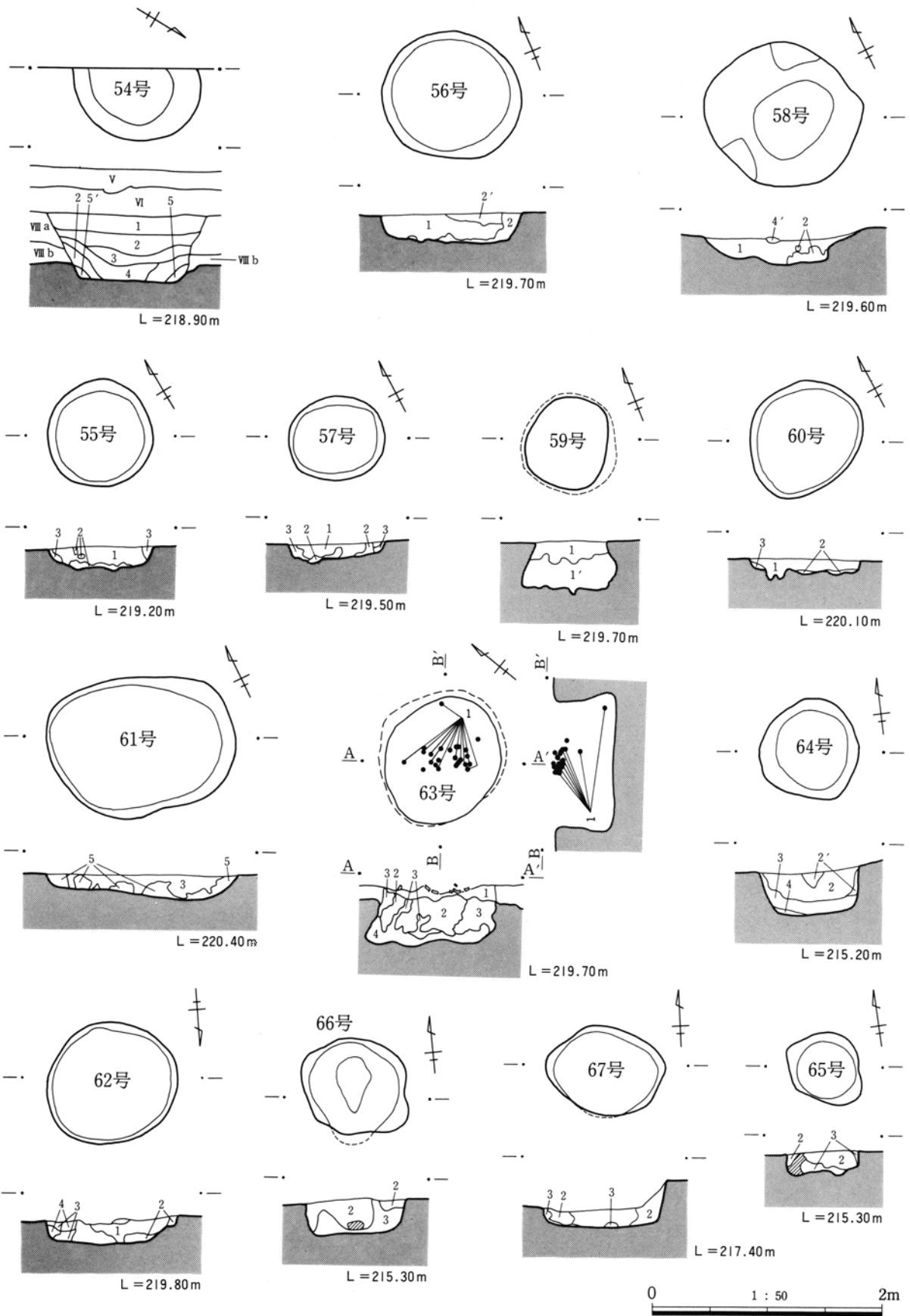
第141図 28~42号土坑

II 調査の結果



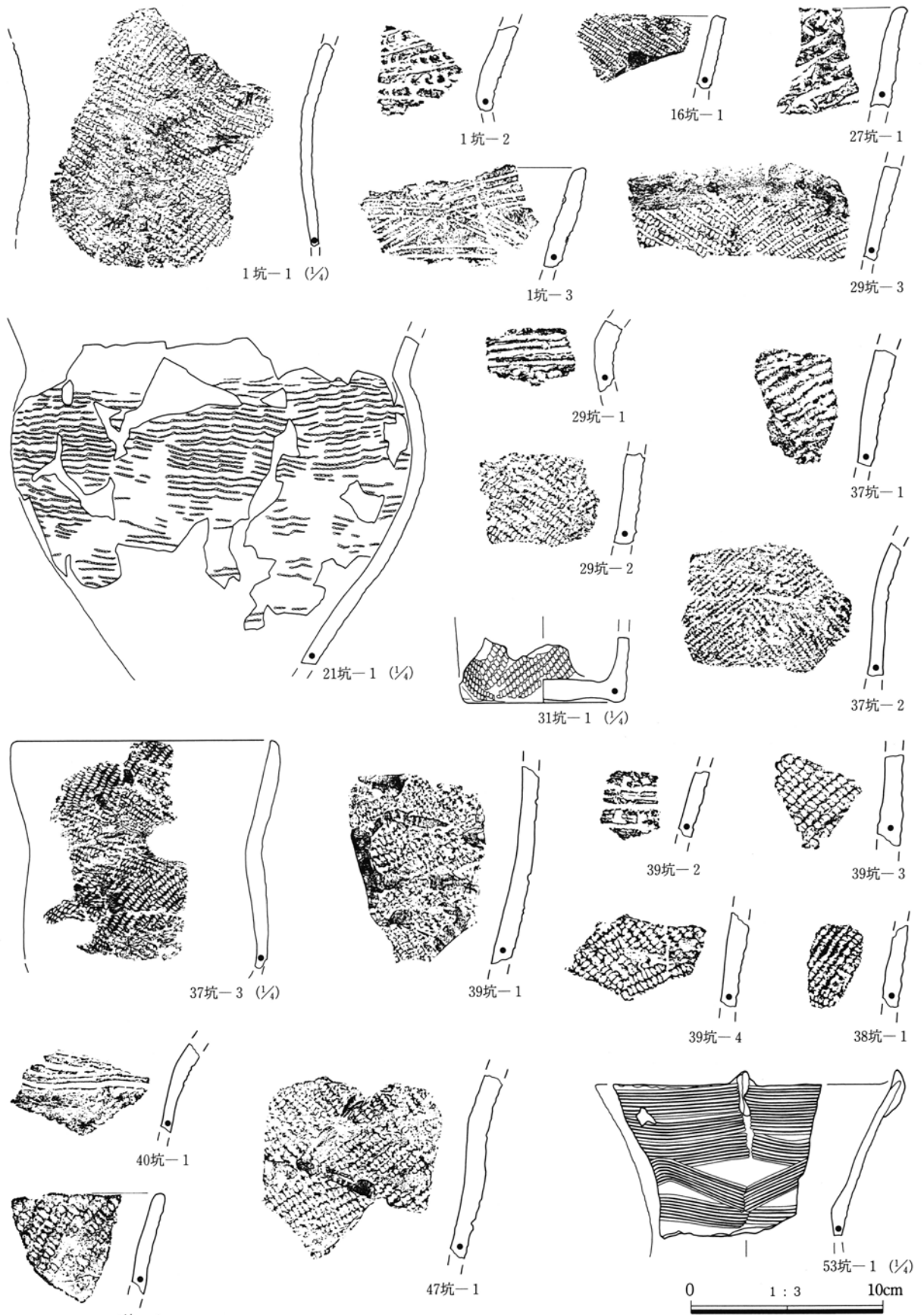
第142図 43~53号土坑

2. 縄文時代



第143図 54~67号土坑

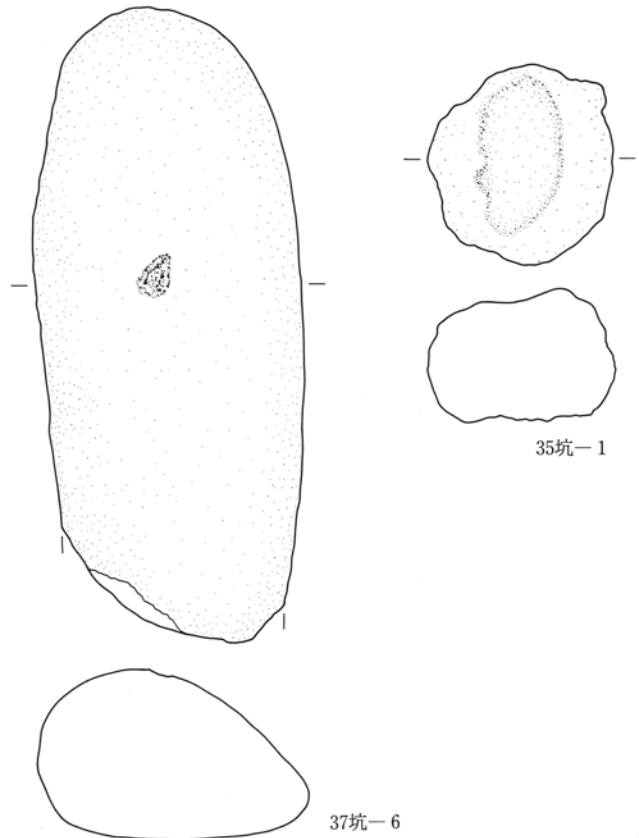
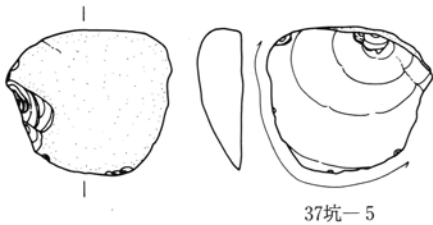
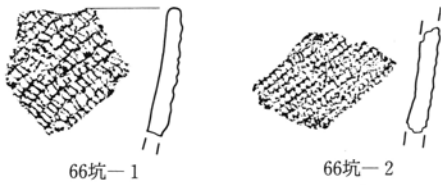
II 調査の結果



第144図 土坑出土遺物(1)

(4) 陥 穴

I区では1基(1号)、IV区では3基(2~4号)の計4基が検出された。1号を除いて、各陥し穴ともにローム層上面にて確認作業を行ったため、実際の掘り込み面は確定できていない。1号の土層断面で見ると、VIII a層上面からの掘り込みであることが確認できる。平面形状は、各陥し穴ともに四隅が丸みを帯びた隅丸長形状を呈する。また、断面形状は、上半部が約60度の勾配で外傾し、下半部はほぼ垂直に近く、底面は水平に近いフラット面を有する。いわば、上半部にて外傾することにより、開口部幅が底面幅よりも大きくなる。開口部での規模は、長軸1.9~2.5m、単軸0.9~1.3m、深さ0.7~0.8mである。深さについては、他も1号と同様にその掘り込み面がVIII a層上面であると仮定すれば、VIII a~VIII



0 1 : 3 10cm

0 1 : 5 20cm

第145図 土坑出土遺物(2)

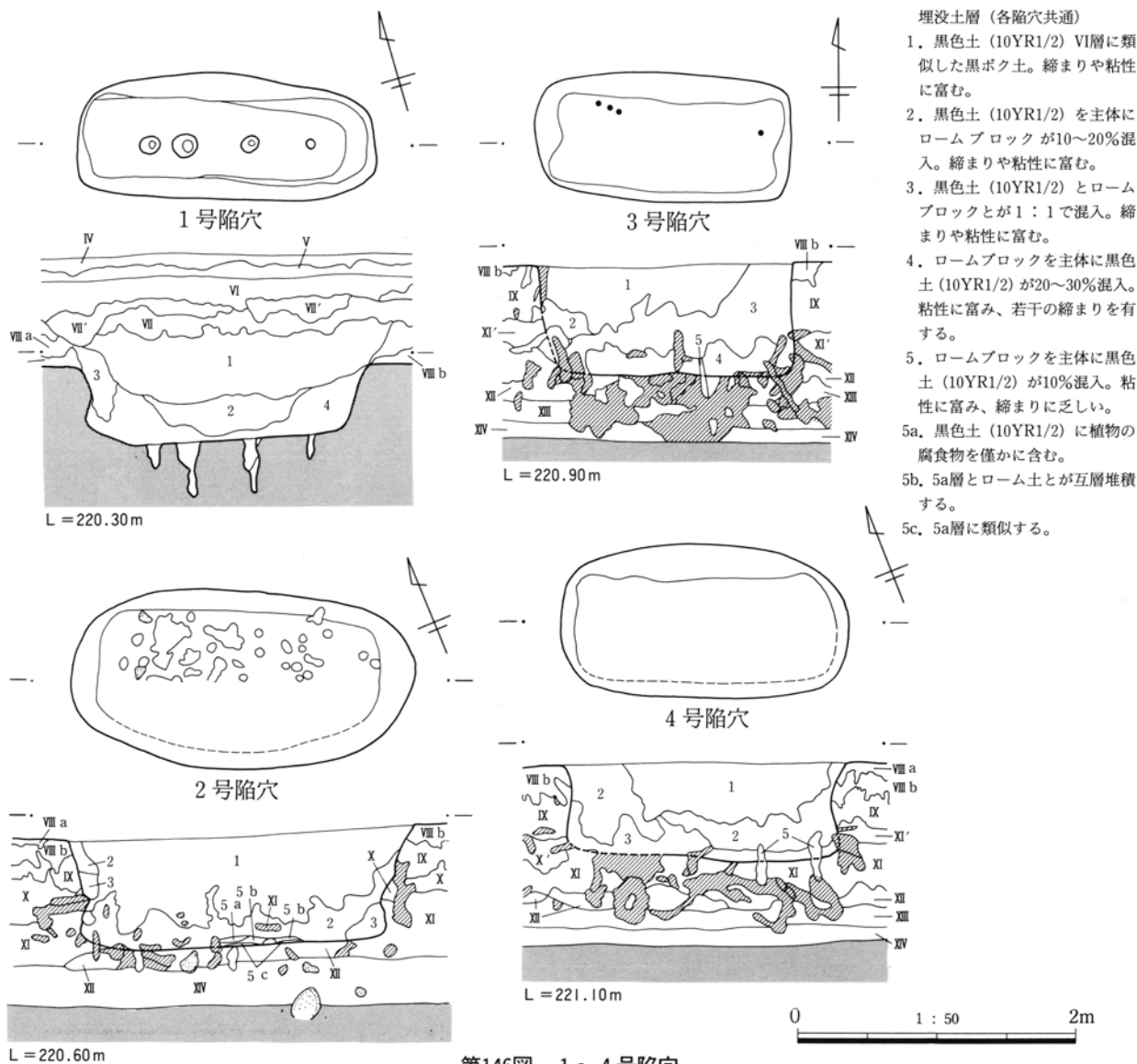
II 調査の結果

b層の層厚約30cmを付加した1m前後と考えられる。

このような長形状の陥し穴には、通常底面の長軸に沿って複数の小ピットが認められ、これが逆茂木を埋設あるいは打設した痕跡という考え方もなされている。当遺跡でもその有無を確認すべく、2～4号について長軸方向に沿った5cm幅を単位とするスライス調査を実施した。結果的には、植物根や小動物の活動に起因すると思われる土壌攪乱が、底面近くからその下位にまで及び、明確に逆茂木と認定されるような痕跡を検出することはできなかった。しかし、3号や4号では、底面にほぼ直立する長さ約30cm、直径5～8cmの円筒状の腐植土(5層)が1～2本認められ、これらが逆茂木痕の可能性もある。

1号については、上位から徐々に底面まで掘り下げ普通調査を行い、底面にて小ピットを確認した後に、配列の軸線に沿って半割調査をした。これらの小ピットは、直径8～18cm、深さ18～40cmの規模を有し、ピット内には1層に類似した黒色土やロームブロックが堆積する。掘り方としてはやや不整形であるが、逆茂木を直接打設したのかあるいは埋設したのかは断定しがたい。

各陥し穴の埋没土は、細部においては若干異なっているが、最上層に黒色土がレンズ状に堆積して自然埋没を示している点は共通している。2号の底面直上には、若干色調の異なる腐植土(5a～5c層)が互層をなして堆積しており、穴の上部を覆っていた



第146図 1～4号陥穴

構造物が崩落して腐食・堆積した可能性もある。

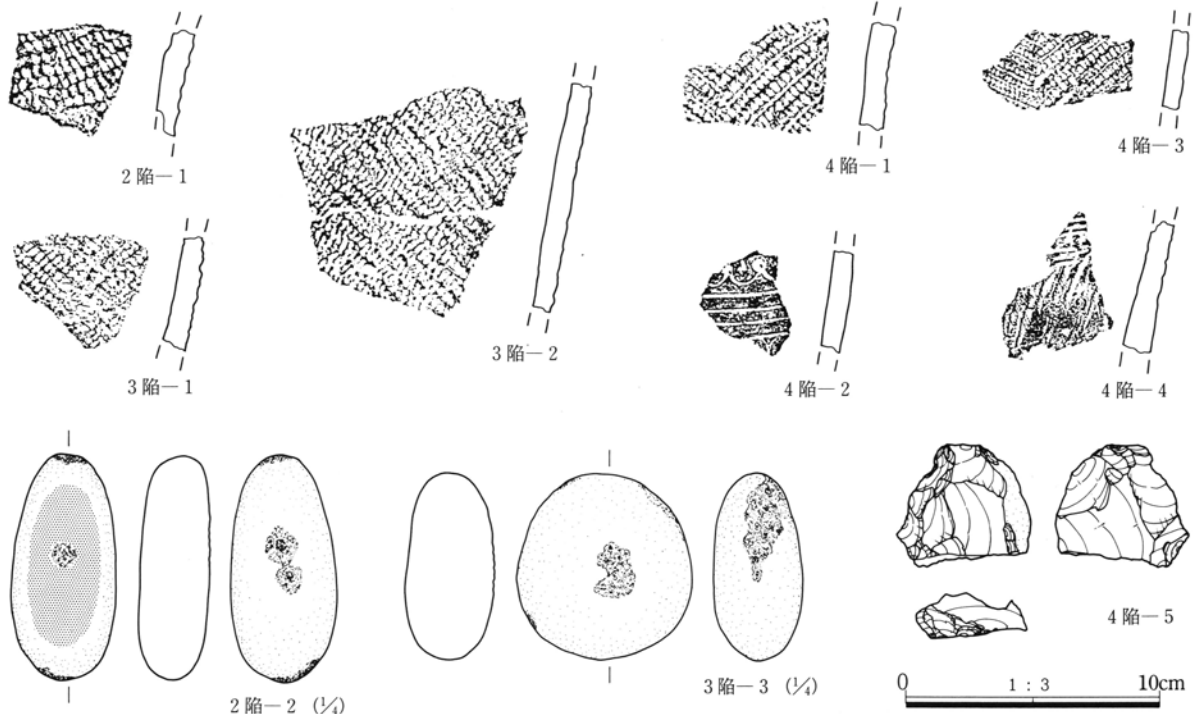
総体としては検出基数が少ないために、各陥し穴の関連性や配列状況を復元することは困難であるが、等高線に対して陥し穴の長軸がほぼ直行するように配置されており、各陥し穴ともに地形勾配を加味して穿った様子が窺える。

各陥し穴の所属時期については、2～4号が埋没土中より有尾式あるいは黒浜式の土器片を出土しているものの、陥し穴としての機能停止後に自然埋没する過程で混入した可能性が大きいことから、判定の根拠とするには問題があろう。またその性格上、有尾・黒浜式段階の竪穴住居や土坑等の日常生活関連遺構と空間的に重複することも考えにくく、基本的に有尾・黒浜式期とは異なると思われる。このように所属時期を確定することはできないが、その掘り込み面が中期段階に形成されたとされる淡色黒ボク土のVII層直下にあることを考慮すれば、少なくとも中期以前の所産であることは確実である。また、前述したような規模・形状・埋没土や設置方向などの類似性から見ると、各陥し穴ともに同一時期の可能性が高いと推定される。(写真：PL69～71)

(5) 焼土痕

I区にて2基(5・6号)、V区にて4基(1～4号)の計6基が検出された。1～4号はIX層のローム上面まで掘り下げた時点ではじめて確認し得たが、5・6号はVIII a層上面において確認することができた。各焼土痕について、焼土や炭化物の平面的な散布範囲をラインとして囲ったのが第148図であるが、ともに不整形形状を呈している。堆積土層断面図では、浅い掘り込みを持つようにも見えるが、これは被熱によって焼土化した範囲を断面図中に表現したものであり、決して土坑状の掘り込みを伴うものではない。これら焼土痕の形成要因については、1～4号に見られるように、かなり集中して存在していることからみて、自然的な営為によるものではなく、焚き火等の人為的な加熱により生じたものと考えられる。しかし、その所属時期や用途については、何ら遺物を伴出しないために、確定することは難しい。想像をたくましくすれば、屋外炉的な機能を有していたのかも知れない。

各焼土痕の散布範囲やその深度は、1号：長軸90



第147図 陥穴出土遺物

II 調査の結果

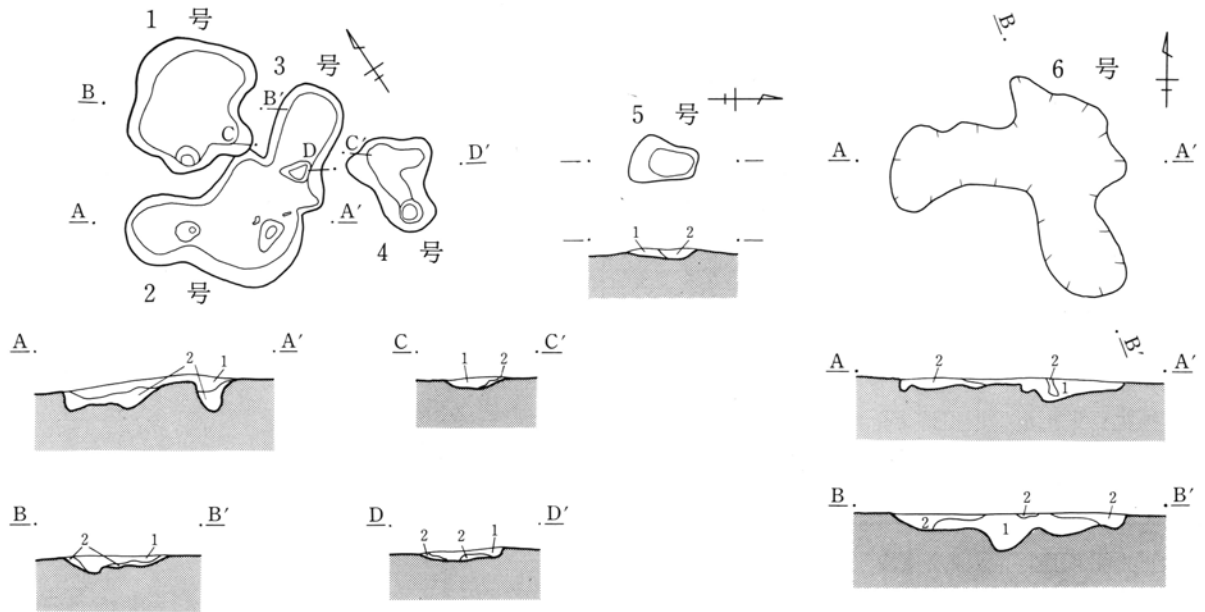
cm×単軸80cm、深さ10cm、2号：長軸80cm×単軸70cm、深さ18cm、3号：長軸60cm×単軸40cm、深さ10cm、4号：長軸70cm×単軸50cm、深さ6cm、5号：長軸45cm×単軸20cm、深さ10cm、6号：長軸170cm×単軸70cm、深さ20cmである。(写真：PL71・72)

(6) 倒木痕

IX層のローム上面において、I区では23基、II区では4基、III区では12基、IV区では17基、V区では10基の計66基の倒木痕を検出した。当遺跡の倒木痕の調査では、逆転埋没土の基本土層との対比や、転倒方向を割り出すことを主眼として、ローム層上面での平面プラン確認状況を図化した。個々の規模や形状については第8表に記載したとおりであるが、37号のように長径が約5m弱の大きなものから47号のように1.4mほどの小さなものもある。また、IX層のローム上面での深さも1~1.5mに達するものが多い。平面形状はいずれも不整形であるが、円形や

楕円形を基調とし、底面は中小の穴状の窪みにより凹凸の激しい浅いすり鉢状を呈している。逆転埋没土層を観察すると、VIII a層やVIII b層以下を巻き込んだ1・4~6・8~11・14・16~19・28~30・46~48・50・52・55~63・65・66号と、VI層以下を巻き込む32~39・49・53号がある。下位のローム土の巻き上げ状態は、樹木の規模により異なるが、大規模なものはXII・XIII層のローム層やAs-BP軽石層までを巻き込んだものもある。これらの特徴は、白井北中道II遺跡で検出されている倒木痕と同様であり、ともに関連した原因(台風等の強風により転倒)により生じたものと想定される。

この逆転層の堆積ラインと直行する軸線が、基本的に風向を示すと考えることができるが、これを基本土層と同様に上下方向に正置した場合、下位方向が風上を示すことになる。このようにして、各倒木の転倒方向を割り出してみると、大半のものが東方向あるいは南東方向からの営力により転倒している



埋没土層 (各焼土痕共通)

1. 褐灰色土 (10YR4/1) ロームブロックが10%混入。多量の炭化物・焼土粒を含み、縮まり・粘性に富む。
2. 褐灰色土 (10YR4/1) とロームブロックとが1:1で混入。多量の炭化物粒を含む。

0 1 : 50 2m

第148図 1~6号焼土痕

2. 縄文時代

ことが判明する。さらに、その転倒方向を方位との角度に置き換えて30度単位で区分してみると、S 91~120度 W が17基(1・7・8・14・25・26・33・36・39・47・50~52・54・59・62・66号)と最も多く、次いでS 61~90度 W と S 121~150度 W が各11基(前者：4・9・11・30~32・37・38・48・55・60号、後者：5・18~20・34・35・46・49・53・63・64号)づつ存在し、S 31~60度 W が4基(6・16・28・57号)、S 151~180度 W が3基(13・29・58号)である。基本的に、S 91~120度 W を中心とした転倒方向を有していると思なすことができよう。一方17・56・61・65号は、これらグループとは全く反対の西あるいは北西方向からの営力で転倒しており、それらとは異なった要因が想定される。

各倒木痕の形成時期については、ほとんどのものが不明確である。しかし、完形に近い有尾式土器を出土した63号土坑に切られる54号倒木は、少なくとも有尾式期以前に形成されたことが確実である。また、逆転堆積層の内容差で見れば、VIII a 層あるいは VIII b 層以下を巻き込むものは縄文時代前期段階の形成であろうし、VI層以下を巻き込むものは同中・後期段階のものであろう。こうした埋没土層や転倒方向

の類似性から見ると、そのほとんどが縄文時代の前期を中心に形成されたものと思われる。

(写真：PL72~75)

第7表 倒木痕の転倒方位

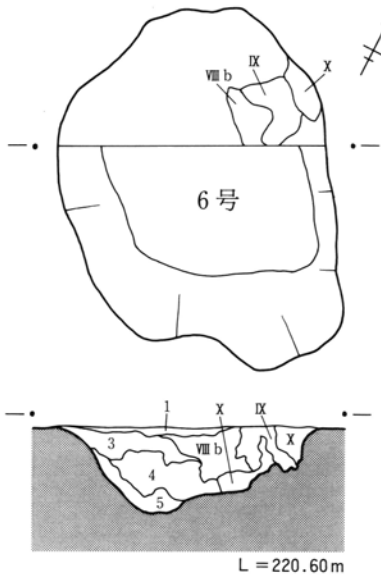
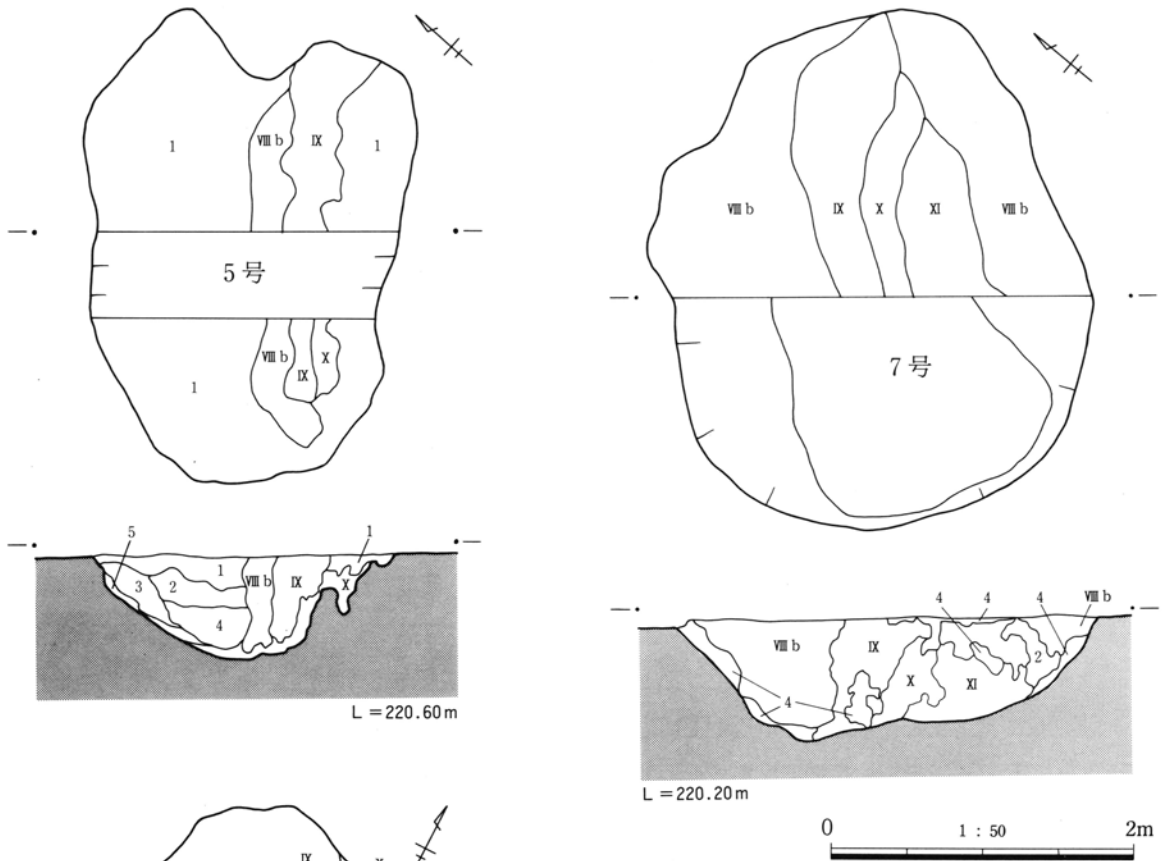
番号	転倒方位	番号	転倒方位	番号	転倒方位
1	S 99°W	23	不明	45	不明
2	不明	24	不明	46	S 123°W
3	不明	25	S 115°W	47	S 94°W
4	S 90°W	26	S 95°W	48	S 69°W
5	S 139°W	27	不明	49	S 123°W
6	S 44°W	28	S 58°W	50	S 117°W
7	S 112°W	29	S 179°W	51	S 114°W
8	S 99°W	30	S 76°W	52	S 116°W
9	S 63°W	31	S 73°W	53	S 147°W
10	S 24°W	32	S 68°W	54	S 94°W
11	S 70°W	33	S 103°W	55	S 90°W
12	不明	34	S 146°W	56	N 109°E
13	S 163°W	35	S 136°W	57	S 46°W
14	S 111°W	36	S 92°W	58	S 179°W
15	不明	37	S 89°W	59	S 108°W
16	S 60°W	38	S 67°W	60	S 85°W
17	N 150°E	39	S 92°W	61	N 106°E
18	S 131°W	40	不明	62	S 103°W
19	S 138°W	41	不明	63	S 130°W
20	S 132°W	42	不明	64	S 142°W
21	不明	43	不明	65	N 153°E
22	不明	44	不明	66	S 100°W

第8表 倒木痕の規模一覧

(単位：cm)

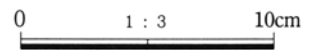
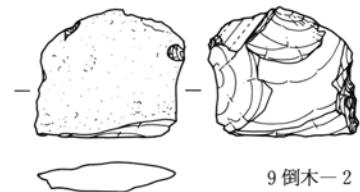
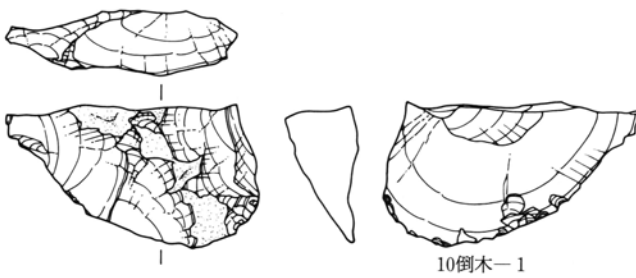
番号	位置	規模 長径×短径×深さ	埋没土	番号	位置	規模 長径×短径×深さ	埋没土	番号	位置	規模 長径×短径×深さ	埋没土
1	CC-21	240×210×?	VIII b~X	23	BI-10	220×150×?	IX	45	DH-31	290×?×?	不明
2	CB-20	220×160×?	不明	24	BJ-14	230×170×?	IX	46	CW-35	280×260×?	VIII b~XI
3	BX-17	230×?×?	不明	25	BC-12	610×400×?	IX・X	47	CV-35	140×110×?	VIII b・IX
4	BS-15	340×300×?	VIII b~X	26	BC-12		IX~XI	48	CL-30	400×290×?	VIII a~X
5	BJ-11	300×220×60	VIII b・IX	27	BK-11	270×200×?	不明	49	CG-26	300×270×?	VI~XI
6	BI-09	240×180×60	VIII b~X	28	CA-23	4000×300×?	VIII b~XI	50	CF-26	330×280×?	VIII a~XI
7	BD-09	340×270×80	IX・X	29	BX-26	250×160×?	VIII b~X	51	CM-26	300×?×?	VIII a~X
8	BH-09	370×300×?	VIII b~X	30	BW-23	240×200×?	VIII a~X	52	CH-30	260×90×?	VIII a~X
9	BD-09	260×220×?	VIII b~X	31	BU-22	260×220×?	IX・X	53	CN-30	340×200×?	VI~X
10	BB-08	240×190×?	VIII b~X	32	BT-21	340×240×?	VI~X	54	CT-34	400×260×?	VIII b・IX
11	BG-12	220×190×?	VIII b~XI	33	BW-26	350×260×?	VI~X	55	CS-34	290×210×?	VIII a・IX
12	BJ-16	260×?×?	不明	34	BR-22	220×190×?	VI~X	56	CQ-33	220×200×?	VIII a~XI
13	BK-13	280×140×?	IX・X	35	BP-20	280×210×?	VI~VIII b	57	DJ-38	380×340×?	VIII a~XII
14	BH-17	310×170×?	VIII b・IX	36	BN-20	240×160×?	VI~XI	58	DL-39	280×270×?	VIII a~XI
15	BH-17	170×120×?	VIII b・IX	37	BN-19	440×280×?	VI~XI	59	DN-42	230×160×?	VIII b・IX
16	BD-14	300×280×?	VIII b~X	38	BN-18	340×240×?	VI~XI	60	DP-39	220×190×?	VIII a~IX
17	AY-12	390×300×?	VIII b~XII	39	BN-17	260×240×?	VI~XI	61	DQ-43	320×310×?	VIII a~XII
18	BH-12	240×220×?	VIII b・IX	40	CY-45	200×?×?	不明	62	DS-43	330×270×?	VIII b~XIII
19	BF-10	320×230×?	VIII b・IX	41	DF-37	170×150×?	不明	63	DT-43	260×210×?	VIII b~XIII
20	BG-11	250×200×?	IX	42	DF-36	280×250×?	不明	64	DU-44	290×230×?	IX~XIV
21	BH-11	270×240×?	IX	43	DG-36	200×190×?	不明	65	DV-41	310×220×?	VIII b~XIV
22	BJ-11	230×190×?	IX	44	CY-44	340×?×?	不明	66	DV-40	160×150×?	VIII b・IX

II 調査の結果

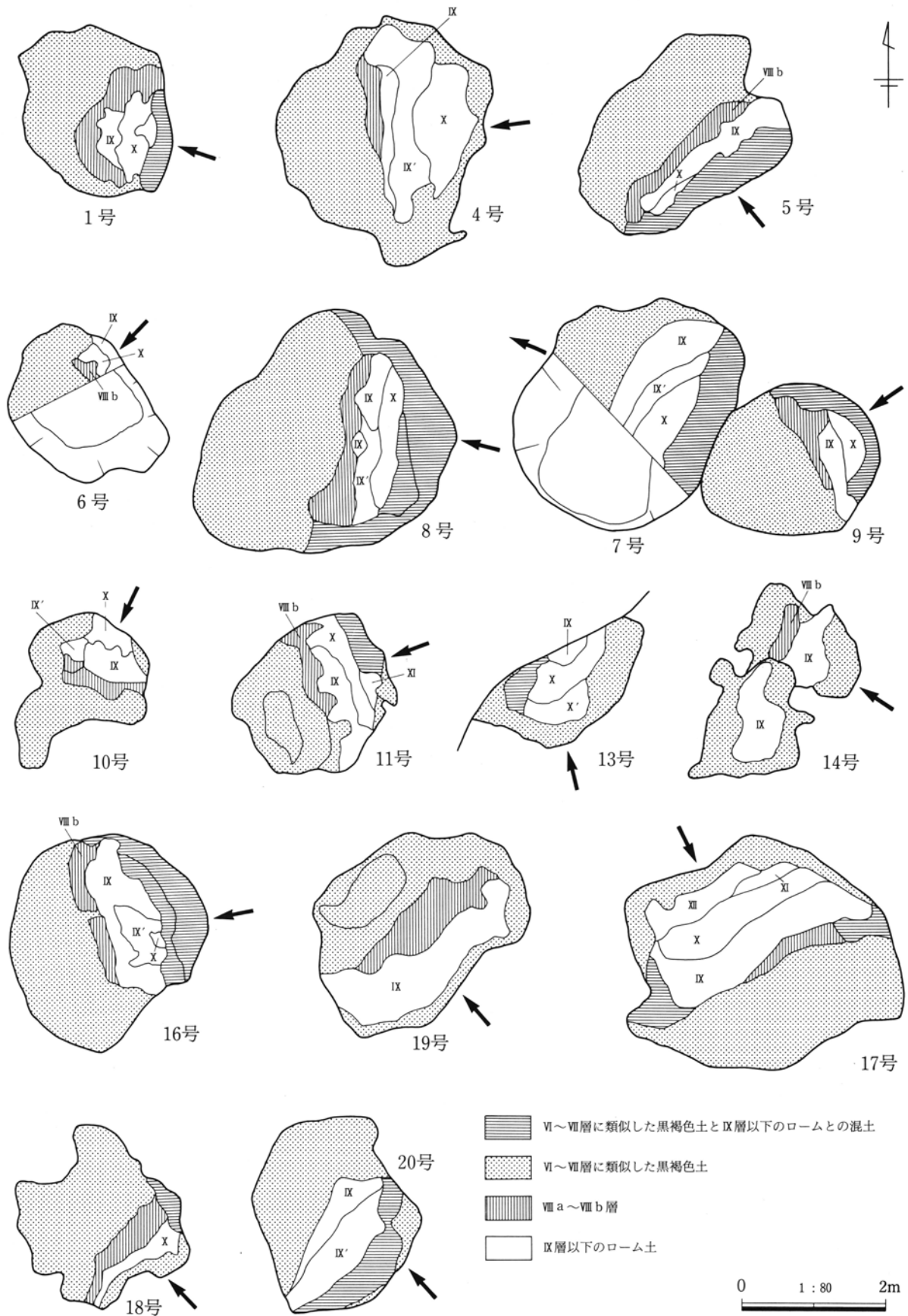


埋没土層（各倒木痕共通）

1. 暗褐色土（10YR3/4）VIII a 層に類似。少量の軽石粒（As-D）を含む締まりの強い土。
2. 暗褐色土（10YR3/4）VIII a 層に類似。多量の軽石粒（As-D）を含む締まりの強い土。
3. 暗褐色土（10YR3/3）VIII a 層に類似。中量の軽石粒（As-D）を含む締まりの強い土。
4. 暗褐色土（10YR3/4）を主体にロームブロックが40～50%混入。
5. ロームブロックを主体に暗褐色土（10YR3/4）が5%混入。

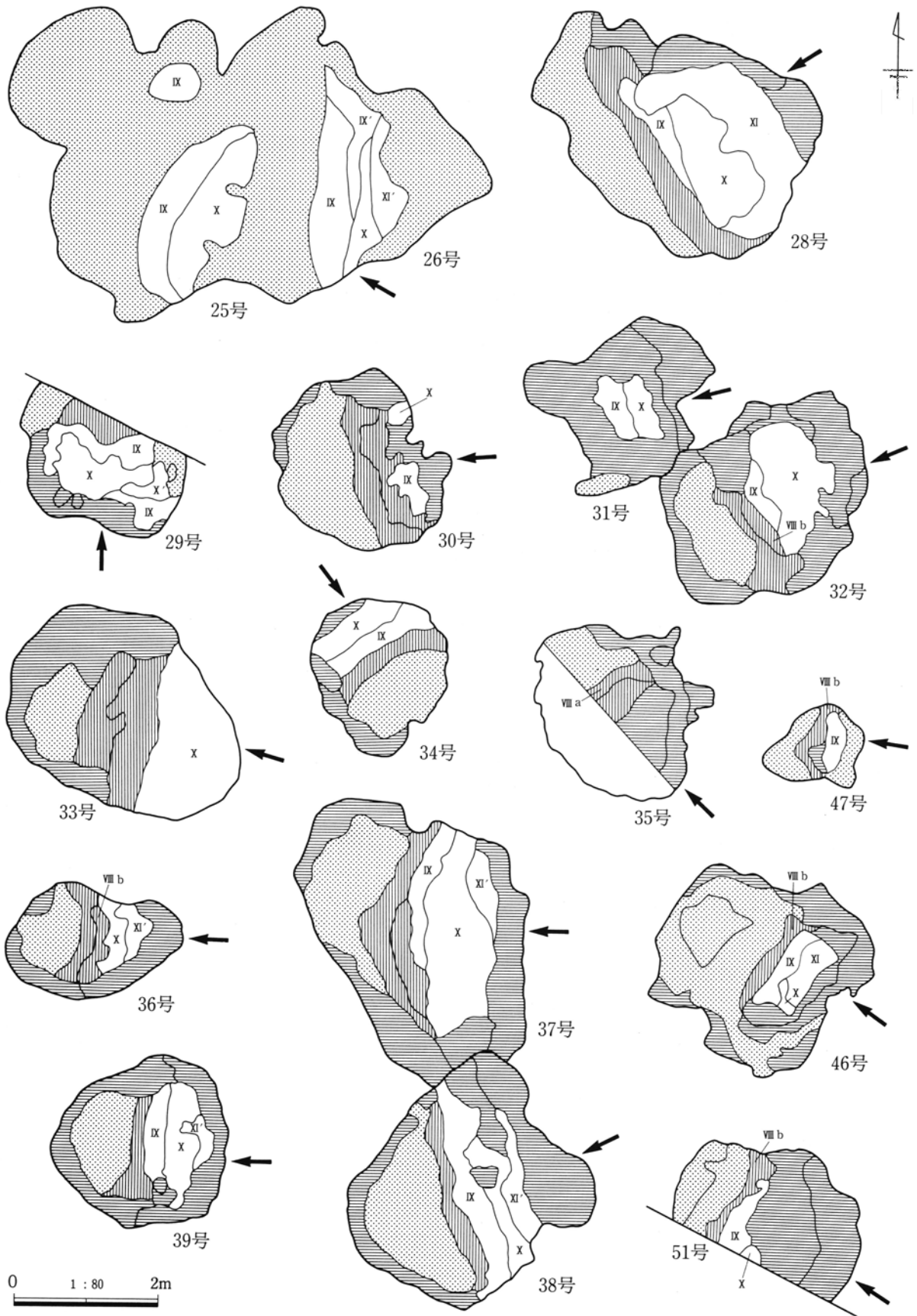


第149図 倒木痕と出土遺物

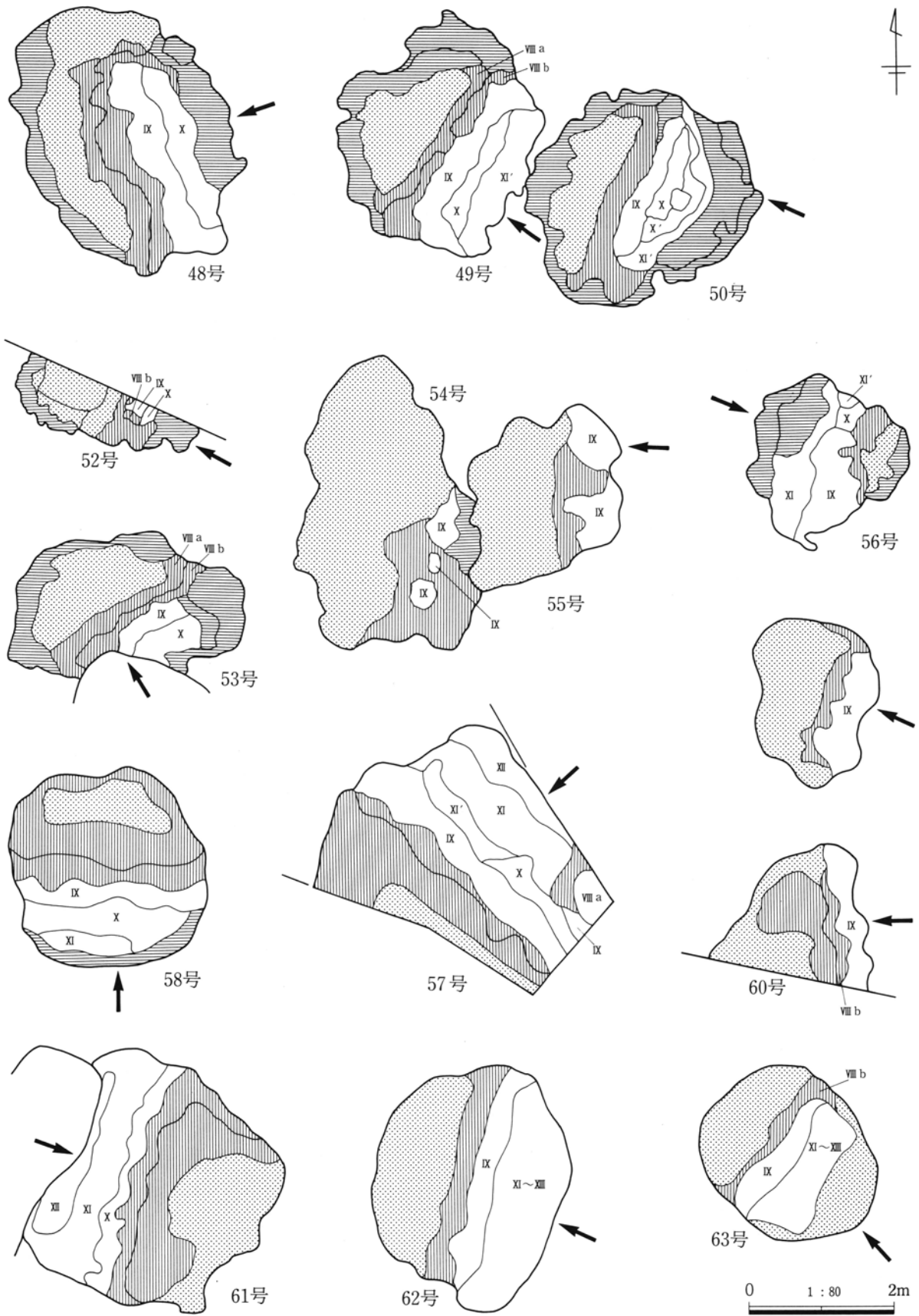


第150図 倒木痕の埋没土と転倒方向(1)

II 調査の結果

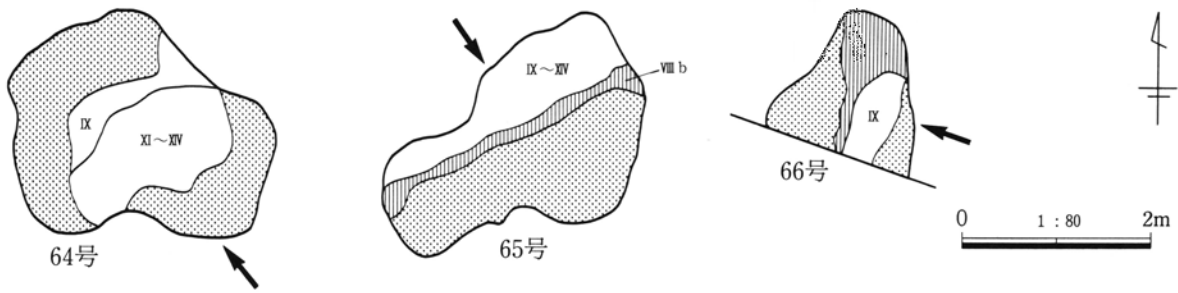


第151図 倒木痕の埋没土と転倒方向(2)



第152図 倒木痕の埋没土と転倒方向(3)

II 調査の結果



第153図 倒木痕の埋没土と転倒方向(4)

(7) 包含層の出土遺物

A. 出土状況

当遺跡の10,200m²におよぶ調査対象区域内にも、白井北中道II遺跡と同様に、榛名山二ツ岳軽石の下位に50~80cm厚の縄文時代の遺物包含層が存在している。包含層の堆積状況も類似し、VI(黒ボク土)・VII(淡色黒ボク土)・VIII a(黒褐色土)の三層にわたっている。

大別時期でみると、草創期前半から後期にかけての遺物が認められ、数量としては土器17,478点、石器3,482点を検出している。しかし、各遺物は白井北中道II遺跡の場合と同じく明確な層位的出土状況を有しておらず、風倒木等による土壌攪乱の影響を受けていることが予測される。

土器の時期別の内訳は、第9表に示したように、草創期前半2点、同後半10点、早期1点、前期17,188点、中期37点、後期240点であり、前期が最多数を占める点は白井北中道II遺跡と類似する。しかし、前期の中で最多数を占めているのは、黒浜式の11,824点(前期土器の69%)であり、有尾式の2,654点(15%)がこれに次ぐ。諸磯b式は2,221点(13%)と比較的多いが、同a式も316点と少なからず存在し、同c式が150点と減少することなどは、諸磯b式新段階と同c式を主体とする白井北中道II遺跡の場合とは大きな相違点である。

各土器型式の出土層位は、草創期から前期段階のものを含めてVI~VIII b層にまでまたがっているが、

VIII b層からの出土量は少なく、全体的にはVI・VII・VIII a層を中心とした状況を示す。中・後期の土器は前期に比べて少量ではあるが、その出土がVIII b層には認められないことや総体的にVI層からの出土量が多いことなど、より上層からの出土傾向もみられる。

遺跡内における各型式別の土器の分布傾向については、付図のドットマップに示してあるが、大別時期を単位にしてみると、その分布にはかなりの偏在性が認められる。例えば、草創期と中期はほぼV区に限定されるが、前期はI・IV・V区の3地点に、後期初頭はI区に、後期中葉はIII・IV区の2地点を中心分布する傾向にある。今回の調査区域内には、草創期や中・後期の遺構は存在しないが、中期についてはV区の西側に隣接する中原遺跡で竪穴住居が検出されており、これとの関係が考慮される。IV区の北側に延びるVII区については、土器の出土そのものが極めて希薄であり、遺構も存在しないことを考慮すると、各時期ともに今回の調査地点を含めてより南側方向へ展開することが窺える。

ところで、前期の中で土器総数の84%を占める有尾・黒浜式土器の分布は、ほぼ重複する状況が認められる。しかし、こうした分布状況は、それ以降の諸磯各式にも共通しており、断続的ではあるにしてもかなり長期にわたって継的に同一地点を利用したことを示すものであろう。検出されている遺構は、そのほとんどが有尾・黒浜式期に属するものであり、他期の遺構は調査区外に存在していると想定される。また、後期の加曾利B式土器については、完形に近いものも検出されているが、当期の文化面が黒

ボク土のVI層内に想定されることから、仮に遺構が存在してもその掘り込み面を検出することは難しく、見落としているケースも考えられる。

なお、当遺跡の包含層出土土器17,478点の全てに対して、胎土・縄文原体の分類的把握を行っており、後段にてその詳細を述べる。

石器については、器種別に見ると削器が705点(使用痕を持つ剥片290点を含む)と最も多く、打製石斧の172点、磨石類の167点がそれに次ぐ。また石鏃は61点と多く、調整加工を施した肉厚の剥片や礫器的なものが87点存在する。他の器種は僅少であるが、残核70点や調整剥片2,127点の存在は、遺跡内に原石を持ち込んで石器製作が行われたことを示している。

石材では、石鏃を除く石匙・削器・石斧などの「打製系列」の石器には黒色頁岩が多用され、全体の80%を占めている。またそれらの石核や剥片に占める黒色頁岩の比率も80%と同比率を有しており、北中道II遺跡と同様に「打製系列」における同石材の優位性が際立っている。61点の石鏃は、黒曜石が30%と多いものの、黒色頁岩・チャート・黒色安山岩が各々20%前後を占めており、多様な石材で構成される点特徴的である。また磨石・石皿等の「使用痕系列」の石器には、粗粒輝石安山岩が49%と多用されており、当遺跡でも「打製系列」の石材選別とは明確な差異を確認することができる。

石鏃・磨製石斧・スタンプ形石器などのように、その形態的特徴からある程度時期判別できるものを除けば、大半のものは厳密な時期の特定は難しい。しかし、各器種の遺跡内における分布は、ほぼI・IV・V区に集中しており、先の前期の遺構や土器群の分布傾向とも合致している点を考慮すれば、前期に帰属する可能性が高い。(写真：PL76～98)

B. 出土土器の概要

各土器の分類基準や、縄文原体・胎土・出土層位等については、351～356・364～369頁に一括してある。ここでは大別時期を単位にして、各土器の概要を記

す。

a. 草創期前半の土器(第158図 1・2)

同一固体の細隆線文土器4点と爪形文土器1点が存在する。1の細隆線文は、条数は不明だが口縁部には横位、胴部には縦位に施文し、その上面や交点に棒状工具による先端や側面の押圧を加えている。また細隆線文の両脇は、篋状工具により丁寧に撫でられている。2は、生体の爪によると思われる八字状の爪形文が縦位に施される。両者ともに裏面には、指頭圧痕状の整形痕が認められ、色調は赤燈色を呈する。胎土は、角閃石や石英の粗砂・礫を含むBタイプである。

b. 草創期後半の土器(第158図 3～7)

絡条体条痕文6点、無文4点の10点が存在するが、その内の9点がV区からの出土である。無文の3を含めて、いずれも稲荷台式に比定される。胎土は角閃石や石英の粗砂・礫を含むBタイプで、赤燈色の色調を持つ点でも前半期の細隆線文や爪形文土器と類似している。

c. 早期の土器(第158図 8)

出土したのは、ここに掲載した1点のみである。表裏面の条痕文と、微量の繊維を含有した堅緻な胎土の特徴から鶺鴒島台式と思われる。

d. 前期の土器(第158～171図 9～372)

遺跡内で検出されている遺構は、当該期のものに限定されることもあり、有尾式(9～129)、黒浜式(130～278)、諸磯a式(279～303)、諸磯b式(304～359・371)、諸磯c式(360～370)、興津式(372)などの土器型式が、種類や数量ともに他期を圧倒している。

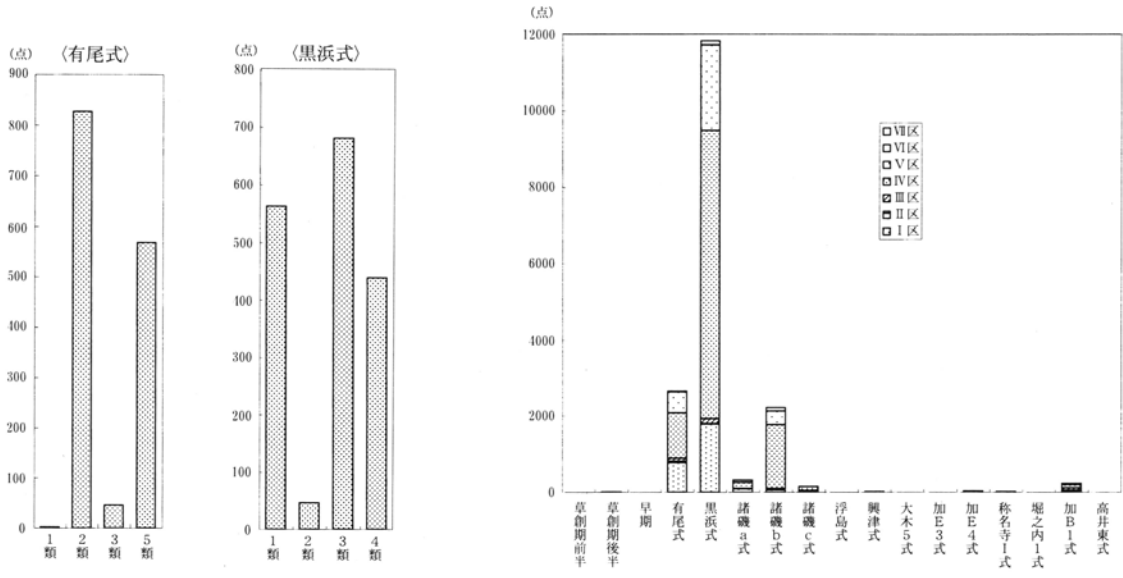
有尾式 出土総数は2,654点を数え、黒浜式に次いで多い。菱形構成の縄文地のみで類別不明のもの1,211点を除けば、爪形文や平行沈線文により菱形状に文様構成される2類827点(9～38)、施文方向を違えた縄文の条が菱形状に構成される5類568点(41～78)、そして2類の菱形文が簡略化されて三角形文となった3類46点(39・40)などがある。

2類は、平行沈線による2b類(18～36)が664点と多く、爪形文の2a類(9～17)が142点、条線状平行沈

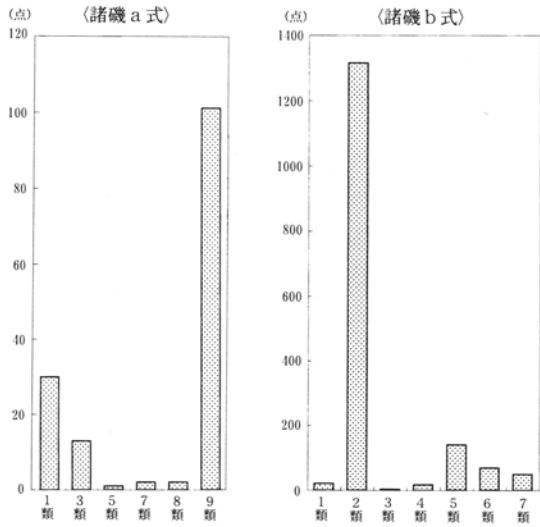
II 調査の結果

第9表 包含層出土土器の型式別・層位別一覧

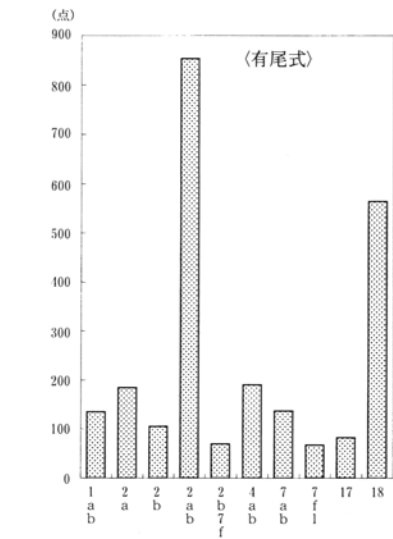
	草創期		早期	前期								中期		後期				合計
	前半	後半		有尾	黒浜	諸a	諸b	諸c	浮島	興津	大木5	加E3	加E4	称I	堀1	加B1	高井東	
VI層	0	4	0	1095	4873	128	1047	94	2	15	2	1	16	7	0	143	0	7427
VII層	0	0	0	599	2200	66	446	9	0	1	0	1	0	6	0	25	0	3353
VIII a層	1	5	1	741	3076	72	446	36	1	2	0	0	19	0	0	31	0	4431
VIII b層	0	0	0	82	399	13	69	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	566
不明	1	1	0	137	1276	37	213	8	0	0	0	0	0	0	0	26	2	1701
合計	2	10	1	2654	11824	316	2221	150	3	18	2	2	35	13	0	225	2	17478
I区	0	1	0	770	1783	80	56	32	1	1	2	1	0	13	0	28	0	2768
II区	0	0	0	36	8	0	10	11	0	0	0	0	0	0	0	13	0	78
III区	0	0	0	81	135	13	30	1	2	0	0	0	0	0	0	71	0	333
IV区	1	0	1	1191	7560	157	1670	97	0	17	0	0	0	0	0	80	2	10776
V区	1	9	0	551	2228	56	359	8	0	0	0	0	35	0	0	33	0	3280
VI区	0	0	0	16	110	9	92	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	229
VII区	0	0	0	9	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
合計	2	10	1	2654	11824	316	2221	150	3	18	2	2	35	13	0	225	2	17478



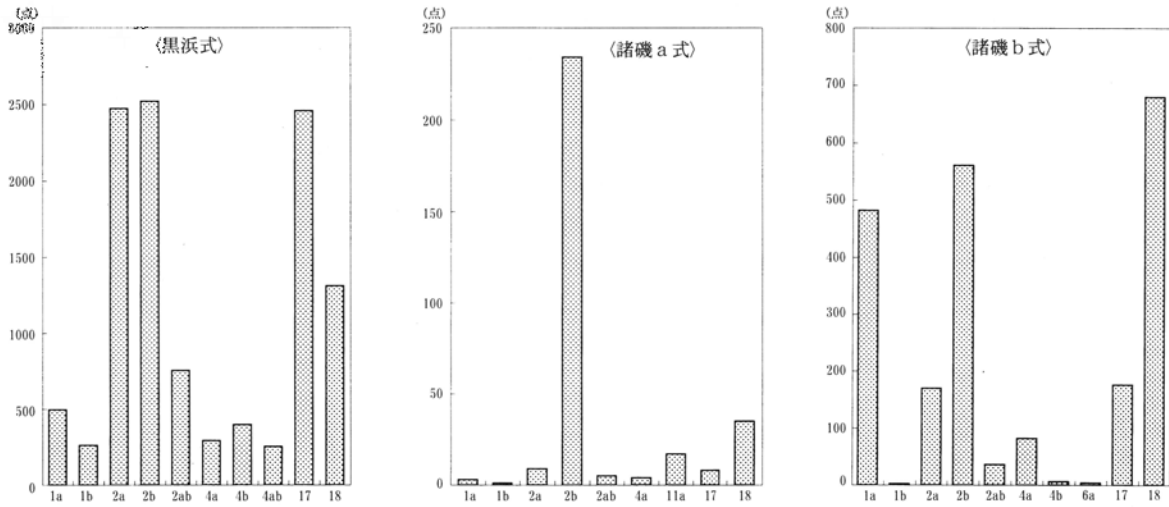
第154図 包含層出土土器の型式別点数



第155図 前期土器の分類別点数



第156図 前期土器の縄文原形別点数 (1)



第157図 前期土器の縄文原形別点数（2）

有尾式の分類別点数

1類	2類			3類			5類	不明	合計
	a	b	c	a	b	c			
2	142	664	21	3	42	1	568	1211	2654

有尾式の縄文原形別点数

1類				1a2a	1a2b	1a9a	1b2a	2類			2a5b	2a7b	2a7l	2b4a	2b4b	2b7f	18類	
a	b	ab	不明	類	類	類	類	a	b	ab	類	類	類	類	類	類	類	
47	19	135	1	4	3	1	2	184	105	853	1	1	1	1	4	69	564	
4類			6類		7類					9類					17類	合計		
a	b	ab	a	a	b	c	f	ab	ad	bc	bg	cd	ej	fl	a	c	cd	
26	37	190	2	8	2	5	1	137	20	1	5	42	27	67	1	3	1	
																	84	2654

黒浜式の分類別点数

1類					2類			3類			4類				不明	合計
a	b	c	d	不明	a	b	不明	a	b	不明	a	b	c	不明		
158	44	144	108	106	5	31	10	215	25	441	100	36	120	183	10098	11824

黒浜式の縄文原形別点数

1類			1a2b	1a9a	1b2a	2類			2a7b	2b4b	3類		4類					
a	b	ab	類	類	類	a	b	ab	類	類	a	b	a	b	c	d	ab	ad
496	260	81	4	2	4	2473	2520	756	1	2	2	1	293	397	37	9	253	1
5類			6類		7類					14類		15類		16類		17類	18類	合計
a	b	ab	c	a	b	c	d	f	g	h	k	l	ab	bf	bg	cd	fg	
1	1	2	17	98	85	18	23	18	5	3	1	11	37	1	2	34	4	
8類			9類					14類		15類		16類		17類	18類	合計		
a	b	c	a	b	c	d	ab	不明	b	a	b	a						
4	2	6	3	1	2	11	4	60	1	1	4	2						
													2459	1311	11824			

諸磯 a 式の分類別点数

1類					3類		5類	7類	8類	9類	不明	合計
b	c	d	e	不明	b	不明	不明	a				
1	3	2	13	15	1	12	1	2	2	101	163	316

諸磯 a 式の縄文原形別点数

1類		2類			4類		11類	17類	18類	合計
a	b	a	b	ab	a	a				
3	1	9	234	5	4	17	8	35	316	

II 調査の結果

諸磯b式の分類別点数

1類	2類			3類		4類	5類				6類	7類		不明	合計
	a	b	不明	a	b		a	b	c	不明		b	c		
21	423	664	228	1	2	17	132	4	1	3	69	1	48	607	2221

諸磯b式の原体別点数

1類		2類			2b10a	3a類	4類			6類	7類	10類		14類	17類	18類	19類	合計
a	b	a	b	ab	類	a	b	ab	c	b	b	d	a			b		
482	2	173	563	36	1	5	83	6	2	4	2	1	2	2	176	680	1	2221

線文の2d類(37・38)が21点となる。沈線文や爪形文などの有文土器は891点を数えるが、これは黒浜式の1,048点に比肩されるものである。5類を含めた縄文施文土器の便宜的な分類もあって、数量的に有尾式は黒浜式の四分の一に満たないが、有文同士の数量比から見れば、両者はほぼ拮抗すると想定される。

縄文地のみ5類は、基本的に2種類の異種原体を併用して縄文を菱形状に構成している。器形については、頸部でやや強く括れて口縁が外傾気味に開口するもの(86)、括れをもたずにラップ状に開口するもの(94)、キャリパー状のもの(108)などのバリエーションが見られる。

縄文の施文は、2種類の原体を用いて菱形状に構成するのを基本としている。縄文構成の明瞭な大形破片でカウントした原体種別数量は、単節同士を併用施文するものが1,048点(67%)と最多で、附加条第1種同士が299点(19%)、無節同士が135点(9%)と続く。単節と無節、あるいは単節と附加条第1種などの異種原体同士の併用が86点(5%)見られることは、附加条第1種が無節を凌駕することと合わせて、黒浜式との相違点である。単節・無節原体でみた基本撚り(0段階)傾向は、 $r : l = 1 : 1.3$ となり、1縄が若干優勢である。

胎土の傾向は、黒浜式と同様にDタイプが1,659点(63%)と最多で、Cタイプ758点(29%)、Fタイプ117点(4%)となる。

器形は、各類ともに口縁が外傾し、頸部に強く括れるキャリパー状を呈するものが多い。

有文の1～3類の編年的位置は、現在定着しつつある3段階区分に照合させれば、1類が古段階、2類が中段階、3類が新段階に対比できる。1類が2

点、3類も46点と僅少であることは、中段階の有尾式を主体としていることを示しており、縄文のみの5類はその大半が3類に共伴すると想定される。

黒浜式 総数11,824点が存在し、前期土器の中で最多数を占めている。小破片のために分類不能なもの10,098点を除けば、縄文のみで構成される3類681点(175～223)、主にコンパス文などが施される1類563点(130～153・159・160)、爪形文により米字状のモチーフを描く4類439点(162～174)、縄文地に平行沈線文を施す2類46点(154～158)などがある。総体的に見れば、1・2・4類などの有文土器は、1,045点を数えるに過ぎない。

3類は、斜行縄文の3a類(182～188)が215点と主体を占め、羽状構成の3b類(175～181)は25点と少数である。こうした数量比から見れば、縄文構成の不明瞭な189～223などをはじめとした441点の口縁部破片も、その大半が3a類に比定される可能性が高い。器形は口縁部が外反する円筒形状を呈する。ただし、この3類については、同様に縄文のみで構成される有尾式5類との区別が難しく、ここでは単純に斜行あるいは羽状構成を黒浜式に、菱形構成を有尾式に比定している。従って、縄文施文のみの土器の分類は、型式比定を含めて模式的・便宜的なものであることを付言しておきたい。

1類は、半截竹管の端正なコンパス文や平行沈線文を多段に施文し、口縁部に縦位の区画線を持つ1a類(130～133・136・137・139・152・153)が158点と最も多く、他に波状的なコンパス文と押引状列点文を交互に横位全面施文する1c類(138・140～143)の144点、縄文地の口縁部や頸部にコンパス文を施す1d類(145～151)の59点、多截竹管状あるいは櫛歯状工

具で波状文的コンパス文と平行沈線文を交互に横位全面施文する1b類(134・135・144)の26点などがある。1a類の中には、口縁部に縦位区画線ではなく「*」状の貼付文を附加するもの(152・153)もある。1a・1b類は基本的に無地文が主であるが、1c類は縄文を菱形状に構成している点で異なる。

菱形構成された縄文の条あるいはその施文変換部を強調するように爪形文を施す4類は、口縁部や頸部に横位施文する4c類(168・171~174)が120点、米字状構成の4a類(162~167)が100点で、4c類に縦位の爪形文を付加した4b類(170)は36点に止まる。爪形文の相互間の縄文地は磨り消される例が多く、円形竹管文なども付加されている。

口縁部を中心に横位平行沈線文を施す2類は、同部位に縦位の貼付文をもつ2a類5点(154)と、平行沈線文のみの2b類31点(155~158)、判別できないもの10点など極めて少量に過ぎない。

縄文原体のあり方は、無施文のものを除いて全体的には単節が6,741点と最も多いが、その主体は0段2条の5,749点であり、0段多条は990点に止まってその比率がかなり小さい点で注意される。無節837点、附加条第1種340点がそれに次ぎ、単軸絡条体第1類81点などが主たるものである。この単軸絡条体に分類したものの中には、附加条第2種の軸縄の施文が浅いために、絡条体として分類されてしまったものも若干含まれている可能性もある。総体的に用いられる原体の種類は少なく、正反縄の合撚りや結節・ループ縄文などはほとんど認められない。2種類の原体を併用施文するものは1,188点、1種類のもの6,866点であり、後者が前者を大きく凌駕している。しかし、こうした傾向は1~3類には合致するが、4類で見た場合には2種類の原体を用いるものが46%(205点)も存在し、特定の類型との結びつきが深いと考えられる。2種類原体併用例の内訳は、単節同士が1,010点(85%)、無節同士が81点(7%)、附加条第1種同士が78点(7%)、その他6点(0%)であり、異種原体を併用するのは13点(1%)と僅少である。無節や単節の基本撚り(0段時)は、rとlが

ほぼ1:1の割合で存在している。

器形は、1・4類が内湾ぎみに開口するキャリパー形を呈するが、2・3類は外傾気味に開口して屈曲に乏しい。また胎土は、Dタイプ9,422点(80%)、Cタイプ1,800点(15%)を中心としているが、結晶片岩を含むFタイプが271点(2%)存在している点は注意する必要がある。しかし、特定の類型と胎土との相関性は確認できない。

黒浜式各類の編年の位置付けについては、3細分案(黒坂:1986)に従うならば、1類はII段階、4類はIII段階に比定することができ、2類や縄文施文のみの3類なども同段階と見て良いだろう。

諸磯a式 諸磯b・c式とともに遺構の存在は確認されなかったが、316点が検出されている。文様構成の不明なもの168点を除いて、縄文以外の文様を持たない9類(292~296)が101点と最多で、口縁部に肋骨文を施す1類(279~285)の30点、木葉文を施す3類の13点、口頸部に円形竹管文の垂下を施す7類2点(290)、口頸部に波状文を施す8類2点(291)、口頸部に平行沈線文を垂下させる5類1点(286)などがある。

1類の肋骨文は、施文の粗雑化した横線状の1e類(284・287)が13点と最も多く、その他に弧状肋骨文の1c類(280・281・283)や斜行状肋骨文の1d類(282・285)、木葉状肋骨文の1b類(279)などが少数存在するのみである。

縄文は、各類を通して横位施文の単節RLを用いる例が234点と多く、全体の86%を占める。他に無節や複節なども若干見られるが、結束第1種や二種類の単節による羽状縄文も22点存在している。胎土は、Bタイプが202点(64%)と最多であるが、結晶片岩を含有するEタイプも85点(27%)存在する。

諸磯b式 横位の集合沈線により文様を施す2類(305~329・331・332)が1,315点と最多で、他に縄文地のみの5類140点(336~339)、無文深鉢の6類69点(341・342)、浅鉢の7類49点(340・344)、爪形文の1類21点(304)、横位集合沈線文の単位間に矢羽根状沈線文を施す4類17点(330・333)、浮線文の3類3点

II 調査の結果

(334・335)などがある。

2類は、対弧状や凡字状のモチーフをもつ2a類(311・314～316・318・320・324・325)が423点、それらのモチーフが簡略化されて横位集合沈線文が多段構成される2b類(305～310・312・313・317・322・323・326～329・331・332)が664点、判別できないもの228点などである。

5類では、口唇部への加飾がない5a類(337)が132点と主体的で、刻み目を施す5b類(336)は4点、耳状貼付文を施す5c類(371)は1点と少ない。

浅鉢の7類は、無文かつ器面全体が丁寧に研磨された7c類が48点を占めるが、これらはともに344の同一破片であり、木葉文をもつ7b類の340と合わせても個体的には2点と少数である。

縄文原体は、0段2条単節が772点(RL:563点、LR:170点、両者併用:36点)と最多で、無節の484点(L:482点、R:2点)がこれに次ぐ。他に0段多条の単節91点(RL:83点、LR:6点、両者併用:2点)なども見られるが、総体的にバラエティに乏しい。0段時の基本撚りは、rが全体の86%を占める。

量的に豊富な2類で器形を観察すると、2a類は口縁部が内湾するキャリパー状を呈し、2b類は外傾するか「く字状」に内折するものが主体的で、中には靴先状に著しく内折するものもある。また4類では、外傾する口縁部と口唇部に連続した刻み目を施すのが特徴的で、5b類などもこれに類似したあり方を示す。胎土は上記の各類を通じてBタイプが主体的(79%)で、その他にAタイプ(9%)、Eタイプ(8%)などがある。

当遺跡の諸磯b式の編年的位置は、2a類や2b類を中心として諸磯a式や同c式に近接するものが少ないことから、中段階を主体としていることが窺える。

諸磯c式 総数150点が存在するが、胴部に縦位の集合沈線文をもつ1類が全体の99%(148点)を占める。文様構成の判別できるもので見ると、1b類は存在せず、361・362などのように1a類の中でも耳状貼付文や円形貼付文などのデコレーションが少ないも

のが主体となっている。また、結節沈線文で同心円状の文様を施す2類(364)は、1点が認められるのみである。縄文を施すものは、370を除いて他に見あたらない。胎土は、諸磯a・b式と同様にBタイプが主体的である。

数量的に1a類が多数を占めるあり方から見て、諸磯c式古段階を中心に展開していると考えられる。

その他 上記以外の土器としては、興津式18点(372)、浮島式3点と、縄文地に細い横位波状隆線文を貼付する大木系土器2点などがある。

e. 中期の土器(第171図 373・374)

加曾利E3式(373)が2点、同4式(374)が35点出土しているが、後者はいずれも同一個体での破片数量である。

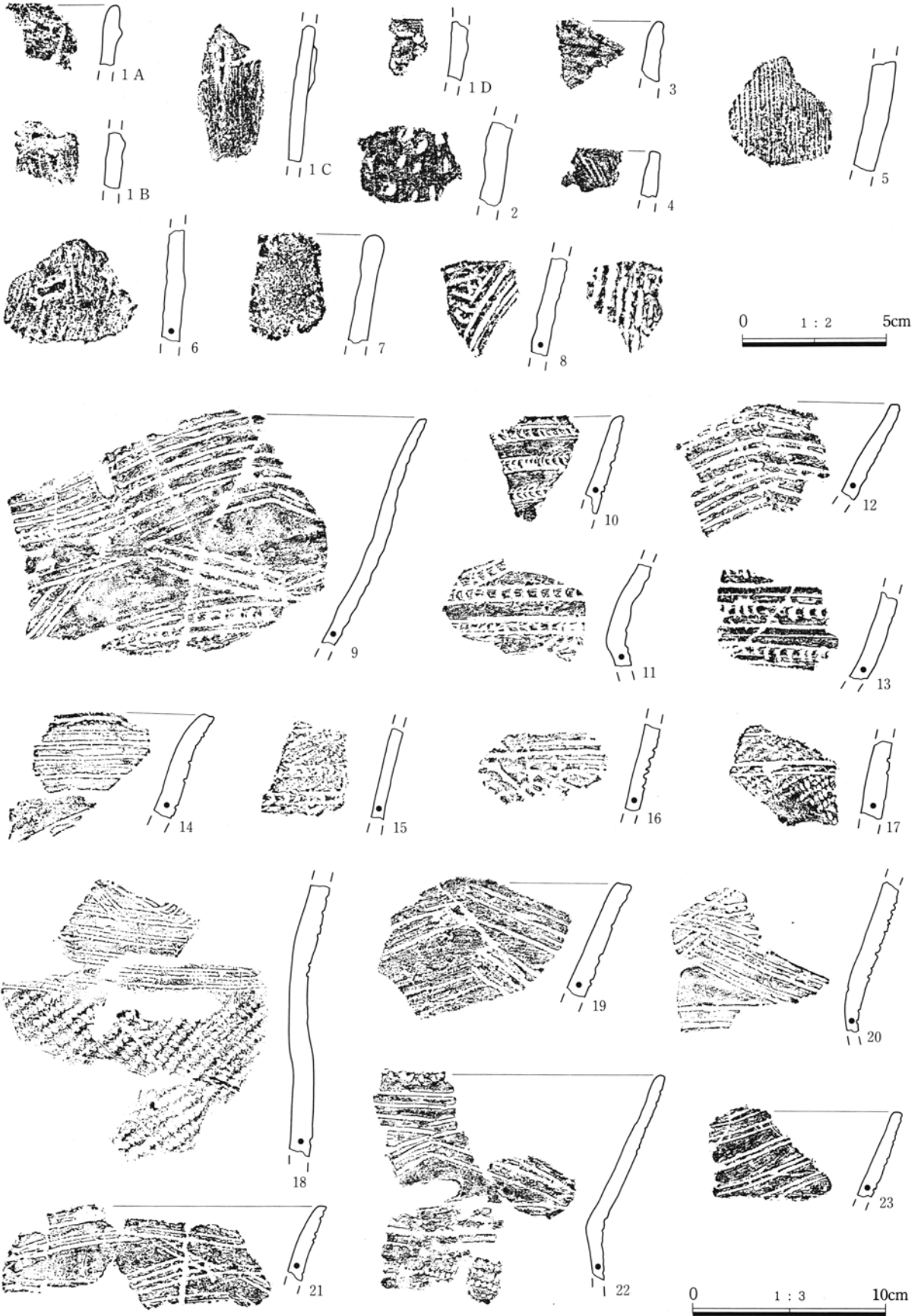
f. 後期の土器(第172図 375～385)

称名寺式が13点、加曾利B1式が225点(375～378・381～385)、高井東式が2点(379・380)出土している。加曾利B1式は、横位の区画文内に縄文を充填し、器面を丁寧に研磨した精製の深鉢(376～382)が中心的で、浅鉢(375)や縄文地のみの粗製の深鉢(383～385)は少ない。縄文原体は、無節82点(L:81、R:1)、単節34点(LR:32、RL:2)、0段時多条の単節13点(LR:12、RL:1)などが見られる。全体的な傾向を把握するに足る数量ではないが、無節が単節を凌駕することや両者間では0段時の基本撚りが異なることなどは、注意される点である。胎土はBタイプが主体を占める。

g. その他の土製品(第172図 386)

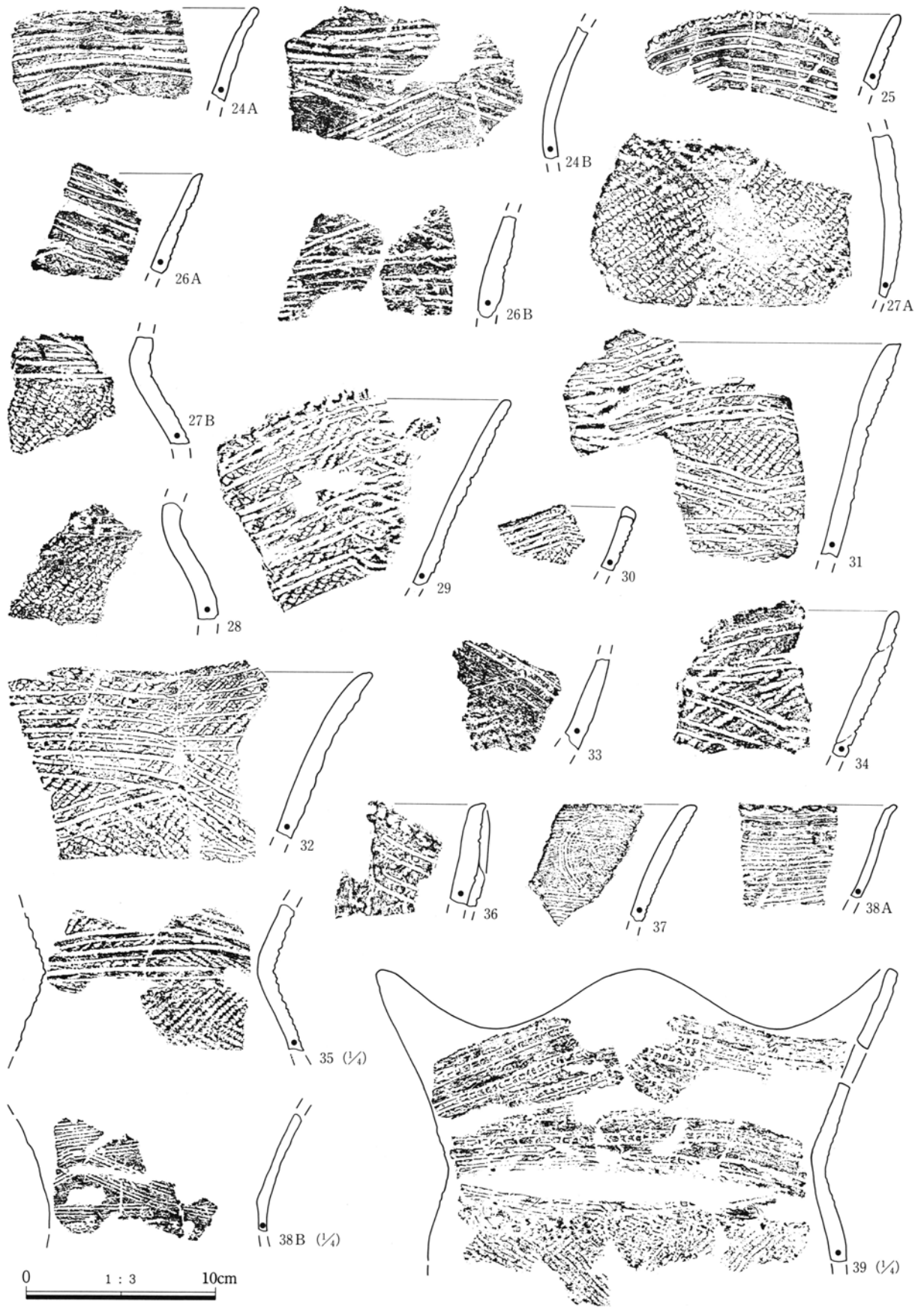
386は断面形が滑車状を呈し、表裏両面に棒状工具による弧状のモチーフと刺突を施す耳飾りである。出土した層位は不明だが、後期段階のものと考えられる。

2. 縄文時代

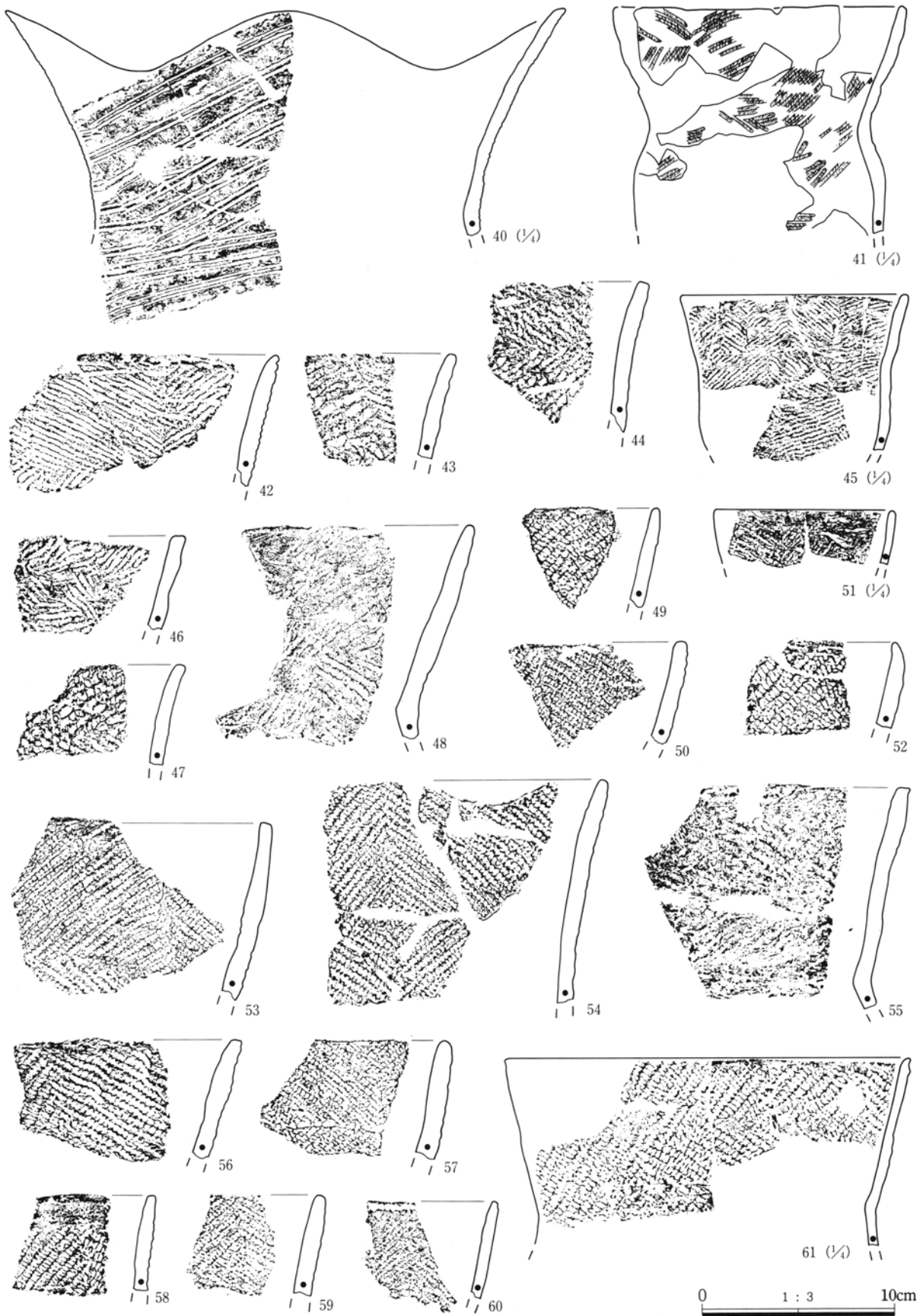


第158図 包含層出土の土器(1)

II 調査の結果

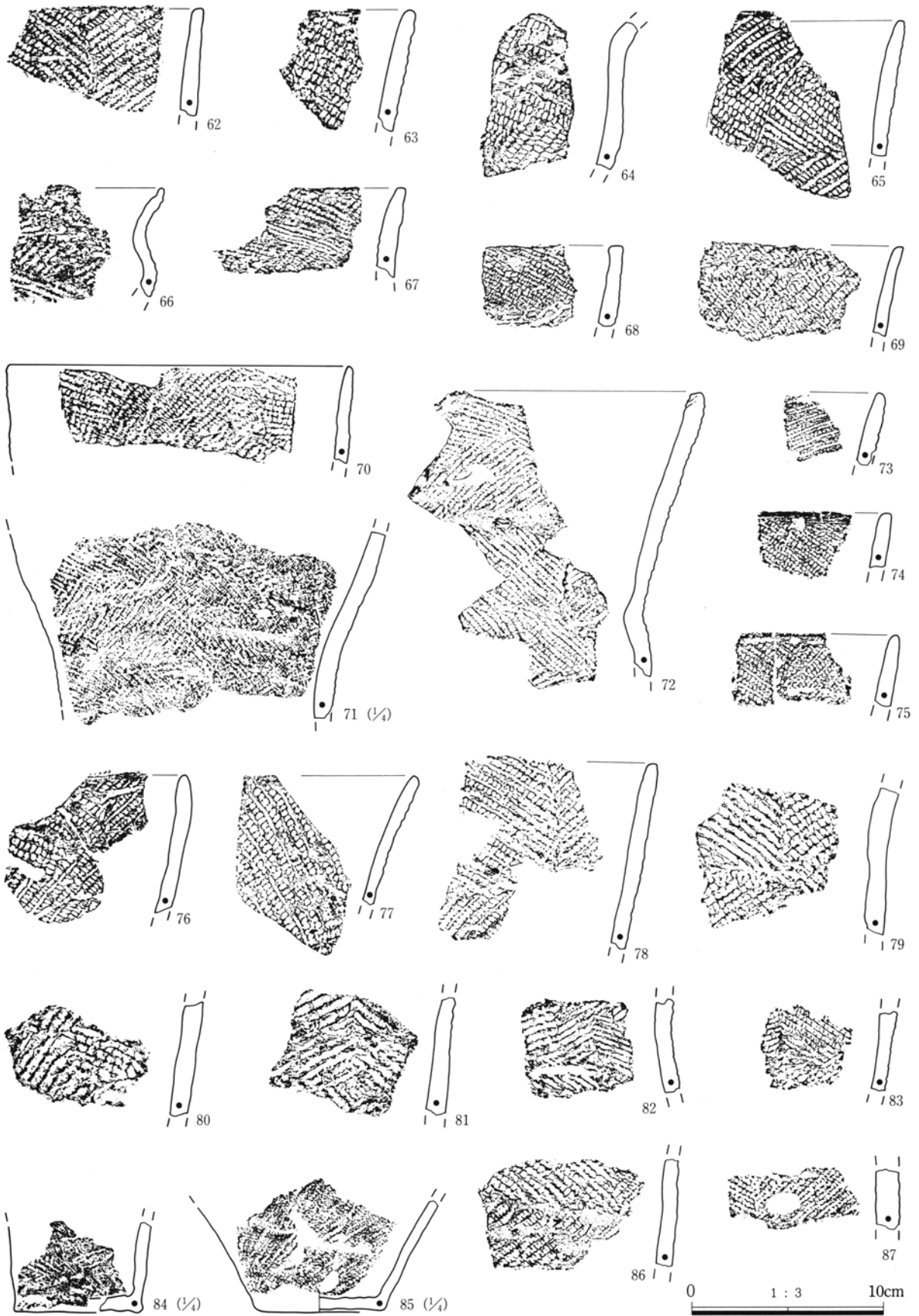


第159図 包含層出土の土器(2)

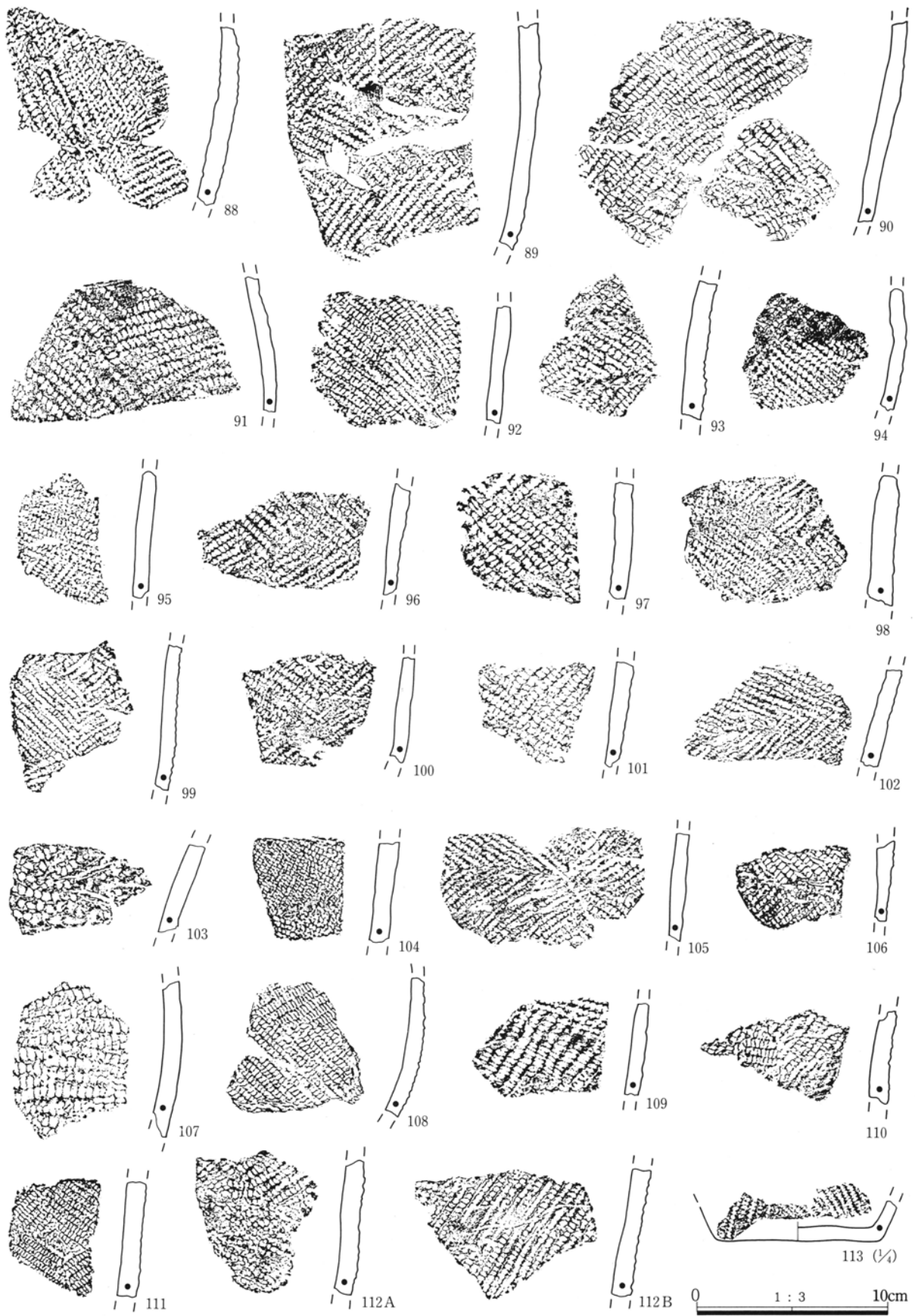


第160図 包含層出土の土器(3)

II 調査の結果

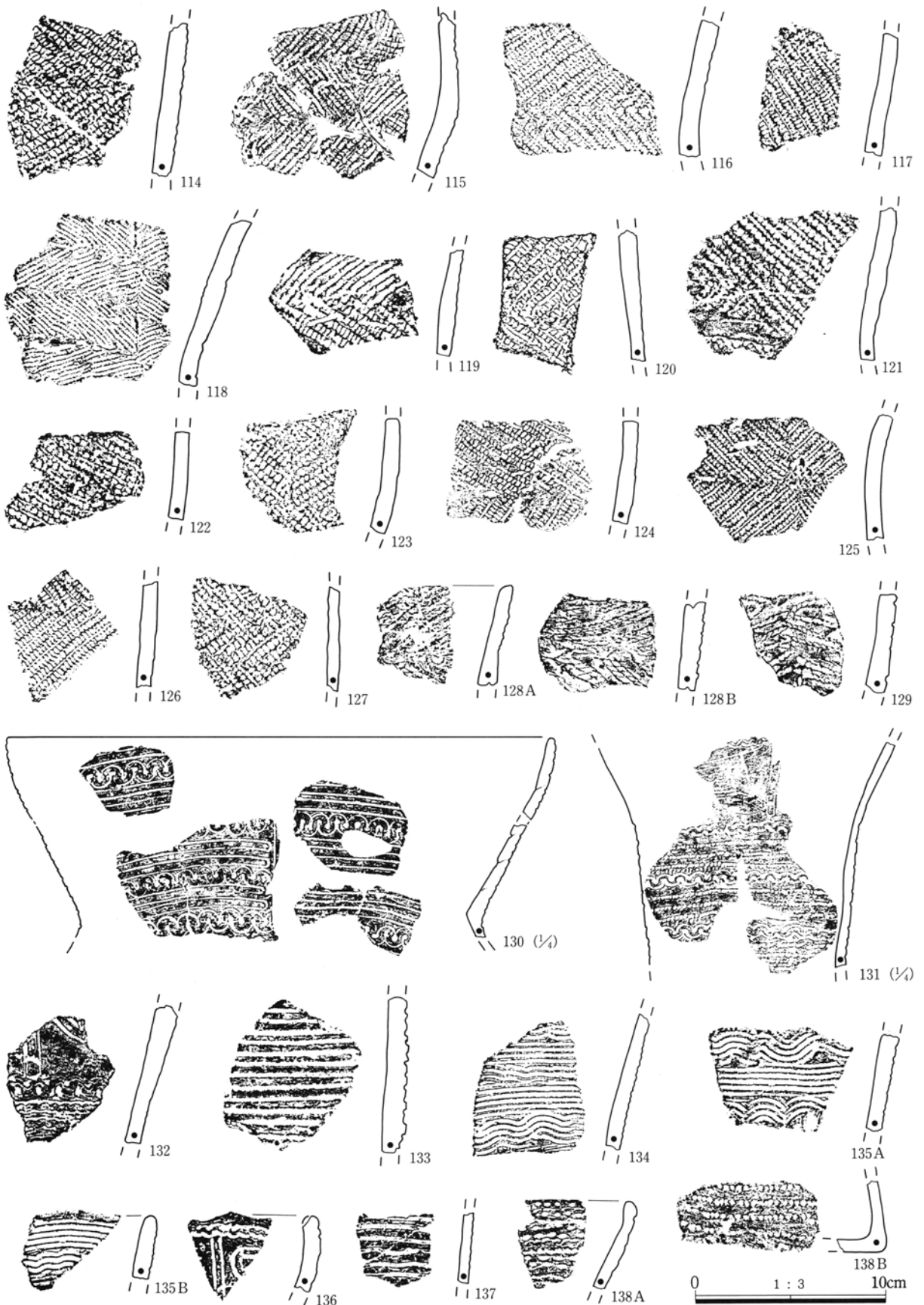


第161図 包含層出土の土器(4)

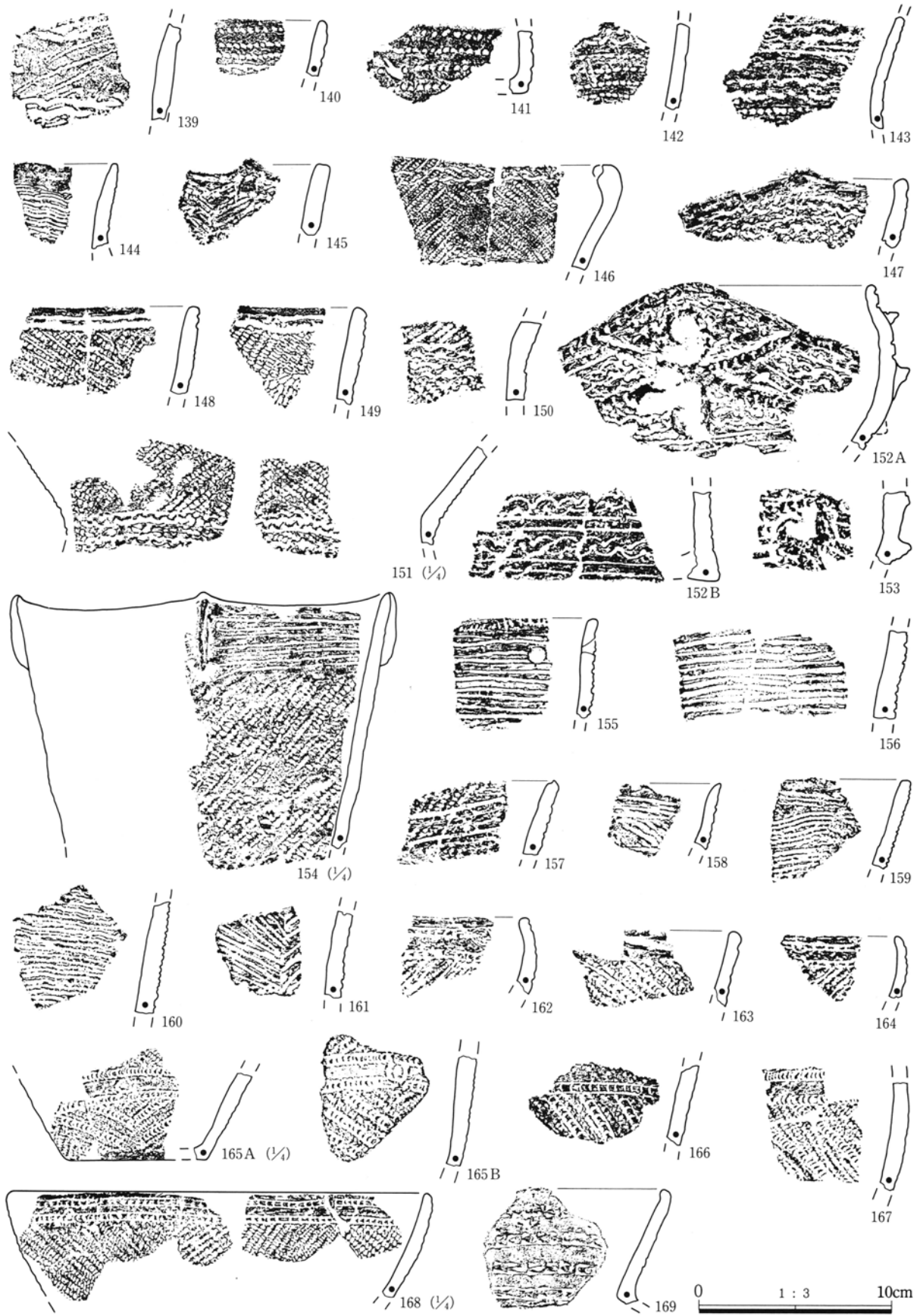


第162図 包含層出土の土器(5)

II 調査の結果

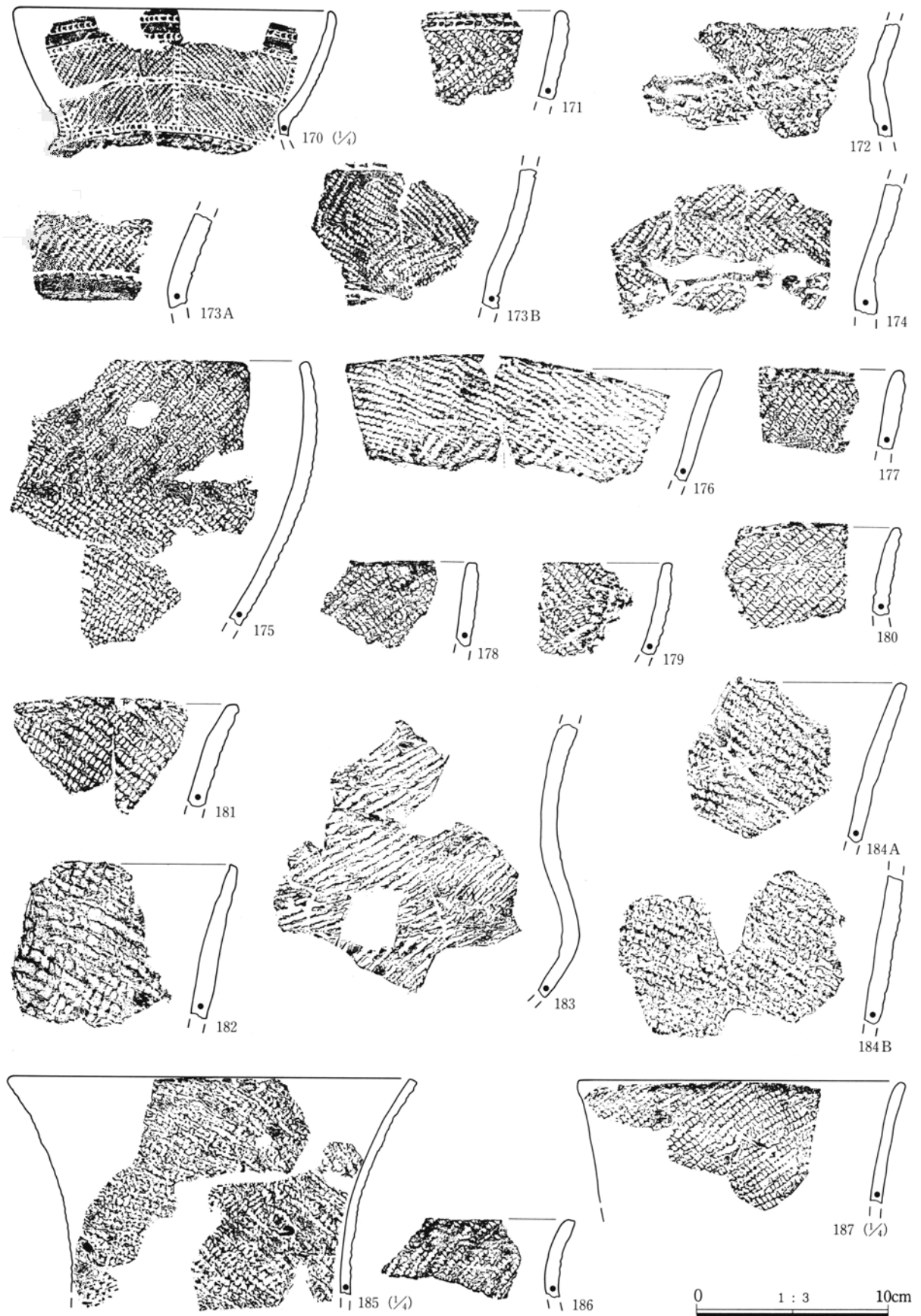


第163図 包含層出土の土器(6)



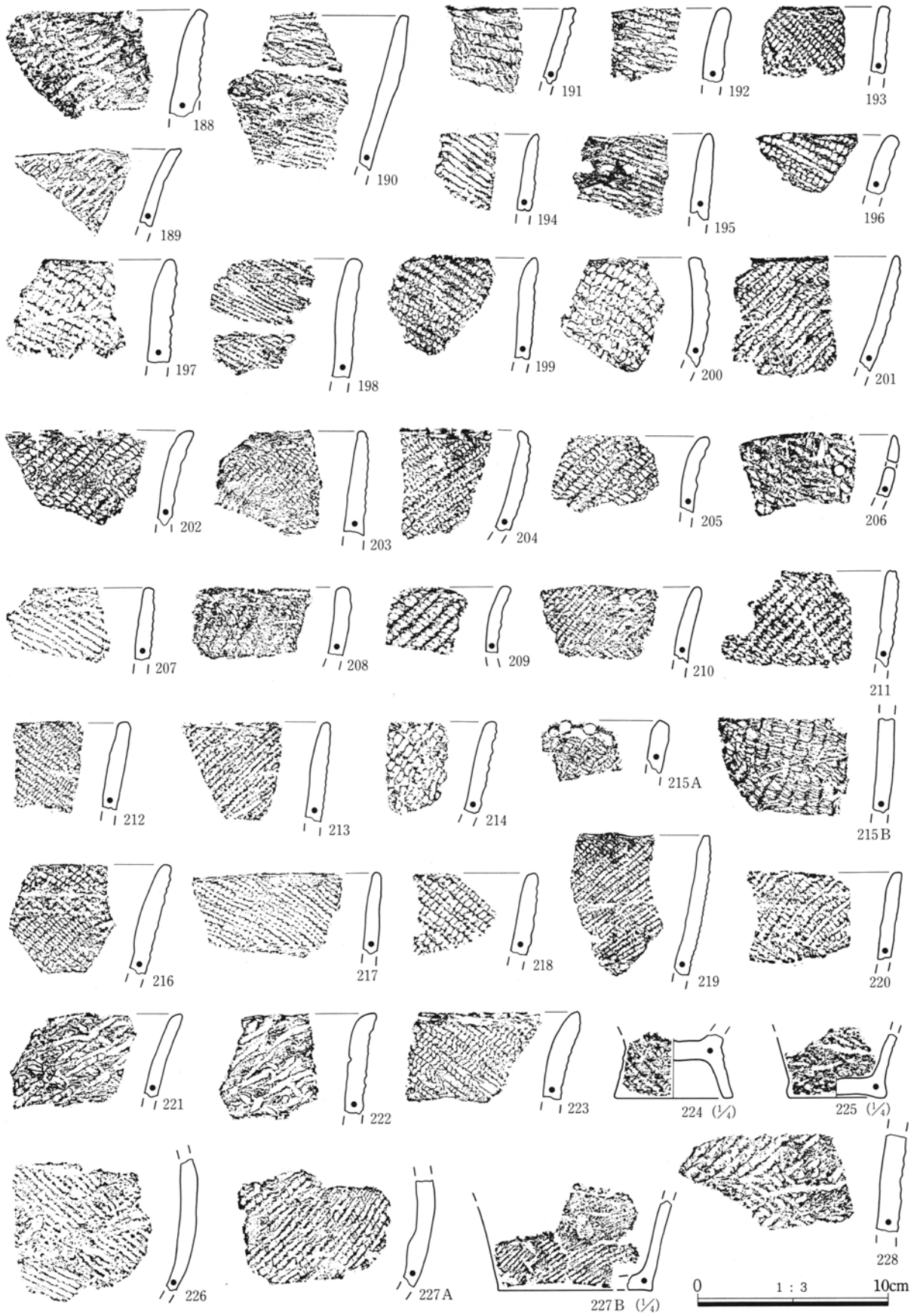
第164図 包含層出土の土器(7)

II 調査の結果



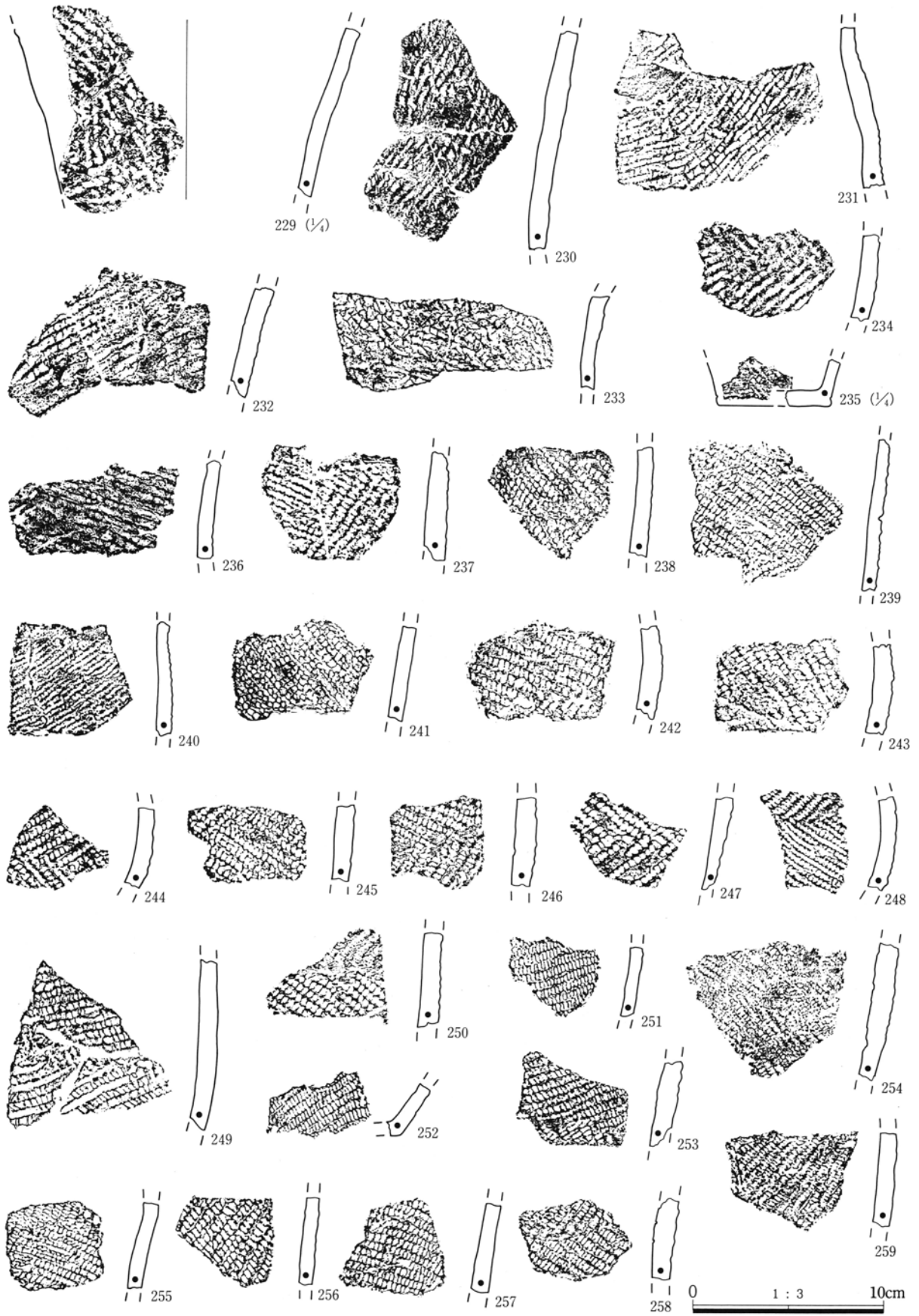
0 1 : 3 10cm

第165図 包含層出土の土器(8)

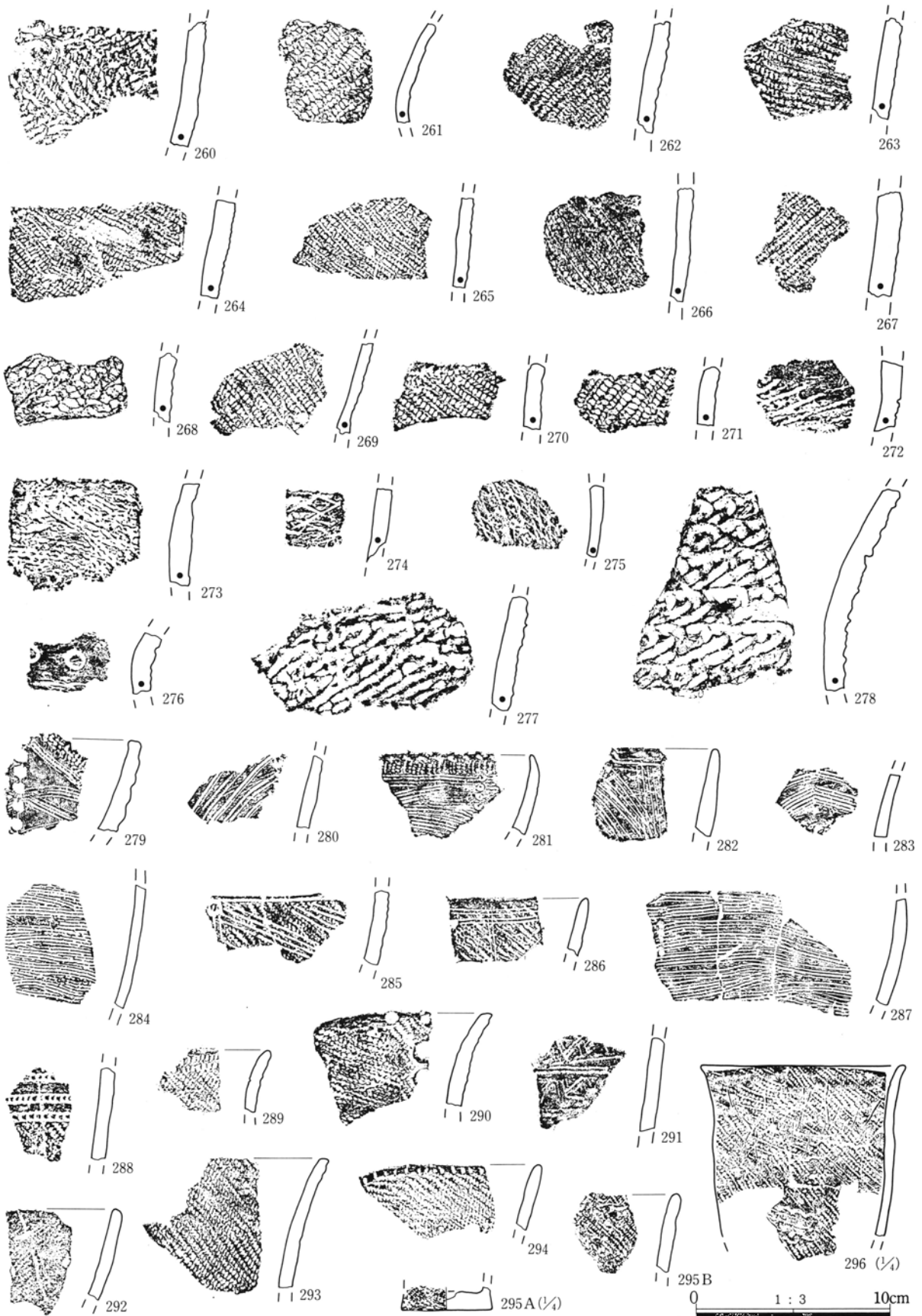


第166図 包含層出土の土器(9)

II 調査の結果

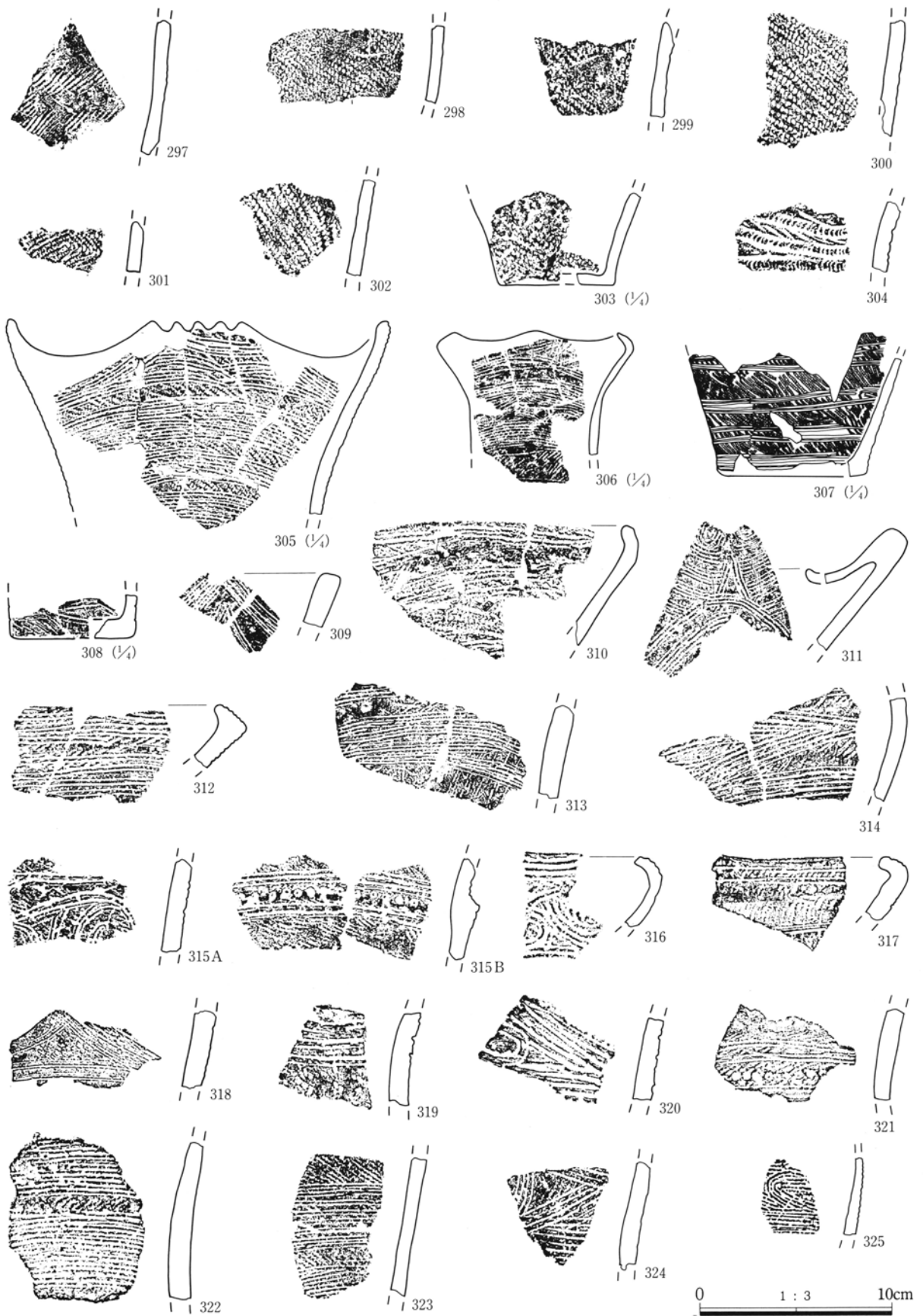


第167図 包含層出土の土器(10)

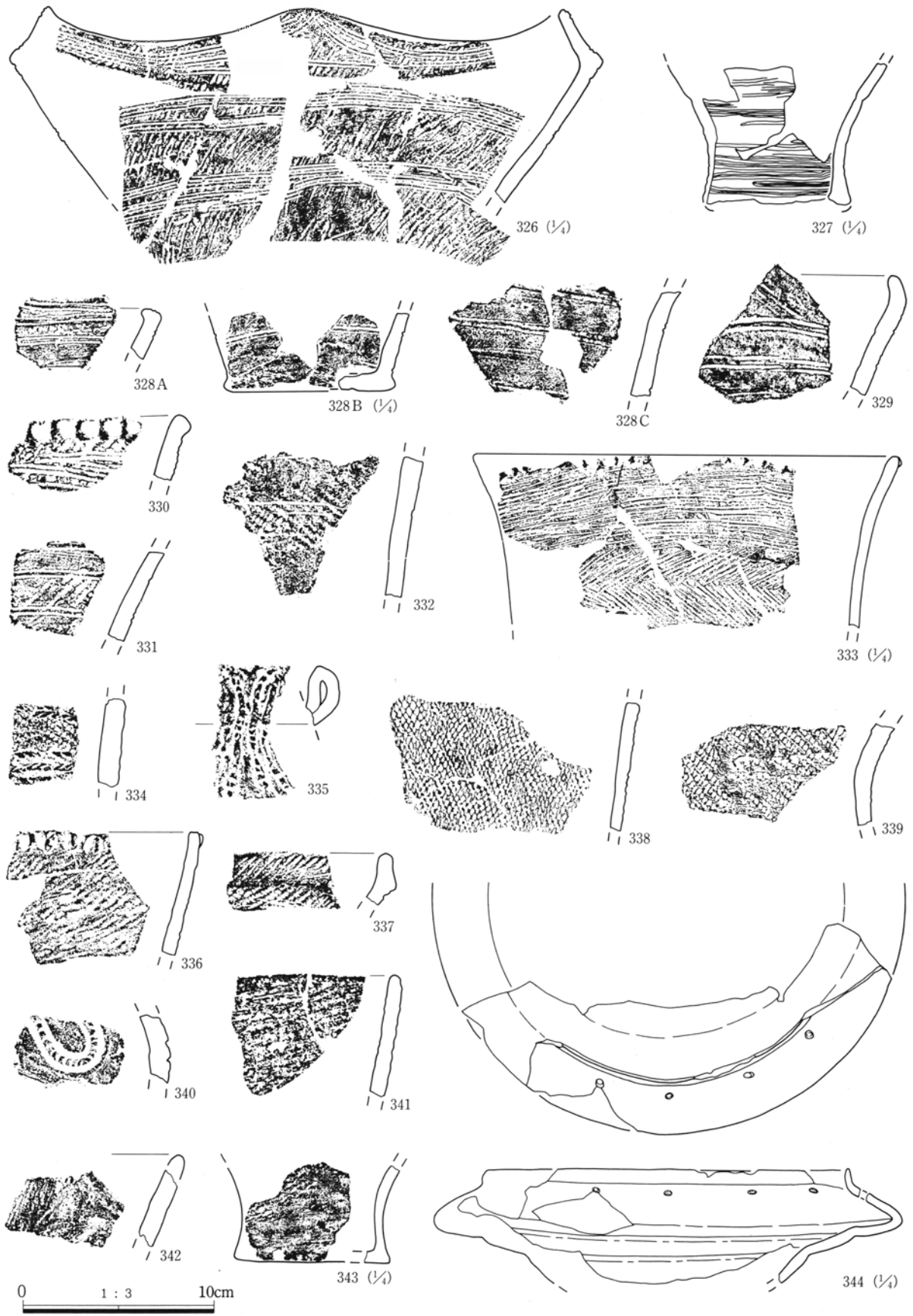


第168図 包含層出土の土器(11)

II 調査の結果

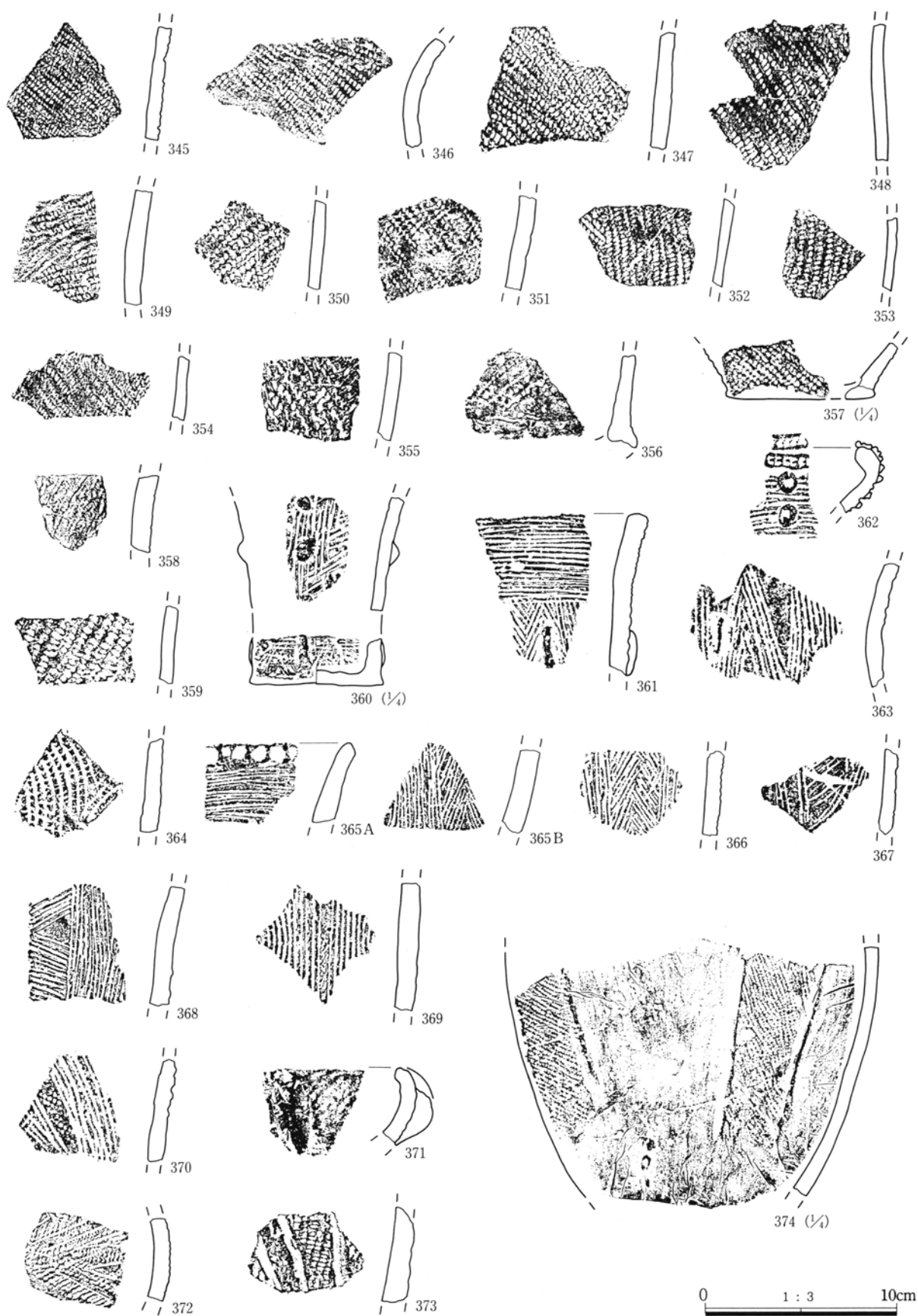


第169図 包含層出土の土器(12)



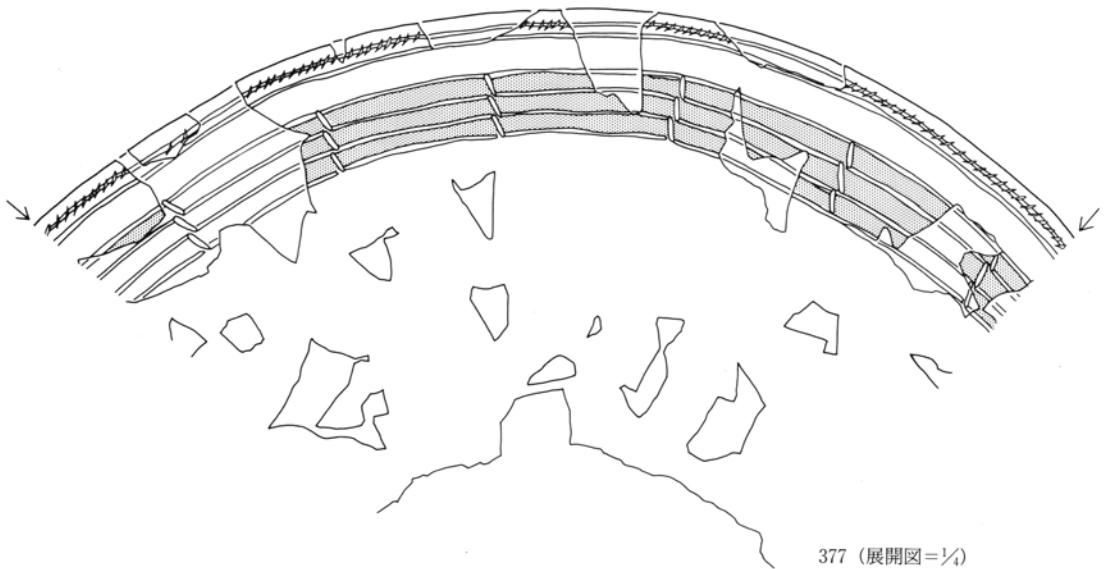
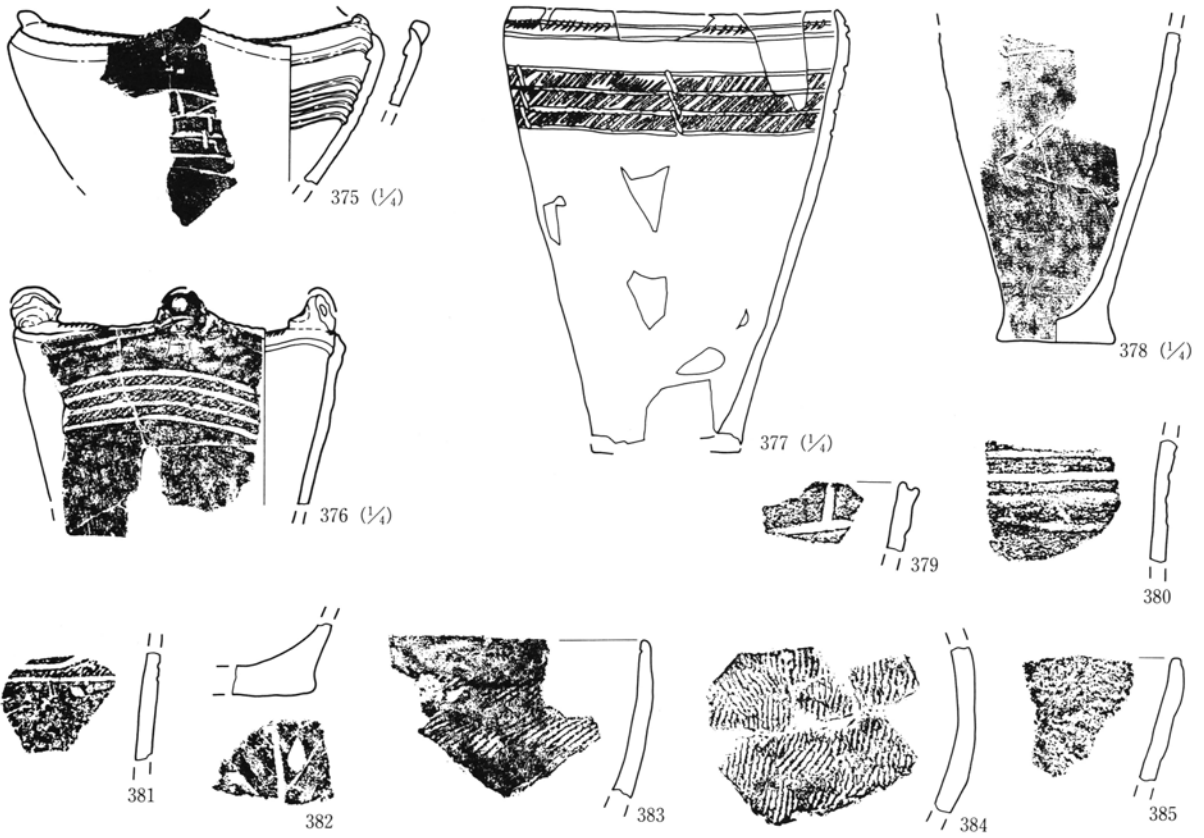
第170図 包含層出土の土器(13)

II 調査の結果



第171図 包含層出土の土器(14)

2. 縄文時代



0 1 : 3 10cm

第172図 包含層出土の土器(15)

II 調査の結果

C. 出土石器の概要

総数で3,482点が存在するが、剥片類が2,127点と全体の61%を占めている。1,063点の「打製系列」石器の中で主体となるのは、使用痕を有する剥片を含めた削器705点であり、打製石斧172点、加工石器88点、石鏃60点、石匙17点などがある。193点の「使用痕系列」石器では、凹石・敲き石を含めた磨石類が164点と最多で、他に台石9点、石皿8点、スタンプ形石器・砥石各5点などがある。「複合技術系列」石器では、磨製石斧24点を筆頭に多孔石・装身具各2点、石棒1点が存在する。出土地点はIV区に35%、V区に31%、I区に25%という偏在性を有するが、基本的に土器の分布状態をトレースする関係にある。出土層位はVI層に44%、VII層に16%、VIII a層に36%であり、大半の石器がこの3つの層に集中している。

尚、各器種の分類基準は白井北中道II遺跡の場合と同様で357・358・370～373頁に詳細を記載した。

a. 石 鏃(第178～181図 1～60)

完存29点、欠損31点の計60点が検出され、ここではその全てを掲載した。無茎(1～5類)48点と有茎(6・7類)11点の両者が存在するが、前者が後者の4倍以上を占める。

無茎では、基部が平坦な1類(1～5・28・30)、基部が緩く湾曲状に抉れた2類(27・29・31～45)、基部がノッチ状に抉れた鋏形鏃的な3類(46・47)、基部がV字状に深く抉れた4類(6～26)、基部が円弧状の5類(59)などが認められる。やや作りの粗雑な5類は、未成品か小形削器の可能性もある。有茎では、基部が平坦かそれに近い6類(48～50)、基部が突出する7類(51～58)、などがあるが、無茎鏃には研磨による平坦面を有するものが6点あり、表裏両面にあるもの(4・5・28)と片面のみのもの(27・34・46)がある。大きさの面では、各類ともかなりのバラエティが認められるが、特に2・4類と6類はかなり明確に大形品と小形品に二分される。例えば、2・4類では大形品は長さ35mm～40mm・重さ2g前後、小形品は長さ15mm～20mm・重さ1g未満であり、6類では大

形品は長さ40mm前後・重さ3g前後、小形品は長さ25mm・重さ1g未満となり、いずれも大形品が小形品の2倍ほどの大きさ・重量を有している。また1類は、5を除けば全て長さ15mm前後・重さ0.5g未満の小形品で構成され、7類は長さ25mm～30mm・重さ1～1.5gのものが主体を占める。

石材で見ると、黒曜石18点(30%)、チャート13点(22%)、黒色頁岩と黒色安山岩が各11点(各18%)、珪質頁岩6点(10%)、赤碧玉1点(2%)であり、黒曜石や赤碧玉以外の在地産石材が7割近くを占める。黒曜石は1類に、在地産石材は2～4・7類に多用される傾向にあり、特定形式と石材との関連性が窺える。尚、上記石材については、チャートを除いて石核や調整剥片が検出されており、当遺跡内での石鏃製作が想定できるが、チャート製については完成品としてもたらされている可能性が高く、こうした点は北中道II遺跡と同一の様相を持つ。

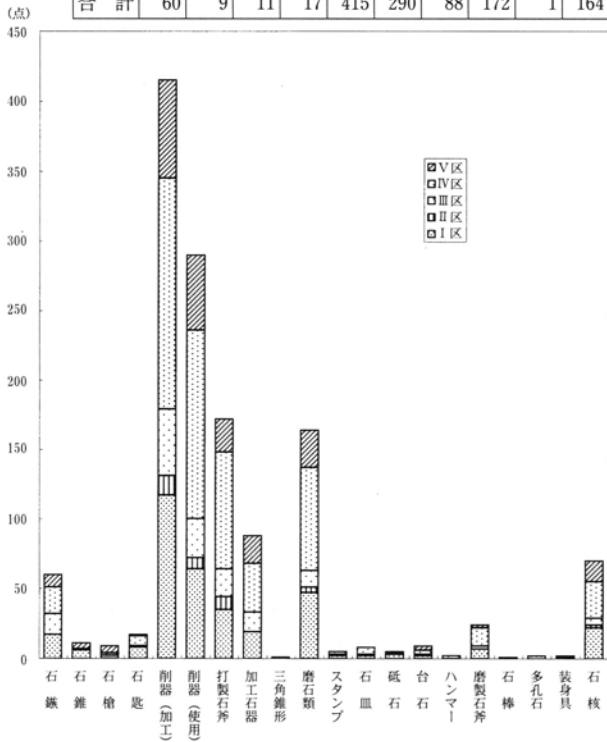
出土位置はIV区19点、I区17点、III区15点、V区9点となり、出土層位はVI層38点、VII・VIII a層が各9点である。出土層位と各形態との有意な関係は認められないが、1類の中で1～4などの小形品は草創期に、3類は早期に、2・4類は前期に、6・7類は後期にそれぞれ比定されるものだろう。

b. 石 槍(第181・183図 62～65・67・92・95・96)

V区5点、IV・III区各2点の計9点が検出されており、その出土層位はVI層が1点の他はVIII a層あるいはVII～VIII a層に限定されている。61・63は両面に丁寧な押圧剥離を施して薄い凸レンズ状の体部となるが、他はやや粗雑な調整加工によりやや厚みのある体部をもつ。62を除いていずれも先端部あるいは体部中位を欠損するが、形態的には長幅比が2.5～3.0:1とやや幅広のものが多し。大きさの面では、61のように長さが4cmに満たない小形品もあるが、他は6～10cmの中形品が主体的である。61は片面に96は両面に磨耗痕が認められるが、61の場合は使用痕というよりも磨製の研磨痕の可能性もある。石材は黒色頁岩6点、黒色安山岩2点、珪質頁岩1点で、黒曜石は皆無である。時期的には、草創期前半の隆

第10表 包含層出土石器の器種別・層位別一覧

	打製系列										使用痕系列					複合技術系列				その他		合計
	石鏃	石槍	石錐	石匙	削器1	削器2	加工	打斧	三角錐	凹石類	スタンプ	石皿	砥石	台石	ハンマー	磨斧	石棒	多孔	装身具	石核	剥片	
VI層	38	1	7	8	210	135	32	91	1	56	1	2	4	3	0	7	0	2	1	32	889	1520
VII層	9	1	1	1	68	56	18	31	0	38	0	1	0	0	0	5	1	0	0	12	320	562
VIII a層	9	7	3	6	116	88	32	40	0	66	4	3	1	6	1	11	0	0	1	24	847	1265
VIII b層	0	0	0	0	7	2	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	11	24
不明	4	0	0	2	14	9	6	10	0	1	0	2	0	0	1	1	0	0	0	1	60	111
合計	60	9	11	17	415	290	88	172	1	164	5	8	5	9	2	24	1	2	2	70	2127	3482
I区	17	0	6	8	117	64	19	35	0	47	2	2	3	2	0	7	0	2	0	22	503	856
II区	0	0	0	1	14	8	0	9	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	30	68
III区	15	2	0	0	48	28	14	20	0	12	1	1	0	1	0	2	0	0	0	5	108	257
IV区	19	2	1	7	166	136	35	84	1	74	2	5	1	3	2	13	1	0	1	26	630	1209
V区	9	5	4	1	70	54	20	24	0	27	0	0	1	3	0	2	0	0	1	15	856	1092
VI区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
VII区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	60	9	11	17	415	290	88	172	1	164	5	8	5	9	2	24	1	2	2	70	2127	3482



第173図 包含層出土石器の器種別点数

起線文土器などに平行すると思われる。

c. 石錐(第181・182図 68~78)

I区6点、V区4点、IV区1点の計11点が検出されている。出土層位はVI層が7点と最多で、VIII a層3点、VII層1点となる。横長あるいは縦長の不定形剥片を素材として、先端の機能部を主体にやや粗雑な押圧剥離を施すケースが多く、つまみ部を作出するための調整加工はほとんど行われないうか、あるいは極めて弱い状態に止まっている。78は三角形状剥片の先端部を無加工で使用しており、回転動作に伴

〈各種石器の分類別数量一覧〉

石鏃

分類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	不明
合計	6	17	2	21	1	4	8	1

石匙

分類	横型	縦型	不明
合計	8	9	

磨製石斧

分類	1類	2類	不明
合計	7	3	14

削器1(加工痕)

分類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	不明
合計	65	147	59	44	47	50	3

削器2(使用痕)

分類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	不明
合計	62	79	52	35	29	32	1

打製石斧

分類	1類	2類	3類	4類	5類	不明
合計	41	31	16	14	7	63

凹石・磨石・砥石類

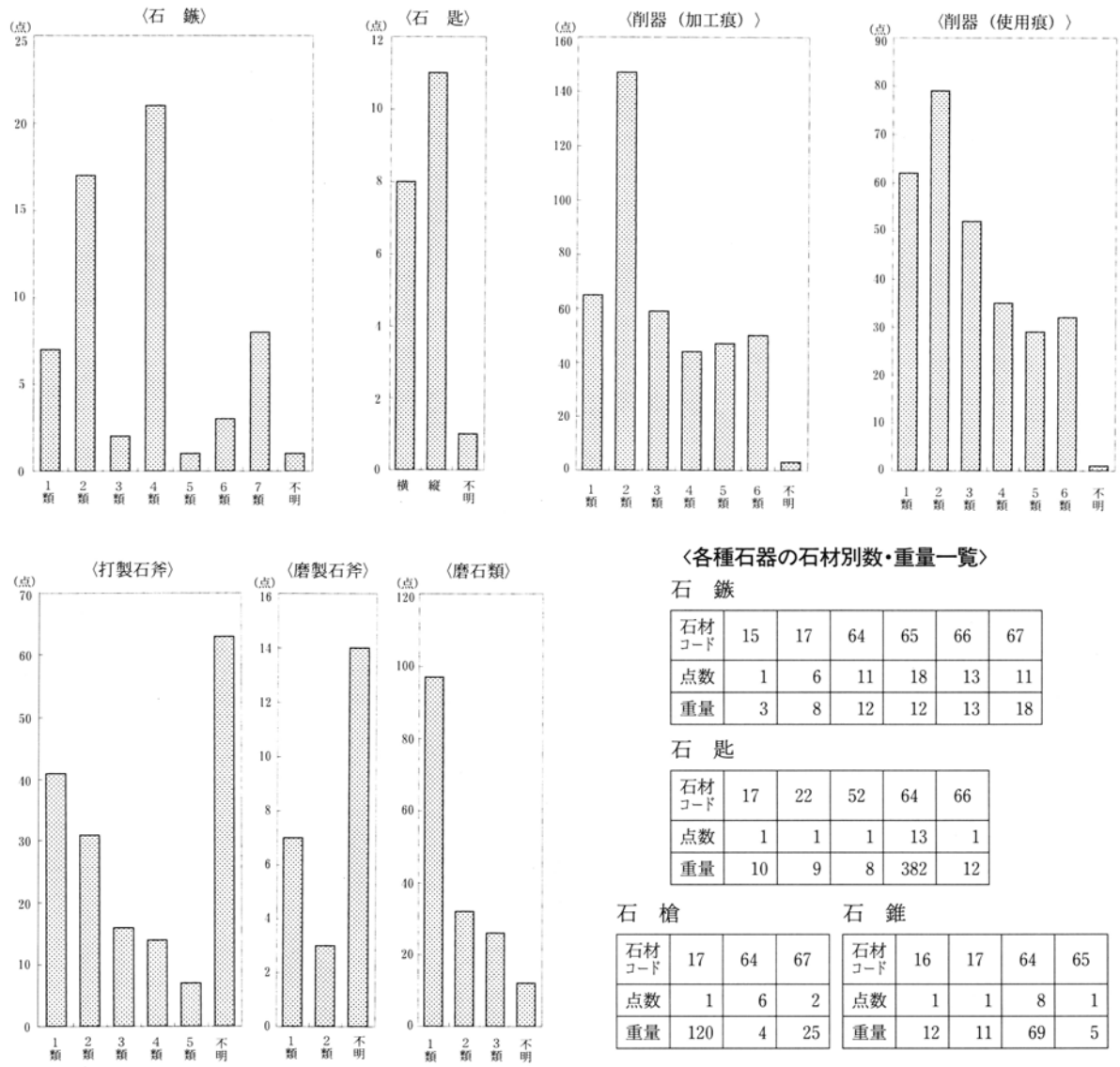
分類	1類	2類	3類	不明
合計	97	32	26	12

う刃こぼれ状の使用痕が認められる。石材は、黒色頁岩が8点と最も多く、他に頁岩・珪質頁岩・黒曜石が各1点認められるが、黒曜石は68のように機能部やつまみ部が丁寧な押圧剥離によって作出された秀逸品である点に注目する必要がある。大きさは、長さ4cm弱の小形品から7cmを越えるものもある。

d. 石匙(第182・183図 80~91・93・94)

横型8点(80~87)と縦型9点(88~91・93・94)の計17点が存在する。I区8点、IV区7点、II区・V区は各1点があり、その出土層位はVI層8点、VIII a層6

II 調査の結果



第174図 各種石器の分類別点数

削器 1 (加工痕)

石材コード	1	4	5	6	7	16	17	22	27	28	50	52	64	65	66	67	不明
点数	1	4	3	2	1	15	9	1	1	1	1	1	352	4	2	11	6
重量	32	627	286	307	6	436	376	4	164	22	74	19	18,479	134	18	615	

三角錐形石器

石材コード	64
点数	1
重量	334

削器 2 (使用痕)

石材コード	4	5	6	15	16	17	18	22	27	28	52	64	65	66	67	不明
点数	2	1	3	1	7	6	1	1	1	2	1	239	6	3	10	6
重量	199	33	114	4	378	80	28	12	36	109	22	8,185	7	28	196	

ハンマーストーン

石材コード	17	34
点数	1	1
重量	188	535

打製石斧

石材コード	4	5	6	7	16	17	19	27	28	44	50	64	65	67	不明
点数	10	3	8	1	6	1	1	2	3	1	2	129	1	2	2
重量	725	288	2,949	179	751	21	39	176	334	115	466	12,682	46	105	

2. 縄文時代

加工石器

石材コード	5	7	13	16	17	27	28	50	64	65	66
点数	4	1	1	1	2	3	2	1	70	1	2
重量	2,001	252	450	33	747	1,040	600	655	13,907	1	413

石皿

石材コード	5	25	48
点数	5	1	2
重量	13,068	95	1,542

砥石

石材コード	5	64
点数	3	2
重量	300	21

凹石・磨石・敲石類

石材コード	5	7	10	16	25	27	28	29	33	34	39	40	44	52	63
点数	78	7	3	3	2	2	4	1	3	43	2	1	12	2	1
重量	37,207	2,988	1,261	237	823	556	1,160	555	975	21,465	323	491	4,052	453	147

スタンプ形石器

石材コード	5	7	34
点数	3	1	1
重量	1,927	645	488

台石

石材コード	5	10	34	不明
点数	6	1	1	1
重量	16,248	2,950	2,150	

磨製石斧

石材コード	26	27	30	31
点数	21	1	1	1
重量	2,546	3	18	32

多孔石

石材コード	4	5
点数	1	1
重量	9	2,000

石棒

石材コード	61
点数	1
重量	54

剥片

石材コード	2	3	4	5	6	7	13	14	15	16	17	19	22	25	26	27
点数	1	2	16	32	18	9	4	1	1	85	22	1	1	3	4	27
重量	1	23	178	988	641	251	64	95	1	863	237	22	30	11	23	796

装身具

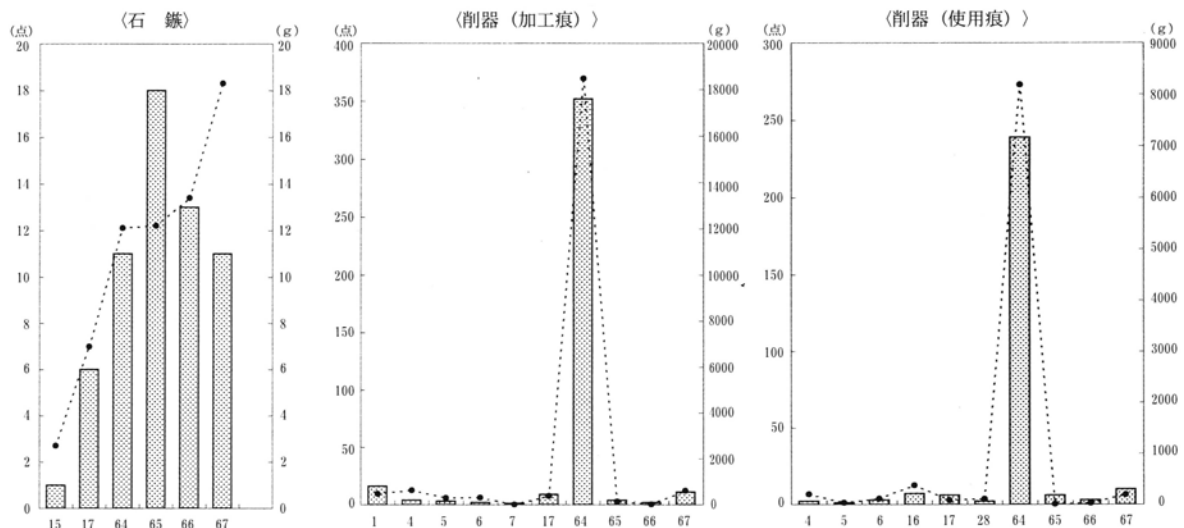
石材コード	42	48
点数	1	1
重量	5	6

石核

石材コード	28	33	34	39	44	45	48	50	52	60	62	64	65	66	67	不明
点数	20	1	1	1	3	1	2	9	3	1	1	1,726	20	1	83	27
重量	375	5	341	19	25	5	11	117	13	1	2	25,303	170	1	1,560	

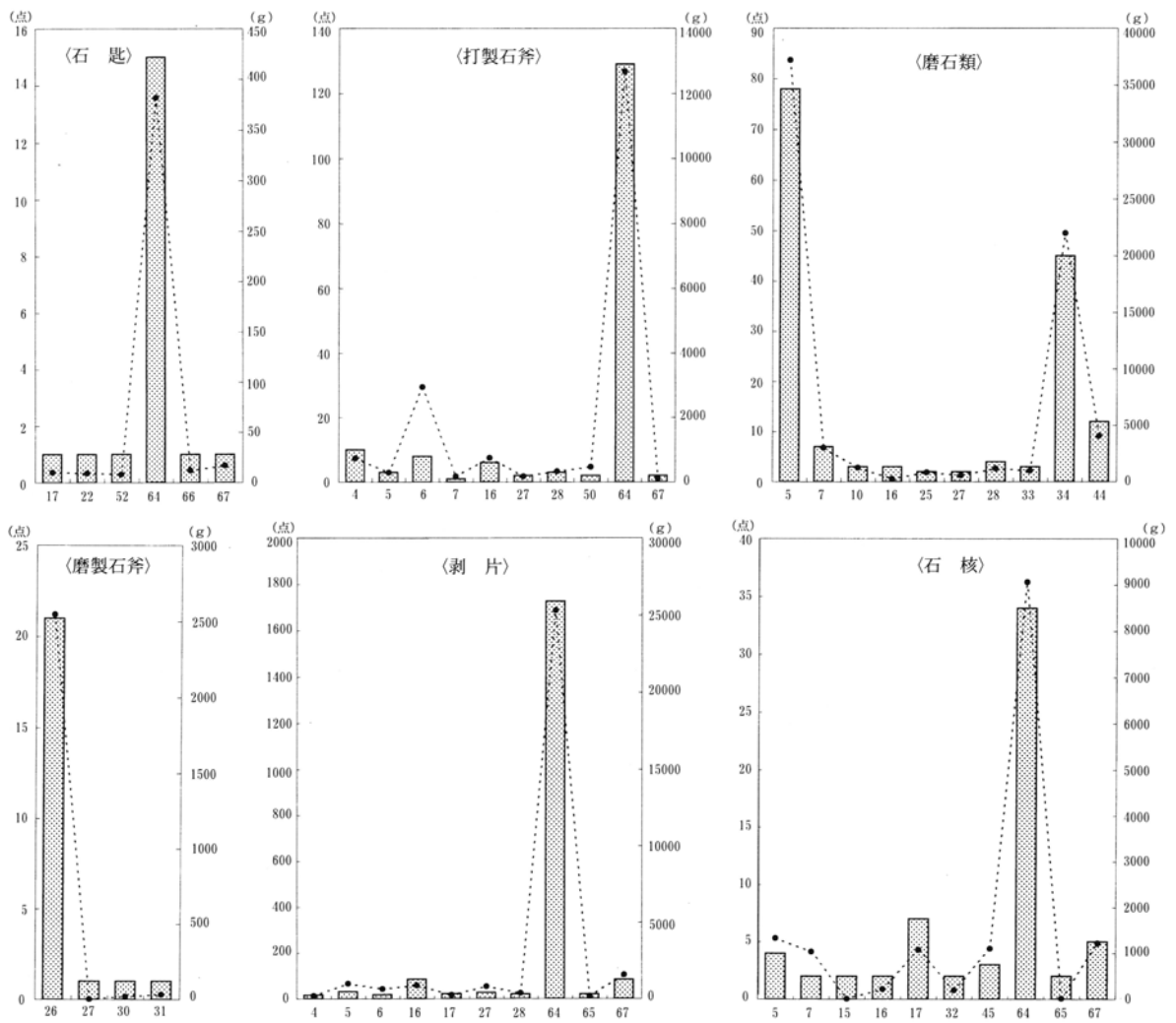
石核

石材コード	2	5	7	15	16	17	26	27	32	33	45	50	64	65	66	67	不明
点数	1	4	2	1	2	7	1	1	2	1	3	1	34	2	1	5	2
重量	1	1,331	1,035	10	216	1,078	923	799	190	150	1,102	234	9,060	10	29	1,219	



第175図 各種石器の石材別点数(1) (折線は重量)

II 調査の結果



第176図 各種石器の石材別点数（2）（折線は重量）

点、VII層1点である。横長あるいは縦長の楕円形状の剥片を素材として、その形状をあまり改変することなく、主に片面方向からのやや粗い押圧剝離により機能部が作出されている。原礫面を残すものが4点(84・91・93・94)存在する。大きさは、横型が横幅4cmの小形品から12cmの大形品のようにバラエティに富むが、縦型は長さ5～8cmの範囲に収まり、変動幅が少ない。石材は、両型を通じて黒色頁岩が多用され(13点)、他に頁岩・珪質凝灰岩・流紋岩・チャートなど各1点が認められる。

e. 削器(第183～190・196図 97～221・289B)

不定形の横長剥片や縦長剥片を用材として、その縁辺部に粗雑な刃部加工を施すもの(97～182・189・289B)と、刃こぼれ状の使用痕を有するもの

(183～188・190～221)の二者があるが、基本的に、両者とも類似した部位に機能部を有する。各器種を通じて最も点数が多く、前者は415点、後者は290点が存在し、そのうちの49%がVI層に集中し、次いでVIII a層から29%、VII層から18%が出土している。

剥片形状による分類では、円・縦位楕円形状を1類、横位楕円形状を2類、台形状を3類、三角形状を4類、逆三角形状を5類、縦位長方形形状を6類とした。また、加工および使用痕の存在する機能部位による分類では、バルブ除去の加工を含めてA～K類まで11分類してある。素材の剥片形状は、2～4類が横長剥片を使用し、1・5・6類が縦長剥片を基本的に用いている。各類の中で最多となるのは2類の226点(32%)であるが、これを除外すれば他も

10～18%の比率で一定量存在しており、極端な数量偏差は認められない。横長剥片系は416点(60%)、縦長剥片系は285点(40%)、不明4点である。

加工・使用部位による分類では、片側縁部のB類213点(30%)、下縁部を刃部とするA類の204点(29%)、下縁部と片側縁部のD類86点(12%)などが主なものであり、他はいずれも8%に満たない。横長剥片系ではA類が43%、また縦長剥片系ではB類が53%と主体を占め、基本的に前者は下縁部を、後者は片側縁部を機能部とする傾向にある。103や189などのように、全周に加工を施したランドスクレーパー的なものも若干存在する。平均的な大きさ(縦幅×横幅)や重量は、横長剥片系が46mm×61mm、重さ45g、縦長剥片系が58mm×44mm、重さ44gで両者ともに類似した大きさを有する。

石材は、黒色頁岩を筆頭に頁岩・黒色安山岩・珪質頁岩・黒曜石やその他の石材12種類が認められるが、黒色頁岩が全体の84%を占め、頁岩と黒色安山岩が各3%の他は、残りの石材15種を総計しても10%に過ぎない。全体の約62%のものは、片面あるいは縁辺に原石の礫面を残しているが、その98%が黒色頁岩で構成される点は、外皮に近い副次的な調整剥片を用材とすることを示している。またそれは、既に指摘されていることでもあるが(大工原：1996)、289Bに見る接合関係のように、打製石斧(289A)の製作過程で産出される調整剥片を使用するという構造的なものと考えられる。黒曜石を用いるケースでは、118・190・215などのようにいずれもその大きさが2cm前後の小形品となっており、石核の大きさに規定されていることが想定される。

f. 加工石器(第182・190～192図 79・222～243)

何らかの意図的な加工痕を有するが、機能部の角度・形態などから既存の器種に分類することが不適当なものや、搔器・礫器的なものなどを便宜的に加工石器として一括した。合計で88点が存在し、IV区に35点、V区に20点、I区に19点が分布する。出土層位はVI・VIII a層が各32点で、VII層が18点の順である。79は対向する上下端に打痕や刃こぼれ状の使用痕を

もつもので、ピエス的な使用が想定される。これ以外に3点存在する。また、222・223などは機能部の角度が約60度前後に加工されており、搔器的な用途をもつと思われる。226～243は、礫核や大形剥片を素材とした礫器的なものであり、46点が確認されている。226・229・231・236には、使用による磨耗痕が認められる。使用石材は11種に及ぶが、そのうちの80%が黒色頁岩で占められている。

g. 打製石斧(第193～201図 245～348)

172点が存在し、IV区の84点を筆頭に、I区の35点、V区の24点、III区の20点の順となる。出土層位は、VI層が91点、VIII a層が40点、VII層が31点であり、その53%がVI層に集中する。短冊形・撥形・分銅形の三形態と、基部と刃部の寸法比率や側縁部の形状等を加味すると1～5類に分類できる。1類は基部・刃部幅比が1：1.5未満の短冊形、2類は同比が1：1.5以上の撥形、3類は同比が1：1.5以上で両側縁部が緩く湾曲する撥形、4類は「抉り」が浅い分銅形、5類は「抉り」が深くノッチ状となる分銅形である。

欠損による分類不能なものを除いて、数量的に最も多いのは3類で、37点が存在する。次いで1類の29点、2類の22点、4類の14点、5類の7点となり、3類とともに2類の数量が目立つ点で注意される。大きさ(長さ×幅)や重量の平均値は、1類が120mm×54mm・239g、2類96mm×54mm・111g、3類が114mm×63mm・172g、4類が109mm×65mm・204g、5類が124mm×63mm・190gを測る。各類ともに機能部再生による小形品が認められるが、それ以外にも1・3類には大形・小形の種別が存在している。また3類は側縁の湾曲度が緩いものが主体を占めるが、強く湾曲して石鉞状を呈するもの(306・315)も見られ、細分が可能である。2類は小形品が主体的で数値のばらつきが少なく、規格的な大きさが指向されていたようである。素材の面では、幅広の大形素材剥片を長軸に対して斜め上方あるいは横位に置いて加工するケースが、第1次剥離面を残す石斧の約7割に認められる。また片面に原礫面を残すものが45%にも及ぶが、その状態から見て大きな原礫からの素材剥片を用いて